県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

築山遺跡Ⅰ

2005年 12月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

築山遺跡 1区東

観　察　表

遺物観察表の記載事項について

挿図番号：本文の挿図番号に対応する。
出土地点：グリッド(Gr)名・遺構名・層位で記した。
種別・器種：土器の種類・器種、不確定なものは部位を記した。
　　土器以外のものは、素材・器種を記した。
計測値・残存率：実測図から測定した。
　　復元不可能な小破片は2辺の測定値である。
　　残存率は全体分の、部位が記載してあるものはその部位の比率である。
胎　　土：胎土に含まれる砂粒子の大きさとその量、砂粒子の主な種類（目分量の多いものから順に）を記した。
焼　　成：良好・やや良好・普通・やや不良・不良の5段階に分けて判断した。
色　　調：素焼き系統の土器は褐色を、還元炎焼成の土器は灰色を基本として色調を判別した。
成形・調整・文様：遺物を正位置に置いた状態での、各位の上から下へ、底面は外縁から内側へ特徴を記述した。変化点には「・」で区切りをつけた。重複するものは「→」を使い「古→新」で表した。並列関係は「＋」を用いた。「回転」と明記したものは、回転台・轆轤を利用したと考えられるものである。「ﾅﾃﾞ」とのみ記載したものは意識的な方向性を持たないもの、または方向が不明なものである。「ｹｽﾞﾘ(LR)」とはｹｽﾞﾘの方向左から右を表したものである。「ｹｽﾞﾘ(DU)」とはｹｽﾞﾘの方向下から上を表したものである。凹線文とは1条ずつ施文された複条線文を指す。ﾊｹ目の単位が未記載のものは不明なものである。
備　　考：上記以外に特記事項がある場合のみ記述した。

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図14－1	C4Gr SD04 ⑥層上面	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.0×2.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：調整不明→(大きな)刻目貼付突帯文 内：調整不明'	刻目突帯E類
図14－2	D4Gr SD04 ⑥層	突帯文土器 深鉢	口縁部 3.5×2.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	外：(細い)刻目突帯文・ｹｽﾞﾘ 内：板状工具によるﾅﾃﾞ？	刻目突帯C類
図14－3	C4Gr SD04 ⑥層	突帯文土器 鉢	胴部最大径　29.0 突帯部　1/16存	2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	浅黄色	外：ﾅﾃﾞ→2条の刻目貼付突帯文 内：ﾅﾃﾞ	
図14－4	C3Gr SD04 ⑥層	弥生土器 甕	口縁部 5.0×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	灰白色	玉縁状を呈する如意形口縁 内外：調整不明	突帯文系
図14－5	B3Gr SD04 下半部	弥生土器 甕	口縁部 5.0×3.0角	1mm以下の砂粒子(石英など)及び若干の2～3mm大の砂粒子を含む	普通	灰白色	如意形口縁 外：調整不明→刻目・現状で3条の沈線文 内：調整不明	Ⅰ-3様式
図14－6	B4Gr SD04 下半部	弥生土器 壺	口径　14.2 口縁部　1/6存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい橙色	口縁端部面をもつ 内外：調整不明	Ⅲ-2様式
図14－7	B4Gr SD04 下半部	弥生土器 甕	口径　19.3 口縁部　1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	灰白色	口唇部はつまみ上げ 内外：調整不明	Ⅲ-2様式
図14－8	C4Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 甕	口縁部 4.6×2.4角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	灰白色	口縁端部はつまみ上げ断面三角形 口縁端部面をもつ 外：調整不明→1条の沈線文・1条の細い凹線文 内：調整不明	Ⅳ-1様式
図14－9	A3Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 甕	口径　15.5 口縁部　1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色～灰白色	口縁端部は上に拡張 外：調整不明→2条の凹線文 内：調整不明	Ⅳ-1様式
図14－10	B3Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 甕	胴部　4.0×4.0角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	灰黄色	外：調整不明→刺突文 内：ｹｽﾞﾘ(RL)	中期
図14－11	A3Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 甕	口縁部 5.5×4.0角	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	外：褐灰色 内：灰白色	外：貝殻原体による9条の擬凹線文・ﾖｺﾅﾃﾞ 内：ﾖｺﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ	草田2
図14－12	C4Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 甕	口径　20.0 口縁部　1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	浅黄色	外：多条の沈線文→ﾅﾃﾞ消し(7条残)・調整不明 内：ﾅﾃﾞ？・ｹｽﾞﾘ？	草田3
図14－13	C4Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 底部	底径　7.4 底部　1/6存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい橙色～明褐灰色	平底 内外・底面：調整不明	前半期
図14－14	B3Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 底部	底径　10.2 底部　1/4存	1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	やや良好	外：灰黄褐色 内：灰白色	平底 外：調整不明・指押さえ 内・底面：調整不明	前半期
図14－15	B3Gr SD04 ⑥層上面	弥生土器 底部	底径　10.7 底部　1/12存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	にぶい黄橙色	平底 外・底面：調整不明 内：ﾅﾃﾞ	前期
図14－16	B3Gr SD04 ⑥層	弥生土器 底部	底部　5.5×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	外：明赤灰色 内：灰黄褐色	平底 外：ﾐｶﾞｷ？ 底面：調整不明 内：ﾅﾃﾞ(所々指押さえ)	前期
図14－17	C4Gr SD04 ⑥層	弥生土器 底部	底部　5.0×4.5角	1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)少し含む	普通	にぶい褐色～にぶい黄橙色	平底 内外・底面：調整不明	後半期
図14－18	C4Gr SD04 ①・②層	須恵器 坏蓋	口径　15.6 器高　3.2 体部　1/8存	砂粒子ほとんど含まず	良好	灰白色	外：ﾅﾃﾞ・削り取ったような沈線・回転ﾖｺﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ・回転ﾖｺﾅﾃﾞ	古墳末
図16－1	B7Gr SD07 上半部	弥生土器 甕	胴部　6.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外：黒斑あるいは2次焼成痕 内：にぶい黄橙色	外：ﾍﾗ状工具による現状で2条の沈線文・ﾀﾃﾊｹ目(4本/5mm) 内：ﾅﾃﾞ	前期
図16－2	B8Gr SD07	弥生土器 甕	胴部　6.5×6.5角	1mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色～褐灰色	外：ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目(8本/1cm) 内：調整不明・内面頸部にしぼり痕・ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	前期
図16－3	D5Gr SD07 下層	弥生土器 底部	底部　4.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外：赤褐色 内：灰黄褐色	平底 内外・底面：調整不明	前期
図18－1	B7Gr SD08	土師器 坏	口径　16.2 器高　4.4 底径　9.7 1/2存	若干の砂粒子を含む	普通	内外：浅黄橙色の表面に朱塗り	外：ﾖｺﾅﾃﾞ・調整不明 内：調整不明	8世紀
図18－2	A8Gr SD11	弥生土器 底部	底径　9.6 底部　1/4存	1mm大の砂粒子(石英など)多く含む	やや不良	淡黄色	平底 内外・底面：調整不明	前半期
図20－1	D9Gr SD19	須恵器 碗	口径　14.6 器高　7.6 底径　11.5 底部完形 体部　1/3存	若干の長石など含む	良好	灰白色	上げ底ぎみの底部 外：回転ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 底面：ﾍﾗ切り未調整 内：回転ﾖｺﾅﾃﾞ・不定方向ﾅﾃﾞ	7～8世紀
図20－2	B10Gr C10Gr SD19 底面	須恵器 長頸壺	胴部最大径　17.0 胴部最大径付近 1/8存	若干の長石・石英を含む	良好	灰色	胴部最大径位は緩く屈曲 外：回転ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：回転ﾖｺﾅﾃﾞ	7～8世紀
図23－1	A10Gr SX02 ②層	弥生土器 底部	底径　11.0 底部　1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	灰黄色～灰色	平底 内外・底面：調整不明	前期
図23－2	A10Gr SX02	弥生土器 底部	底部　9.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	浅黄橙色	平底 内外・底面：調整不明	前半期
図23－3	A10Gr SX03 (SX02との境目)	弥生土器 底部	底径　13.8 底部　1/9存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	浅黄色～褐灰色	平底 内外・底面：調整不明	前半期
図26－1	D7Gr SK31	弥生土器 底部	底径　6.6 底部　2/5存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	にぶい橙色～褐灰色	平底 外・底面：調整不明 内：ﾅﾃﾞ	前半期

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図26－2	A8Gr SK37	弥生土器 底部	底径 8.2 底部 1/2存	1mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	にぶい橙色	平底 内外・底面:調整不明	前半期
図26－3	C9Gr SK38	縄文土器 底部	底径 13.5 底部 1/10存	1mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	上げ底 内外・底面:調整不明	
図29－1	C3Gr SD24	弥生土器 甕	口径 18.0 頸部 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	灰白色	如意形口縁 内外:調整不明	Ⅰ-4様式
図32－1	D6Gr SD42 ①層	弥生土器 甕	口縁部 3.5×2.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色	口縁下端凸状 外:ナデ→刻目 内:ナデ・ハケ目?(4本/5mm)	Ⅰ-1様式
図32－2	D5・6Gr SD42 上段	弥生土器 壺	口径 14.4 口縁部 1/16存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:褐灰色 内:にぶい黄橙色	外:ナデ・ハケ目(4本/5mm)→ナデ消し 内:調整不明	外面スス付着? Ⅰ-2様式
図32－3	D5・6Gr SD42 上段・②層・下半	弥生土器 壺	くびれ部径 11.8 くびれ部 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色	ナデ押さえによる段あり 外:ミガキorナデ? 内:ハケ目(5本/5mm)→ナデ消し	Ⅰ-2様式
図32－4	D6Gr SD42 下半	弥生土器 甕	口径 27.3 口縁部 1/15存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	褐灰色	外:ナデ→刻目・ナデ 内:ナデ	Ⅰ-2・3様式
図32－5	D6Gr SD42 ①層	弥生土器 甕	口縁部 2.5×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	如意形口縁 外:ナデ→刻目・現状で3条の沈線文 内:ナデ	外面口縁部の一部にススト付着? Ⅰ-3様式
図32－6	D5・6Gr SD42 下半	弥生土器 胴部	胴部 4.5×3.0角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色	外:貼付突帯→ナデ→ヘラ状工具による羽状文 内:ナデ	外面の一部に黒斑あり Ⅰ-3様式
図32－7	D6Gr SD42 ②層	弥生土器 胴部	胴部 4.5×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	褐灰色～灰白色	外:貼付突帯→調整不明→ヘラによるタテ沈線文 内:調整不明	Ⅰ-3様式
図32－8	D6Gr SD42 上段	弥生土器 底部	底径 8.5 底部 1/5存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色	平底 外:粗いハケ目(6本/1cm)+所々指ナデ 底面:未調整 内:剥落	前期
図32－9	D6Gr SD42 ②層	弥生土器 底部	底径 10.0 底部 1/10存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	浅黄橙色	平底 外:タテハケ目 底面:調整不明 内:ナデ	前期
図32－10	D5・6Gr SD42 ③層	弥生土器 底部	底径 10.9 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい橙色～灰白色	平底 外:粗いハケ目(5本/1cm) 底面:ナデ 内:ナデ	前期
図32－11	D6Gr SD42 下半	弥生土器 土製円盤	6.5×6.5角 重量 52	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰白色～暗灰白色	外:ミガキ 内:ハケ目(6本/1cm)	土器の転用 外面1/3に黒斑あり 前期～中期初
図36－1	A7Gr P3	縄文土器 底部	底径 13.9 底部 1/12存	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)やや多く含む	普通	にぶい橙色～灰黄色	上げ底 外:ナデ 底面:調整不明 内:ナデ	内面に黒斑あり
図38－1	B6Gr 土器集積	縄文土器 口縁部	口縁部 4.5×3.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:にぶい褐色 内:灰黄色	内外:ナデ	
図38－2	B6Gr 土器集積	縄文土器 口縁部	口縁部 4.0×6.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外:灰黄褐色 内:黒褐色	口端部に面をもつ 外:粗いハケ目→粗いナデ 内:粗いナデ	
図38－3	B6Gr 土器集積	弥生土器 底部	底径 8.2 底部 1/3存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	にぶい橙色～灰黄褐色	平底 外:ハケ目(10本/1cm) 底面:ナデ 内:指押さえ+ナデ	円盤状の底部に粘土を貼り付けた痕跡あり 前期
図38－4	B6Gr 土器集積	弥生土器 底部	底径 8.4 底部 1/4存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰白色	平底 外:ハケ目(11本/1cm) 底面:ナデ 内:ナデ	内面上縁部にススト付着 前期
図38－5	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	7.0×6.7角 重量 62	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色	外:ナデ→1条の沈線文 内:ナデ	土器の転用 前期

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図38－6	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	6.2×5.8角 重量 36	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰白色	外:ハケ目(10本/1cm)→1条の沈線文 内:ハケ目(10本/1cm)	土器の転用 前期
図38－7	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	8.0×7.0角 重量 97	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	浅黄橙色	内外:ナデ	土器の転用 前期
図38－8	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	7.8×6.8角 重量 51.5	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	橙色～にぶい黄橙色	外:調整不明 内:小口によるナデ	土器の転用 前期
図38－9	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	7.3×7.0角 重量 57	1～2mm大の砂粒子(石英、長石・赤色粒子・角閃石など)やや多く含む	普通	灰白色	外:調整不明 内:ナデ	土器の転用 前期
図38－10	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	6.0×5.5角 重量 41	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰白色	外:ナデ?→刺突文? 内:ナデ	土器の転用 前期
図38－11	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	6.7×6.0角 重量 43.5	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く、またわずかな角閃石を含む	普通	灰黄色～灰黄褐色	外:ナデ 内:板状工具?によるナデ上げ	土器の転用 前期
図38－12	B6Gr 土器集積	弥生土器 土製円盤	6.0×4.7角 重量 31	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	にぶい黄橙色	内外:ナデ	土器の転用 前期
図40－1	A6Gr 3B層	縄文土器 直口壺	口径 12.5 口縁部 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄褐色～灰赤色	外:条痕→ミガキ 内:条痕	口縁部に現状で1穴の穿孔あり 後期(中津式)
図40－2	A5Gr 3層	縄文土器 浅鉢	口径 16.7 口縁部 1/10存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	外:灰白色 内:灰色	水平口縁 外:ナデ・縁帯文 内:ナデ	後期(縁帯文土器)
図40－3	A6Gr 3B層	縄文土器 浅鉢	口径 19.4 口縁部 1/9存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	水平口縁 口縁部に平坦面あり 頸部は屈曲 内外:ミガキ	後期(中津式)
図40－4	C10Gr 3層	縄文土器 浅鉢	口縁部 4.0×4.0角	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	外:黒褐色 内:にぶい黄橙色	外:ミガキ?・明瞭な1条の沈線文・ナデ 内:ナデ	後期(中津式)
図40－5	A5Gr 3B層	縄文土器 深鉢	口縁部 7.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む	普通	にぶい褐色	波状口縁 外:ミガキ 内:ナデ	後期(中津式)
図40－6	A5Gr 3B層	縄文土器 深鉢	頸部径 24.6 頸部 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	にぶい黄橙色	外:条痕 内:ナデ	後期(中津式)
図40－7	A6Gr 3B層	縄文土器 底部	底径 9.2 底部 1/3存	1～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)多く含む	やや不良	にぶい黄橙色	上げ底 外:調整不明 底面:ナデ 内:条痕・ナデ	
図40－8	A6Gr 3B層	縄文土器 底部	底径 13.0 底部 1/2存	1～2mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	やや不良	にぶい黄橙色	上げ底 内外・底面:ナデ	
図40－9	A6Gr 3B層	縄文土器 底部	底径 7.2 底部 3/4存	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・長石・デイサイトなど)含む	やや不良	外:橙色 内:黒色	上げ底 外・底面:調整不明 内:ナデ	
図41－1	D3Gr 3C層	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.5×4.0角	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外:黒褐色 内:灰黄褐色	口縁端部に平坦面あり 外:突帯貼付→ナデ・刻目・ケズリ 内:ヘラナデ	刻目突帯E類
図41－2	B10Gr 3層	突帯文土器 深鉢	口縁部 6.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・デイサイトなど)含む	普通	明褐灰色	口唇部は尖る 外:突帯貼付→調整不明→刻目 内:調整不明	刻目突帯H類
図41－3	D3Gr 3C層	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.0×2.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄色～黄灰色	口縁端部に平坦面あり 外:突帯貼付→ナデによる窪み・調整不明→刻目 内:ケズリ?	外面口縁部から内面にかけての一部に黒斑 刻目突帯H類
図41－4	B5Gr 3B層	突帯文土器 深鉢	胴部 4.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・金雲母など)含む	普通	橙色～灰白色	2条突帯? 外:突帯貼付→ナデ?→ヘラによる刻目 内:調整不明	刻目突帯I類
図41－5	A6Gr 3C層	突帯文土器 深鉢	口縁部 7.0×5.0角	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	灰黄褐色	如意形口縁 外:粗雑な指押さえナデ 内:ナデ	無刻目突帯B類
図41－6	C7Gr 3B層	突帯文土器 深鉢	口縁部 8.5×4.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石など)及び若干の金雲母を含む	普通	灰黄褐色	口縁部はL字状に屈曲 外:ナデ・ケズリ 内:ナデ	無刻目突帯B類

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図41－7	A4Gr 3層	突帯文土器 深鉢	口縁部 2.5×2.5角	1mm大の砂粒子(石英など)多く含む	普通	淡橙色～黄灰色	口縁部はL字状に屈曲 内外：調整不明	無刻目突帯B類
図41－8	C10Gr 3層	突帯文土器 深鉢	口縁部 2.5×2.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	折り曲げ玉縁状の口縁 内外：調整不明	無刻目突帯B類
図41－9	B5Gr 3層	突帯文土器 深鉢	口径　27.4 口縁部　1/12存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色～にぶい褐色	口唇部は尖る 外：突帯貼付→粗雑な指押さえナデ・ケズリ 内：指押さえナデ・ケズリ(RL)→ナデ	無刻目突帯C類
図41－10	A5Gr 3B層	突帯文土器 深鉢	口縁部 5.0×4.0角	1mm大の砂粒子(石英など)及び若干の3mm大の砂粒子含む	やや不良	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	口縁端部に平坦面あり 外：ナデ・粗いナデ 内：ナデ	無刻目突帯D類
図41－11	D7Gr 3層上面	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.0×4.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	口縁端部に平坦面あり 内外：調整不明	無刻目突帯D類
図41－12	D8Gr 3B層	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.5×2.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	橙色 突帯突出面：褐灰色	口縁部はL字状に屈曲 内外：指押さえ＋指ナデ	無刻目突帯D類
図41－13	A5Gr 3C層	突帯文土器 深鉢	口縁部 3.8×2.0角	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	やや不良	灰黄褐色～にぶい黄橙色	口縁部は玉縁状でL字状に屈曲 内外：ナデ	無刻目突帯D類
図41－14	A6Gr 3B層	突帯文土器 深鉢	口縁部 4.5×2.5角	1mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	暗灰黄色	玉縁状の口縁 内外：調整不明	無刻目突帯D類
図41－15	A5Gr 3層	突帯文系 土器 深鉢	口径　19.7 口縁部　1/10存	1mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	やや不良	灰黄褐色～暗灰色	口縁端部に平坦面あり 外：粗いナデ 内：ナデ	
図41－16	D5Gr 3B層	突帯文系 土器 深鉢	口縁部 4.0×3.0角	1～1.5mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	浅黄橙色	口唇部は尖る 外：突帯貼付→ナデ？→大振りの刻目 内：ナデ	
図41－17	B3Gr 3B層	突帯文系 土器 深鉢	口縁部 4.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	灰白色～明褐灰色	口縁部はくの字状に屈曲 内外：ナデ	
図42－1	A5Gr 3B層	弥生土器 壺	口径　37.6 口縁部　1/20存	1～1.5mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色～灰白色	外：調整不明・ミガキ・ナデによる段 内：ナデ	Ⅰ-1様式
図42－2	B7Gr 3B層	弥生土器 壺	口径　17.8 口縁部　1/6存	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英など)やや多く、また若干の金雲母を含む	普通	にぶい黄橙色～褐灰色	外：頸部削り出し突帯→調整不明 内：調整不明	外面口縁部の一部にわずかな朱塗り痕あり Ⅰ-2様式
図42－3	A2Gr 3B層	弥生土器 壺	胴部　5.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	外：低い削り出し突帯→ナデ 内：ナデ	内面に挑成前のキズ痕？あり Ⅰ-2様式
図42－4	C9Gr 3B層	弥生土器 壺	口縁部 5.0×3.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰白色	口縁端部は丸め込んだような玉縁状 外：ナデによる段→調整不明 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図42－5	B6Gr 3B層 下位	弥生土器 壺	胴部　7.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)及び若干の角閃石を含む	普通	灰黄褐色	外：ハケ目(6本/1cm)・ハケ状工具の押さえによる段・ハケ目(8本/1cm)→ナデ 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図42－6	C5Gr 3B層	弥生土器 壺	胴部　6.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	灰白色	外：調整不明→ヘラ描きによる羽状文・ヘラ描きによる3条の平行沈線文・ヘラ描きによる複線弧状ハの字状文 内：調整不明	Ⅰ-2様式
図42－7	B9Gr 3B層	弥生土器 壺	胴部　7.0×6.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	外：貝殻原体による2条の平行沈線文＋有軸羽状文・ミガキ 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図42－8	D5Gr 3C層	弥生土器 壺	胴部　4.0×3.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色～褐灰色	外：ミガキ→先端の丸い棒状工具による刺突文・ナデ状のミガキによる段・ミガキ 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図42－9	D5Gr 3C層	弥生土器 壺	胴部　5.5×4.0角	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	灰白色	外：ナデ→先端の丸い棒状工具による刺突文・ナデ 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図42－10	D5Gr 3層	弥生土器 広口壺	口径　16.2 口縁部　1/12存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：ミガキ→1条の浅い沈線文・ミガキ？ 内：ミガキ？	Ⅰ-3様式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図42－11	D6Gr 3B層	弥生土器 広口壺	口径　16.8 口縁部　1/8存	2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	橙色～にぶい黄橙色	外：ナデ→1条の浅い沈線文・指押さえ＋ハケ目→ミガキ？・4条のヘラ描き平行沈線文 内：ミガキ？・ヨコナデ	Ⅰ-3様式
図42－12	D7Gr 3B層	弥生土器 広口壺	頸部径　8.8 頸部　1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：橙色 内：にぶい橙色	外：タテミガキ・5条のヘラ描き沈線文・ヨコミガキ 内：ミガキ？	Ⅰ-3様式
図42－13	C8Gr 3層	弥生土器 壺	胴部最大径　20.9 胴部最大径位 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色～褐灰色	外：ミガキ→現状で2条のヘラ描き沈線文＋貝殻及びクシ歯状原体による羽状文と3条の沈線文・細かいミガキ 内：ミガキ	Ⅰ-3様式
図42－14	C8Gr 3B層 上半	弥生土器 壺	胴部最大径　27.7 胴部最大径位 1/11存	1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	外：灰黄褐色 内：浅黄橙色	外：調整不明→2条のヘラ描き沈線文・ミガキ→貝殻原体による羽状文・貝殻腹縁による現状で1条の沈線文 内：ミガキ	Ⅰ-3様式
図42－15	A6Gr 3C層	弥生土器 壺	胴部　4.5×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	橙色～淡橙色	外：調整不明→ヘラ描きによる絵画？ 内：調整不明	Ⅰ-3様式
図42－16	C8Gr 3層	弥生土器 壺	底径　8.0 底部　完形 胴部　1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色	外：ミガキ 底面：ミガキ？ 内：ミガキ？	外面の一部に黒斑あり Ⅰ-2～3様式
図43－17	B8Gr 3B層	弥生土器 広口壺	口径　29.2 口縁部　1/17存	1～2mm大の砂粒子(石英・赤色粒子など)及び若干の角閃石を含む	普通	にぶい黄橙色	外：調整不明・ハケ目→ミガキ？ 内：ナデ？	内外面とも朱塗りの痕跡あり Ⅰ-4様式
図43－18	D3Gr 3C層	弥生土器 短頸壺	口径　15.3 口縁部　1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英など)多く含む	普通	にぶい黄橙色	外：ナデ→ナデによるわずかな段 内：ナデ	Ⅰ様式後半
図43－19	D6Gr D7Gr 3B層	弥生土器 壺	胴部最大径　41.4 胴部　1/15存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色～灰色	外：2条の削り出し突帯→調整不明・ミガキorナデ？→貝殻原体による羽状文 内：ミガキ？	外面の一部に黒斑あるいはススが付着か？ Ⅰ様式後半
図43－20	A8Gr 3B層	弥生土器 甕	口径　26.6 口縁部　1/16存	1～2.5mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)やや多く含む	普通	浅黄橙色	如意形口縁 外：ナデ→粗い刻目・ハケ目＋ハケ目による段→ナデ消し 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図43－21	B8Gr 3B層	弥生土器 甕	有段位径　29.8 胴部　1/12存	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石・長石など)やや多く含む	普通	灰白色～灰黄褐色	外：ナデ・ハケ目→ナデ消し・ハケ目による段・ハケ目(6本/5mm～4本/5mm) 内：調整不明	Ⅰ-2様式
図43－22	A8Gr 3B層	弥生土器 甕	口縁部 7.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	外：灰黄色 内：灰白色	如意形口縁 外：ナデ→細かい刻目・ナデによる浅い段 内：ナデ(タテ方向の指押さえ痕あり)	Ⅰ-2様式
図43－23	B5Gr 3B層	弥生土器 甕	胴部　9.5×6.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰白色～灰黄褐色	外：ハケ目(6本/1cm)・ナデによる段・ナデ 内：ナデ	内外面とも一部に黒斑あり Ⅰ-2様式
図43－24	B7Gr 3B層	弥生土器 甕	胴部　4.5×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：にぶい黄褐色 内：灰白色	外：ハケ目→ナデ・ハケ状工具の押さえによる段・ハケ目(9本/1cm)→所々ナデ 内：調整不明	Ⅰ-2様式
図43－25	B5Gr 3B層	弥生土器 甕	胴部　8.0×6.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	灰黄褐色	外：ナデ→刻目＋浅い沈線状の段 内：ナデ	Ⅰ-2様式
図43－26	A6Gr 3B層	弥生土器 甕	口径　23.0 口縁部　1/9存	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	灰白色	如意形口縁 外：明瞭な刻目・ハケ目→ナデ 内：ナデ	外面の一部に黒斑あり Ⅰ-2様式
図43－27	C8Gr 3B層 上半	弥生土器 甕	口径　26.6 口縁部　1/17存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい橙色	如意形口縁 外：刻目・ハケ目→ナデ・ハケ目(9本/1cm) 内：ナデ・指頭圧痕＋ハケ目(8本/1cm)	Ⅰ-2様式
図43－28	C5Gr 3B層	弥生土器 甕	口径　19.2 口縁部　1/10存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	にぶい黄橙色～灰黄褐色	如意形口縁 外：ハケ目(5本/5mm)→ナデ 内：粗いヨコナデ・調整不明	Ⅰ-2様式
図43－29	B5Gr 3B層	弥生土器 甕	胴部　5.5×5.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	灰褐色～灰黄褐色	断面L字状口縁 外：ナデ・ナデによる段・ハケ目(8本/1cm) 内：粗いナデ	Ⅰ-2様式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図43－30	D8Gr 3B層	弥生土器 甕	口縁部 5.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	如意形口縁 外：ナデ・ヘケ目→ナデ・ハケ目(10本/1cm) 内：調整不明	Ⅰ-2様式
図44－31	D5Gr 3層	弥生土器 甕	口径 22.4 口縁部 1/9存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	やや不良	外：にぶい赤褐色 内：灰黄色	如意形口縁 外：ナデ・浅いキズ状の沈線・ハケ目→ナデ・1条のヘラ描き沈線文・ハケ目(6本/1cm) 内：ナデ	外面に成形時の工具痕(斜め2本線) 外面の一部に黒斑あり Ⅰ-3様式
図44－32	D6Gr 3B層	弥生土器 壺	口径 17.5 口縁部 1/10存	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	口縁端部は丸く仕上げる 外：ナデ(粗雑な指押さえ痕あり)→1条のヘラ描き沈線文 内：ナデ	Ⅰ-3様式
図44－33	C7Gr 3B層	弥生土器 甕	口径 20.3 口縁部 1/13存	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色	如意形口縁 外：頸部指押さえによる屈曲痕跡→ナデ・1条のヘラ描き沈線文・(ハケ目→ナデ？) 内：頸部に成形時の指押さえ痕残存→ナデ・調整不明	Ⅰ-3様式
図44－34	D5Gr 3層	弥生土器 甕	口径 25.0 口縁部 1/9存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい橙色～にぶい黄橙色	如意形口縁 外：ハケ目→ナデ・1条のヘラ描き沈線文・調整不明 内：調整不明	口縁端部の打ち欠きは焼成後の人工的なものか？ Ⅰ-3様式
図44－35	C4Gr 3層	弥生土器 甕	胴部最大径 20.5 胴部最大径位 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	浅黄橙色	如意形口縁 外：ミガキ？→1条のヘラ描き沈線文 内：調整不明・ナデ	Ⅰ-3様式
図44－36	D4Gr 3層	弥生土器 甕	口径 22.8 口縁部 1/10存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	如意形口縁 外：調整不明→3条のヘラ描沈線文 内：ナデ・小口による強いナデ	Ⅰ-3様式
図44－37	D4Gr 3層	弥生土器 甕	胴部 11.5×9.0角	1～2mm大の砂粒子(石英長石・角閃石など)含む	やや良好	灰黄色	外：1条のヘラ描き沈線文・ハケ目(7本/1cm)・ナデ 内：ハケ目(7本/1cm)	焼成後穿孔痕あり 外面の一部に黒斑あり Ⅰ-3様式
図44－38	D5Gr 3層	弥生土器 甕	口縁部 4.5×4.5角	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	やや不良	明褐灰色～灰黄褐色	外：調整不明→3条のヘラ描き沈線文 内：ナデ(頸部以下に小口によるナデ痕？あり)	Ⅰ-3様式
図44－39	D5Gr 3B層 最下位	弥生土器 甕	胴部 8.0×5.0角	1～4mm大の砂粒子(石英など)含む	やや不良	灰白色	外：ヨコナデ・4条のヘラ描き沈線文・ナデ・ハケ目(6本/5mm) 内：ミガキ？	Ⅰ-3様式
図44－40	C7Gr 3B層	弥生土器 甕	口径 18.4 口縁部 1/8存	1～5mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	暗灰黄色	如意形口縁 外：ナデ→浅い刻目・5条の平行沈線文(丸みのある施文具で粗雑)・調整不明 内：ナデ・小口状の工具によるナデ・ナデ	外面の一部にススが付着 外面下半の剥落は被熱のため？ Ⅰ-3様式
図44－41	A6Gr 3B層	弥生土器 甕	口径 30.2 口縁部 1/12存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	如意形口縁 外：粗雑な刻目・ヘケ目・ハケ目(8本/1cm)→ナデ 内：ナデ	Ⅰ-3様式
図44－42	A5Gr 3層	弥生土器 甕	口縁部 7.0×6.5角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	口縁端部断面矩形 内外：ナデ	外面口縁部に黒斑？ Ⅰ-4様式
図44－43	D5Gr 3層	弥生土器 甕	口径 21.7 口縁部 1/12存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	明褐灰色～灰黄色	口縁端部断面矩形 外：ナデ・調整不明 内：ナデ	Ⅰ様式後半
図44－44	A5Gr 3層	弥生土器 口縁部	口縁部 5.0×3.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	灰白色～黄灰色	口縁端部は尖る 外：ナデ？→明瞭な1条のヘラ描き沈線文 内：調整不明	Ⅰ-3様式
図44－45	D3Gr 3C層	弥生土器 小型鉢	口径 12.8 口縁部 1/6存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	やや不良	赤橙色～灰黄褐色	口縁端部はL字状に屈曲 外：粗雑なナデ(頸部は指押さえにより屈曲さす・器面は指押さえの凹凸あり) 内：ナデ・粗雑なナデ(器面は指押さえの凹凸あり)	外面の一部に被熱で黒くなった部分あり Ⅰ-4様式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図45－46	A6Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 7.2 底部 3/4存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	外：赤色 内：にぶい黄橙色	すっきりした平底 外：ハケ目(3本/5mm) 底面・内：ナデ	ほぼ全体に黒いのは黒斑か？ 前期
図45－47	D5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 7.7 底部 1/4存	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色～灰白色	すっきりした平底 外：ハケ目(6本/1cm) 底面：粗雑なナデ 内：ナデ	底面縁周は黒斑 前期
図45－48	D5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.0 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	灰白色～明褐灰色	すっきりした平底 外：調整不明 底面・内：ナデ	前期
図45－49	B7Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.0 底部 1/9存	2～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	浅黄橙色～明褐灰色	すっきりした平底 内外・底面：調整不明	前期
図45－50	D5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.1 底部 1/2存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	外：淡橙色 内：黒色	すっきりした平底 外・底面：調整不明 内：粗いミガキ	内面に黒斑 前期
図45－51	B7Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.6 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい橙色	すっきりした平底 外：ハケ目(8本/1cm) 底面・内：調整不明	底部穿孔か？ 底面に焼成時にできた穴あり 前期
図45－52	C5Gr 3層	弥生土器 底部	底径 8.6 底部 1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	すっきりした平底 内外・底面：調整不明	前期
図45－53	D5Gr 3C層	弥生土器 底部	底径 8.9 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英など)やや多く含む	やや不良	にぶい橙色～灰黄褐色	すっきりした平底 内外・底面：ナデ	前期
図45－54	D6Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 9.0 底部 1/5存	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)多く含む	普通	にぶい橙色～灰白色	すっきりした平底 外：ハケ目(6本/1cm) 底面：未調整 内：ナデ	前期
図45－55	D4Gr 3層	弥生土器 底部	底径 9.0 底部 1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	すっきりした平底 内外：粗いナデ 底面：調整不明	前期
図45－56	D5Gr 3層	弥生土器 底部	底径 9.2 底部 1/6存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	すっきりした平底 外：ハケ目(7本/1cm) 底面・内：ナデ	前期
図45－57	B7Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 9.4 底部 1/4存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	灰黄褐色	すっきりした平底 外：調整不明 底面：ナデ 内：押しナデ	前期
図45－58	B8Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 9.6 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：浅黄橙色 内：灰白色	すっきりした平底 外：ハケ目(6本/1cm)→一部ナデ 底面：ナデ(ドーナツ状に指ナデによる凹みあり) 内：ナデ	底面がやや黒ずむ 前期
図45－59	D5Gr 3層	弥生土器 底部	底径 10.2 底部 1/3存	1～2mm大の砂粒子(石英など)多く含む	普通	浅黄橙色～灰褐色	すっきりした平底 外：ハケ目(6本/1cm) 底面・内：ナデ	内面胴部におこげ？付着 前期
図45－60	B8Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 10.3 底部 1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	灰白色	すっきりした平底(中央側を少し押し上げている) 外・底面：調整不明 内：ナデ	前期
図45－61	A5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 11.7 底部 1/10存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	すっきりした平底 外：ハケ目(5本/1cm)・粗いナデ 底面：ナデ 内：粗いナデ	前期
図45－62	B8Gr 3層	弥生土器 底部	底径 12.1 底部 1/6存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	浅黄橙色	すっきりした平底 内外・底面：調整不明	前期
図45－63	B8Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 13.6 底部 1/9存	2mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	すっきりした平底 外：ナデ(押さえ痕あり) 底面・内：ナデ	内面上部に若干のおこげ付着 前期
図45－64	D4Gr 3層	弥生土器 底部	底径 15.6 底部 1/8存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色	すっきりした平底 外・底面：調整不明 内：ナデ＋ハケ目(6本/5mm)	前期
図45－65	C4Gr 3層	弥生土器 底部	底径 6.0 底部 4/5存	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色～黄灰色	くびれのある平底 外：ハケ目(6本/1cm)→粗雑なナデ消し 底面：調整不明 内：粗いナデ	底面縁辺部の一部に黒斑あり 前期

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図45－66	C3Gr 3C層	弥生土器 底部	底径 6.7 底部 1/3存	1～4mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	にぶい赤橙色～明褐灰色	くびれのある平底 外：ハケ目(7本/1cm)→底部周辺部分的にナデ 底面・内：ナデ	前期
図45－67	B5Gr 3層	弥生土器 底部	底径 8.1 底部 1/5存	1～4mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色～灰褐色	くびれのある平底 外：成形時の指頭圧痕→ハケ目(9本/1cm) 底面・内：ナデ	前期
図45－68	D5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.8 底部 1/3存	2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)やや多く含む	普通	外：にぶい橙色 内：黄灰色～黒褐色	くびれのある平底 外・底面：調整不明 内：ナデ	前期
図45－69	B10Gr 3層	弥生土器 底部	底径 9.8 底部 1/4存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)及び若干の角閃石を含む	普通	淡黄色	くびれのある平底 外：調整不明 底面・内：ナデ	前期
図45－70	D5Gr 3層	弥生土器 底部	底径 10.3 底部 1/4存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色	くびれのある平底 外：ハケ目(4本/5mm)→粗いナデ 底面・内：粗いナデ	前期
図46－71	A4Gr 3C層	弥生土器 底部	底径 16.2 底部 1/2存	1～3mm大の砂粒子(石英・長石・赤褐色粒子など)及び若干の角閃石を含む	普通	浅黄橙色	くびれのある平底 外：ハケ目 底面：調整不明 内：剥落	前期
図46－72	B7Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.1 底部 1/6存	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)少量含む	普通	浅黄橙色	分厚い平底 外：ハケ目(6本/5mm) 底面：調整不明 内：剥落	前期
図46－73	C6Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 7.2 底部 1/2存	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	橙色	分厚い平底 内外・底面：調整不明	前期
図46－74	B6Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.8 底部 1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	浅黄色	分厚い平底 内外・底面：調整不明	前期
図46－75	D7Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 8.5 底部 1/2存	2～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	上げ底 内外・底面：調整不明	前期
図46－76	D10Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 4.3 底部 ほぼ完	1～4mm大の砂粒子(石英・長石など)及び微細な角閃石を含む	普通	灰白色	上げ底 外：ナデ？(指押さえ痕あり) 底面：調整不明 内：ナデ？(不規則な凹凸が残存)	前期
図46－77	A5Gr 3B層	弥生土器 底部	底径 11.8 底部 1/8存	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)やや多く含む	普通	橙色～にぶい黄橙色	上げ底 外：ヨコハケ目？(ヨコ方向のヘラ目状の沈線が観察される) 底面・内：ナデ	前期
図46－78	D3Gr 3B層	弥生土器 高坏	接合部径 4.7 接合部 完	1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く、また少量の角閃石を含む	普通	浅黄色	接合部に円筒状粘土充填 内外：調整不明	
図46－79	B6Gr 3B層 下位	弥生土器 土製円盤	6.0×5.2角 重量 33	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	灰白色	外：ﾐｶﾞｷ→ヘラ描きによる沈線文＋羽状文 内：成形時の指押さえ痕→ﾐｶﾞｷ	土器の転用 前期
図46－80	A5Gr 3層	弥生土器 土製円盤	7.0×6.5角 重量 53.5	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰白色	外：調整不明→1条の沈線文 内：調整不明	土器の転用 前期
図46－81	D7Gr 3B層	弥生土器 土製円盤	5.8×5.7角 重量 49	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	やや不良	外：にぶい橙色 内：灰黄色	内外：調整不明	土器の転用 前期
図46－82	A5Gr 3層	弥生土器 土製円盤	4.0×4.0角 重量 15	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	外：黒褐色 内：灰黄色	外：ハケ目(5本/1cm) 内：ナデ？(微妙な砂移動が観察される)	土器の転用 外面黒斑？ 中期
図46－83	C8Gr 3層	弥生土器 土製円盤	7.0×6.0角 重量 72	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい黄橙色	外：ﾐｶﾞｷ？ 内：ナデ	土器の転用 中期
図46－84	D5Gr 3B層	弥生土器 甕	胴部 5.0×4.5角	1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)やや少量含む	普通	灰白色	外：調整不明→(長い刻目→平行沈線文)＋2条の浅い沈線文 内：調整不明	中期後半(塩町式)
図47－1	C8Gr 3層	古式土師器 直口壺	口径 12.0 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	浅黄橙色	口縁端部は直線的に伸びる 内外：調整不明	
図47－2	D9Gr 3B層	古式土師器 甕	口径 23.6 口縁部 1/10存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰白色～灰黄褐色	口縁端部は外へ屈曲させ平坦面をもつ 内外：調整不明	外面口唇部、口縁部の一部に黒斑あり 草田6

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図47－3	C8Gr 3B層 上半	古式土師器 甕	口径 18.6 口縁部 1/5存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい橙色～にぶい黄橙色	口縁端部に若干の平坦面あり 突出部が不明瞭 内外：調整不明	破面に挑成時破砕痕あり 古墳前期
図47－4	A4Gr 3B″層 上位	古式土師器 低脚坏	接合部径 4.4 接合部 完	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	普通	浅黄橙色	内外：調整不明	弥生終末～古墳初頭
図48－1	D9Gr 2層	円筒埴輪	胴部最大径 26.0 タガ長 1.7	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい橙色	外：ナデ 内：調整不明・極広のタテナデ	古墳後期
図48－2	D3Gr 1・2・ア層	須恵器 坏身	口径 11.6 最大径 12.6 器高 3.5 底径 4.0 ほぼ完形	若干の1～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・ケズリ(不定方向) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	出雲5期
図48－3	D3Gr 3B″層	須恵器 坏蓋	現存最大径 14.8 1/8存	若干の長石など含む	良好	灰白色	外：ナデ→ナデによる段・回転ヨコナデ→2条の凹線状の沈線 内：ナデ・回転ヨコナデ	出雲5期
図48－4	A4Gr 3B″層 上位	須恵器 坏蓋	屈曲部径 15.2 1/12存	若干の長石含む	良好	灰色	輪状つまみの痕跡あり 外：回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ 内：ナデ・回転ヨコナデ	出雲6期
図48－5	B10Gr 3層 上面	須恵器 蓋	現存最大径 10.5 1/5存	若干の石英含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ→回転による連続刺突文 内：ナデ	古墳後期
図48－6	A5Gr 2′層	須恵器 高坏	最大径 11.1 接合部径 4.2 坏部下半 1/4存	若干の石英・長石など含む	良好	灰白色	長方形または逆三角形ｽｶｼあり 外：回転ヨコナデ→部分的にナデ→連続ヘラ描き文＋1条の太い沈線文 内：ナデ	出雲3期
図48－7	E3Gr 1・2層	須恵器 大甕	頸部 8.0×5.0角	若干の石英・長石など含む	良好	外：灰色 内：黄灰色～褐灰色	外：回転ヨコナデ＋上下のナデによる突帯状 内：ヨコナデ	7～8世紀
図48－8	A4Gr 2層	須恵器 高台部	底径 7.2 底部 1/2存	若干の石英・長石など含む	良好	灰色	外：ヨコナデ 底面：回転ヨコナデ 内：同心円ナデ	
図48－9	A7Gr 2層	須恵器 高台付碗	底径 8.5 底部 2/3存	1.5mm大の砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	灰色	外：ヨコナデ 底面：ヨコナデ・同心円ナデ 内：回転ヨコナデ・ナデ(中央に直径3.5cmの凹みあり)	8世紀
図48－10	A4Gr 3B″層 上位	須恵器 皿	口径 14.8 器高 2.55 底径 11.4 1/5存	砂粒子ほとんど含まず粉っぽい	普通	灰色	外：回転ヨコナデ 底面：糸切り 内：回転ナデ・ナデ	8世紀
図48－11	A4Gr 3B″層 上位	須恵器 皿	底径 6.4 底部 1/4存	若干の石英・長石など含む	良好	青灰色	外：回転ナデ 底面：回転ヘラケズリ 内：回転ヨコナデ・ナデ	内面磨滅 9世紀
図48－12	A4Gr 3B層 上面	土師器 高台付坏	底径 6.7 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	明黄褐色	貼付高台 内外・底面：調整不明	10世紀
図48－13	A7Gr 2層	白磁 無高台皿	底径 6.0 底部 1/4存	緻密	良好	釉薬：明オリーブ灰色 露台：灰白色	外：施釉 底面：釉がかかり調整不明 内：施釉	中世前半
図48－14	8～12Gr 付近 排土中	土製品 土錘	長さ 5.6 最大直径 2.0 孔径 0.65 重量 19.5 完形				細身の紡錘形	表面先端の一部に黒斑あり
図48－15	C2Gr 1・2層	須恵質 布目瓦	7.0×7.5角	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	不良	灰白色	表面：布目叩き 裏面：縄目叩き	
図59－1	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 5.5×3.5角	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	波状口縁 外：磨消縄文(蕨形文) 内：ナデ	中津式(少し古い)
図59－2	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 3.5×3.5角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	波状口縁 外：磨消縄文 内：条痕	中津式(少し古い)
図59－3	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 2.5×2.0角	1mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	橙色	波状口縁 外：磨消縄文 内：ナデ	中津式(少し古い)

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図59－4	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 4.0×2.5角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色～褐灰色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－5	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×3.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:橙色 内:灰白色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－6	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 11.0×7.0角	1～3mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰黄色	体部キャリパー形 外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ?	中津式(少し古い)
図59－7	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 8.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	良好	暗灰黄褐色	体部キャリパー形 外:磨消縄文・条痕 内:条痕	中津式(少し古い)
図59－8	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・長石など)含む	やや不良	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色	外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:条痕	中津式(少し古い)
図59－9	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.5×2.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色～にぶい褐色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－10	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.0×3.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	やや不良	外:橙色 内:灰褐色	外:磨消縄文(長楕円形の区画文) 内:条痕	中津式(少し古い)
図59－11	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 6.5×5.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰黄色	外:磨消縄文(撚縄文・長方形の区画文) 内:条痕	中津式(少し古い)
図59－12	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 7.5×3.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	黄褐色～橙色	外:磨消縄文(長楕円形の区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－13	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.0×3.5角	2～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・長石など)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:黄褐色	外:磨消縄文(長楕円形の区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－14	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	外:橙褐色 内:にぶい黄橙色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－15	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.5×4.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:明褐色	外:磨消縄文(長方形の区画文) 内:条痕	中津式(少し古い)
図59－16	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.5×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	明褐色～にぶい黄橙色	外:磨消縄文(菱形文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－17	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰黄色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－18	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 3.5×3.5角	1～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	やや不良	浅黄色	外:調整不明→沈線文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－19	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 3.0×2.5角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	良好	外:暗褐色 内:にぶい黄橙色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－20	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 7.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	外:橙色 内:にぶい黄橙色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文(長方形の区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図59－21	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×2.5角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄褐色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文 内:調整不明	中津式(少し古い)
図60－22	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口径 45.4 上半部 1/8存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色～灰黄褐色	波状口縁　体部キャリパー形 外:磨消縄文(鉤状)字文を交互に4段施す)・ﾐｶﾞｷ 内:ﾅﾃﾞ	中津Ⅱ式
図60－23	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 7.0×7.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・長石・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	赤褐色	波状口縁 外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図60－24	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 6.0×4.0角	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	黄灰色～灰黄色	波状口縁 外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図60－25	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 4.0×2.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	黒褐色	波状口縁 外:磨消縄文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図60－26	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 11.0×8.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英など)多く含む	良好	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色	波状口縁 外:磨消縄文(帯状文) 内:ﾐｶﾞｷ	中津式(少し新しい)
図60－27	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 5.5×5.0角	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	にぶい橙色～暗褐色	波状口縁 外:磨消縄文(帯状文) 内:ﾐｶﾞｷ	中津式(少し新しい)
図60－28	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 7.0×4.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	外:黄灰色 内:灰黄褐色	波状口縁 外:磨消縄文(頂部の尖った)字文) 内:ﾐｶﾞｷ	中津Ⅲ式
図60－29	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 3.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:褐色	波状口縁 外:磨消縄文(頂部の尖った)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図60－30	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 5.0×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい赤褐色 内:褐灰色	外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:ﾐｶﾞｷ	中津式(少し新しい)
図60－31	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 6.0×5.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・長石など)含む	普通	外:橙色 内:にぶい黄褐色	波状口縁 外:ﾅﾃﾞ→沈線文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図60－32	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 7.0×5.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色	波状口縁 外:ﾐｶﾞｷ→沈線文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図60－33	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.5×2.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:明赤褐色 内:にぶい赤橙色	外:磨消縄文(帯状文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－34	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.5×4.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:明褐色 内:にぶい橙色	外:磨消縄文(鉤状)字文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－35	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	口縁部 5.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)また若干の角閃石を含む	普通	外:灰色 内:にぶい黄色	波状口縁 外:磨消縄文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－36	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.5×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:明赤褐色 内:にぶい黄橙色	外:磨消縄文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－37	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 2.5×2.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英など)含む	普通	明褐色～にぶい橙色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－38	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.0×3.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	やや不良	外:にぶい黄橙色 内:明黄褐色～灰白色	外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－39	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 3.0×2.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)やや多く含む	普通	明褐色～にぶい黄橙色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－40	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.0×2.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外:にぶい橙褐色 内:浅黄橙色	外:ﾅﾃﾞ→沈線文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－41	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 4.0×3.5角	1～3mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	黄灰色～黒褐色	外:磨消縄文(区画文) 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し新しい)
図61－42	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 6.5×5.0角	1～5mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	良好	浅黄色～黒褐色	外:縄文 内:ﾅﾃﾞ	
図61－43	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文深鉢	胴部 7.5×4.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	良好	外:灰黄褐色 内:黒褐色	外:縄文 内:ﾅﾃﾞ	
図61－44	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	口縁部 5.0×3.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	にぶい黄褐色～褐色	水平口縁　体部ボウル形 外:磨消縄文 内:ﾅﾃﾞ	中津式(少し古い)
図61－45	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	口縁部 6.0×3.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英など)多く含む	普通	赤褐色～にぶい黄橙色	水平口縁　体部ボウル形 外:調整不明(鉤状)字文) 内:調整不明	中津式(少し新しい)

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図61－46	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	口縁部 4.5×3.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	普通	褐色～黒褐色	水平口縁　体部ボウル形 外:磨滅不明(沈線文) 内:調整不明	中津式(少し新しい)
図61－47	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	口縁部 8.0×8.0角	1～6mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	良好	浅黄色～明褐色	波状口縁　体部皿形 外:ミガキ?→沈線文(円形文) 内:調整不明	中津式(少し新しい)
図61－48	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	胴部　4.5×3.0角	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	にぶい黄橙色～黒褐色	外:磨消縄文・ミガキ 内:ミガキ	中津式(少し新しい)
図61－49	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	胴部　7.5×4.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	灰黄褐色～黒褐色	外:磨消縄文(長方形の区画文) 内:ナデ	中津式(少し新しい)
図61－50	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	胴部　6.0×3.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	浅黄色～灰黄色	外:磨消縄文(鉤状J字文) 内:ナデ	中津式(少し新しい)
図61－51	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	口縁部 3.5×2.0角	1～2mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	黄褐色～黒褐色	波状口縁 外:磨消縄文(鉤状J字文) 内:ミガキ	中津Ⅲ式
図61－52	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	胴部　8.5×5.5角	微砂粒子～1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色	外:磨消縄文(帯状文)・ミガキ 内:ミガキ	中津式(少し新しい)
図61－53	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文浅鉢	胴部　8.0×6.5角	砂粒子～1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色～灰黄色	外:磨消縄文(円形文) 内:ナデ・条痕	中津式(少し新しい)
図61－54	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 有文双耳壺	把手部 6.5×5.0角	1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	黄灰色	半球状の把手に上下からの穿孔あり 外:磨消縄文(鉤状J字文・菱形文・半月状文) 内:ミガキ	中津Ⅱ～Ⅲ式
図62－55	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 12.0×7.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・金雲母など)含む	普通	外:黒褐色 内:黄褐色	波状口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－56	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.5×5.5角	微砂粒子～1mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色～黒褐色	波状口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－57	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　30.0 口縁部　1/8存	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石・長石など)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰黄褐色	水平口縁　体部バケツ形 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－58	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.5×7.0角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)やや多く含む	やや不良	黒褐色	外:条痕 内:条痕	中津式
図62－59	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 6.0×5.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－60	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.0×3.5角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:黄褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－61	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 8.5×3.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	にぶい橙色～黒褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕	口縁端部付近に穿孔あり 中津式
図62－62	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×3.5角	1mm以下の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	外:にぶい黄橙 灰色 内:灰黄褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－63	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×4.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	外:黄灰色 内:灰黄色	波状口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－64	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.5×4.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	外:褐灰色 内:灰黄褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－65	A6Gr 層位不明 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.0×3.5角	微砂粒子～5mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	灰黄褐色	外:条痕 内:条痕	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図62－66	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.0×6.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	黄灰色～黒褐色	体部キャリパー形 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－67	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　6.0×5.0角	1mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	外:黄褐色 内:にぶい黄橙褐色	体部キャリパー形 外:条痕 内:条痕	中津式
図62－68	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 17.0×13.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	褐灰色～黒褐色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－69	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 14.0×12.5角	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英・角閃石など)含む	普通	明黄褐色～にぶい灰黄褐色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－70	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 16.0×15.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色～黄褐色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－71	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　9.0×8.0角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	外:灰黄褐色 内:褐灰色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－72	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.0×6.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	明褐色～灰黄褐色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－73	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　6.0×5.5角	1～2mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	外:にぶい褐色 内:黄灰色	外:条痕 内:条痕	中津式
図63－74	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　7.5×4.5角	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	明褐色～にぶい灰黄橙色	外:条痕 内:条痕	中津式
図64－75	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×3.5角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	良好	外:灰黄褐色 内:褐灰色	水平口縁 外:条痕 内:条痕→一部ナデ	中津式
図64－76	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	頸部径　26.0 頸部　1/8存	1～4mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	黄灰色～黄橙色	体部キャリパー形 外:条痕 内:条痕→一部ナデ	中津式
図64－77	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　25.4 口縁部　1/12存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)やや多く含む	やや不良	褐灰色～灰褐色	水平口縁 外:条痕 内:条痕→一部ナデ	外面に若干のススが付着 中津式
図64－78	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　31.7 口縁部　1/5存	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)やや多く含む	普通	外:にぶい黄橙褐色 内:灰黄色	水平口縁　体部キャリパー形 外:条痕 内:ナデ	中津式
図64－79	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 19.0×15.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)含む	普通	外:明褐色 内:灰黄色	波状口縁　体部キャリパー形 外:条痕 内:ナデ	中津式
図64－80	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 11.5×11.0角	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	良好	黄灰色～灰黄色	波状口縁　体部キャリパー形 外:条痕 内:ナデ	中津式
図64－81	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.5×6.0角	1mm大の砂粒子(石英・デイサイト・長石・角閃石など)含む	普通	外:にぶい黄橙色 内:灰黄橙褐色	水平口縁 外:条痕 内:ナデ	中津式
図65－82	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 16.5×10.0角	微砂粒子～6mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	黒褐色	波状口縁 外:条痕→一部ナデ 内:条痕	中津式
図65－83	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　23.0 口縁部　1/5存	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石・金雲母など)含む	普通	褐灰色～黒褐色	水平口縁　体部筒形 外:条痕→一部ナデ 内:条痕	中津式
図65－84	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.5×5.0角	1mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	外:灰黄褐色 内:暗黄橙色	水平口縁 外:条痕→一部ナデ 内:条痕	中津式
図65－85	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 6.5×5.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・デイサイト・長石など)含む	普通	灰黄褐色	水平口縁 外:条痕→一部ナデ 内:条痕	中津式
図65－86	A6Gr 才層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 13.0×4.5角	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色	波状口縁 外:条痕→一部ナデ 内:条痕	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図65－87	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.0×4.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・金雲母など)含む	普通	黄灰色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図65－88	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.5×4.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：灰黄褐色 内：褐灰色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図65－89	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 12.0×7.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)やや多く含む	普通	外：褐灰黄色 内：暗黄橙褐色	体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図65－90	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 10.0×8.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：明赤褐色～にぶい橙色 内：褐灰色	体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図65－91	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 14.0×10.0角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・橙色粒子など)含む	普通	外：橙色～灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図65－92	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 11.0×9.5角	1～5mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	明黄褐色～黒褐色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図66－93	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 12.0×11.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	明黄褐色～褐灰色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図66－94	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 10.0×6.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・金雲母など)及び若干の1cm大の砂粒子含む	良好	灰黄褐色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図66－95	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　9.5×4.0角	1～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・若干の角閃石など)含む	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図66－96	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　6.5×5.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・長石など)含む	普通	外：にぶい橙色～明褐色 内：淡黄色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図66－97	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 10.5×8.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・長石・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外：にぶい黄褐灰色 内：にぶい灰黄色	波状口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－98	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 14.5×12.0角	1～5mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄褐色～黒褐色	水平口縁　体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－99	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 9.0×7.0角	1mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石・長石など)含む	普通	外：明黄褐色 内：灰白色	水平口縁　体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－100	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 10.0×8.5角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	良好	外：黒褐色 内：灰黄色	水平口縁　体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－101	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.0×6.5角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外：褐色 内：にぶい黄褐色	波状口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－102	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 10.0×10.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	外：黄灰色 内：黒褐色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－103	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 9.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	外：にぶい黄橙褐色 内：にぶい黄橙色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－104	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.0×2.0角	1mm以下の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石・長石など)含む	普通	外：橙褐灰色 内：灰黄褐色～黒褐色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図66－105	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　9.5×7.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・橙色粒子・黒雲母など)含む	普通	外：にぶい褐色 内：黄灰色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	胴部中央に穿孔あり 中津式
図67－106	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：にぶい黄褐色 内：褐灰色	体部キャリパー形 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図67－107	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	底径　9.0 体部下半～底部 1/4存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・長石・角閃石など)含む	良好	外：灰黄色 内：黄灰色	平底 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	胴部下半部に穿孔あり 中津式
図67－108	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.0×4.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石・長石など)含む	やや不良	浅黄色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図67－109	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 11.5×10.5角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	灰黄色～灰黄褐色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図67－110	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.5×5.5角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	やや良好	褐灰色～黄灰色	外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図67－111	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 11.0×7.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	外：明黄褐色～にぶい橙色 内：黄褐色	水平口縁　体部キャリパー形 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－112	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 6.5×6.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	褐灰色～黒褐色	水平口縁 外：強いﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－113	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.5×4.5角	1～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	やや不良	にぶい黄橙色～明黄褐色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－114	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 9.0×5.0角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	やや不良	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－115	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×2.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色～褐色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－116	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 5.5×4.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－117	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.0×5.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色～褐灰色	体部キャリパー形 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図67－118	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.0×6.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石・金雲母など)含む	普通	外：にぶい黄橙褐色 内：灰黄色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図67－119	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　8.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：粗雑なﾅﾃﾞ 内：条痕→一部粗雑なﾅﾃﾞ	内面におこげ付着 中津式 14C年代測定試料
図67－120	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　6.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：橙色 内：にぶい黄橙色～褐灰色	外：ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図67－121	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部　6.0×5.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外：にぶい黄橙色 内：黄灰色	外：ﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式
図68－122	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　29.6 口縁部～体部上半 1/7存	1～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石・金雲母など)含む	やや不良	外：にぶい赤褐色 内：にぶい黄褐色	波状口縁　体部キャリパー形 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－123	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　29.1 口縁部　1/8存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：にぶい黄褐色 内：浅黄灰色	波状口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－124	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 10.5×8.5角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：褐色 内：明灰褐色	水平口縁　体部キャリパー形 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－125	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 6.5×6.0角	1～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色～灰黄褐色	水平口縁 外：細いﾅﾃﾞ 内：細いﾅﾃﾞ	中津式
図68－126	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　23.0 口縁部　1/7存	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・長石・角閃石など)含む	やや不良	にぶい黄褐色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	口縁部やや下位に穿孔あり 中津式
図68－127	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径　25.0 口縁部　1/7存	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	にぶい黄橙色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図68－128	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 7.0×5.5角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：にぶい黄橙色 内：灰黄色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－129	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×3.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	灰黄色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－130	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 4.0×3.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色	水平口縁 外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－131	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 10.0×5.5角	微砂粒子～7mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外：にぶい黄褐色 内：暗灰黄色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－132	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 11.0×11.0角	微砂粒子～5mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：にぶい橙色 内：灰黄褐色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－133	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 10.0×7.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	橙色～淡黄色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図68－134	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 7.0×5.5角	1～5mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：橙色 内：褐灰色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図69－135	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 6.0×4.0角	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	にぶい褐色～灰黄橙褐色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図69－136	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 7.0×5.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：にぶい黄橙色 内：灰黄色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図69－137	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 4.0×4.0角	1～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	黄褐色～褐色	外：ﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図69－138	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 14.0×8.5角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・花崗岩など)含む	普通	外：にぶい橙褐色 内：灰黄褐色	波状口縁 外：ﾐｶﾞｷ(口端部付近は条痕→ﾐｶﾞｷ) 内：条痕	中津式
図69－139	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 8.5×4.5角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	外：にぶい褐色 内：褐灰色	体部キャリパー形 外：ﾐｶﾞｷ 内：ｹｽﾞﾘ(RL)→ﾅﾃﾞ	中津式
図69－140	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 9.0×6.0角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色 ～橙色	外：ｹｽﾞﾘ(RL) 内：ｹｽﾞﾘ(LR？)→粗いﾅﾃﾞ	中津式
図69－141	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 6.5×6.0角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	褐灰色～にぶい褐色	外：ｹｽﾞﾘ(DU) 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図69－142	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 9.0×6.5角	1～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	外：灰黄褐色 ～にぶい黄橙色 内：灰白色	体部キャリパー形 内外：調整不明	中津式
図69－143	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口径 20.6 口縁部 1/9存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	橙色～明黄灰褐色	波状口縁 外：調整不明 内：条痕	中津式
図69－144	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	口縁部 6.5×6.0角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：にぶい黄橙褐色 内：にぶい灰黄色	水平口縁 内外：調整不明	中津式
図69－145	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 13.5×9.0角	微砂粒子～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	普通	外：にぶい橙色 ～黒褐色 内：灰白色	外：条痕 内：調整不明	中津式
図69－146	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 無文深鉢	胴部 8.5×5.5角	微砂粒子～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	外：橙色～淡黄色 内：にぶい黄橙色	外：ﾅﾃﾞ 内：調整不明	中津式
図70－147	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口径 32.0 体部上半 1/4存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	外：黄褐色 内：黄橙色	水平口縁　　体部皿形 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－148	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口径 27.2 口縁部～体部 1/16存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・若干の金雲母など)含む	普通	外：黒褐色 内：灰色	水平口縁　　体部ボウル形 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図70－149	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口径 17.4 体部 1/8存	1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)及び若干の金雲母含む	やや不良	灰黄褐色	水平口縁　　体部ボウル形 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－150	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口縁部 4.5×4.5角	微砂粒子～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	黒褐色～灰黄褐色	水平口縁　　体部ボウル形 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－151	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	胴部 8.0×5.0角	1mm以下の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	良好	にぶい黄色～暗黄灰褐色	体部皿形 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－152	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	胴部 9.5×5.5角	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色～黄褐色	底部と体部の境は不明瞭 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－153	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	体部～底部 6.0×4.0角	1～2mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：にぶい黄橙色～灰黄褐色 内：褐色	平底 内外：ﾐｶﾞｷ	中津式
図70－154	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口径 29.0 復元器高 14.0 底径 9.0 1/5存	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：橙色～灰黄褐色 内：灰白色～黒褐色	水平口縁　　体部ボウル形 平底 外：条痕→ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ(RL) 底面：粗雑なﾅﾃﾞ 内：条痕・粗雑なﾅﾃﾞ	内面にｽｽ付着 中津式
図70－155	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	口縁部 5.5×3.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外：にぶい橙色 ～褐灰色 内：黄灰色	水平口縁 外：条痕→一部ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図70－156	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 無文浅鉢	胴部 6.0×3.5角	1～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	外：にぶい黄橙色 内：褐灰色	体部ボウル形 外：ﾅﾃﾞ 内：条痕	中津式
図71－157	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.0 底部 3/4存	1～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	暗灰色	上げ底 外・底面：ﾅﾃﾞ 内：粗雑なﾅﾃﾞ	中津式
図71－158	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.4 体部下位～底部 1/6存	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	外：橙色 内：灰白色	上げ底 外・底面：ﾅﾃﾞ 内：条痕→ﾅﾃﾞ	中津式
図71－159	A6Gr カ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 6.6 底部 1/3存	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	灰黄色～橙色	上げ底 外：ﾐｶﾞｷ？ 底面：ﾅﾃﾞ 内：条痕→ﾅﾃﾞ	中津式
図71－160	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.0 底部 1/8存	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	普通	外：灰黄色 内：黄灰色	上げ底 外：ﾀﾃﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ 底面：ﾅﾃﾞ 内：条痕→ﾅﾃﾞ	中津式
図71－161	A6Gr 層位不明 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 8.0 底部 1/2存	1～4mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	にぶい黄橙色	上げ底 内外：条痕→ﾅﾃﾞ 底面：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－162	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 7.0 底部 1/12存	1～3mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	灰白色	上げ底 内外・底面：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－163	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 8.0 底部 3/4存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄ・角閃石など)含む	普通	黄灰褐色～黒褐色	上げ底 内外・底面：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－164	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 7.1 底部 3/4存	1～3mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)やや多く含む	やや不良	外：明黄橙褐色 内：褐色～黒褐色	上げ底 内外・底面：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－165	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 11.0 底部 1/5存	1～5mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	上げ底 内外・底面：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－166	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 13.0 底部 1/2存	1～6mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英など)含む	普通	外：浅黄色 内：黒褐色	上げ底 内外・底面：粗雑なﾅﾃﾞ	中津式
図71－167	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.0 底部 1/8存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(ﾃﾞｲｻｲﾄ・石英・角閃石など)含む	やや不良	外：灰黄色 内：黄灰色	上げ底 外・底面：粗雑なﾅﾃﾞ 内：ﾅﾃﾞ	中津式
図71－168	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 14.2 体部下位～底部 1/8存	微砂粒子～9mm大の砂粒子(石英・ﾃﾞｲｻｲﾄなど)含む	やや不良	外：灰黄褐色 内：褐色	凹底 外：条痕→粗雑なﾅﾃﾞ 底面：粗雑なﾅﾃﾞ 内：条痕→一部ﾅﾃﾞ	中津式

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
図71－169	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.4 底部 2/3存	1mm大の砂粒子(石英・デイサイト・長石など)含む	普通	黄灰色	凹底 内外:条痕→一部ナデ 底面:ナデ	中津式
図71－170	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 11.7 底部 1/5存	1～5mm大の砂粒子(石英・デイサイト・長石など)含む	普通	外:橙色 内:黄褐色～黒褐色	凹底 外・底面:ナデ 内:条痕・ナデ	中津式
図71－171	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 10.2 体部下位～底部 1/8存	1～4mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)やや多く含む	普通	外:灰黄褐色 内:明黄褐色～にぶい黄橙色	凹底 内外・底面:ナデ	中津式
図71－172	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.0 底部 1/5存	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	良好	黄褐色～浅黄色	凹底 内外・底面:ナデ	中津式
図71－173	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 7.4 底部 1/2存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色～褐灰色	凹底 内外・底面:ナデ	中津式
図71－174	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.1 体部下位 1/2存 底部 ほぼ完	1～2mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)多く、また若干の角閃石を含む	やや不良	灰黄色	凹底 外・底面:ナデ? 内:調整不明	中津式
図71－175	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 8.0 底部 1/8存	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイト・角閃石など)やや多く含む	やや不良	外:にぶい橙色 内:にぶい黄橙色～灰黄色	凹底 外・底面:調整不明 内:条痕	中津式
図71－176	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 10.2 底部 1/3存	1～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	やや不良	にぶい黄橙色	凹底 外・底面:ナデ 内:調整不明	中津式
図71－177	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 8.9 底部 4/5存	1～5mm大の砂粒子(デイサイト・石英・角閃石など)やや多く含む	普通	外:明褐灰色～淡赤橙色 内:灰色～灰白色	凹底 外・底面:調整不明 内:粗いナデ	中津式
図71－178	A6Gr エ層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 10.0 底部 1/4存	1mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)多く、また若干の角閃石を含む	やや不良	外:橙色～にぶい黄橙色 内:灰白色～明黄褐色	凹底 内外・底面:調整不明	中津式
図71－179	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.6 体部下位～底部 1/5存	1～2mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	灰色	平底 外:条痕 底面・内:ナデ	中津式
図71－180	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部	底径 9.6 体部下位～底部 2/3存	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)多く含む	普通	外:浅黄橙色～橙色 内:明褐色	器壁のくびれは指ナデによる 平底 内外・底面:ナデ	中津式
図71－181	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部 (浅鉢?)	底径 6.0 体部下位～底部 1/7存	微砂粒子～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)やや多く含む	普通	外:にぶい褐色～黒褐色 内:橙色	平底 内外・底面:ナデ	中津式
図71－182	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 底部 (浅鉢?)	底径 8.0 底部 1/4存	1～4mm大の砂粒子(石英・花崗岩・デイサイトなど)含む	普通	灰白色	平底 内外・底面:調整不明	中津式
図71－183	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 底部 (浅鉢?)	底径 9.6 体部下位～底部 1/8存	微砂粒子～2mm大の砂粒子(石英・デイサイト・長石など)含む	普通	外:にぶい橙色 内:黒褐色	平底 内外:ミガキ 底面:調整不明	中津式
図72－184	A6Gr オ層 縄文集中地	縄文土器 小型深鉢	口径(184-1) 10.4 底径(184-2) 8.7 口縁部(184-1) 1/11存 底部(184-2) 1/8存	微砂粒子～4mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	水平口縁　体部キャリパー形 平底 内外・底面:ナデ	中津式
図72－185	A6Gr 10層 縄文集中地	縄文土器 小型鉢	口縁部 3.5×2.8角	1～2mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)含む	普通	外:黄灰色 内:灰黄色	水平口縁 外:ナデ→沈線 内:条痕→ナデ	中津式
図72－186	A6Gr エ～オ層 縄文集中地	縄文土器 小型鉢	頸部径 14.0 底径 7.5 2/3存	1～3mm大の砂粒子(石英・デイサイトなど)多く、また若干の角閃石を含む	やや不良	灰白色	丸底ぎみの平底 外・底面:調整不明 内:ナデ	中津式
図72－187	A6Gr エ層 縄文集中地	突帯文土器 口縁部	口縁部 4.5×3.0角	1～3mm大の砂粒子(デイサイト・石英など)含む	普通	橙色～灰黄褐色	内外:ナデ	無刻目突帯D類

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図49－1	C4Gr SD04 ⑥層	流紋岩 打製石斧	現存長 16.0　最大幅 10.6 最大厚 3.6　重量 620 基部欠損	撥形 右側縁:敲打→研磨 左側縁:敲打	
図49－2	C8Gr SD08	流紋岩 大型石包丁様石器	長さ 12.7　最大幅 13.5 最大厚 2.1　重量 375 完形品	裏面基部の加工は再加工か	表裏面とも磨滅痕あり(特に裏面の面積が広い)
図49－3	C9Gr SD08	流紋岩 砥石	現存長 12.1　現存幅 3.6 厚さ 2.0　重量 111 欠損品		荒研ぎ・中研ぎ・仕上げ研ぎ面あり
図49－4	A9Gr SX02	流紋岩 石錘?	長さ 8.5　幅 8.0 最大厚 3.5　重量 260 完形品	上下左右辺の中央部に抉りが入る	打製石斧の2次使用か
図49－5	A10Gr SX03	安山岩～玄武岩質の貫入岩 磨製石斧	現存長 3.4　現存最大幅 3.2 現存最大厚 2.5　重量 28.5 基部	乳棒状と思われる	
図49－6	D3Gr SD24	黒曜石 楔形石器	長さ 2.8　幅 1.7 最大厚 1.3　重量 4 完形品		
図49－7	C10Gr SD40 底面直	黒曜石 楔形石器	長さ 2.2　幅 2.0 最大厚 0.8　重量 3.5 完形品		
図49－8	C10Gr SD40	珪質岩(玉髄) 敲石	長さ 8.0　最大幅 5.8 最大厚 5.3　重量 295 完形品	剥離面は敲打によるものか	
図50－9	B4Gr P3	流紋岩 石器素材	長さ 12.2　最大幅 12.0 最大厚 3.4　重量 415 完形品	一側縁のみ加工	
図49－10	A5Gr P2	黒曜石 加工痕ある剥片	長さ 3.2　幅 1.1 最大厚 0.8　重量 1.6 完形品		
図50－11	D5Gr P1	流紋岩～デイサイト 打製石斧の2次使用	長さ 9.1　最大幅 13.1 最大厚 2.2　重量 190 完形品	基部は人工的に折半されたようなきれいな断面で、稜線は鋭利ではない	表裏面とも磨滅痕あり
図50－12	C9Gr P3	流紋岩～安山岩 加工痕ある剥片	長さ 5.1　最大幅 3.6 最大厚 0.5　重量 10.5 完形品		
図50－13	B6Gr 土器集積	流紋岩～安山岩 平石	現存長 10.2　幅 8.4 厚さ 2.5　重量 365 下部欠損	片面に研磨	
図51－1	B4Gr 3層	塩基性片岩 太型蛤刃石斧	現存長 9.7　現存最大幅 3.5 現存最大厚 4.7　重量 181 刃部		
図51－2	A8Gr 3B層	玄武岩 太型蛤刃石斧	現存長 5.9　現存最大幅 3.9 現存厚 3.1　重量 92.5 基部		
図51－3	D7Gr 3B層	塩基性片岩 磨製石斧 (太型蛤刃石斧)	現存長 4.8　現存幅 5.3 現存厚 1.2　重量 42 体部		
図51－4	A5Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 8.8　現存最大幅 6.7 最大厚 2.9　重量 117 刃部欠損	分銅形	
図51－5	B8Gr 4層上面	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 14.1　最大幅 12.4 最大厚 3.6　重量 575 刃部欠損	分銅形	
図51－6	D5Gr 3C層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 15.0　現存最大幅 8.7 最大厚 3.3　重量 485 刃部欠損	撥形	裏面に磨滅痕あり 右側縁中央は敲打による成形 左側縁刃部寄りに一部敲打による成形あり
図51－7	A5Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 16.2　現存最大幅 9.7 最大厚 3.8　重量 560 基部・刃部欠損	分銅形	裏面にキズ状の研磨痕あり
図51－8	B5Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 16.8　最大幅 7.4 最大厚 2.8　重量 480 刃部欠損	しゃもじ形	

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図52－9	D7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 14.8　現存最大幅 9.9 現存最大厚 2.8　重量 380 基部・刃部欠損	撥形	
図52－10	A4Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 18.1　現存最大幅 8.0 最大厚 2.7　重量 415 体部半分欠損		
図52－11	C10Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 13.4　現存幅 6.5 最大厚 3.2　重量 310 基部・体部半分欠損	短冊形	刃部に磨滅痕あり
図52－12	A2Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 11.5　現存最大幅 10.6 最大厚 3.6　重量 365 下半部	分銅形	
図52－13	D7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 7.2　現存最大幅 9.0 現存最大厚 2.4　重量 160 刃部		表裏面とも磨滅痕あり
図52－14	D10Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 5.8　現存幅 9.8 現存最大厚 2.4　重量 151 刃部		表裏面とも磨滅痕あり(特に表面は著しい)
図52－15	B5Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 5.9　現存最大幅 5.7 現存最大厚 3.1　重量 111 基部	撥形	
図52－16	A7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 6.6　現存最大幅 6.0 現存最大厚 2.4　重量 119 基部	短冊形	
図52－17	C3Gr 3C層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 7.0　現存最大幅 7.0 現存最大厚 1.9　重量 145 半部欠損		表裏面とも磨滅痕あり
図52－18	A6Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 5.4　現存最大幅 6.8 現存最大厚 2.3　重量 87 刃部		
図53－19	D4Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 18.4　最大幅 13.6 最大厚 2.9　重量 755 基部欠損		裏面刃部及び縁辺部に磨滅痕あり
図53－20	B5Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 12.6　最大幅 11.8 最大厚 1.6　重量 300 基部・刃部欠損	分銅形	部分的に磨滅痕あり
図53－21	D7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 11.5　最大幅 14.0 最大厚 2.8　重量 425 基部・刃部欠損		裏面研磨痕観察される
図53－22	A4Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 14.6　最大幅 8.2 現存最大厚 2.4　重量 362 基部欠損		
図53－23	A3Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 15.0　最大幅 8.3 最大厚 2.0　重量 285 基部・刃部欠損		
図53－24	A5Gr 3層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 13.0　現存最大幅 6.9 現存最大厚 1.6　重量 220 基部・体部半分欠損	短冊形	裏面刃部及び縁辺部に磨滅痕あり
図53－25	3～6Gr付近 排土中	流紋岩～安山岩 打製石斧	最大長 12.8　現存最大幅 6.8 最大厚 1.5　重量 166 基部・刃部欠損	撥形	
図54－26	D3Gr 3C層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 10.0　最大幅 15.5 現存最大厚 1.6　重量 260 刃部		表裏面とも刃部はツルツルの磨滅痕あり，裏面は特に著しく大きな剥離面にも観察される
図54－27	D6Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 8.6　現存最大幅 14.0 現存最大厚 1.4　重量 205 基部・体部半分欠損		
図54－28	A8Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 6.8　最大幅 9.2 最大厚 1.9　重量 118.5 刃部		
図54－29	A5Gr 1～2層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 7.6　最大幅 9.0 現存最大厚 1.6　重量 107.5 刃部		
図54－30	A～D -1～5Gr 排土中	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 6.0　現存最大幅 11.2 現存最大厚 1.5　重量 86.5 刃部		

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図54－31	B7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 2.8　現存最大幅 5.9 現存最大厚 1.2　重量 13 刃部		表裏面とも磨滅痕あり
図54－32	B6Gr 2層 3層上面	流紋岩～安山岩 打製石斧	現存長 6.6　現存最大幅 8.2 現存最大厚 1.9　重量 112 基部		
図54－33	A3Gr 1～2層	流紋岩～安山岩 打製石斧か？	現存長 13.4　最大幅 11.0 最大厚 2.0　重量 290 基部・刃部欠損		
図54－34	D3Gr 1～2層	流紋岩～安山岩 石斧未成品	長さ 14.8　最大幅 6.7 最大厚 2.4　重量 247 完形品		
図54－35	D10Gr 3B層	流紋岩～安山岩 石斧未成品	現存長 12.0　現存最大幅 7.3 現存最大厚 4.6　重量 395 体部		
図55－36	A3Gr 4層上面	安山岩(サヌカイト) スクレイパー	現存長 6.7　現存最大幅 10.3 最大厚 1.1　重量 64 一側縁欠損	刃部湾曲	
図55－37	D5Gr 3層	流紋岩～安山岩 スクレイパー	長さ 7.3　最大幅 11.8 最大厚 1.8　重量 153 一部欠損	刃部やや湾曲	
図55－38	B5Gr 3B層	流紋岩～安山岩 スクレイパー	長さ 3.3　最大幅 4.9 最大厚 1.1　重量 17 完形品		下縁辺部は刃こぼれ状を呈する
図55－39	A6Gr 3B層	玉髄(珪質岩) スクレイパー	長さ 5.7　最大幅 4.2 最大厚 2.0　重量 36 完形品		下縁辺部は刃こぼれ状を呈する
図55－40	A6Gr 3B層	玉髄(珪質岩) スクレイパー	長さ 5.8　最大幅 2.5 最大厚 1.0　重量 12.5 完形品	稜線は全て鋭利	両側縁は刃こぼれ状を呈する
図55－41	A6Gr 3B層	黒曜石 加工痕ある剥片	長さ 2.1　最大幅 4.2 最大厚 1.3　重量 7.5 完形品		下縁辺部に若干の刃こぼれ観察される
図55－42	A7Gr 2層	黒曜石 加工痕ある剥片	長さ 3.7　最大幅 2.0 最大厚 1.3　重量 7.5 完形品		
図55－43	A5Gr 3A層	黒曜石 剥片	長さ 1.7　最大幅 3.5 最大厚 0.7　重量 3 一部欠損		打撃面調整剥片かも
図55－44	A6Gr 3B層	砂岩 磨石・敲石	長さ 9.3　最大幅 7.3 最大厚 3.8　重量 245 完形品	表面：細かい敲打により整形・研磨痕あり 裏面：縁周に剥離を施してから細かい敲打による整形・研磨痕あり	スタンプ形を呈する 平坦面には使用中の敲打及び研磨痕あり
図55－45	C7Gr 3B層	流紋岩～安山岩 磨石・敲石	現存長 8.0　現存最大幅 4.8 現存最大厚 5.5　重量 270 1/4残存		表裏面研磨 側面敲打
図55－46	A5Gr 3層	玄武岩 磨石	現存長 7.7　最大幅 7.5 最大厚 4.8　重量 375 完形品		
図55－47	B5Gr 3層	花崗岩 磨石	現存長 7.0　現存最大幅 7.8 現存最大厚 3.8　重量 255 1/3残存		
図55－48	B5Gr 3B層	流紋岩～安山岩 磨石	現存長 3.1　現存最大幅 6.5 現存最大厚 4.7　重量 92 破片		側縁に敲打痕？
図56－49	A4Gr 2層	流紋岩～安山岩 砥石	長さ 6.7　最大幅 6.9 最大厚 1.5　重量 72 完形品		
図56－50	D6Gr 3B層	砥石	現存長 6.3　現存最大幅 8.0 現存最大厚 2.3　重量 131.5 半欠損		全面研磨か？
図56－51	B5Gr 3層	流紋岩～安山岩 砥石	現存長 5.9　現存最大幅 4.8 現存最大厚 3.5　重量 121 破片		

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図56－52	A10Gr 3層	流紋岩～安山岩 砥石	現存長 19.7　現存最大幅 6.2 現存最大厚 4.5　重量 510 表面の一部残存		刃部痕観察される
図56－53	A10Gr 3層	凝灰岩 砥石	長さ 4.8　最大幅 4.1 最大厚 3.4　重量 75.2 完形品		中研ぎ・仕上げ研ぎ面あり
図56－54	A5Gr 3層	玉髄(珪質岩) 石核	長さ 3.1　最大幅 4.8 最大厚 2.2　重量 25.5 完形品		
図56－55	C7Gr 3層	玄武岩質貫入岩 御物石器？ (祭祀石器)	長さ 35.7　最大幅 7.2 最大厚 11.8　重量 3000 完形品	形を整えるため、敲打後研磨した所が観察される 裏面の平坦面は研磨によりつくりだされている	
図73－1	A6Gr 10層 縄文集中地	獣骨 関節付近	現存長 8.0　最大幅 3.6 最大厚 2.6　重量 21 一部分		
図74－1	A6Gr エ層 縄文集中地	黒曜石 石鏃	長さ 1.2　最大幅 1.2 最大厚 0.25　重量 0.4 基部一部欠損		先端がドリルのように細い
図74－2	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石鏃	現存長 2.4　現存最大幅 1.6 最大厚 0.55　重量 1.2 先端部及び基部欠損		
図74－3	A6Gr エ層 縄文集中地	黒曜石 楔形石器	長さ 1.1　最大幅 1.7 最大厚 0.4　重量 0.5 完形品		上縁辺部に刃潰れ痕が明瞭
図74－4	A6Gr エ層 縄文集中地	黒曜石 楔形石器	長さ 1.4　最大幅 2.1 最大厚 0.7　重量 1.6 完形品		上下両縁辺部に刃潰れ痕あり
図74－5	A6Gr オ層 縄文集中地	黒曜石 楔状の使用痕ある剥片	長さ 1.0　現存最大幅 2.6 最大厚 0.6　重量 0.9 一部欠損		何らかの製品の2次使用か？ 上下縁辺部に刃潰れ痕あり
図74－6	A6Gr オ層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) スクレイパー	長さ 5.5　最大幅 3.1 最大厚 1.1　重量 15 完形品	下端部は平たくプラットフォームを残し厚みがある	両サイドに刃こぼれ状の小剥離痕があるのでサイドスクレイパーか？
図74－7	A6Gr エ層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 加工痕ある剥片	長さ 3.4　最大幅 2.1 最大厚 1.2　重量 6.5 完形品		
図74－8	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 加工痕ある剥片	長さ 10.5　最大幅 6.5 最大厚 1.5　重量 106.5 完形品		
図74－9	A6Gr カ層 縄文集中地	黒曜石 使用痕ある剥片	現存長 3.1　現存最大幅 0.9 現存最大厚 0.6　重量 1 上下欠損		両側縁に刃こぼれあり
図74－10	A6Gr オ層 縄文集中地	黒曜石 使用痕ある剥片	現存長 3.1　最大幅 1.3 最大厚 0.6　重量 1.5 下部欠損		左側縁に刃こぼれ及びキズ状の使用痕が明瞭
図74－11	A6Gr オ層 縄文集中地	黒曜石 使用痕ある剥片	現存長 1.9　現存最大幅 2.1 現存最大厚 0.4　重量 1.2 半分欠損		縁辺部に使用痕・刃こぼれあり
図74－12	A6Gr オ層 縄文集中地	瑪瑙 使用痕ある剥片	長さ 2.9　最大幅 1.4 最大厚 0.4　重量 1.3 完形品		両側縁に刃こぼれあり
図74－13	A6Gr オ層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 使用痕ある剥片	長さ 3.2　最大幅 2.2 最大厚 0.85　重量 5.5 完形品		右下縁辺部に刃こぼれあり
図74－14	A6Gr 10層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 使用痕ある剥片	長さ 3.0　最大幅 4.3 最大厚 1.4　重量 10 完形品		右下縁辺部は鋭利で刃こぼれあり
図74－15	A6Gr オ層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 使用痕ある剥片	長さ 3.4　最大幅 5.1 最大厚 1.0　重量 16.5 完形品		左下縁辺部に刃こぼれあり(裏面が顕著)
図74－16	A6Gr 10層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 使用痕ある剥片	長さ 3.5　最大幅 4.1 最大厚 0.9　重量 10.5 完形品		右側縁裏面に刃こぼれ顕著

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図75－17	A6Gr エ層 縄文集中地	玉髄(珪質岩) 使用痕ある剥片	長さ 4.9　最大幅 5.2 最大厚 1.7　重量 51 完形品		下縁辺部裏面に刃こぼれあり
図75－18	A6Gr カ層 縄文集中地	方解石 使用痕ある剥片	長さ 5.5　最大幅 2.7 最大厚 0.8　重量 11.5 完形品		左側辺下部に刃こぼれあり
図75－19	A6Gr オ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 剥片	長さ 4.3　最大幅 6.6 最大厚 0.7　重量 16.5 完形品		
図75－20	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 磨石	現存長 14.5　現存最大幅 7.0 現存最大厚 5.5　重量 540 半分欠損		
図75－21	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 磨石	現存長 4.0　現存最大幅 8.5 現存最大厚 3.2　重量 140 一部分		
図75－22	A6Gr オ層 縄文集中地	安山岩 磨石・敲石	長さ 10.6　最大幅 6.2 最大厚 6.5　重量 475 完形品		
図75－23	A6Gr オ層 縄文集中地	凝灰岩 敲石	長さ 9.3　最大幅 5.4 最大厚 5.6　重量 280 完形品		
図75－24	A6Gr オ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 敲石	長さ 8.4　最大幅 5.3 最大厚 2.0　重量 65 完形品		
図76－25	A6Gr オ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石皿	現存長 13.5　現存最大幅 10.0 最大厚 6.5　重量 1160 一部分		
図76－26	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩 石皿	現存長 10.5　最大幅 9.5 最大厚 3.6　重量 445 一部欠損		
図76－27	A6Gr オ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石皿？	現存長 9.0　現存最大幅 5.1 現存最大厚 4.3　重量 165 一部分		
図76－28	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 砥石？	現存長 3.7　現存最大幅 5.9 現存最大厚 2.1　重量 43.5 一部分	裏面は擦痕面	
図76－29	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 打製石斧未成品	現存長 7.4　最大幅 6.3 現存最大厚 3.3　重量 178 基部・刃部欠損		
図77－30	A6Gr オ層 縄文集中地	酸性貫入岩 石錘	長さ 7.1　最大幅 5.5 最大厚 2.2　重量 117 完形品		裏面中央部に敲打痕あり
図77－31	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 7.5　最大幅 6.0 最大厚 2.2　重量 106.5 完形品		
図77－32	A6Gr オ層 縄文集中地	凝灰岩 石錘	長さ 8.0　最大幅 6.6 最大厚 2.6　重量 183 完形品		
図77－33	A6Gr 10層 縄文集中地	安山岩～玄武岩 石錘	長さ 9.1　最大幅 6.2 最大厚 2.3　重量 195 完形品		
図77－34	A6Gr エ層 縄文集中地	安山岩？ 石錘	長さ 7.0　最大幅 5.5 最大厚 2.4　重量 121 完形品		
図77－35	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 7.2　最大幅 6.4 最大厚 1.0　重量 67 完形品		
図77－36	A6Gr エ層 縄文集中地	火山岩または凝灰岩？ 石錘	長さ 7.8　最大幅 6.1 最大厚 2.6　重量 126 完形品		
図77－37	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 8.3　最大幅 6.6 最大厚 1.85　重量 92 完形品		
図77－38	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 8.2　最大幅 7.6 最大厚 1.7　重量 136.5 完形品		

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
図77－39	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 7.3　最大幅 5.5 最大厚 1.8　重量 77.5 完形品		
図77－40	A6Gr 才層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 6.1　最大幅 6.0 最大厚 2.1　重量 105.5 完形品		
図78－41	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 5.8　最大幅 5.2 最大厚 1.3　重量 48 完形品		
図78－42	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 9.4　最大幅 7.1 最大厚 1.4　重量 108.5		
図78－43	A6Gr 10層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 8.6　最大幅 5.7 最大厚 1.9　重量 120 完形品		
図78－44	A6Gr 才層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘	長さ 9.2　最大幅 4.7 最大厚 1.3　重量 67 完形品		
図78－45	A6Gr エ層 縄文集中地	安山岩 石錘	現存長 7.0　現存最大幅 5.5 現存最大厚 2.0　重量 93 下半部欠損		
図78－46	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩？ 石錘	現存長 6.3　最大幅 5.5 最大厚 2.0　重量 53 上半部欠損		
図78－47	A6Gr エ層 縄文集中地	流紋岩～安山岩 石錘未成品？	長さ 5.8　最大幅 6.2 最大厚 1.4　重量 52 完形品		

参考文献

・角田徳幸「板屋Ⅲ遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998 島根県教育委員会
・柳浦俊一「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年－中津・福田K2式土器群、縁帯文土器群の地域編年－」『島根考古学会 第17集』2000
・柳浦俊一「山陰中部地域における縄文時代後期土器の地域性－とくに「中津式」の小地域性について－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』2003
・「中津式の成立と展開」『第15回 中四国縄文研究会 発表資料・集成資料』2004
・鈴木道之助『図録・石器入門事典〈縄文〉』1994 柏書房
・加藤晋平・小林達雄・藤本強編「7 道具と技術」『縄文文化の研究』1995 雄山閣
・鳥谷芳雄・小林青樹・下江健太・岡田憲一「三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』2000 島根県教育委員会
・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992 木耳社
・赤澤秀則「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』1992 鹿島町教育委員会
・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』1994
・柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古 第3号』1980 松江考古談話会
・丹羽野裕ほか『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』1984 島根県教育委員会
・広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古 第8号』1992 松江考古談話会
・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『研究論集4』1978 九州歴史資料館

築山遺跡　１区西　土器等

挿図番号	器　種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①胎土　②焼成　③色調	備　考
79－1	中世土師器 坏	D13gr 土坑・1層	口径　11.7 底径　7.7 器高　3.5	器壁は底部から外傾して立ち上がる。	口縁部・体部 内外面：ナデ 底部　外面：不明	① 1mm 以下の砂粒を少し含む ②やや不良 ③淡黄橙色	完形に復元。
79－2	中世土師器 坏	D13gr 土坑・1層	口径　11.6 底径　8.6 器高　3.5	器壁は底部から僅かに内湾して立ち上がる。	口縁部・体部 内外面：ナデ 底部　外面：不明	① 1mm 以下の砂粒を少し含む ②やや不良 ③淡黄橙色	完形に復元。
79－3	須恵器 坏	B18gr SX01・1層	高台径 11.0	底部外縁に低い高台を貼り付ける。8 世紀後半から 9 世紀前半。	底部 内外面：回転ナデ	① 1.5mm 以下の砂粒を少し含む　②良　③灰白色	反転復元。
83－1	須恵器 壺 or 甕	13-14gr SD01・上層	不　明	口縁部は外反して開口する。	口縁部 内外面：ナデ	①砂粒をほとんど含まず緻密 ②良　③灰色	
83－2	須恵器 壺 or 甕	13-14gr SD01・下層	不　明	口縁部は外反して開口する。	口縁部 内外面：ナデ	①砂粒をほとんど含まず緻密 ②良　③灰色	
83－3	須恵器 坏蓋	13-14gr SD01・下層	不　明	天井部に稜を持つ。6 世紀後半。	天井部・口縁部 内外面：ナデ	① 1mm 以下の砂礫を少し含む ②良　③灰色	
83－4	須恵器 坏	13-14gr SD01・1層	高台径 11.0	底部外縁に低い高台を貼り付ける。8 世紀末から 9 世紀前半。	底部 内外面：ナデ	① 1mm 以下の砂粒を含む ②良　③灰色	反転復元。
83－5	土師器 壺 or 甕	13-14gr SD01・下層	不　明	口縁部は外傾して開口する。複合部の稜は斜め下方に突出する。古墳時代前期。	口縁部 内外面：ナデ	① 1mm 以下の砂粒を多く含む ②やや不良　③灰白色	
83－6	土師器 高坏	13-14gr SD01・下層	不　明	裾部は広がる。	脚部 内面：ケズリ外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を含む ②やや不良　③橙色	反転復元。
83－7	陶磁器	13-14gr SD01・上層	高台径 3.9	唐津系。底部に低い高台を削り出す。近世。	口縁部 内外面：回転ナデ	①砂粒をあまり含まず緻密 ②良　③にぶい黄橙色	
83－8	陶磁器 擂り鉢	13-14gr SD01・下層	不　明	器壁は厚い。	体部 内外面：ナデ	① 1mm 以下の砂粒を少し含む ②普通　③淡黄橙色	
83－9	円筒埴輪	13-14gr SD01・上層	不　明	胴部にタガを貼り付ける。古墳時代後期。	胴部 内外面：ナデ	① 3mm 以下の砂礫を含む ②やや良　③にぶい橙色	
83－10	円筒埴輪	13-14gr SD01・下層	不　明	胴部にタガを貼り付ける。古墳時代後期。	胴部 内外面：ナデ	① 3mm 以下の砂礫をやや多く含む　②やや良　③にぶい橙色	
83－11	須恵器 甕	13-14gr SD06	口径　20.7	頸部から外反して開口する。	頸部 内面：ナデ　外面：ハケ	① 0.5mm 以下の砂粒を少し含む　②良好　③灰色	反転復元。
88－1	須恵器 高坏	A17gr SK09・1層	脚端径 9.6	脚端部を下方に引き出す。6 世紀前半。	坏部・脚部 内外面：ナデ	① 0.5mm 以下の砂粒を少し含む　②良好　③灰色	反転復元。
93－1	弥生土器 甕	B11-B12gr SD41・2層	不　明	口縁部は外反して開口する。端部は丸く収める。弥生時代前期から中期前葉。	口縁部 内外面：ナデ	①希に 3mm 大の礫を含む ②やや不良　③淡黄橙色	
94－1	弥生土器 甕	A16gr 2-IV層	不　明	口縁部は単純に外反して開口する。前期から中期前葉。	口縁部　内外面：ナデ 胴部　内面：ケズリ	① 2.5mm 以下の砂礫を非常に多く含む　②普通　③灰白色	
94－2	弥生土器 甕	C15gr 2-IV層	不　明	口縁部は単純に外反し開口する。頸部外面に 4 条のヘラ描直線文を施す。前期。	口縁部・頸部 内外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
94－3	弥生土器 甕	D15gr 2-IV層	不　明	口縁部は外反して開口する。端部に刻目文、頸部に突帯文＋刻目文を施す。前期。	口縁部　内外面：ナデ 頸部　内面：指頭圧痕	①3mm 以下の砂礫を含む ②普通　③灰白色	
94－4	弥生土器 甕	D14gr 1・2層	不　明	口縁部は外反して開口する。端部に刻目文、頸部に突帯文＋刻目文を施す。前期	口縁部 内外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を含む ②普通　③灰白色	
94－5	弥生土器 甕	C15gr 1・2層	不　明	口縁端部を外に折る。頸部に刻目文と櫛描直線文を施す。中期前葉。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を含む ②普通　③褐灰色	
94－6	弥生土器 甕 or 壺	A12gr 3層	底径　9.0	平底。器壁が厚い。前期から中期前葉。	底部 内外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を多く含む ②普通　③にぶい橙色	反転復元。
94－7	弥生土器 甕 or 壺	A14gr 3A層	底径　11.8	平底。前期から中期前葉。	底部　内面：指頭圧痕 外面：ナデ	①2mm 以下の砂礫を多く含む ②普通　③淡黄橙色	反転復元。
94－8	土師器 甕	D13gr 3A層	不　明	口縁端部を丸く収める。複合部の稜は水平方向に突出する。古墳時代初頭。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm 以下の砂粒を含む ②普通　③灰白色	
94－9	陶磁器？ 鉢？	A16gr 2-IV層	不　明	口縁端部に面を持つ。	口縁部 内外面：粗いハケ	① 1mm 以下の砂粒を少し含む ②良　③にぶい橙色	
94－10	中世土師器 坏	C18gr 2層	底径　5.2	器壁は底部から外傾して立ち上がる。	底部　内面：回転ナデ 外面：回転糸切り	①砂粒あまり含まない ②普通　③淡黄橙色	
94－11	中世土師器 坏	C18gr 2層	底径　5.4	器壁は底部から僅かに内湾して立ち上がる。	底部　内面：回転ナデ 外面：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まず密 ②普通　③淡黄橙色	反転復元。
94－12	中世土師器 坏	B18gr 2層	底径　6.0	底部を絞る。	底部　内面：回転ナデ 外面：回転糸切り	①砂粒をあまり含まない ②良　③灰白色	反転復元。
94－13	中世土師器 坏	D18gr 2層	底径　6.8	器壁は底部から外傾して立ち上がる。	底部　内面：ナデ？ 外面：回転ナデ？	① 1mm 以下の砂粒を含む ②普通　③淡黄橙色	反転復元。
94－14	中世土師器 坏	D18gr 2層	底径　4.8	底部を絞る。器壁は内湾気味に立ち上がる。	底部　内面：ナデ？ 外面：回転ナデ？	①まれに 4mm 大の礫を含む ②やや不良　③淡黄橙色	反転復元。
94－15	中世土師器 坏	A18gr 2層	底径　4.5	器壁は底部から内湾気味に立ち上がる。	底部　内面：回転ナデ 外面：不明	①砂粒をほとんど含まず密 ②不良　③灰白色	反転復元。
94－16	土製品 土錘	D13gr 1・2層	長さ　4.5 幅　1.7	管状紡錘形土錘。孔子 0.4cm。	表面：ナデ？	① 1mm 以下の砂粒を含む ②普通　③灰白色	ほぼ完形。
94－17	円筒埴輪	C18gr 2層	不　明	胴部にタガを貼り付ける。	胴部　内面：ケズリ 外面：ハケ後ナデ	① 1mm 以下の砂粒を含む ②良　③にぶい橙色	
95－1	須恵器 坏身	D14gr 1・2層	不　明	立ち上がりを内傾気味に引き出す。6 世紀。	底部　内面：ナデ 外面：ケズリ後ナデ	①砂粒をほとんど含まず密 ②良　③灰白色	
95－2	須恵器 高坏	B18gr 3層	脚端径 9.5	脚裾端部を下方に引き出す。6 世紀頃。	脚裾部 内外面：ナデ	① 0.5mm 以下の砂粒を含む ②良好　③灰色	反転復元。
95－3	須恵器 甕 or 壺	B18gr 2層	底径　12.4	器壁は底部から僅かに内湾して立ち上がる。	底部　内面：ナデ 外面：ケズリ	①まれに 5mm 大の礫を含む ②良好　③灰色	反転復元。
95－4	須恵器 甕 or 壺	B11gr 1・2層	底径　9.7	底部を絞る。器壁は外傾して立ち上がる。奈良時代？	底部　内面：ナデ 外面：回転糸切り？	① 1mm 以下の砂粒を少し含む ②やや良　③灰色	反転復元。
95－5	須恵器 坏	A17gr 1・2層	高台径 7.2	底部外縁やや内寄りに低い高台を貼り付ける。奈良時代。	底部　内面：ナデ 外面：回転糸切り後ナデ	① 1mm 以下の砂粒を含む ②良　③灰色	反転復元。
95－6	瓦	D15gr 1・2層	厚さ　1.8	内湾している。	内面：布目 外面：タタキ	① 0.5mm 以下の砂粒を含む ②良　③灰色	
96－1	陶磁器 碗	B15gr 2-IV層	口径　12.5	蓮弁文が入る青磁。	口縁部 内外面：施釉	①緻密　②良好　③灰色	反転復元。
96－2	陶磁器 皿	C15gr 1・2層	口径　14.0	口縁部を外側に引き出す。白磁。	口縁部・体部 内外面：施釉	①緻密　②良好　③灰白色	反転復元。
96－3	陶磁器 小鉢	D12gr 1・2層	口径　7.5	口縁端部は肥厚し面を有する。陶器。	口縁部・体部 内外面：施釉	① 1mm 以下の砂粒を含む ②良好　③暗褐色	反転復元。
96－4	陶磁器 小鉢	A13gr 1・2層	不　明	口縁端部を外に短く引き出す。陶器。	口縁部・体部 内外面：施釉	①緻密　②良好 ③オリーブ黄色	
96－5	陶磁器 不明	C15gr 1・2層	不　明	家紋の様な文様が観察できる。	口縁部 内外面：ナデ	①密　②やや不良　③灰黄色	
96－6	陶磁器 鉢	C18gr 表土	口径　25.6	口縁端部を外側に折り返す。陶器。	口縁部 内外面：回転ナデ	①密　②良好　③にぶい褐色	反転復元。
96－7	陶磁器 鉢	A14gr 1・2層	口径　33.6	口縁端部を外側に折り丸くする。陶器。	口縁部・体部 内外面：施釉	① 1mm 以下の砂粒を含むが密 ②良好　③オリーブ黄色	反転復元。
96－8	陶磁器 擂り鉢	B18gr 2層	不　明	内面に擂り目がある。	体部 内外面：ナデ？	①密　②やや良　③にぶい橙色	
96－9	陶磁器 擂り鉢	A16gr 2-IV層	不　明	内面に擂り目がある。	底部 内外面：ナデ？	① 1mm 以下の砂粒を含む ②やや良　③にぶい橙色	
96－10	陶磁器 皿	B18gr 2層	不　明	底部内面に施文が認められる。磁器。	底部 内外面：施釉	①密　②良　③灰白色	
96－11	陶磁器 皿	A14gr 1・2層	高台径 7.6	底部外縁に低い高台を削り出す。内外面に染め付け有り。	底部 内外面：施釉	①緻密　②良好　③灰白色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
96－12	陶磁器 皿	D18gr 2層	高台径 6.0	底部外縁に低い高台を削り出す。磁器。	底部 内外面：施釉	①緻密 ②良好 ③灰白色	反転復元。
96－13	陶磁器 皿	A16gr 2-IV層	高台径 4.1	底部外縁に低い高台を削り出す。陶器。	底部 内外面：施釉	①密 ②良好 ③灰オリーブ色	反転復元。
96－14	陶磁器 皿	A14gr 1・2層	高台径 4.5	底部外縁に高台を貼り付ける。陶器。	底部 内外面：施釉	①密 ②良好 ③灰白色	

築山遺跡　11号区画道路部　土器等

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
100－1	須恵器 甕	A5gr SD01 1・2層	口径 50.4	口縁部に沈線と波状文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 肩部 内面：当て具痕 外面：タタキ	①2mm以下の砂礫を含む ②普良 ③灰色	反転復元。
100－2	須恵器 坏	A5gr SD01 1層	口径 16.2 高台径 9.5 器高 6.5	底部外縁に低い高台を貼り付ける。器壁は底部から外傾して立ち上がり開口する。奈良時代。	口縁部・体部 内外面：ナデ 底部 外面：回転糸切り	①砂粒をあまり含まない ②やや不良 ③黄灰色	反転復元。
100－3	須恵器 坏	A5gr SD01 1層	口径 11.7	底部外縁に低い高台を貼り付ける。器壁は底部から外傾して立ち上がり開口する。奈良時代。	口縁部・体部 内外面：ナデ 底部 外面：ナデ消し	①3mm以下の砂礫を含む ②良 ③灰色	
103－1	弥生土器 高坏	A6gr SD03	不明	口縁端部は肥厚し開口する。端部に連続刻目文を施す。中期。	坏部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②やや良 ③淡黄橙色	
105－1	土師器 甕	A6-A8gr SD04・1層	口径 29.6	口縁部は単純に外反して開口する。古墳時代。	口縁部 内外面：ナデ	① 3mm以下の砂礫をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	反転復元。
105－2		A6-A8gr SD04・1層	口径 21.2	口縁部は単純に外反して開口する。古墳時代。	口縁部・頸部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰色	反転復元。
105－3	須恵器 壺	A6-A8gr SD04 1層	口径 24.3	口縁部は単純に外反し開口する。頸部に沈線を施す胴部はあまり張らない。古墳時代。	口縁・頸部 内外面：ナデ 胴部 内面：当て具痕 外面：タタキ	①3mm以下の砂礫を含む ②やや不良 ③灰白色	反転復元。
106－1	弥生土器 長頸壺	A6gr 2層	口径 13.1	口縁端部は肥厚し開口する。端部外面に連続刻目文を施す。中期中葉。	口縁部・頸部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②やや良 ③淡黄色	反転復元。
106－2	弥生時代 高坏	A6gr 3層	不明	脚部に突帯を2本貼り付け、それぞれに連続刻目文を施す。中期中葉。	脚部 内面：ケズリ後ナデ 外面：ナデ	① 1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③灰白色	反転復元。
106－3	須恵器 壺	A8gr 3層	口径 26.2	口縁部は単純に外反して開口する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部 外面：カキメ	①まれに6mm大の礫を含む ②良 ③灰色	反転復元。
106－4	須恵器 甕	A9-B9line サブトレ	口径 25.0	口縁部は単純に外反して開口する。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰色	反転復元。
106－5	須恵器 甕	A7gr 1・2層	口径 21.5	口縁部は単純に外反して開口する。	口縁部 内外面：ナデ	①砂粒をあまり含まず密 ②良 ③灰色	反転復元。
106－6	須恵器 甕	A8gr 3層	口径 21.0	口縁部は大きく外反して開口する。端部は肥厚する。	口縁部 内外面：ナデ	①砂粒をあまり含まず密 ②良好 ③灰色	反転復元。
106－7	須恵器 甕	A7gr 2層	不明	肩部に把手を貼り付ける。	肩部 内面：当て具痕 外面：タタキ後ナデ	①砂粒をあまり含まず密 ②良好 ③灰色	
106－8	須恵器 坏	A3gr 2層	高台径 12.7	底部外縁に低い高台を貼り付ける。平安時代。	底部 内面：ナデ 外面：糸切り後ナデ？	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰色	反転復元。
106－9	土師器	A7gr 1・2層	底径 5.5	やや厚い平底。	底部 内外面：ナデ	① 1mm以下の砂粒をやや多く含む ②良 ③にぶい橙色	
106－10	中世土師器 坏	A1gr 1・2層	底径 5.0	器壁は底部から大きく外傾して立ち上がる。	口縁部 内面：ナデ 外面：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まず密 ②普通 ③灰黄褐色	反転復元。
106－11	陶磁器 碗	A1gr 1・2層	口径 8.0	器壁は内湾する。青磁。	口縁部・体部 内外面：施釉	①密 ②良 ③明緑灰色	反転復元。
106－12	陶磁器 甕	A1-A2line サブトレ	不明	口縁部は外反して開口する。端部は肥厚する。陶器。	口縁部・頸部 内外面：回転ナデ	①3mm以下の砂礫を含む ②良好 ③にぶい橙色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
107－1	瓦	A6gr 2層	不明	強く内湾する丸瓦。	内面：ケズリ後ナデ？ 外面：ナデ	①まれに5mm大の礫を含む ②良 ③灰色	

築山遺跡　1区西・11号区画道路部　石器

挿図番号	種類	出土地点	遺存状態	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
84－1	剥片	B14-B17gr SD15	－	流紋岩	8.2	5.4	1.0	44	貝殻状剥痕、放射状剥痕が観察できる。
97－1	石斧	A17gr 2-IV層	一部欠	流紋岩	14.6	9.0	3.0	401	打製石斧の基部で刃部が欠損している。縁を打ち欠き成形している。縄文晩期から弥生前期。
97－2	石斧	排土	一部欠	流紋岩	9.1	7.6	2.5	271	打製石斧の基部で刃部が欠損している。縁を打ち欠き成形している。縄文晩期から弥生前期。
97－3	石斧	A17gr 2-IV層	一部欠	流紋岩	14.0	11.2	3.0	546	打製石斧の刃部で基部が欠損している。縁を打ち欠き刃を形成する。縄文晩期から弥生前期。
97－4	石斧	A18gr 2層	一部欠	流紋岩	6.2	11.4	1.8	153	打製石斧の刃部で基部が欠損している。縁を打ち欠き刃を形成する。縄文晩期から弥生前期。
97－5	石錘	A18gr 2層	完形	流紋岩	9.6	5.0	1.9	136	両端の中央部を打ち欠く。
107－2	石斧	A6gr 2層	一部欠	流紋岩	9.3	8.0	1.9	241	打製石斧の基部で刃部が欠損している。縁を打ち欠き形成している。縄文晩期から弥生前期。

県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

築山遺跡Ⅰ

（つきやまいせきいち）

2005年 12月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

序

出雲市上塩冶町には、史跡上塩冶築山古墳を筆頭に、上塩冶横穴墓群、築山遺跡など数多くの埋蔵文化財が存在しており、出雲市内でも遺跡の研究においては重要な地域であります。しかし、一方で土地区画整理事業や県道改良事業などの開発が進められつつある地域でもあります。

県道出雲三刀屋線改良事業は、島根県出雲土木建築事務所によって計画されている道路事業ですが、予定地が周知の遺跡である築山遺跡内を横断する路線であります。このため島根県出雲土木建築事務所と出雲市で協議を重ね、平成15年度から遺跡保護のため発掘調査を実施しております。

本書はこの発掘調査結果を報告するために作成したものであります。なお、築山遺跡内では県道今市古志線も計画されており、現在も発掘調査を継続していますが、この報告書については、別途発行する予定です。

今回の調査成果が、さらなるこの地域における歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、発掘調査や本書の刊行にあたって、ご指導、ご協力賜りました島根県出雲土木建築事務所をはじめ、関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成17年(2005) 12月

出雲市教育委員会
教育長　黒目　俊策

例　言

1．本書は、島根県出雲土木建築事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成15年度(2003)に実施した、県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で取り扱う遺跡は築山遺跡(島根県遺跡番号：W24、出雲市遺跡番号：F23)である。

3．調査地の所在及び面積は次のとおりである。

　1区：出雲市上塩冶町1684ほか、2,300㎡

　11号区画道路部：出雲市上塩冶町1686-2ほか、250㎡

4．現地の発掘調査期間は次のとおりである。

　1区：平成15年(2003)6月4日から平成15年11月30日まで

　11号区画道路部：平成15年(2003)9月29日から平成15年11月21日まで

5．調査工程及び調査体制は次のとおりである。

調査工程

　平成15年度　現地発掘調査及び室内整理作業

　平成16・17年度　室内整理作業及び報告書作成

調査主体　出雲市教育委員会

　平成15年度(2003)

　　調査指導　田中義昭(島根考古学会 会長)、山田康弘(島根大学 法文学部 助教授)、
　　原田敏照(島根県教育庁 文化財課 文化財保護主事)

　　事 務 局　板倉　優(出雲市 芸術文化振興課長)、川上　稔(同 文化財室長)

　　調 査 員　藤永照隆(出雲市 文化財室 副主任主事)、三原一将(同)、
　　米田美江子(同 主任嘱託員)

　　調査補助　伊藤晶子、勝部真紀、錦田充子、南奈保子、宮崎 綾(以上 出雲市臨時職員)

　平成16年度(2004)・平成17年度(2005)

　　事 務 局　板倉　優(出雲市 芸術文化振興課長：合併前)、神門　勉(同 文化財課長：合併後)
　　川上　稔(同 主査)、三原一将(同 主任)

＊出雲市ほか1市4町は平成17年(2005)3月22日に合併した。

6．発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表しておきたい。(順不同・敬称略)

中村唯史(三瓶自然館サヒメル 指導員)、岸隆太郎(出雲市築山土地区画整理組合)、大國 勝(同)、柳浦俊一(島根県教育委員会)、角田徳幸(同)

7．本書の執筆、編集は藤永、三原、米田が協議して行った。なお、文責は目次に記した。

8．遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

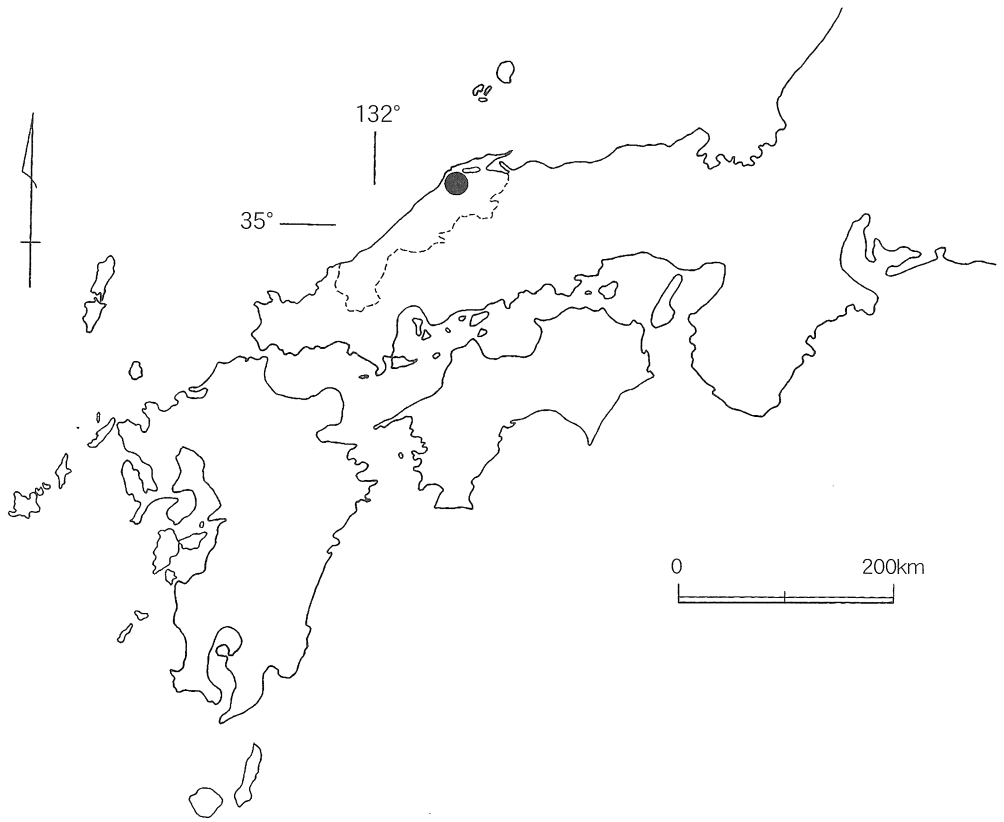
SD：溝状遺構　SK：土坑　P：柱穴　SX：その他の遺構

9．遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm × W340mm × H150mm、ビニール袋はL380mm × W260mmのものである。

10. 本書で使用した測地系は世界測地系(改正後)で、方位は座標北を示し、レベル高は海抜高を示す。
11. 理化学分析については、小林謙一氏(国立歴史民俗博物館)、渡辺正巳氏(文化財調査コンサルタント株式会社)の両氏から玉稿を賜り、第5章に掲載した。
12. 本書で掲載した写真の撮影については、航空写真を株式会社藤井基礎設計事務所に委託し、その他は調査員が行った。
13. 発掘調査、遺物整理については、次の者が従事した。

    青木　孝、飯国美代子、今岡　実、奥田利晃、勝部初子、川上靖夫、岸　邦夫、坂本　進、三部　進、上代　勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、曽田利夫、高根常代、富田　勉、長島節子、成相吉隆、花田和子、藤原一男、古川八郎、松本エミ子、吉川善美、吉田　栄、米山清司(以上、発掘調査)、飯國陽子、鵜口令子、永田節子、吹野初子(以上、遺物整理)
14. 遺物実測については、調査員、調査補助員のほか、次の者が従事した。

    柿本節子、勝部光代、藤原　舞(以上、いなか舎)
15. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。



島根県出雲市の位置

目　次

序

例　言

目　次

第１章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・　1

第２章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・　2

第３章　既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・　4

第４章　調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・　5
　　１区東・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(米田)・・・17
　　１区西・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・85
　　11号区画道路部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(三原)・・・102

第５章　理化学分析結果
　　出雲市築山遺跡の ^{14}C 年代測定・・・・・・・・・・・・・(小林)・・・112
　　築山遺跡平成15年度１区発掘調査に係る自然化学分析・・(渡辺)・・・117

写真図版

報告書抄録

第１章　調査に至る経緯

主要地方道出雲三刀屋線は出雲市上塩冶町から斐伊川沿いに雲南市三刀屋町までを結ぶ県道であり、出雲圏域における都市部と農山村地域との連携強化を図るための役割を有するとともに、出雲圏域と南東部都市圏（雲南地域）の交流促進を図る幹線道路である。特に出雲市上塩冶町、大津町、船津町を連絡する区間は、整備進捗中の高速道路である山陰自動車道へのアクセス機能及び出雲市市街地部での都市の骨格となる幹線道路としての機能が求められ、さらに出雲市内への通勤通学路をはじめ、県立中央病院や島根大学医学部付属病院等の医療機関への通院に利用されていることから、バス路線ともなっており、沿線住民の生活路線として活用されている。

このような状況下、早急に当該道路を改良整備すべく、島根県出雲土木建築事務所は（主）出雲三刀屋線新世紀道路（改良）事業を計画し、平成14年（2002）8月17日付で出雲市長あて連絡調整会議協議書を提出した。また、平成14年（2002）10月24日付で島根県教育委員会から島根県出雲土木建築事務所あてに、事業予定地に遺跡が存在する可能性あるので、出雲市教育委員会と連絡を取り確認調査を実施するよう指示がなされた。これらを受け出雲市文化財室は、出雲総務事務所から出雲土木事務所に通知される連絡調整通知書において、文化財の保護について開発区域には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、遺跡の存在する可能性があるので、出雲市教育委員会と連絡を取り確認調査を実施すること、また、その結果、埋蔵文化財包蔵地であれば発掘調査を実施する必要がある旨通知した。

これを受けた出雲土木建築事務所から当該事業に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼を平成14年10月23日付で受けた出雲市は、用地買収済み箇所など事前調査可能な箇所から随時事前調査を実施する旨回答した。その後、平成15年（2003）4月1日付けで両者は委託契約を交わし、現地発掘調査が開始された。

なお、文化財保護法等に基づく主な文書などについては、下記のとおり提出された。

平成15年（2003）４月　「埋蔵文化財発掘の通知について」島根県出雲土木建築事務所から出雲市教委へ

平成15年（2003）４月　「埋蔵文化財発掘調査の報告について」出雲市教委から島根県教委へ

平成15年（2003）11月　「築山遺跡発掘調査概報の提出について」出雲市教委から島根県教委へ

平成15年（2003）11月　「築山遺跡の取り扱いについて（意見書）」出雲市教委から島根県教委へ

平成15年（2003）12月　「築山遺跡の取り扱いについて（回答）」島根県教委から出雲市教委へ

平成16年（2004）３月　「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」島根県教委から出雲市教委へ

第２章　位置と環境

出雲平野は南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海によって囲繞されている。また、中国山地に源流を辿りかつてともに日本海に注いでいた斐伊川と神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。沖積作用が始まったのは約3,600年前頃と推定されており[1]、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖湾が占めていたと考えられる[2]ことから、遺跡が出現する箇所は出雲平野形成と密接に関わっているようである。以下に古代の出雲平野における集落の消長について概観しておきたい。

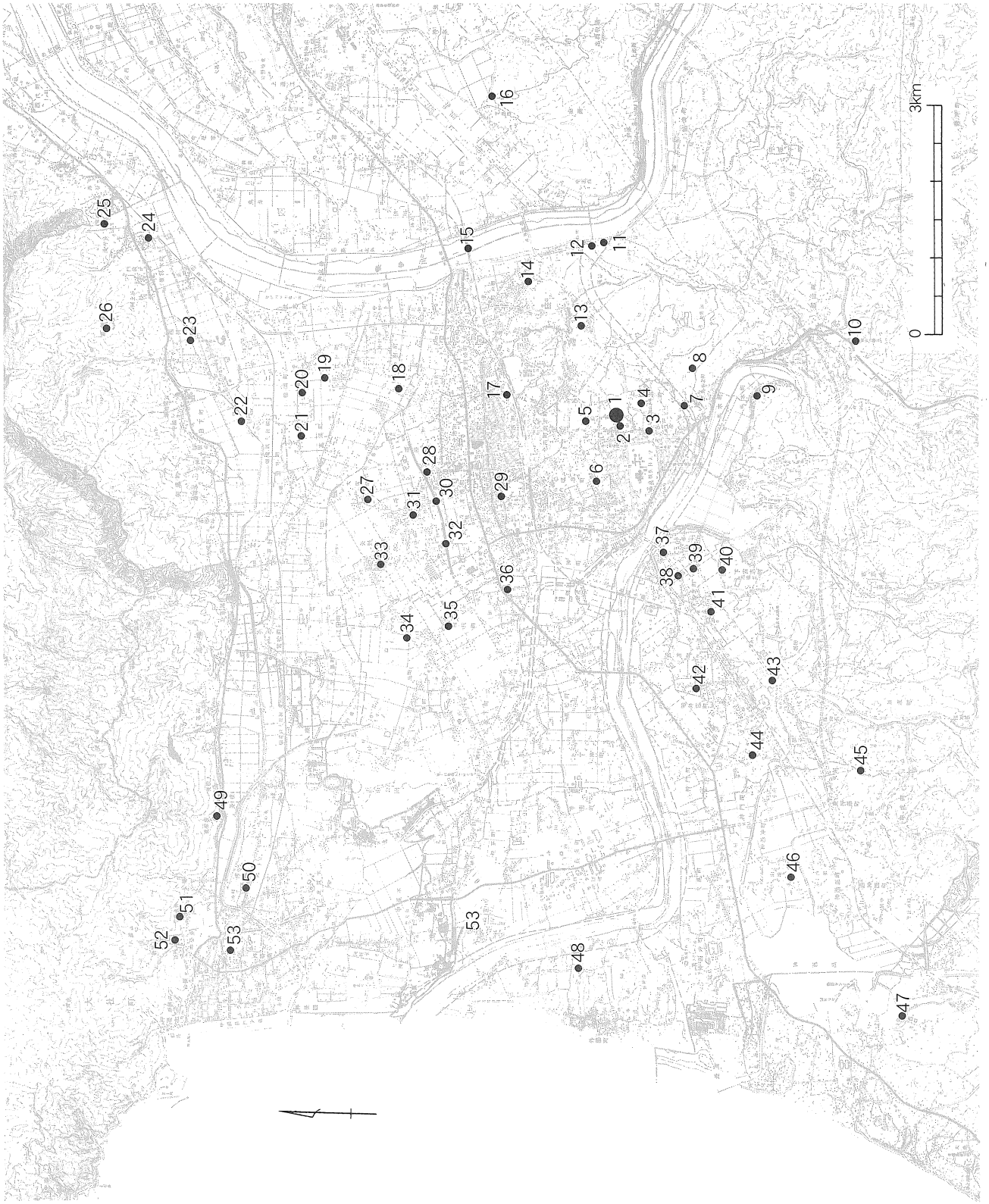
現在のところ、出雲平野において旧石器時代の遺跡は確認されていない。この地の遺跡の初現は、縄文時代の早期末である。縄文時代には出雲平野の大部分が古宍道湖湾によって占めていたと考えられることから、遺跡の出現は山麓付近などに限られていたようである。早期末の遺跡としては、上長浜貝塚、菱根遺跡が挙げられる。また、後期・晩期の遺跡としては、以前から矢野遺跡、出雲大社境内遺跡が知られていたが、近年の調査で蔵小路西遺跡、三田谷Ｉ遺跡などでもこの時期の遺物が確認されている。

弥生時代前期の遺跡としては、矢野遺跡、原山遺跡などが挙げられる。弥生時代中期から神門水海の汀線付近に、天神、四絡、古志遺跡群などの大規模な集落が出現する。近年の調査では、天神遺跡、古志本郷遺跡などで環濠と考えられる大溝の検出が相次いでおり、出雲平野においても環濠を配した集落形態が広く採用されたと考えられる。これらの遺跡を背景に弥生時代後期には、この地の首長を葬ったとされる西谷３号墓など６基の四隅突出型墳丘墓を含む、西谷墳墓群が平野の南丘陵上に築造されるに至る。

古墳時代前期・中期には集落跡はほとんど確認されていない。この時期の古墳として、大寺古墳、山地古墳などが知られているものの、その数はごく僅かである。集落が衰退傾向にあったことも推定される。しかし、後期後半以降には、島根県内では最大級の石室を有する今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳を筆頭に多数の古墳が築造され、上塩冶横穴墓群に代表される横穴墓群が飛躍的に増える傾向にある。

奈良時代以降のこの地の様子は、733年に編纂された『出雲国風土記』で辿れるほか、近年の調査でも新発見が相次いでいる。光明寺３号墓では石櫃が検出され、既知の小坂古墳や朝山古墓とともに、この地の初期火葬墓の解明に進展をみせつつある。また、古志本郷遺跡では官衙跡と推定される大型の掘立柱建物跡が確認され、神門郡家との関連が注目されている。また、蔵小路西遺跡からは、周囲を濠で囲繞した館跡が発見されるなど、中世城館跡の調査事例も増えつつある。

今回の発掘調査の対象となった築山遺跡は、神戸川右岸の旧自然堤防に位置している。付近には三田谷遺跡、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳、上塩冶横穴墓群など様々な遺跡が密集して存在する。これらの遺跡が存在する出雲市上塩冶地域を中心とする地区は、縄文時代以降の遺跡が連綿と確認されている地区であり、出雲平野の遺跡の変遷を解明する上でも極めて重要な地区である。



1. 築山遺跡 2. 上塩冶築山古墳 3. 上塩冶地蔵山古墳 4. 上塩冶横穴墓群 5. 角田遺跡 6. 神門寺境内廃寺 7. 三田谷Ⅰ遺跡
8. 光明寺3号墓 9. 小坂古墳 10. 朝山古墓 11. 長廻遺跡 12. 瀧谷山城跡 13. 菅沢古墓 14. 西谷墳墓群 15. 斐伊川鉄橋遺跡
16. 後谷遺跡 17. 今市大念寺古墳 18. 中野美保遺跡 19. 荻杼古墓 20. 稲岡遺跡 21. 高岡遺跡 22. 里方別所遺跡 23. 山持川川岸遺跡
24. 青木遺跡 25. 大寺古墳 26. 鳶ヶ巣城跡 27. 大塚遺跡 28. 姫原西遺跡 29. 海上遺跡 30. 蔵小路西遺跡 31. 小山遺跡
32. 渡橋沖遺跡 33. 矢野遺跡 34. 井原遺跡 35. 白枝荒神遺跡 36. 壱丁田遺跡 37. 古志本郷遺跡 38. 下古志遺跡 39. 田畑遺跡
40. 妙蓮寺山古墳 41. 宝塚古墳 42. 知井宮多聞院遺跡 43. 浅柄遺跡 44. 神門横穴墓群 45. 北光寺古墳 46. 山地古墳
47. 西安原遺跡 48. 上長浜貝塚 49. 菱根遺跡 50. 原山遺跡 51. 真名井遺跡 52. 出雲大社境内遺跡 53. 鹿蔵山遺跡

図1　築山遺跡周辺の主要遺跡(1：75,000)

第３章　既往の調査

築山遺跡内には出雲の代表的な古墳である史跡上塩冶築山古墳などが存在することから、範囲確認や墳形確認を目的に昭和 60 年(1985)、平成 12 年度、平成 13 年度に出雲市教育委員会によってトレンチ調査が実施されている。その後、平成 14 年度には出雲市築山土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されている。簡単にこれらの調査を振り返ってみたい。

昭和 60 年発掘調査[3)]（トレンチ調査）

この調査は上塩冶築山古墳の墓域及び墳丘以南に広がる築山遺跡の範囲確認を目的に出雲市教育委員会が国庫補助を受けて実施したものである。５つのトレンチが設定され、第１Ｔと第２Ｔが築山古墳の墓域確認、第３Ｔ、第４Ｔ、第５Ｔが築山遺跡の範囲確認のために設定されている。調査の結果、いずれのトレンチからも遺物が出土し、築山遺跡が広範囲に広がることが確認できた。

平成 12・13 年発掘調査[4)]（トレンチ調査）

この調査は出雲市教育委員会が国庫及び県費補助を受けて実施したトレンチ調査である。島根県出雲土木事務所が計画する(主)出雲三刀屋線改良事業計画予定地周辺には、上塩冶築山古墳、築山遺跡及び塩冶判官館跡などの重要と考えられる遺跡が存在したため、島根県教委の指示により遺跡の性格を把握すべく、当初の予定を変更して実施した調査である。

調査の結果、塩冶判官館跡は館跡である可能性が低くなったものの、上塩冶築山古墳周辺の調査では、円筒埴輪や須恵器子持壺などが出土すると同時に、墳形を直径 45 ～ 50m の円墳と推定するに至っている。これらは、今後、上塩冶築山古墳の研究に欠くことのできない成果となっている。

平成 14 年度発掘調査[5)]

この調査は築山土地区画整理事業に伴い出雲市教育委員会が実施した。

調査の結果、多数の溝状遺構、土坑、小ピットの遺構のほか、縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。特筆すべき遺物として、塩冶氏家紋入漆器椀があげられよう。調査地付近は 14 世紀に出雲守護の塩冶判官高貞が館を構えたのではないかと考えられている地区の一つである。塩冶氏縁の塩冶神社、高貞社などが存在することからの仮説であるが、家紋入り漆器が出土したことは、今後の研究において興味深い事実となろう。

第４章　調査の結果

調査の概要

今回の調査区は連続しない２箇所であったため、それぞれ「１区」、「11 号区画道路部」と名付け調査にあたった。

１区

１区は幅 25m、長さ約 95m の東西に長い約 2,300㎡の道路予定地である。重機による表土掘削などの準備期間を経て本格的に作業員を導入して現地発掘調査を実施したのは、平成 15 年(2003)６月４日から同年 11 月 30 日までの約６ヶ月間である。遺物包含層及び遺構面に影響のない表土約 40cm を重機で掘削後、基準杭設置を行った。道路軸と平行に北から南へＡラインからＥラインを、直交して東から西へ１ラインから 18 ラインをいずれも 5m 間隔で設定し、交点に基準点を落とした。また、これにより区画されるグリッドについては、北西角の基準点の名称を用いることとした。また、１区を A10-E10 ラインで二分し、東(以後「１区東」とする)を米田が、西(以後「１区西」とする)を藤永(後に三原と交代)が調査員として担当することとした。

次に、土層堆積状況と遺構検出面の確認のためＡライン沿いにサブトレンチを掘削した。この結果、重機掘削面から地山までには概ね３層の土層が確認され、１層が現耕作土、２層が中世以降の遺物を主とする包含層、３層が弥生時代の遺物を主とする包含層であった。これらの層からコンテナ 22 箱分の出土遺物があった。内容は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、石器などであったが、調査区の東側では弥生土器が、西側では中世土師器の割合が多かった。

遺構は３層上面を主とする第１面と砂層上面の第２面で確認した。検出遺構の種類は多数の小ピット、土坑、溝状遺構、性格不明遺構であり、建物跡などは検出していない。これらの用途は不明だが、溝状遺構の多くは奈良・平安時代あるいは中世以降の耕作の痕跡ではないかと思われる。

また、特筆すべき成果としては、出雲平野では検出例が少ない縄文土器の出土があげられる。１区東の A5gr では縄文時代の遺物包含層が確認できた。この層及びその上位からは後期や晩期の縄文土器が出土していることから、この包含層はいわゆる第２黒色土[6]に相当するものと考えられる。なお、この層以下を重機により 3m 程度深掘りしたが、第２ハイカ層[7]に相当する層は検出できなかった。

11 号区画道路部

11 号区画道路部は１区の西端から南西に約 25m 離れた箇所に位置する。幅 6m、長さ 42m を測る約 250㎡の調査区である。この調査区の現地発掘調査を平成 15 年(2003)９月 29 日から同年 11 月 21 日まで実施した。

表土を 40cm 程度重機掘削したのち、堆積土を手掘りにより徐々に下げながら調査を実施した。表土から地山に至るまでに大きく３層の土層を確認しており、１層が現耕作土、２層が中世以降の遺物を主とする包含層、３層が奈良・平安時代の遺物を主とする包含層であった。これらの層及び遺構内からはコンテナ３箱分の遺物が出土した。内容は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器などであるが、須恵器や中世土師器の割合が多く、弥生土器や土師器は少量である。

遺構は３層上面及び地山上面（砂層）でピット、土坑、溝状遺構などを確認している。調査区の南側には溝状遺構が多く検出されたが、これは奈良・平安時代頃の畑跡ではないかと考えられる。また、北半分では須恵器を多く検出する比較的大きな溝状遺構があり、今後性格について検討していく必要がある。

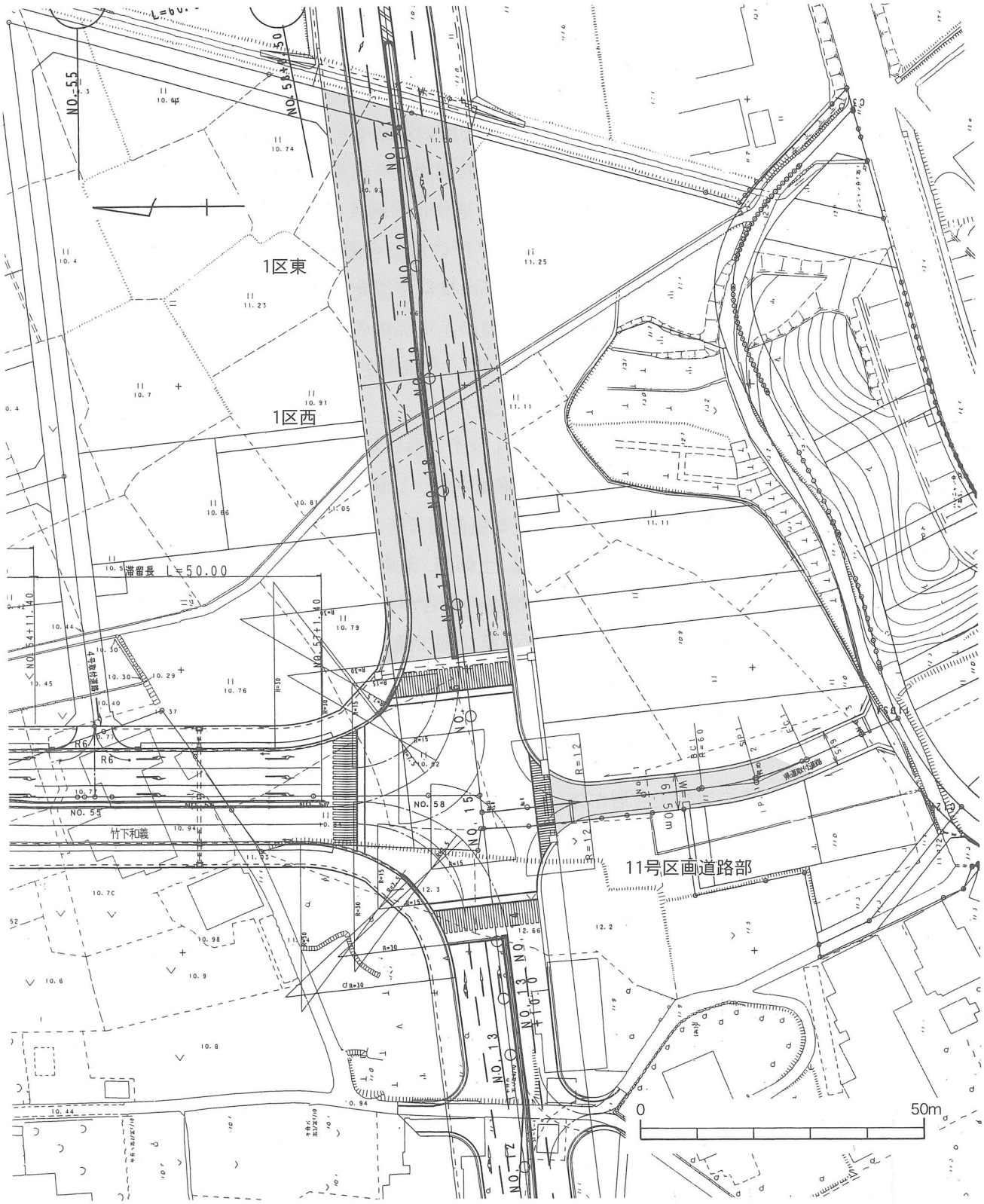


図２　調査区配置図（1：1,000）

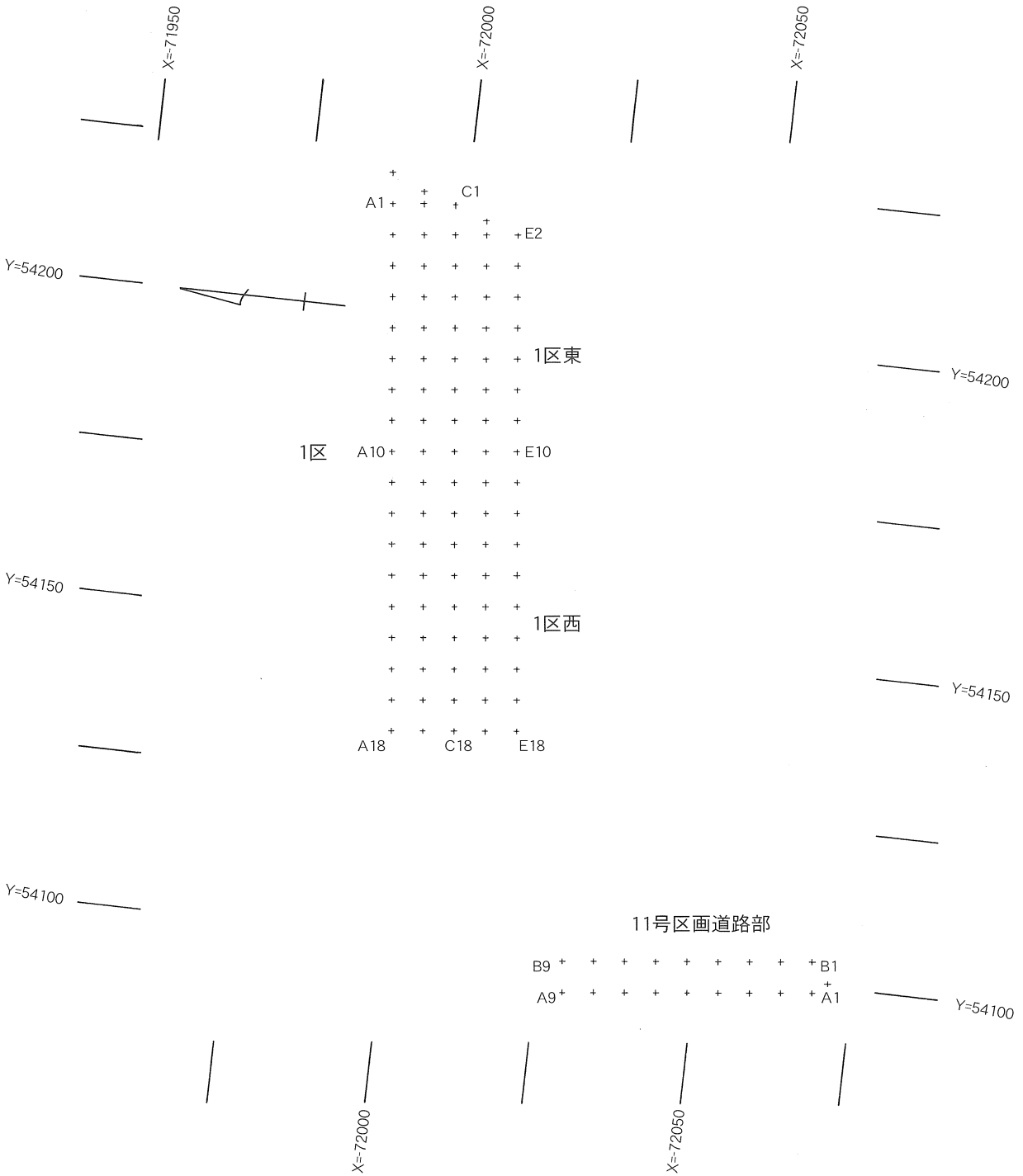


図３　基準杭配置図（1：1,000）

図４　１区東第１面検出遺構(1：200)

図５　１区西第１面検出遺構（1：200）

※スクリントーンは縄文集中地の4層上面検出範囲

図６　１区東第２面検出遺構(1：200)

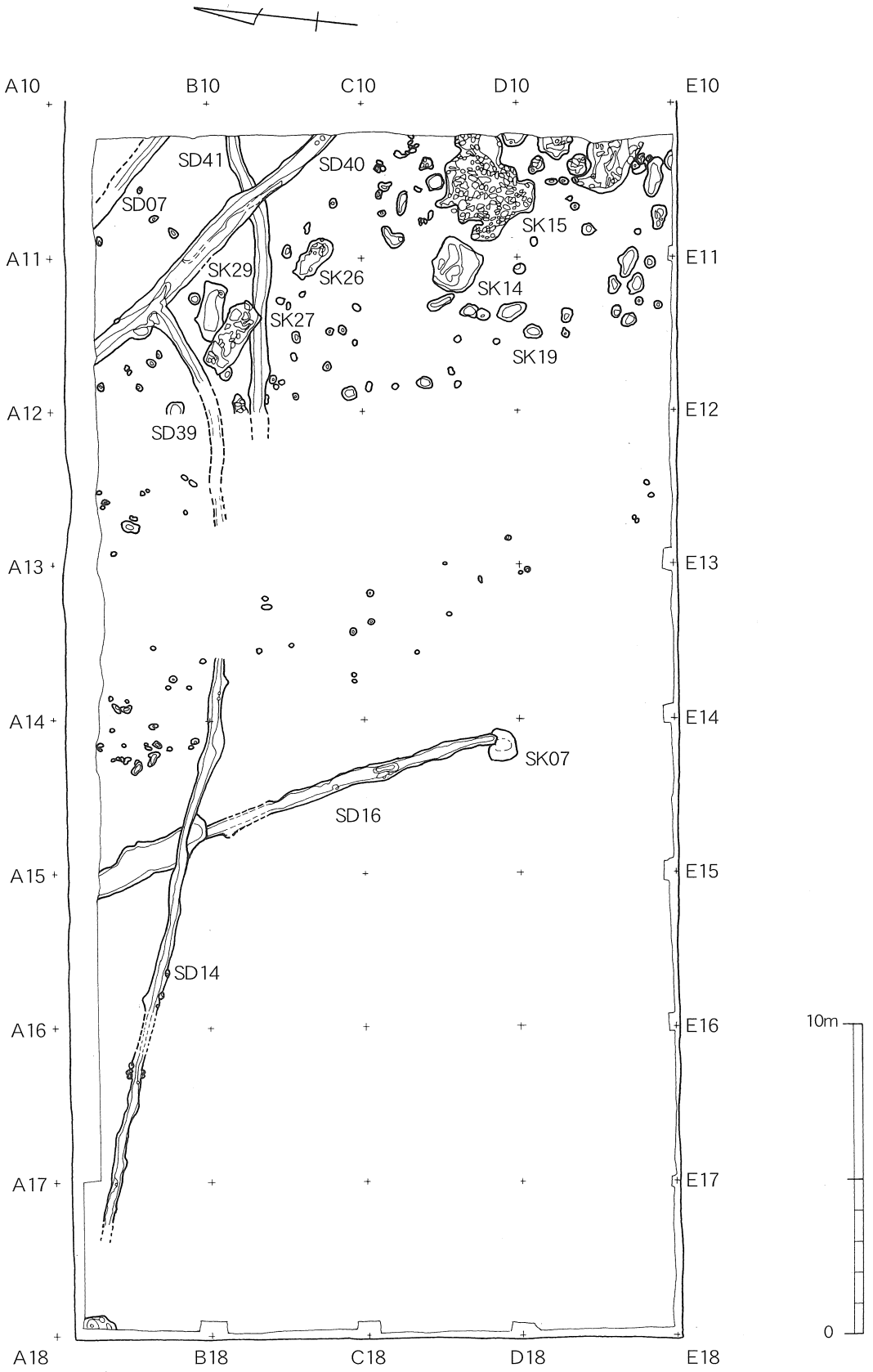
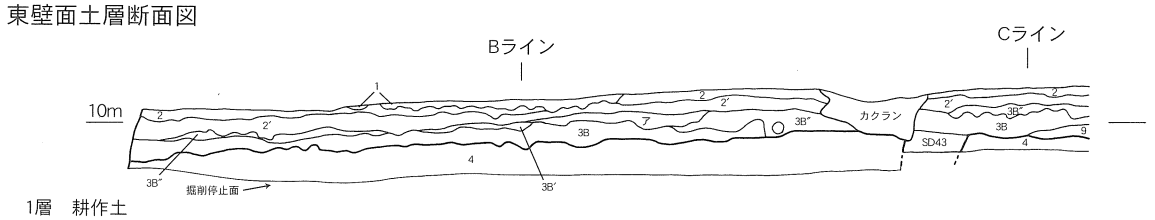
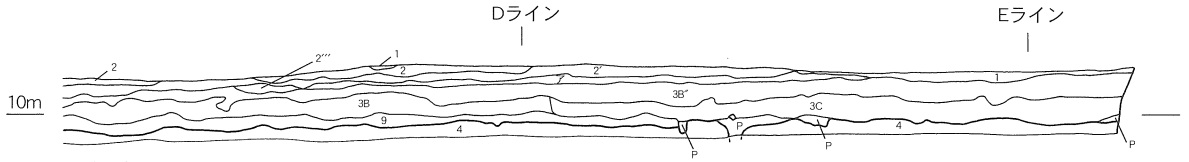


図７　１区西第２面検出遺構(1：200)

東壁面土層断面図

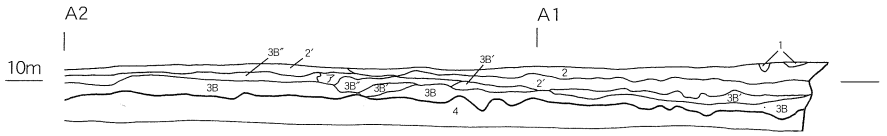


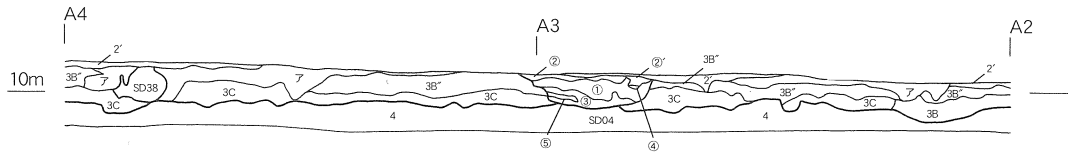
1層　耕作土
2層　オリーブ灰色粘土(橙色粒子多く、砂粒子含む、ややソフト)　　2′層　青灰色粘土(2層より砂粒子多く含む、ややソフト)



3B層　暗灰色粘砂(砂の強い層、ややソフト)　　3B′層　3B層より暗い(粘土の強い層、ややソフト)　　3B″層　3B′層に2層が混入した層
4 層　青灰色砂(ハード)－第1ハイカ　　9 層　黄褐色砂(小礫含む)　　3C層　灰色粘砂(3B層の色調が明るくなった層、ややしまる)
ア層　橙灰色粘土(砂粒子多く含む、緑色粒子含む)　　2‴層　2′層と3B″層の混合層

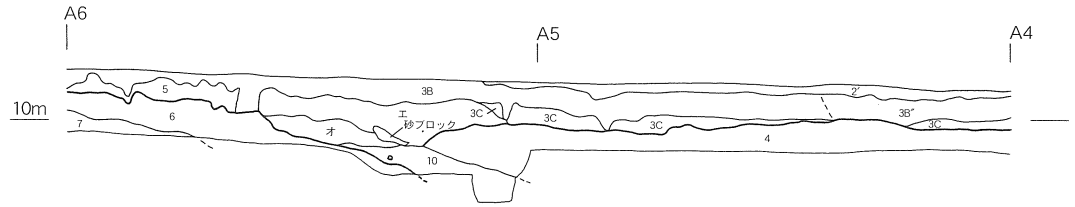
北壁面土層断面図



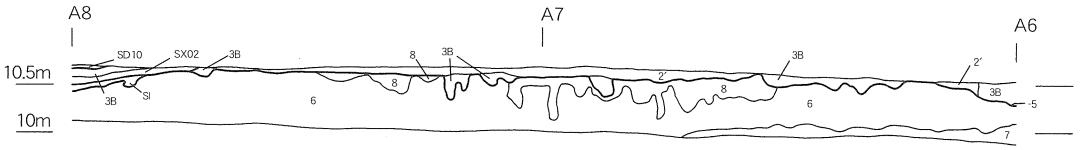


SD04　図13に準ずる

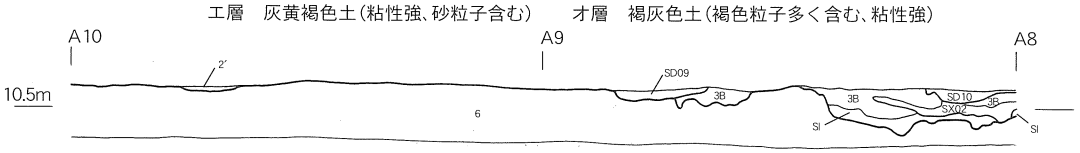
5層　にぶい黄褐色粘質土



7層　オリーブ黄色砂



10層　黒灰色粘土
工層　灰黄褐色土(粘性強、砂粒子含む)　　オ層　褐灰色土(褐色粒子多く含む、粘性強)



8層　明黄褐色砂質土

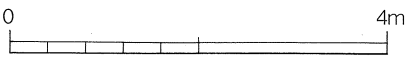
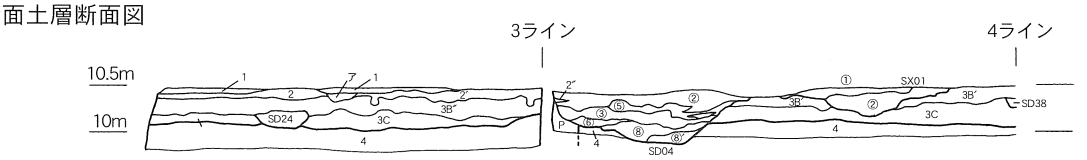
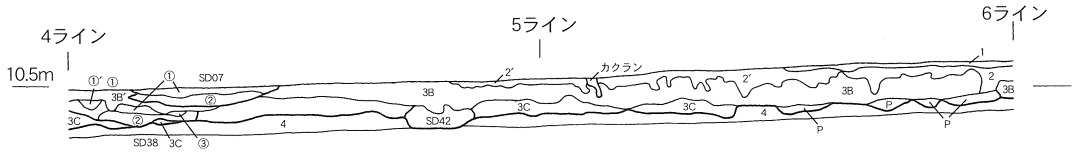


図８　１区東 東壁面・北壁面土層断面図(S=1/80)

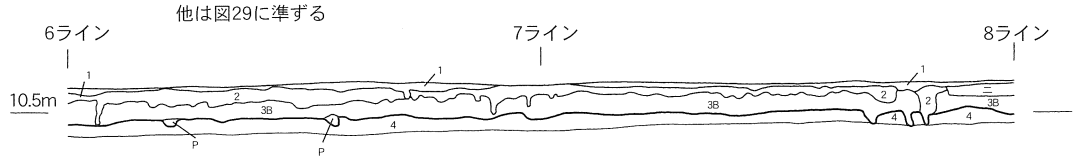
南壁面土層断面図



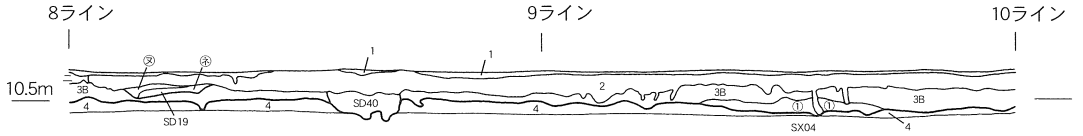
2″層　淡灰色粘土(黒色粒子含む)　　SX01　①層　灰黄褐色シルト層　②層　ア層と同じ



SD38　①′層　①層と3B′層の混合層　　SD07は図15に準ずる
他は図29に準ずる

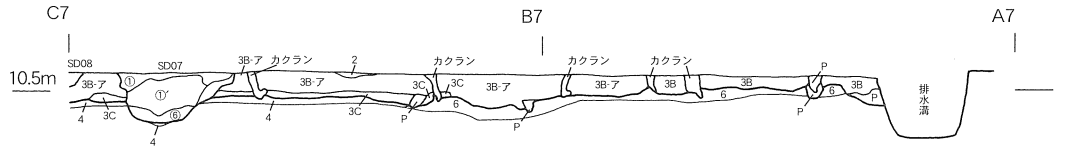


二層　橙灰色粘質土(黒褐色粒子・砂粒子含む)

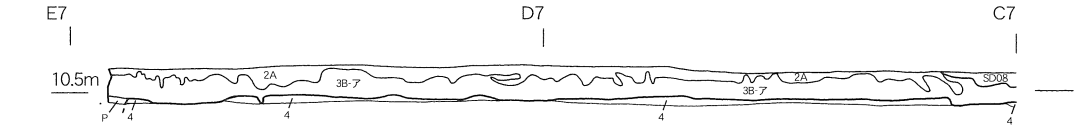


SD19　㋟層　橙灰色粘質土(砂粒子を多く含むため、当たりはザラザラしている)　㋝層　黒灰色粘砂(かなっ気を底面に含む)
SX04　①層　3B層に似るが粘性強くややソフト

7ライン土層断面図

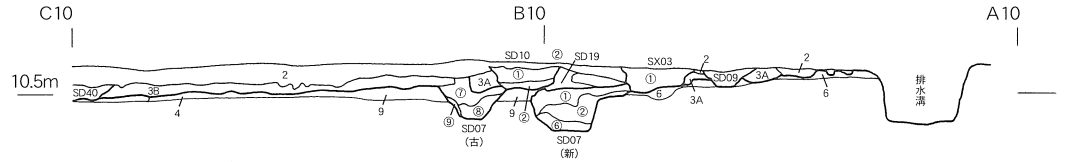


3B-ア層　3B層だが軽石砕を多く含む層

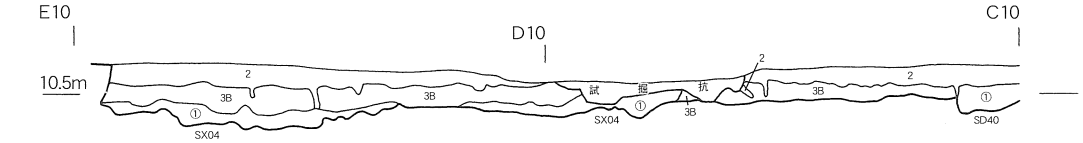


2A層　2層だが軽石砕を多く含む層

10ライン土層断面図



SX03　①層　黄灰色粘質土　　3A層　黒褐色粘質土(軽石砕多く含む)

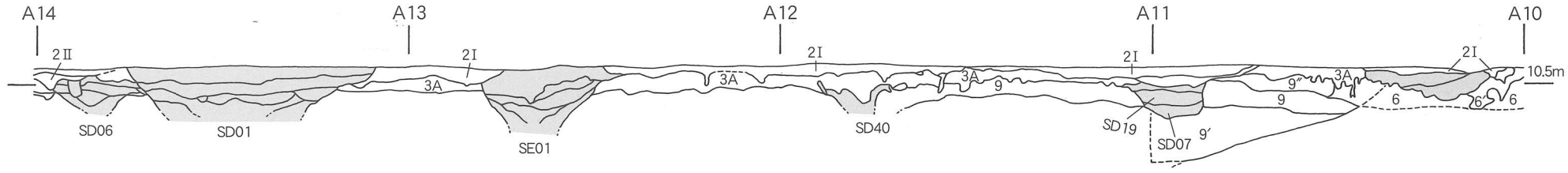


SD07　⑦層　橙褐灰色粘質土(砂粒子含む)　　SD10は図17に準ずる
(古)　⑧層　褐灰色粘砂
⑨層　褐灰色粘土　　SD40は図30に準ずる

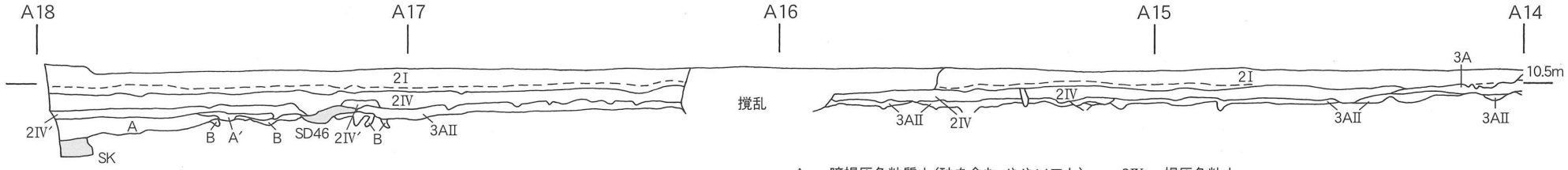
※丸数字は遺構内の土層番号

0　4m

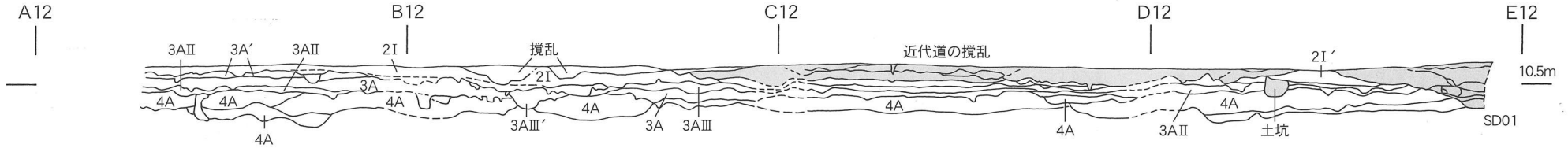
図９　１区東 南壁面・７ライン・10ライン土層断面図(S=1/80)



2Ⅰ．褐灰色粘質土
2Ⅱ．にぶい黄褐色砂質土
3A．黒褐色粘質土（小礫を多く含む）
6．明黄褐色粘砂
6′．明黄褐色粘砂（粘性強）
9．黄褐色砂（小礫含む）
9′．黄褐色砂（小礫なし）
9″．明黄褐色砂（小礫含む）



A．暗褐灰色粘質土（砂を含む、ややソフト）
A′．暗褐灰色粘質土（Aより明るい）
B．黄褐色粘砂
2Ⅳ．褐灰色粘土
2Ⅳ′．褐灰色粘土（灰色強い）
3AⅡ．褐灰色砂質土



4A．基盤砂層（第1ハイカ上層）
2Ⅰ′．褐灰色粘質土（褐色粒子多い）
3A′．黒褐色土
3AⅢ．黒褐色粘土
3AⅢ′．黒褐色粘土（粘性弱い）

0　5m

図10　1区西セクション図（1：80）

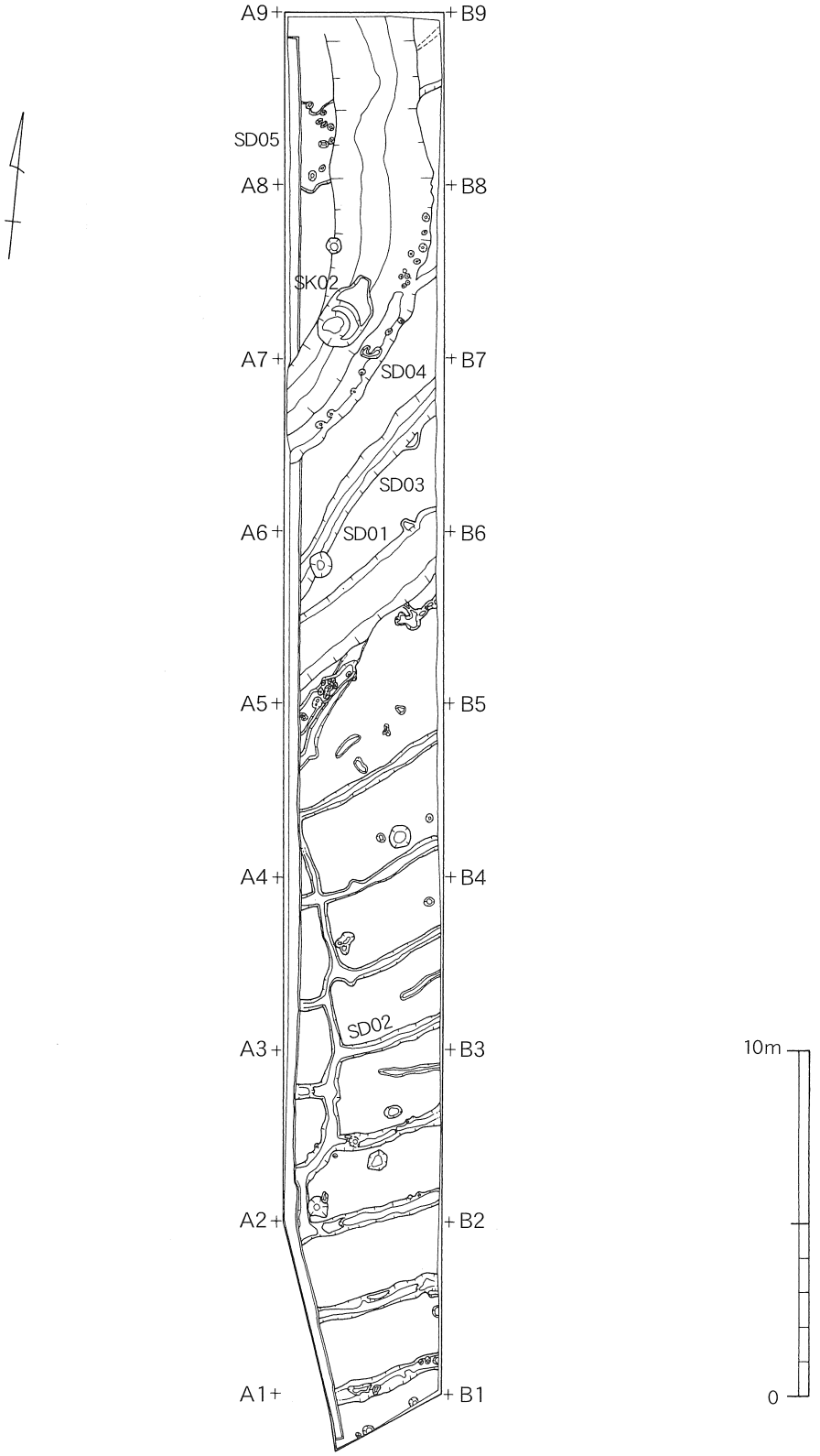


図 11　11 号区画道路部検出遺構(1：200)

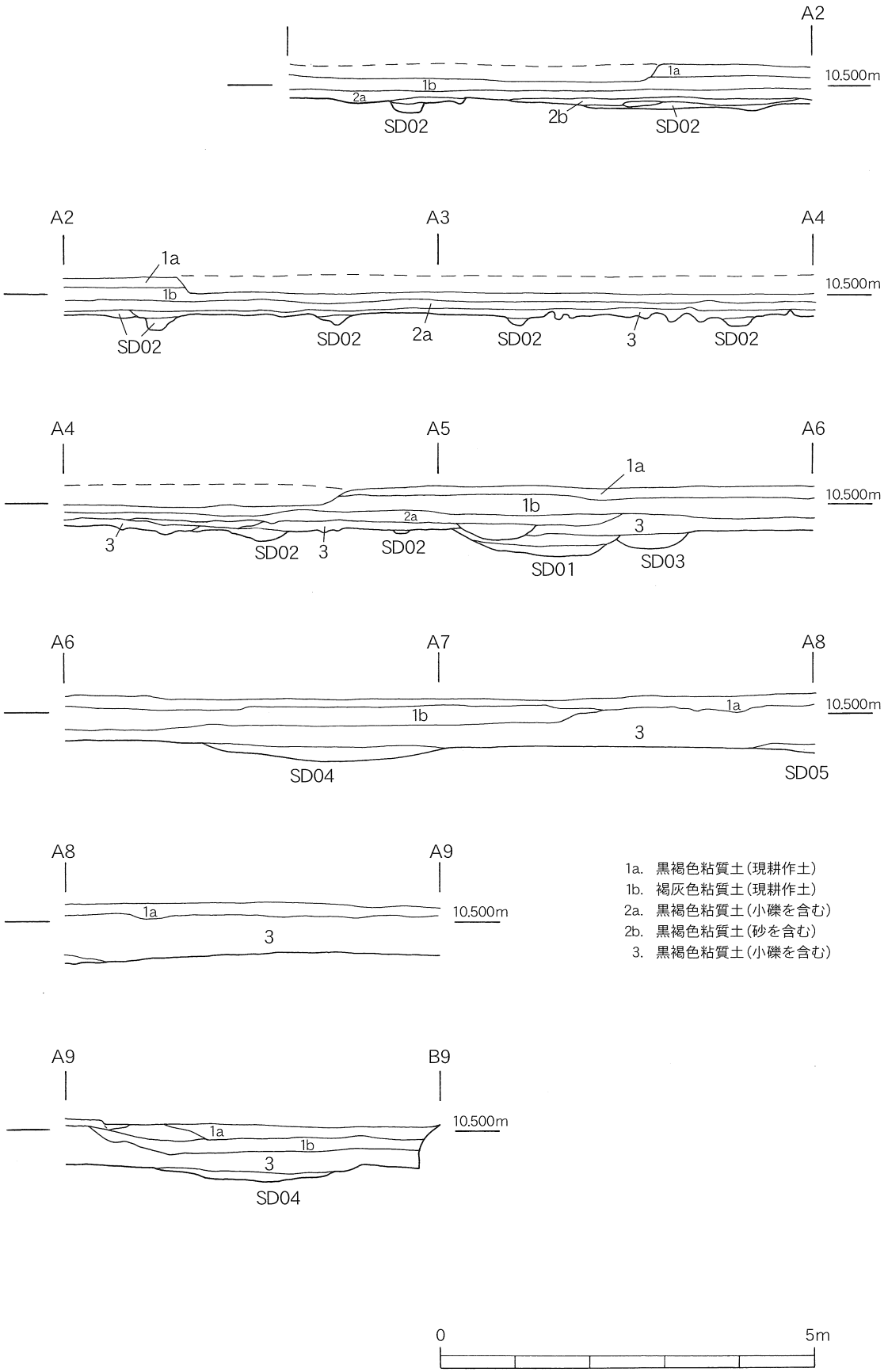


図 12　11 号区画道路部セクション図(1：80)

1区東

1区東の土層は調査区東壁面、調査区北壁面(A1～A10杭ライン)、調査区南壁面(E2～E10杭ライン)、7ライン(A7～E7杭)、10ライン(A10～E10杭)で確認した(図8・9)。約50cm堆積していた第1層(表土：耕作土)の下には、第2層(2層・2′層・2″層・2A層・2B層)、第3層(3層・3A層・3B層・3B′層・3B″層)、第4層(3C層・4層・6層)が認められた。

このうち遺構検出を行ったのは、第3層上面と第4層上面である。ただし第3層は黒色に近い灰色を呈しているため、同色系の覆土をもつ遺構は平面検出が困難で第4層上面で検出した可能性もあるが、それは第4層上面内の切り合い関係から新旧を認めることができる。また3層は3A～3C層に細別したが、3B層の下に位置する3C層は色調が明るく4層との間層と考えられるため、3C層上面検出の遺構は、前記しているように第3層下から検出された遺構として第4層上面での検出とした。1区東3A層は西端から若干確認できるのみで1区西で大体が確認される層である。1区東と1区西では第4層上面検出遺構の時期にかなりの格差があるため、3A層と3B・3C層の堆積時期は異なると考えられる。

1区東において、第1層～第2層の包含遺物は、縄文土器・弥生土器・須恵器(～中世須恵器)・土師器(～中世中葉)・瓦質土器片1点・鞴の羽口破片数点・布目瓦破片1点・近世擂鉢1点。第2層の包含遺物は、縄文土器・弥生土器・古式土師器・須恵器(～古代)・土師器(～古代)・磁器。第3層・3C層包含遺物は、縄文土器・弥生前半期土器。第4層(4層・6層)は無遺物層である。

一応の基盤層と考えられるのは4層であるがA6Gr内において4層より古い地盤層6層を確認した。4層上面と同レベルにおいて調査区内北壁近くのA6～A11Gr内で認めることができた。後述するが6層と4層の間の包含層には縄文後期初頭の遺物が包含されていた。

以下、各検出遺構面毎に詳細を記し、最後に4・6層間検出縄文集中地について詳細を記す。

第3層上面(第1面)検出主要遺構

SD04(図13・14・49)

A~C-3・A~D-4Gr内第3層上面で検出し、調査区外へと延びている溝状遺構である。ほぼ南北に位置し、検出長20m、幅1.3～2.0m、深さ55cmを測り、底面は若干北へ傾斜している。

堀方の断面形態は底面中央を窪ませたレンズ状を呈しているが、⑥層(丸番号は遺構内土層)上面で一度フラットにしており、その時の断面形態は逆台形を呈する。また土層図から観察すると①・⑤層、②・③層と大きく2回の掘り直しが成されているようである。

出土遺物はコンテナ半箱分ありその多くが下位の⑥層からの出土であるが、縄文土器を含む弥生土器(特に前期)の出土量が多い。しかし土師器及び須恵器の小片も出土しており、当該遺構はこれらの時期に掘削されたと考えられ、前記した古い遺物は生活面の第3層からの混入、及び⑥層は一時期に流れ込みまたは人工的に埋められたものではないかと考えられる。しかし⑥層が古い遺構であった可能性も捨てきれない。

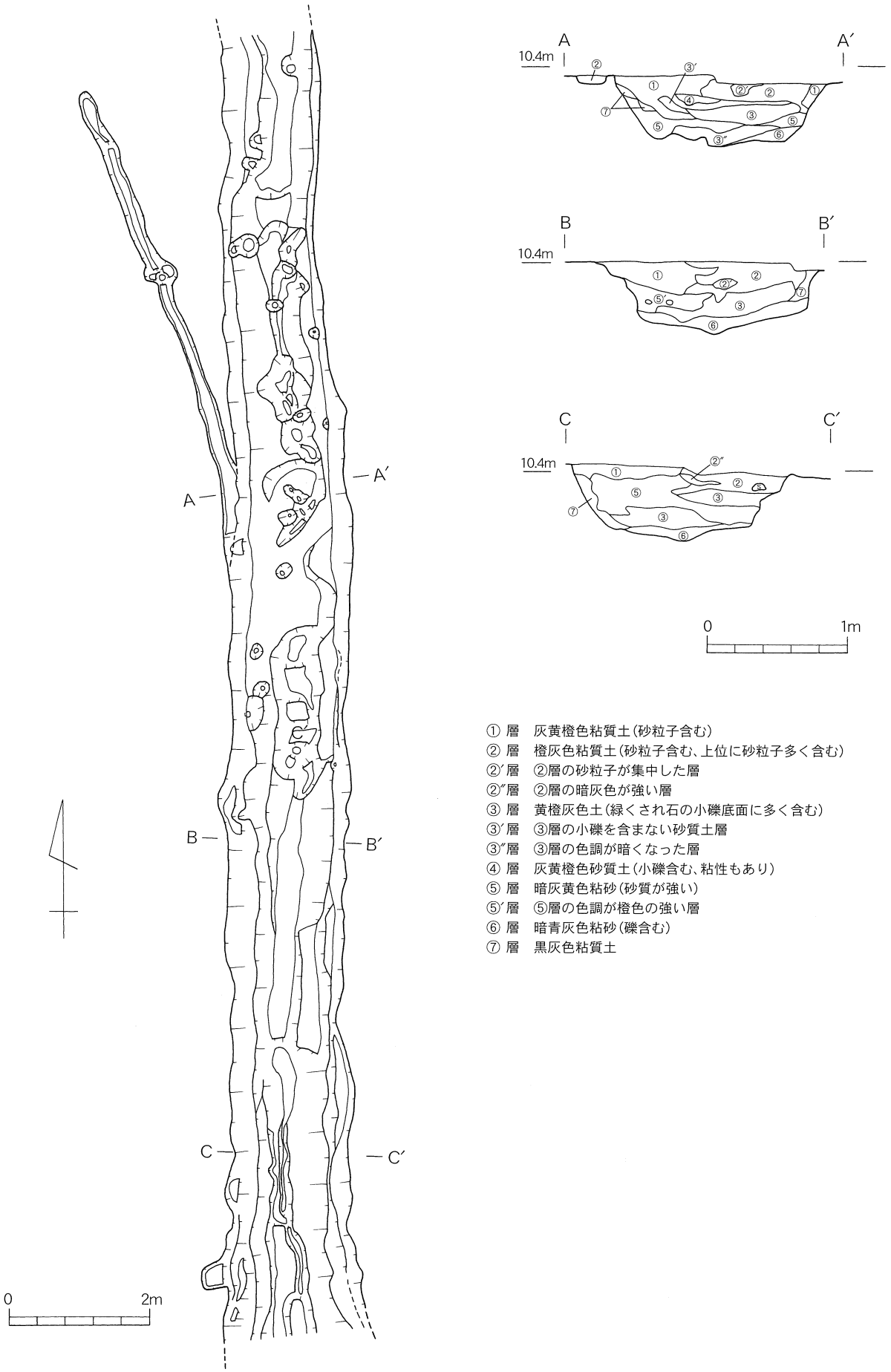


図 13　SD04 実測図(平面図 S=1/80　土層断面図 S=1/40)

図 14-1 ～ 3 は突帯文土器で、1・2 は深鉢の口縁部で、1 は口唇部から若干下がった位置に大きな刻目突帯文を施し、2 は口唇部直に細い刻目突帯文を施している。3 は鉢と考えられ、2 条の刻目突帯文を施している。図 14-4 ～ 17 は弥生土器で、4・5・7 ～ 12 は甕、6 は壺、13 ～ 17 は平底の底部である。4 は如意形口縁を呈する突帯文系、5 は口唇部に刻目、頸部に現状で 4 条の沈線文を施し、7 ～ 9 は口縁部が上へ拡張して面をもち、8・9 は 2 条の沈線文及び凹線文を施す。11・12 は複合口縁部に擬凹線文及び沈線文を施し、12 はのちに上半をナデ消している。6 は頸部が外反し口縁部が若干拡張して面をもつものである。図 14-18 は須恵器の坏蓋である。内外面とも回転ヨコナデ調整で、天井との境には 1 条の削り取った感じの沈線が施されている。唯一出土の須恵器破片であり、土師器は小片すぎて実測に耐えるものは皆無であった。図 49-1 はバチ形の打製石斧で表裏面刃部には削痕・磨滅痕が、表面刃部右縁辺部にも磨滅痕が観察され、両側縁には敲打痕、右側縁にはのちに研磨痕が観察される。

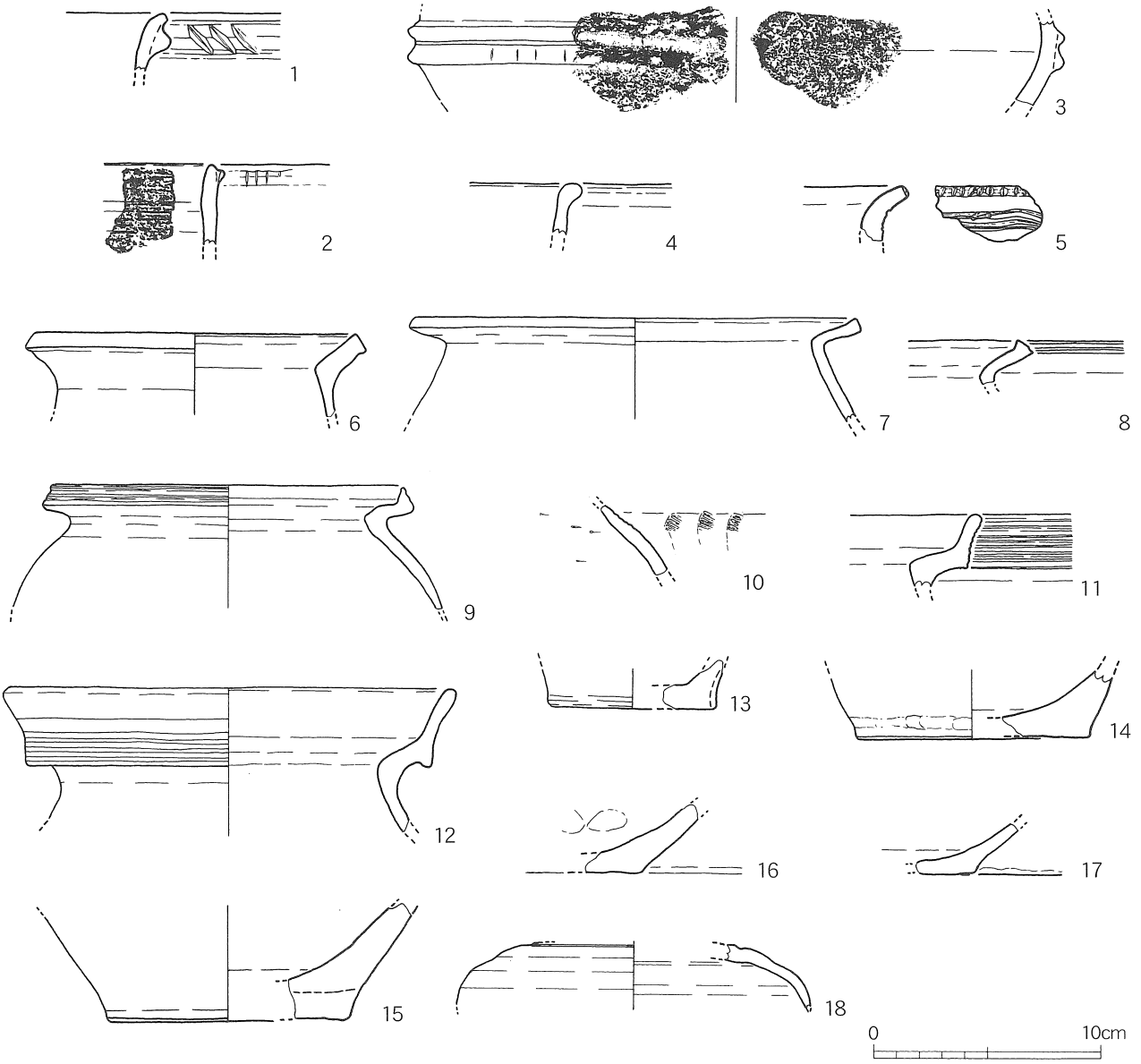


図 14　SD04 出土遺物実測図（平面図 S=1/3）

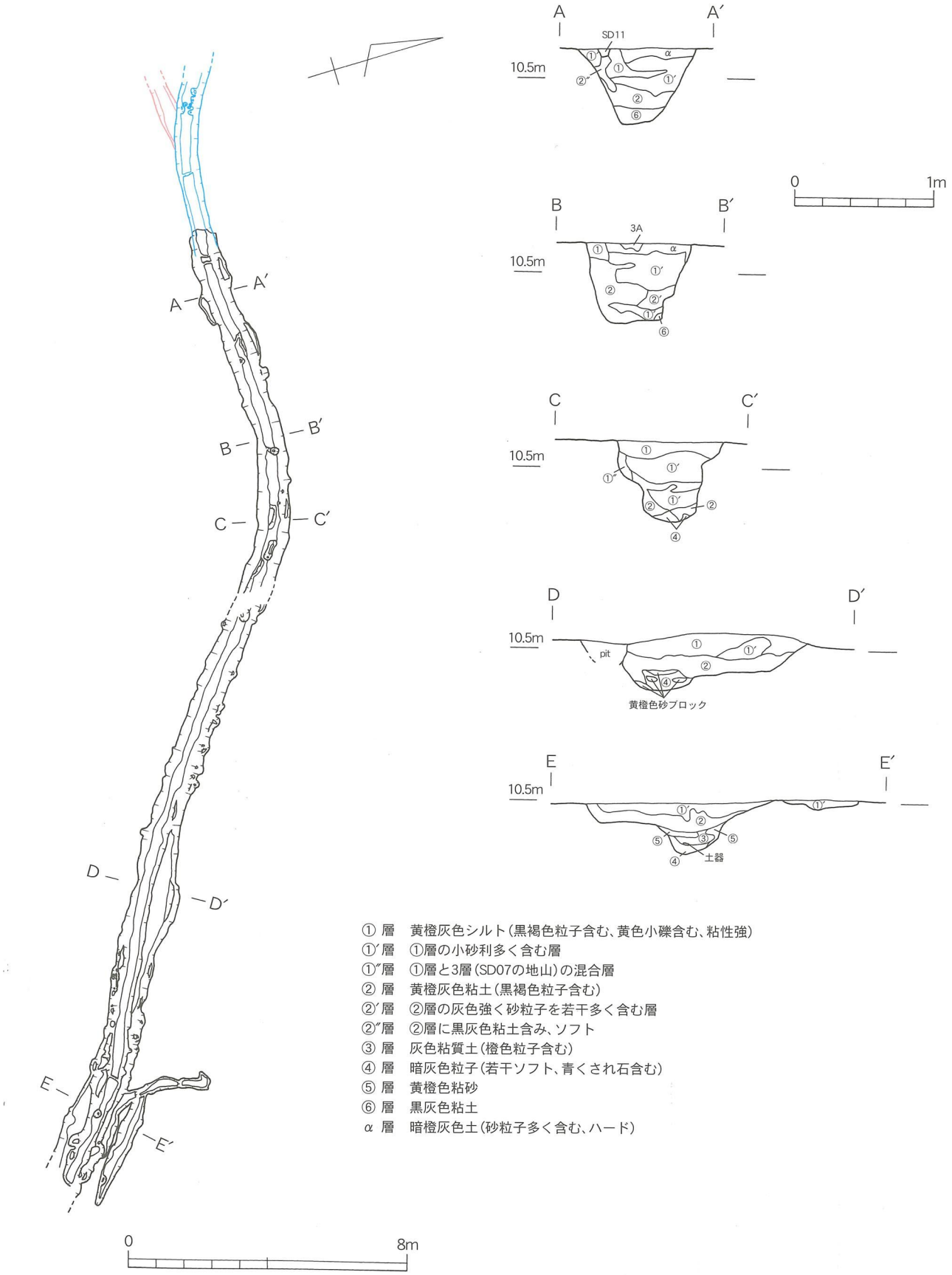


図 15　SD07 実測図（平面図 S=1/160　土層断面図 S=1/40）

SD07(図4・9・15・16)

D-5・6・C-6・7・B-7~10Gr内第3層上面で当該調査区を斜め縦断するように検出した溝状遺構である。B10Gr内では第3層上面で突然プランを検出することができなくなった。しかしプランが確認できたところまで掘削するとプランが突然検出できなくなる所には遺構上面に3A層らしき土が載っていることが判明した。一応第3層上面での検出は図15黒色遺構で留めておき、B10Gr内は第3層掘削後の6層上面にて図15青色遺構として検出した。また同図赤色遺構はSD07の古い遺構である。また3A層は3B層より新しい堆積土であることがこれによって明らかになったが、調査区壁面土層断面などで検討したが、3B層から3A層への変化を明瞭にすることはできなかった。

調査区外南からD5GrでN-60°-Wに延び、B8Gr内でほぼ西へ湾曲し、B10Gr内で再度N-65°-Wに掘り直しされ、1区西へと延び、SD08・10・11・19・SX03に切られている。検出長34m、幅0.5～1.4m、深さ20～60cmを測り、底面は北西に傾斜している。最南部の底面標高(調査区南壁面土層)は10.3m、最北部(10ライン土層)のそれは10.1mである。また最南部は深さ20cmと浅いのと、平成14年度調査Ⅱ区[8]で連続するような遺構が検出されていないため、南側調査区外数mで収束すると考えられる。

断面形態は南側では2段掘りであるが、7Grから西では傾斜のややきつい逆台形を呈している。土層の堆積状況は西端の古遺構以外ほぼ同様な状況を呈している。

出土遺物は掘削量の割に少量で、大袋(26×38cm)1袋分しかなく、その多くが弥生土器(特に前半期)で、縄文土器と古式土師器が少数である。これらの遺物は小片がほとんどで時期の決定できるような確たる出土状況を呈していないため、前記したSD04と同様生活面の第3層からの混入のものも考えられる。よって当該遺構は、生活面の第3層が堆積して以降、切られたSD08・10・11・19・SX03などより古い時期といえる。

図16-1～3は弥生土器である。1・2は甕の頸部付近で、1はヘラ状工具による沈線文を現状で2条施し、2は内面頸部に絞り痕が観察される。3は平底の底部である。

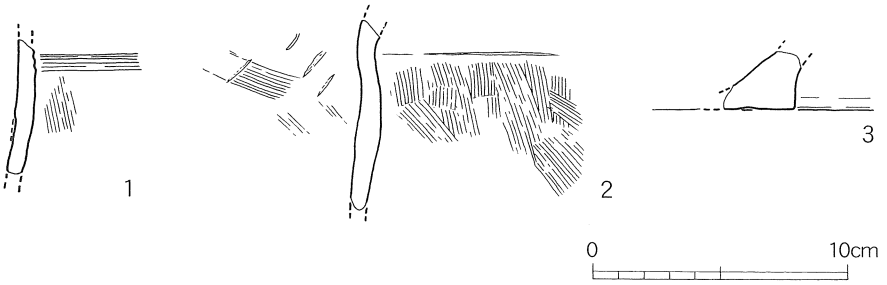


図16　SD07出土遺物実測図(S=1/3)

SD08(図4・17・18・49)

B7・C-8・9Gr内第3層上面で検出し、SD07を切り、SD19・20に切られている溝状遺構である。C9Gr内ではSD19に切られたまま収束し、B6Gr内では浅くなって自然に収束するが図4よりその延長5m北東には同方向に並列するピット列が検出されており、何らかの関連が想定される。N-50°-Eに位置し、検出長15.3m、幅0.3～1.5m、深さ10～20cmを測るが、生活面標高の高い西側が深く東側は浅い。しかし底面標高は東へ若干傾斜している。

断面形態は、東側で逆台形からゆるいV字状を呈し、西側は南にステップをもつ2段掘りとなっ

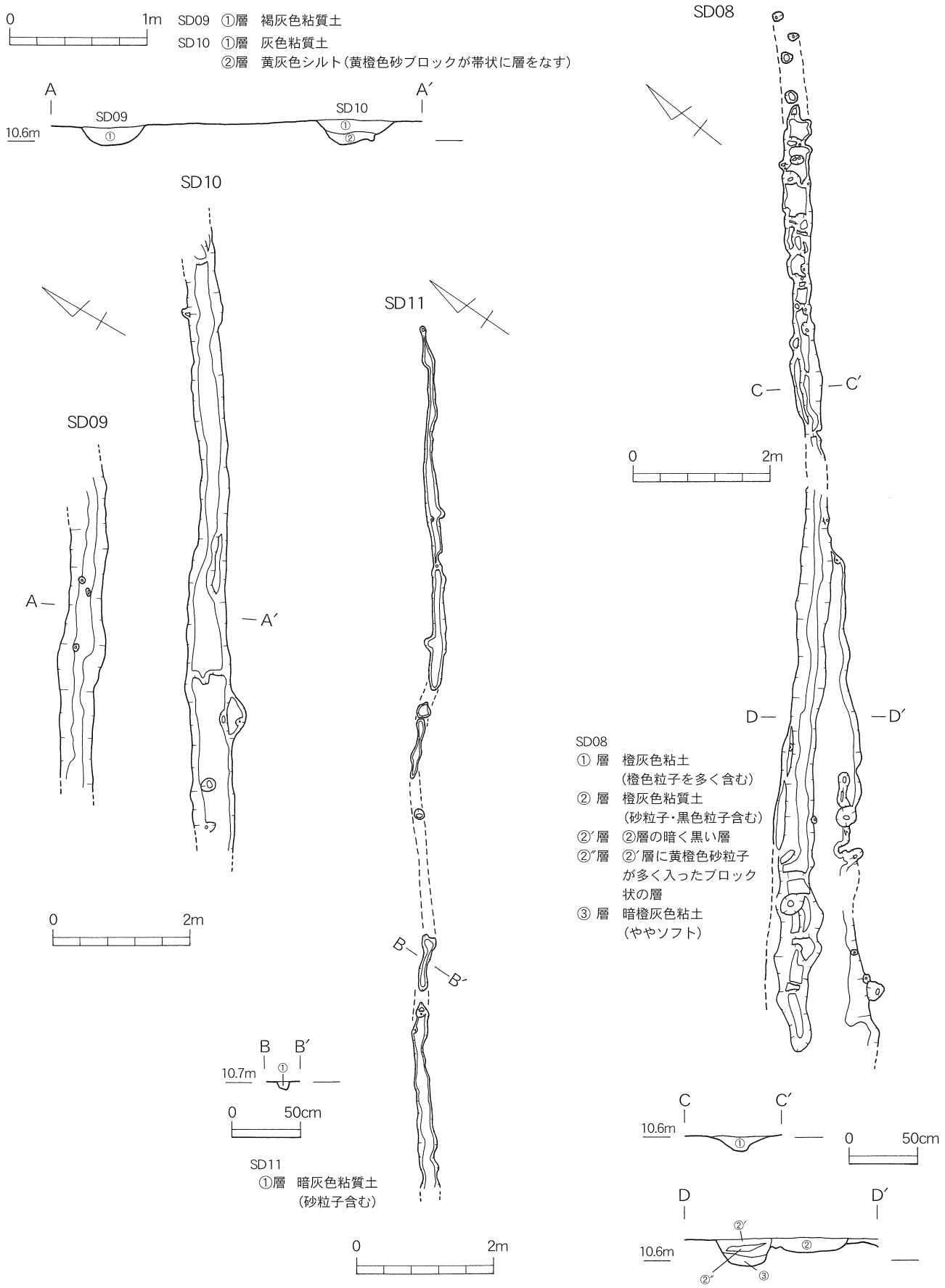


図 17　SD08 ～ 11 実測図（平面図 S=1/80　土層断面図 S=1/40）

ている。

出土遺物は掘削量の割に少量で、中袋(15 × 25cm)1袋分のみで、弥生土器(特に前半期)及び石器も出土したが、これらは前記したSD04・07と同様生活面の第3層からの混入のものと考えられる。土師器・須恵器も出土している。須恵器破片はSD19図20-1と接合したので、SD19からの混入品である。そのため当該時期を決定する遺物として図18-1全面朱塗りを施し口径16.2cmを測るやや大振りの土師器坏があげられる。8世紀の範疇であろう。

図49-2・3は石器である。2は大型石包丁様石器で刃部左縁辺部は使い込まれたように研磨され丸みを帯びている。また裏面は滑らかで全体的に研磨されている感じを受ける。3は砥石で、荒研ぎ～仕上研ぎまでが各面で行われている。

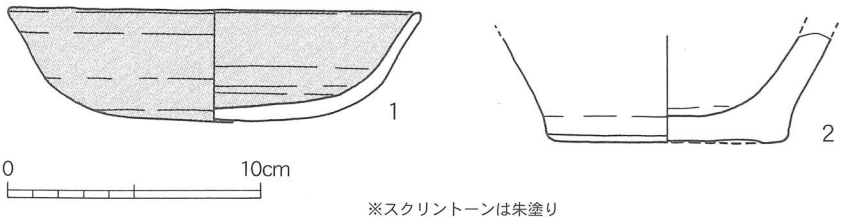


図18　SD08(1)・SD11(2)　出土遺物実測図(S=1/3)

SD9・10(図4・17)

SD09はA10Gr、SD10はA-9・10・B10Gr内第3層上面で検出した。東側は調査区外へ西側は1区西へと延び、SD07・19・SX02・03を切っている溝状遺構である。10ライン土層図(図9)で観察するとSD09は第2層をわずかに切っている様相がみられ、当該遺構は1区東で最も新しい遺構と思われる。2条はN-60°-Eに位置し約1.3mの間隔を空けてほぼ併走している。それぞれの検出長は4.8mと9.2m、幅は50～70cm、深さ10～20cmを測り、底面は若干西へ傾斜している。断面形態は、ゆるやかな逆台形を呈して、西側は南にステップをもつ2段掘りとなっている。

出土遺物はSD09から土師器小片1点のみ、SD10からは生活面の第3層からの混入品である弥生土器小片3点と土師器小片3点のみの出土で、実測に耐えるような遺物は皆無であった。また時期決定は土師器を使用した時期と考えられるが、その胎土から中世前半以前のものと考えられる。

SD11(図4・17・18)

A-8・9・B-9・10Gr内第3層上面で検出し、SD07・19を切っている溝状遺構である。B10Gr内ではSD19にかかった付近で収束し、A8Gr内では浅くなって自然に収束する。N-55°-Eに位置し、検出長12.6m、幅10～20cm、深さ5～10cmを測るが、生活面標高の高い西側が深く東側は浅い。しかし底面標高は東へ若干傾斜している。断面形態は、ゆるいU字状を呈する。

出土遺物は生活面の第3層からの混入品である弥生土器破片5点のみの出土であり、当該遺構の時期決定は、切ったSD07・19などより新しい時期といえる。また前記したSD08とは約7mの間隔を空けてほぼ併走し、規模・傾斜方向もほぼ同じくしているので(ただしSD19との新旧関係が逆)、何らかの関連した遺構と考えられる。

図18-2は弥生土器の平底の底部である。

SD19(図19・20)

D9・C-9・10・A・B-10Gr内第3層上面で検出し、南側は調査区外へ北側は1区西へと延び、SD07・08・SX03を切って、SD10・11に切られている溝状遺構である。N-40°-Wに位置し、検出

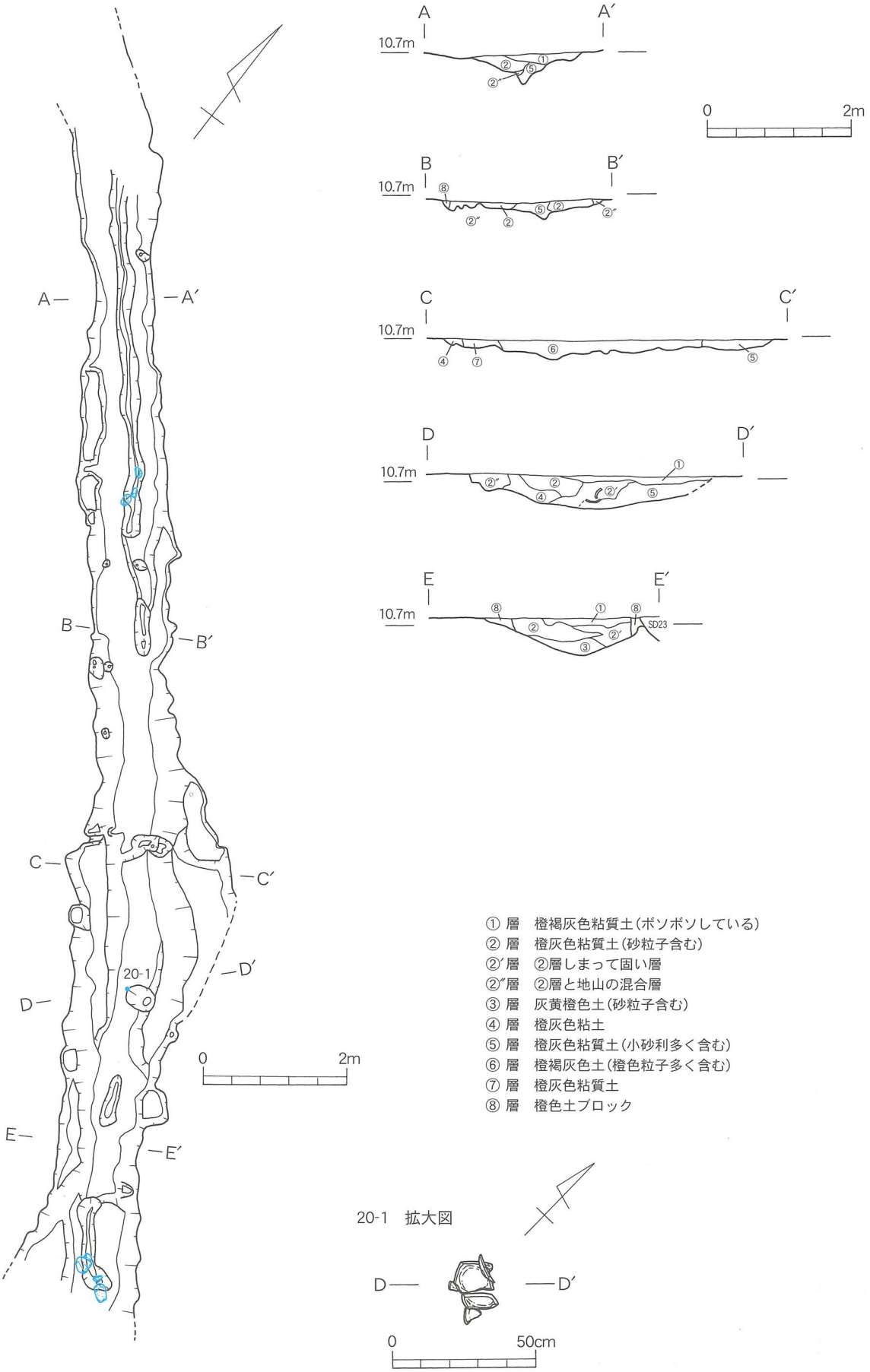


図 19　SD19 実測図・遺物出土状況図(平面図 S=1/80　土層断面図 S=1/40　土器拡大図 S=1/20)

長18m、幅0.8～2.3m、深さ10～25cmを測り、底面は若干南へ傾斜している。断面形態はほぼ底面中央を窪ませフラットな面を有する漏斗状を呈している。

出土遺物は大袋1袋分あり、生活面の第3層からの混入品である弥生土器及び古式土師器小片も含むが、土師器及び須恵器が出土している。当該遺構はこれらの時期と考えられる。

図20-1・2は須恵器である。1は碗で、口径と底径の差が小さく内湾して立ち上がる器壁を有する。底部は中央を押し上げて上げ底ぎみにヘラ切り未調整のままで、その周辺は回転ヘラケズリによって底部と胴部の境を丸くしている。2は長頸壺の胴部で、算盤玉のように張り出す。7～8世紀の範疇であろう。

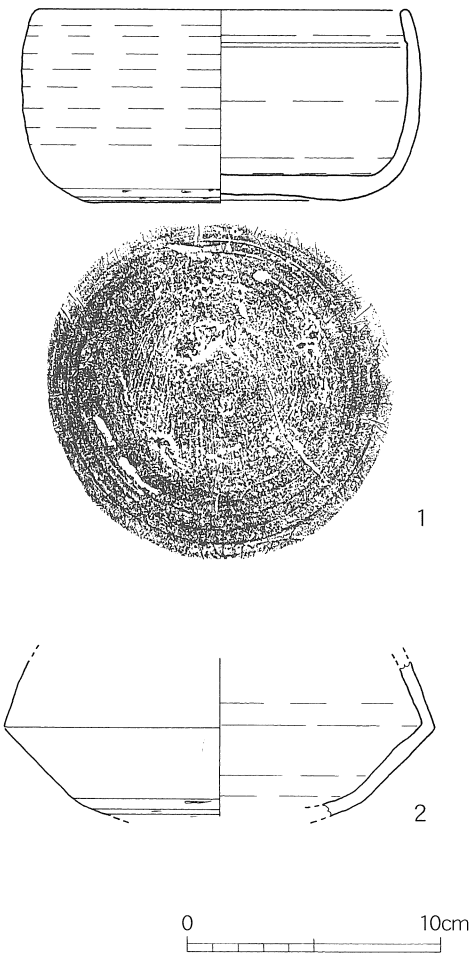


図20　SD19出土遺物実測図(S=1/3)

SD20～23(図21)

C・D-8・9Gr内第3層上面で検出した短長な溝状遺構の重複である。SD19に併走するように位置するSD20はSD08・21・22を切っている。SD08から派生するようなSD21はSD20・22に切られ、SD20の西側へ屈曲して延びている。SD22はSD21を切りSD20に切られる最も短長な遺構である。SD23はSD19・20に併走するように位置している。SD20・23はN-45°-Wに位置し、SD21はN-50°-EからSD20の西では155°東へ振る。SD22はN-25°-Eに位置する。検出長はSD20が8.2m、SD21が7.1m、SD22が2.2m、SD23が2.7m、幅はSD20が0.5～1.7m、SD21が50～70cm、SD22が40cm、SD23が0.8～1.0m、深さは5～20cmを測る。断面形態はゆるいU字状を呈している。

出土遺物はSD20で弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器の小片が大袋半袋分及び残核らしき水晶が1点、SD21で同様に中袋1袋分、SD22で弥生土器小片1点、古式土師器小片2点、土師器小片1点のみ、SD23で弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器の小片中袋1袋分及び桂化木1片であるが、実測に耐えるような遺物は皆無であった。弥生土器と古式土師器は生活面の第3層からの混入品のため、時期決定は土師器及び須恵器を使用した時期であり土師器の胎土から中世前半以前と考えられる。またSD20はSD08を切っているので古くても8世紀である。

SX02(図22・23・49)

A8・A・B-9・10Gr内第3層上面で検出し、北側は調査区外へ若干広がり、SD09・10に切られた性格不明の竪穴状の落ち込みである。長軸はN-75°-Eに位置し、長軸9m、短軸3.7m、深さ10～25cmを測る。

平面形態は長楕円形を呈するが北東隅が出っ張っていく。立ち上がりは短辺はゆるやかであるが長辺はややきつい。長辺に沿って土坑状の落ち込みがみられる。底面は第3層と思われる土層上

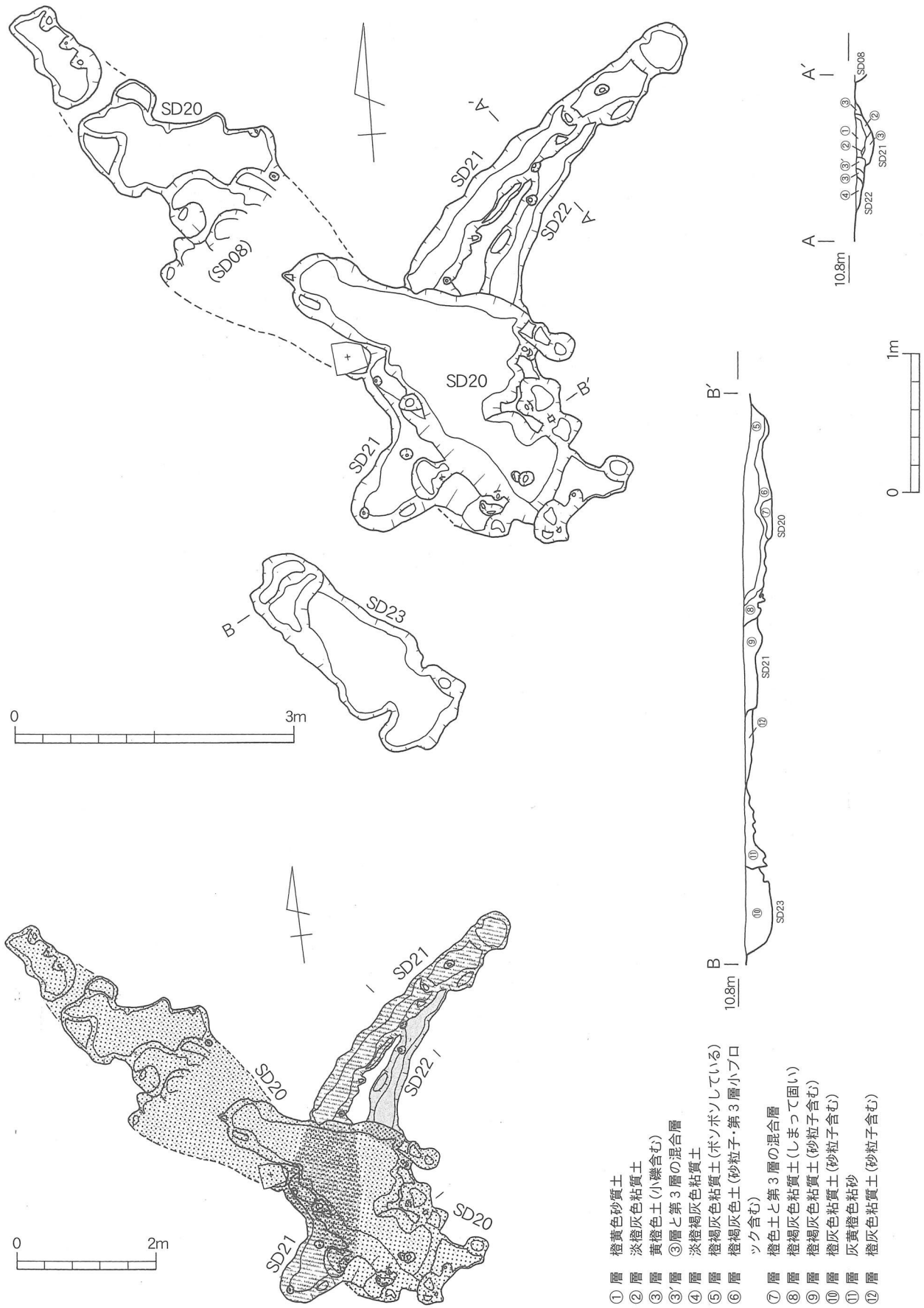


図21　SD20～23実測図(平面図S=1/60　土層断面図S=1/40　各遺構色分け図S=1/80)

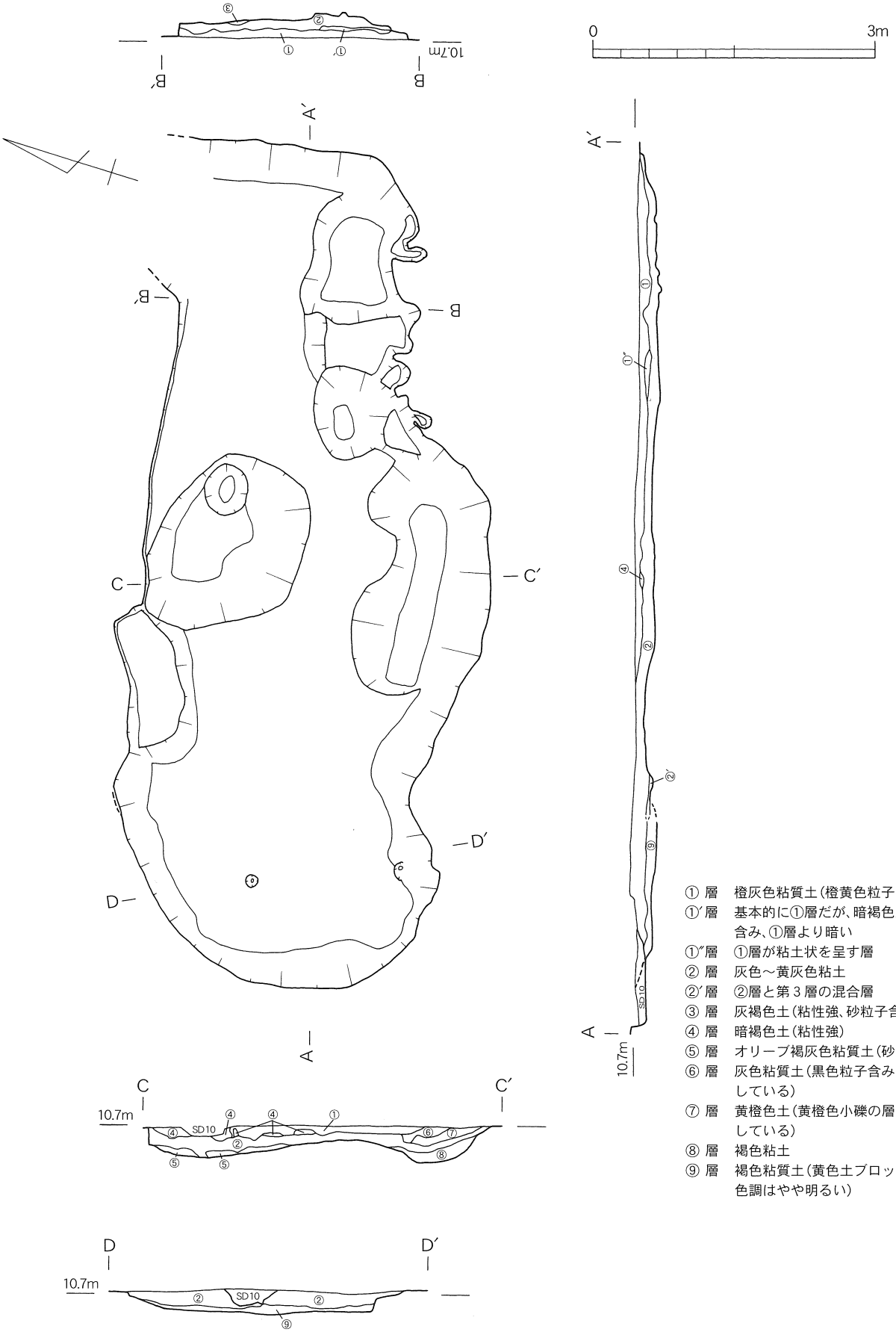


図 22　SX02 実測図（S=1/60）

面及び6層が検出された時点で止め、それ以下を後述する第4層(6層)上面検出遺構(SI01~03・SK43~45・SD44・45)とした。ほぼ重複している。

出土遺物は中袋半袋分あり、生活面の第3層からの混入品である弥生土器がほとんどで石錘と黒曜石のチップが各1点あり、土師器小片1点、須恵器小片2点が出土しているが、時期決定となるような出土状況を呈していない。よって当該遺構は、生活面の第3層が堆積して以降、切られたSD09・10などより古い時期といえる。

図23-1・2は弥生土器で平底の底部である。図49-4は石錘である。打製石斧を折半して2次使用したものまたは残核を利用したもので、各辺の中央に抉りが入れられている。

SX03(図4・9・23・49)

A10Gr内第3層上面で検出し、西側は1区西へと広がり、SD10に切られSD07を切っている性格不明の落ち込みである。SD19とSD10が複雑に切り合って調査区端で検出されたためと底面がSD07に壊されており、正確に掘ることができず詳細不明の遺構となってしまった。南北断面形態は10ライン土層図(図9)で観察できる。それによると第2層を切ってSD19を切っているように見受けられるが、SD10に切られているので、1区東では最も新しい遺構のひとつではあるが、SD09・10よりは古い。

出土遺物は中袋1袋分あり、生活面の第3層からの混入品である弥生土器がほとんどで磨製石斧破片も1点あり、須恵器小片2点が出土しているが、時期決定となるような出土状況を呈していない。よって当該遺構は、生活面の第3層が堆積して以降、切られたSD10より古い時期といえる。

図23-3は弥生土器で平底の底部である。図49-5は磨製石斧の破片で基部に当たる。

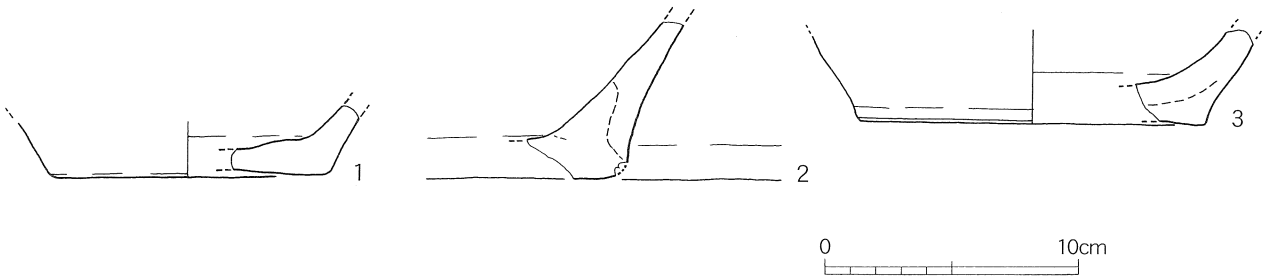


図23　SX02(1・2)・SX03(3)　出土遺物実測図(S=1/3)

ピット(図4)

第3層上面から検出されたピットからは生活面の第3層からの混入品と考えられる弥生土器小片及び黒曜石チップしか出土していない。またピットは集中して検出される箇所がある。B-9・10Gr内のようにSD19に併走しSD20の北延長に位置し2列に並んでいるものもあるが、これらは建物の柱穴列というより、前記した溝状遺構と何らかの関連性が想定される。

地形の掘削(図4)

D9・B・C-10Gr内ではSD19に沿って西側に地形が約10cm下がっている。その落ち際に沿って凹凸が著しい。

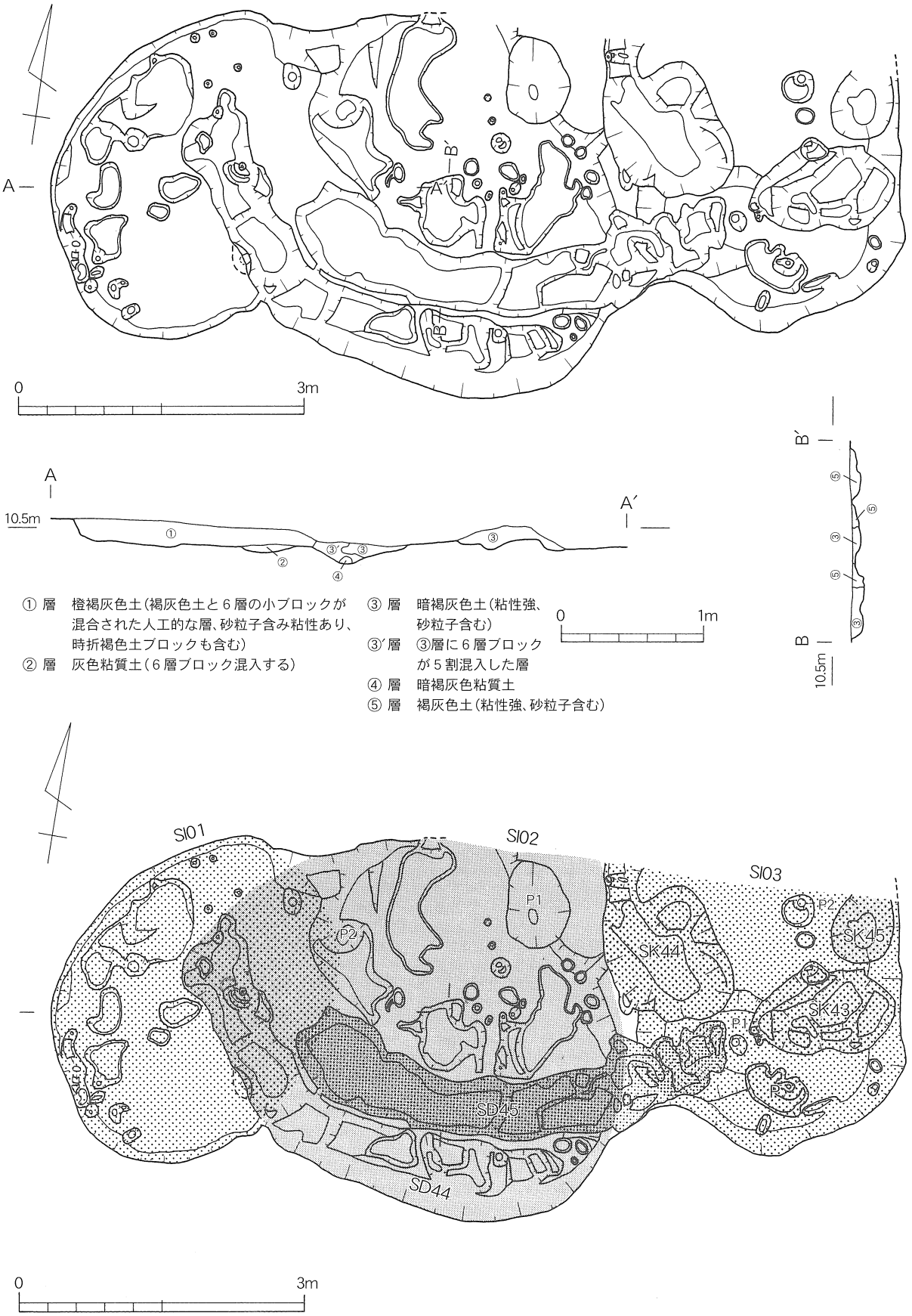


図24　SI01～03・SK43～45・SD44・45実測図(平面図S=1/60　土層断面図S=1/40)

第4層上面(第2面)検出主要遺構

SI01～03・SK43～45・SD44・45(図24)

A-8~10・B9Gr内第4層(6層)上面で検出し、北側は調査区外へ広がり、SK41に切られた竪穴状の落ち込みの重複で、SI01～03は小型の竪穴式住居と捉えている。全体の平面形態は楕円形が3つ重なったような歪な長楕円形を呈する。これらは前記したように上半部をSX02に壊されているためと第3層を間層としており全体としての土層確認はできなかった。

図24の上図は完掘状況で、図24の下図は各遺構をスクリントーンで明確にしたものである。検出状況、残存する土層観察などにより各遺構の新旧関係は、SK43~45・Pit→SI03→SI02(SD44は周溝)→SD45→SI01となり、東から西へ建て直しが行われたようである。

SI01は平面形態は楕円形を呈し、長軸3.6m、短軸2.7m、深さ12～16cm、SI02は平面形態は歪な楕円形を呈し、長軸4.5m、短軸4.0m以上、深さ15～25cm、SI03は平面形態は若干長めの楕円形が想定され、長軸2.9m以上、短軸3.1m、深さ10～20cm、SK43は平面形態は長楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸80cm、最深(SI03の床面から)23cm、SK44は平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.15m、最深(SI03の床面から)18cm、SK45は平面形態は楕円形を呈し、長軸70cm以上、短軸60cm、最深(SI03の床面から)16cm、SD45はSD44に沿うように弓なりに湾曲しており、長さ4.5m、幅50～90cm、深さ20～30cmを測る。

SI01は直立ぎみに壁面が立ち上がり底面はほぼフラットである。主柱穴は存在しないが、壁付近に数cmの浅い落ち込みが検出されている。SI02はややゆるやかな壁面の立ち上がりをみせ、南辺から東にかけてSD44が周溝として巡り、床面はほぼフラットである。SI02-P1・P2がそれぞれ床面から12cm、7cmの深さを測り、周辺の浅い落ち込みと比較すると主柱穴の可能性が考えられる。SI03は壁面が緩やかに立ち上がる。古遺構が床面を壊しており煩雑になっているのと南側の床面が一段低くなるが、床面はほぼフラットである。SI03-P1・P2が床面から10cmの深さを測り、主柱穴の可能性が考えられる。SK43～45はフラットな底面をもつ土坑で掘り込み面がSI03の上面を想定すると各遺構の深さは10～20cmは深くなる。これらは集中して築かれているのと後述するSK38と形態的にも似ており、土壙墓の可能性が考えられる。SD45は単独の溝状遺構のように記してきたが、SD44に沿っていることを考慮するとSI01が作られる前にSI02を北東側にずらして建て直した周溝の可能性も考えられる。これは図示していない。

出土遺物はSI01で小袋(10×14cm)1袋分あり、弥生前半期の土器小片と黒曜石のチップが3点、SI02のSD44内で弥生前半期の土器小片が2点のみ、SD45内で縄文土器または弥生前半期の土器小片が4点と弥生土器小片が1点のみ、SI03・SK43・45は皆無、SK44は縄文土器または弥生前半期の土器小片が1点のみで、実測に耐えられるような遺物は皆無であったが、当該遺構は弥生前半期の遺構と考えられ、その範疇での建て替えが行われたものであろう。

SK09(図25)

D3Gr内第4層(3C層)上面で検出し、SD24を切っている土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長軸はN-5°-Eに位置し、長軸1.1m、短軸85cm、深さ15cmを測る。壁面はゆるやかな立ち上がりで、フラットな底面を有する。性格は不明である。

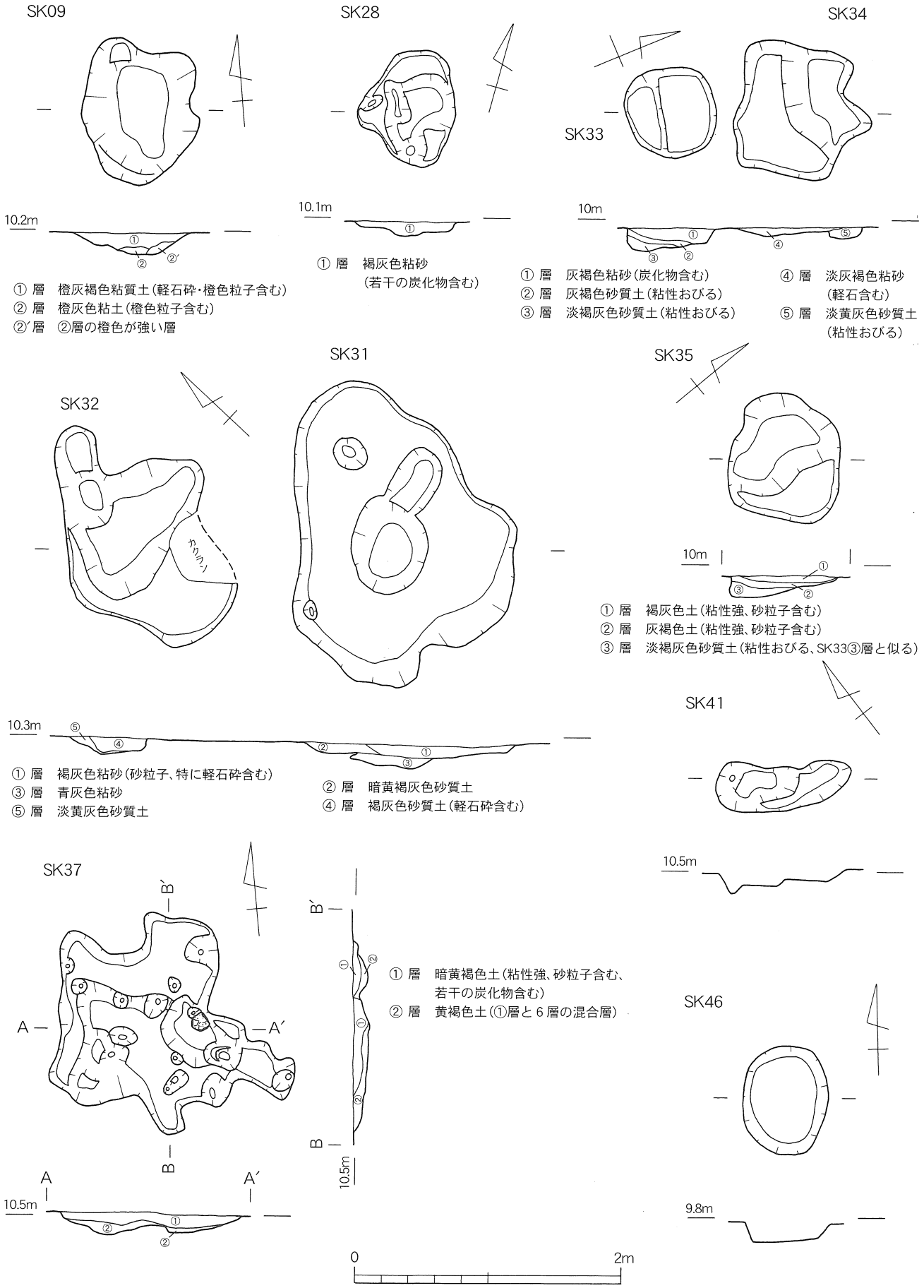


図25　SK09・28・31～35・37・41・46 実測図(S=1/40)

出土遺物は弥生前期土器小片1点のみで、当該期の範疇であろう。

SK28(図25)

D5Gr内第4層(4層)上面で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長軸はN-15°-Wに位置し、長軸90cm、短軸75cm、深さ10cmを測る。ピットの集合体のようである。

出土遺物は弥生前期土器小片1点のみで、当該期の範疇であろう。

SK31・32(図25・26)

C・D-6・7Gr内第4層(4層)上面で検出した土坑である。平面形態は歪な楕円形を呈しSK32は北側にピット状の突出を有する。長軸は共にN-50°-Eに位置し、それぞれの長軸は2.3m・1.4m、短軸は1.6m・1.2m、深さ10～15cmを測る。壁面はやや傾斜をつけて立ち上がり、フラットな底面を有する。それぞれピット状の落ち込みを有し、性格は不明である。

出土遺物はSK31から弥生土器小片が3点のみで、SK32は皆無である。時期は第3層掘削時後に検出された遺構なので、共に弥生前半期の範疇であろう。

図26-1は弥生土器の平底の底部である。

SK33・34・35(図25)

B~D-2・3Gr内第4層(4層)上面で検出し、SK09・SD24に切られている土坑である。平面形態はSK33がほぼ円形をSK34が歪な楕円形をSK35が楕円形を呈する。SK33・34の直径は70cm・1.1m、深さは18cm・10cmを測り、SK35は長軸がN-50°-Wに位置し、長軸98cm、短軸82cm、深さ16cmを測る。壁面はゆるやかな箇所と急傾斜をもつ立ち上がりで、2段掘りのフラットな底面を有する。性格は不明であるが、当該遺構3基は至近距離に配置されていることと断面形体が似ているため、同様な性格のものと考えられる。

出土遺物は皆無であるが、SK09・SD24に切られており、それよりも古く、縄文・弥生移行期[9]の範疇であろう。

SK37(図25・26)

A8Gr内第4層(6層)上面で検出した土坑である。平面形態はアメーバ状を呈し、長軸1.8m、短軸1.4m、深さ20cmを測る。壁面はゆるやかな立ち上がりで、フラットな底面を有するが、小さなピットの集合体のようである。

出土遺物は縄文土器？小片2点、弥生前期土器小片4点、弥生土器小片7点、石器素材1点である。第3層掘削後に検出された遺構なので、弥生前半期の範疇であろう。

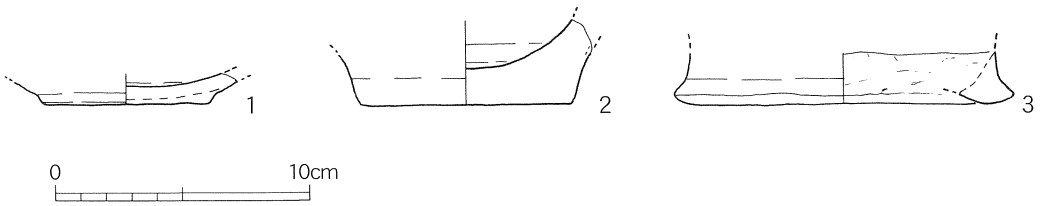


図26-2は弥生土器の平底の底部である。

図26　SK31(1)・37(2)・38(3)　出土遺物実測図(S=1/3)

SK38(図26・27)

C9Gr内第4層(4層)上面で検出した土坑である。平面形態はやや歪な長方形を呈し、長軸はほぼ南

北に位置する。堀方の長軸1.25m、短軸78cm、深さ25cmを測る。直立ぎみに壁面は立ち上がり、フラットな底面の中央には小さな溝状の落ち込みを有し、規則正しい堆積状況を呈する。以上の形態から当該遺構は土壙墓と考えられ埋葬施設としては長辺100cm、短辺65cmの長方形を呈する。底面の溝状の落ち込みは水抜き溝であろう。

出土遺物は縄文土器小片3点、弥生前期土器小片1点のみである。

以上当該遺構は縄文・弥生移行期に当たる。

図26-3は縄文土器の上げ底の底部である。粘土貼付面から剥がれた外縁の残存部で縁辺は突出している。

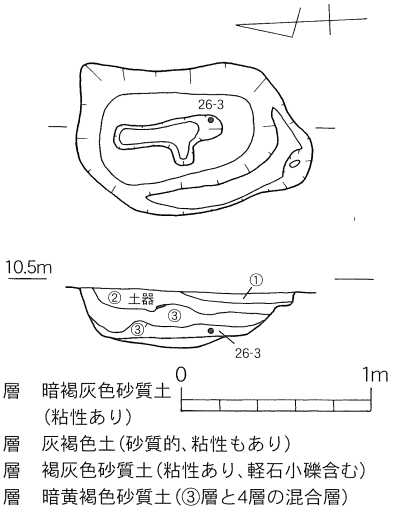


図27　SK38実測図（S=1/40）

SK41（図25）

A・B-10Gr内第4層（6層）上面で検出し、SI01を切っている土坑である。平面形態は長楕円形で、長軸はN-55°-Wに位置し、長軸1.0m、短軸35cm、深さ15cmを測る。壁面はややゆるやかな立ち上がりで、2段のフラットな面を有し底面はピット状を呈する。

出土遺物は弥生前半期土器小片1点のみであるが、当該期の範疇であろう。

SK46（図6・25）

A2Gr内第4層（4層）上面で検出した土坑である。平面形態は楕円形で、ほぼ南北に長軸が位置し、長軸80cm、短軸65cm、深さ15cmを測る。壁面は傾斜をつけて立ち上がり、フラットな底面を有する。図25には掲載していないが図6では中軸の南北に延長した両位置に直径10cm足らずのピットが10～15cmの間隔を空けて1基ずつ穿たれている様相を呈する。

出土遺物は皆無であるが、第3層掘削後に検出された遺構なので、弥生前半期の範疇であろう。

SD24（図28・29・49）

A~D-3Gr内第4層（3C層）上面で検出し、調査区外へと延び、SK09に切られている溝状遺構である。ほぼ南北に位置し、検出長17.8m、幅0.25～1.2m、深さ5～20cmを測り、底面は南へ傾斜している。北へいくに従い幅も狭く浅くなっていくのと調査区北壁面土層に検出されないため、調査区壁面沿いに掘削している排水溝内で収束したものと考えられる。南側は幅広くなっているが浅いステップであるため、本筋としては幅60cmで延びた部分である。

断面形態はゆるやかなU字状からV字状を呈し、ほぼ1層が堆積している。

出土遺物は縄文土器小片4点、弥生前期土器破片1点、弥生前半期土器小片2点、黒曜石製楔形石器1点のみであった。以上よりSK38と同様縄文・弥生移行期の範疇であろう。

図28-1は弥生前期土器、甕の口縁部である。口縁部は外反し端部は矩形を呈しているが、頸部は無文である。図49-6は楔形石器である。上縁に磨滅及び小剥離痕が観察される。

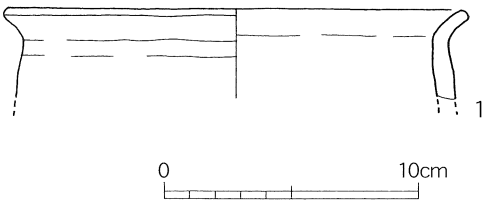


図28　SD24出土遺物実測図（S=1/3）

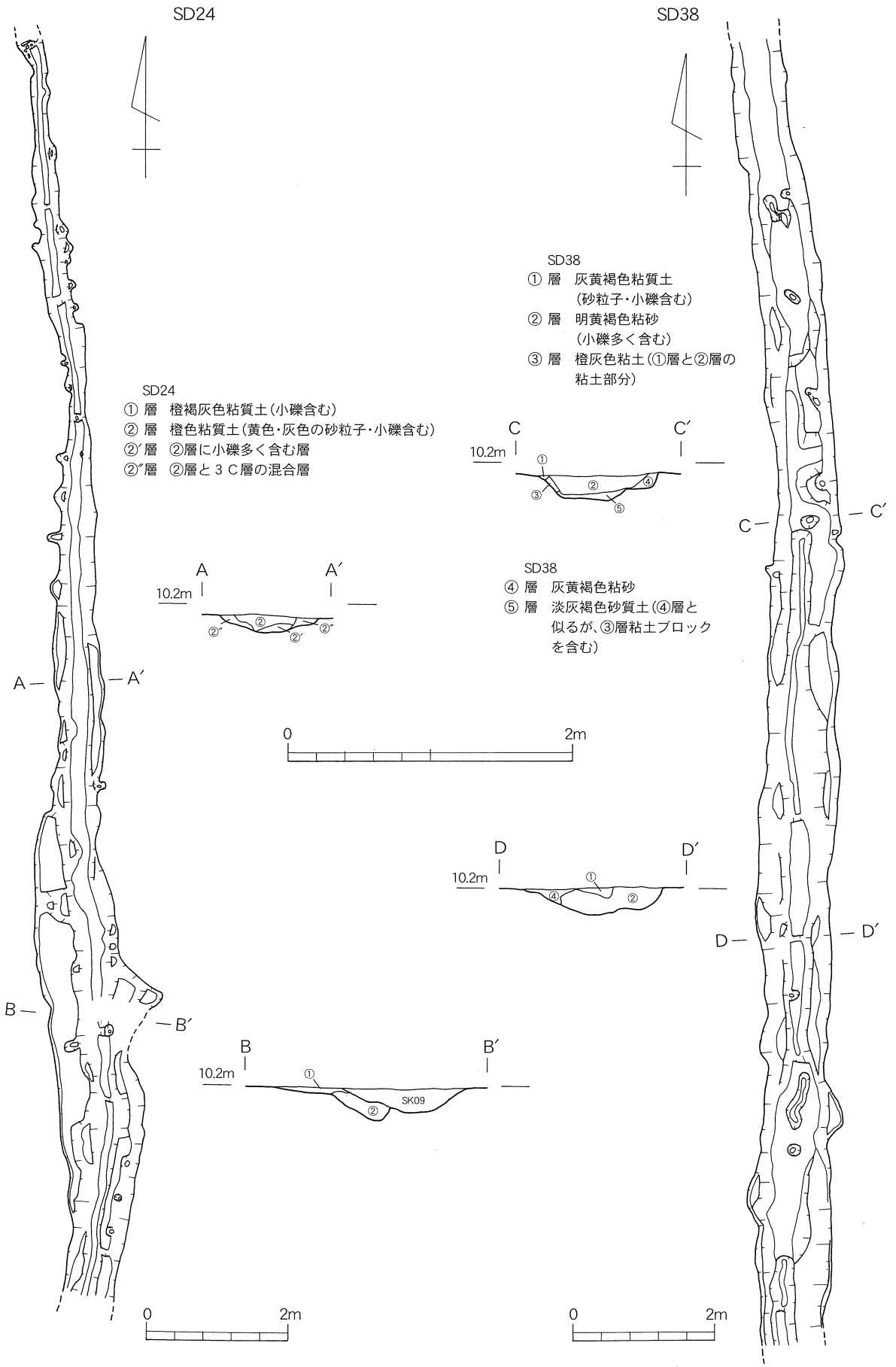


図 29　SD24・38 実測図(平面図 S=1/80　土層断面図 S=1/40)

SD38(図 29)

A･B-4・C･D-4･5Gr 内第 4 層(3C 層)上面で検出し、調査区外へと延びる溝状遺構である。ほぼ南北に位置し、検出長 18.5m、幅 0.8 ～ 1.0m、深さ 10 ～ 20cm を測り、底面は若干北へ傾斜している。

断面形態はゆるやかな U 字状から V 字状を呈し、ほぼ 1 層が堆積している。前記した SD24 とは同じ 3C 層上面から掘り込まれた遺構であること、約 8m の間隔を空けて併走していること、覆土が似てることなどから何らかの関連した遺構と考えられる。ただし底面の傾斜はそれぞれ南方向と北方向の逆である。

出土遺物は縄文土器？小片 2 点、弥生前期土器小片 3 点、弥生前半期土器小片 3 点、弥生土器小片 1 点のみであった。以上より第 3 層(3B 層)掘削後に検出された遺構なので、弥生前半期の範疇であろう。

SD40(図 9・30・49)

D9・C･D-10Gr 内第 4 層(4 層)上面で検出し、南側は調査区外へと延び北側は 1 区西へと続く、SK40・42 を切っている溝状遺構である。調査区南壁面及び 10 ライン土層で観察すると 3B 層上面から掘り込まれた遺構であることが判明した。覆土が第 3 層と酷似しているため第 3 層上面で確認できなかった。N-45°-W に位置し、検出長 12m、幅 50cm、深さ 10 ～ 25cm を測り、南北の高低差はほとんどない。壁面はやや直立ぎみに立ち上がり底面はキャタピラ状に平行した 2 列の凹凸列となっている。土採掘痕または苗株痕が考えられる。

出土遺物は弥生前半期土器小片 1 点、石器 2 点のみであった。これらは生活面の第 3 層からの混入品とは思われるが、第 3 層上面に当該遺構を入れ込むと一段下がった地形に沿って築かれていることになり、その上面にはピットが検出されているため、第 3 層が堆積して以降古くに掘削された遺構と考えられる。

図 49-7 は黒曜石製の楔形石器である。磨滅痕は観察されない。図 49-8 は玉髄製の敲石である。突出する縁辺部を使用しており、敲打位置からの剥離面も観察される。

SD42(図 6・31・32)

D-5･6Gr 内第 4 層(3C 層及び 4 層)上面で検出し、南側は

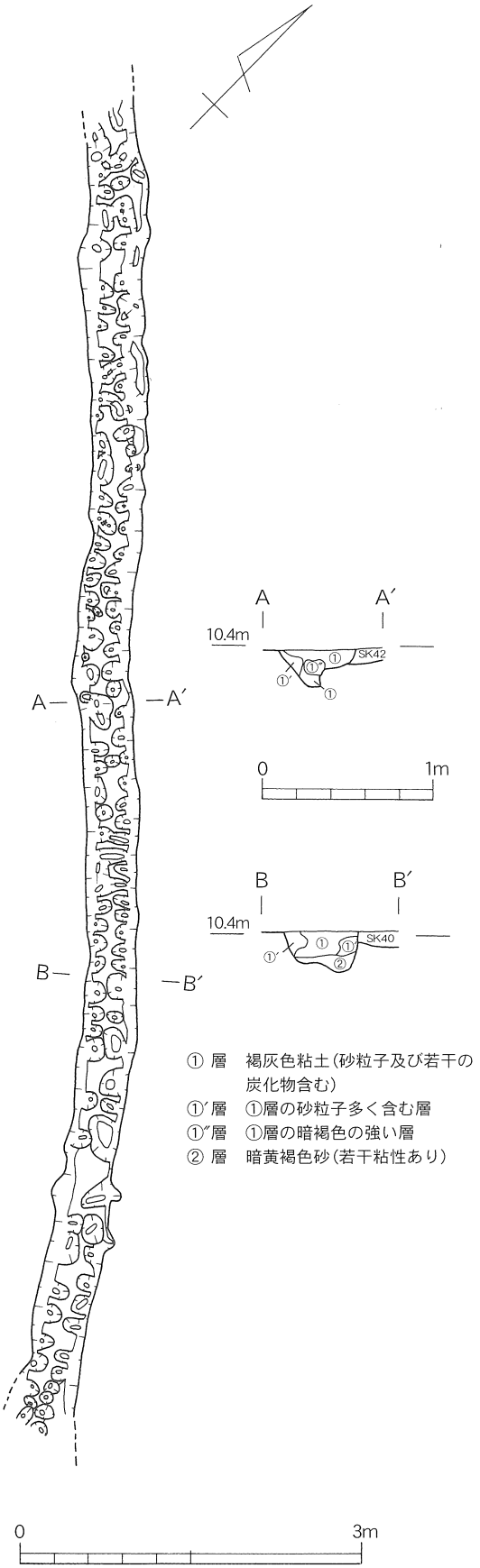


図 30　SD40 実測図
(平面図 S=1/60　土層断面図 S=1/40)

調査区外へと延びる竪穴状遺構である。プランは溝状遺構の様相を呈して軸をN-45°-Wにとり、SD07へ連続するような方向性をみせていた(図6)。しかし掘り進めていくと調査区南壁から北へ2.5mの幅が広がる部分から落ち込むことがわかった。その時には既に南側の浅い部分は掘り終えてしまっていたため、縦断に土層堆積の検討をすることができず、南側の浅い部分と平面形態長方形を呈する竪穴状の落ち込み部と北側の浅い部分との詳細な関係は解らない。ただし縦断面図から検討すると、中央の竪穴状の落ち込み・それを挟んだ一段下がった浅い溝状の部分・南側の浅い溝状の部分に分かれるようである。

堀方は検出長6.0m、幅0.7～2.0m、深さ2～30cmを測る。それぞれの計測値は、南側の浅い溝状部分で検出長1.95m、幅60～80cm、深さ2～5cm、一段下がった浅い溝状部分で長さ3.9m、幅0.8～1.4m、深さ6～20cmである。中央の竪穴状の落ち込みは長軸2.7m、短軸1.6m、深さ30cmを

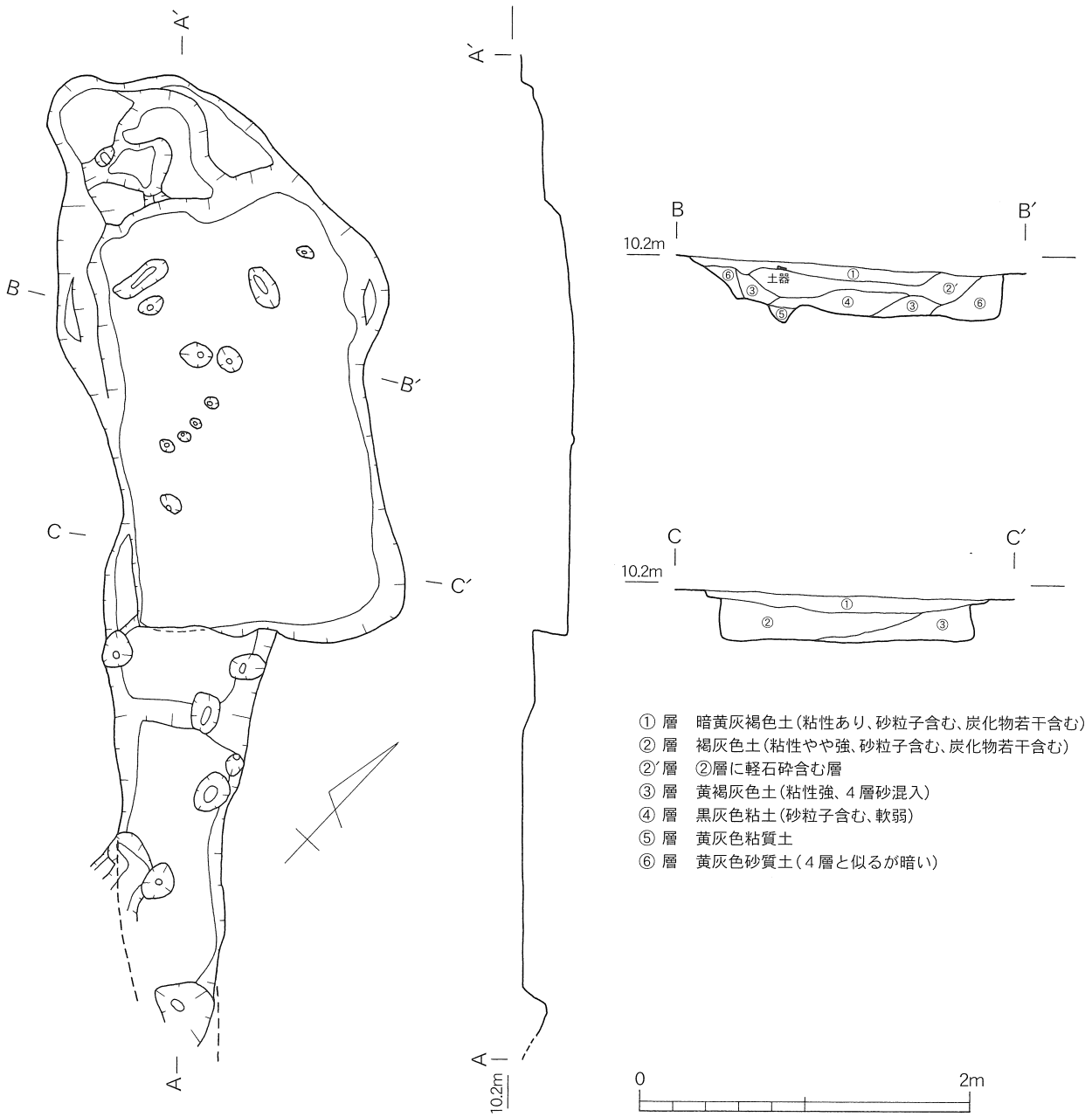


図31　SD42実測図(S=1/40)

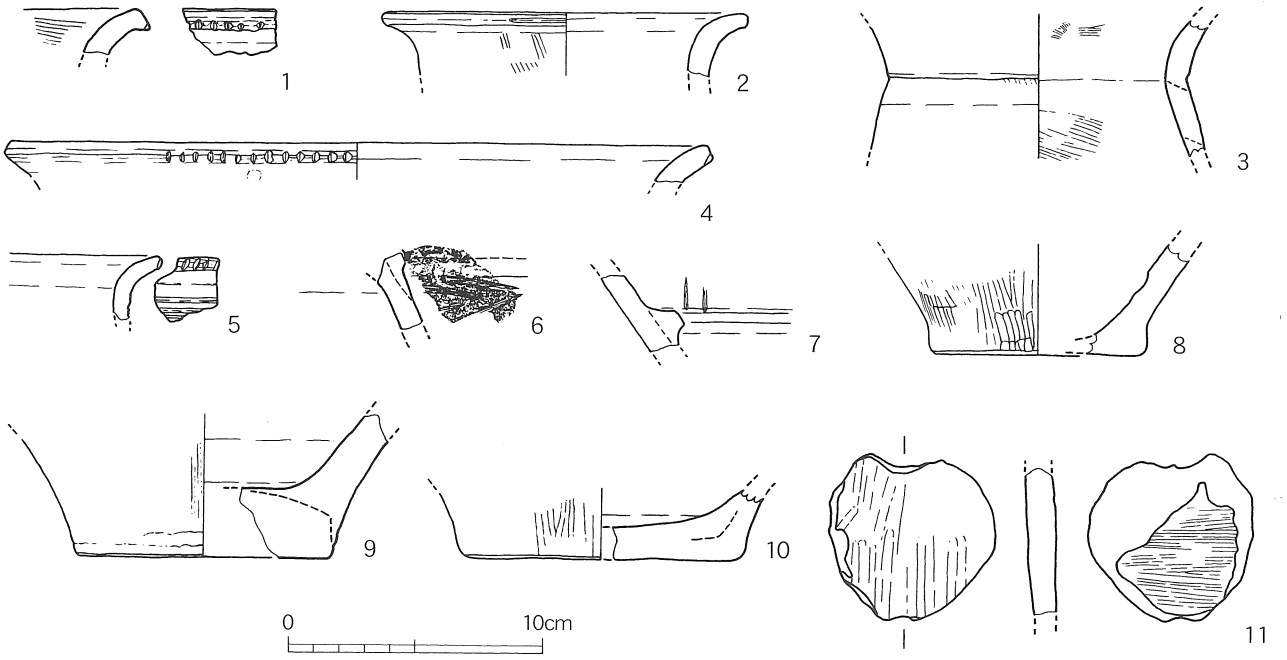


図 32　SD42 出土遺物実測図(S=1/3)

測り、底面はフラットで深さ数 cm の小ピットを数基穿っている。壁面はほぼ直立に立ち上がり断面形体は箱掘り状を呈する。

竪穴状の落ち込みＢライン土層でみられる④層は、軟弱な黒灰色粘土で、掘削中には悪臭を放っていた(作業員の言)という。1.3m 南に設定したＣライン土層では観察されなかったので、平面的にはＢラインの北からＣラインの手前の間に堆積していたようである。

出土遺物は大袋１袋分で、縄文土器小片数点を含む、弥生前期土器小片、弥生土器小片、黒曜石チップ１点、玉髄チップ２点、安山岩チップ１点であった。以上より当該遺構は弥生前期の範疇であろう。

図 32-1 ～ 10 は弥生土器である。1 は口縁下端部凸状甕の口縁部で、2・3 は壺の口縁部とナデ押さえによる段を有する頸部である。4・5 は甕の口縁部で口縁端部に刻目が施され、5 は頸部に現状で３条の平行沈線文が施されている。6・7 は断面矩形の貼付突帯文を施した胴部で、6 はその下にヘラ状工具による羽状文を、7 はその上にヘラによるタテ沈線文を施す。8 ～ 10 は平底の底部である。図 32-11 は弥生土器を転用した土製円盤である。

SD43(図 33)

A･B-2Gr 内第４層(4 層)上面で検出し、調査区外へと

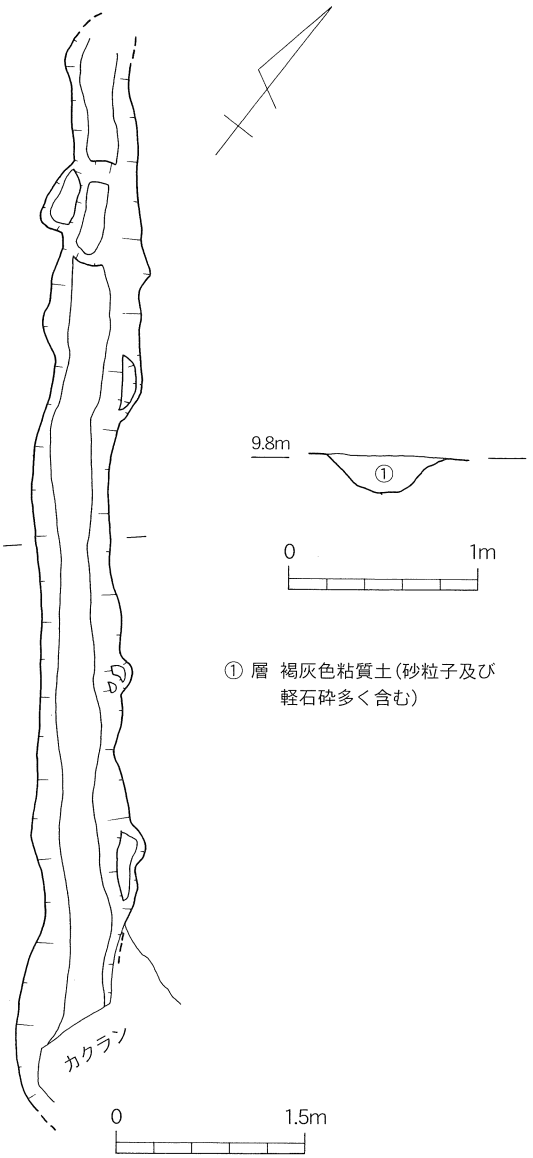


図 33　SD43 実測図
(平面図 S=1/60　土層断面図 S=1/40)

延びる溝状遺構である。N-35°-Wに位置し、検出長8.6m、幅50～90cm、深さ10～22cmを測り、底面はほぼフラットであるが、北側で一段高くなり幅も狭くなっていくのと調査区北壁面土層に検出されないため、調査区壁面沿いに掘削している排水溝内で収束したものと考えられる。断面形態はゆるやかなV字状を呈し、ほぼ1層が堆積している。

出土遺物は縄文土器小片1点、縄文土器？小片2点、弥生前期土器小片1点のみであった。以上当該遺構は縄文・弥生移行期に当たると思われる。

SX04(図34)

C･D-10Gr内第4層(4層)上面で検出し、1区東の南西隅に平面形態三角形を呈して南側は調査区外へと西側は1区西へと続く。側辺はN-40°-Wに位置し、2m東に位置するSD40にほぼ平行している。検出側辺長7.8m、検出南壁沿長4.5m、検出10ライン沿長6.1m、深さ2～35cmを測る。壁面はだらだらとした立ち上がりを呈し、底面はぼこぼこした凹凸状を呈する。SD40と同様に土採掘痕または苗株痕が考えられる。

出土遺物は弥生前半期土器小片7点、弥生土器小片1点のみであった。以上より第3層掘削後に検出された遺構なので、弥生前半期の範疇であろう。

図34　SX04実測図(S=1/40)

ピット(図6・35・36・49・50)

第4層上面から検出されたピットから出土した遺物は、縄文土器及び弥生前半期土器、石器である。これらのピットは第3層掘削後の第1ハイカとしての4層、地盤層としての6層[10]の上面で検出しており、縄文・弥生移行期から弥生前半期の範疇のものと考えられる。

第4層上面から検出されたピットは中小規模のものがほとんどであり、ある程度集中して検出される箇所と空閑地がみられる。CGr範囲が空閑地となっている一つの原因には第4層にかなり軽石が含まれてハードな地山となっているため、掘削するのに困難を生じたために、CGr範囲を空閑地とした遺構配置が成されたものと考えられる。西側では特にピットが密に集中し、しかもそれらが円形を呈するような箇所が何ヶ所かみられ、住居跡が存在した可能性が高い。東側のピットが疎に集中する箇所は柵列、簡易の小屋掛けなどが考えられる。

B4Gr-P3は平面形態は楕円形、断面形態はゆるやかな逆台形を呈し、直径25cm、深さ10cmを測る中規模のピットである。図50-9石器素材が中央に直立に埋め込んであった。右側縁には裏面から加工が施されている。A5Gr-P2は平面形態は円形、断面形態は逆台形を呈し、直径30cm、深さ18cmを測る中規模のピットである。図49-10黒曜石製の加工痕ある剥片と弥生前期土器小片1点が出土している。D5Gr-P1は平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、直径15～20cm、深さ24cmを測る小規模のピットである。図50-11加工痕のある大型剥片と縄文または弥生前半期の土器小片が1点出土している。11の基部の欠損は人工的に折ったような感じも受ける。先端部及び右側縁は磨滅痕が著しい。A6Gr-P1～P3は平面形態は楕円形、断面形態は逆台形及びV字状を呈し、直径22～32cm、深さ15cmを測る中規模のピットである。P3の④′層は木杭先端の腐食土である。P1から縄文土器小片3点、P3から弥生土器小片1点が出土している。A7Gr-P3は平面形態は楕円形、

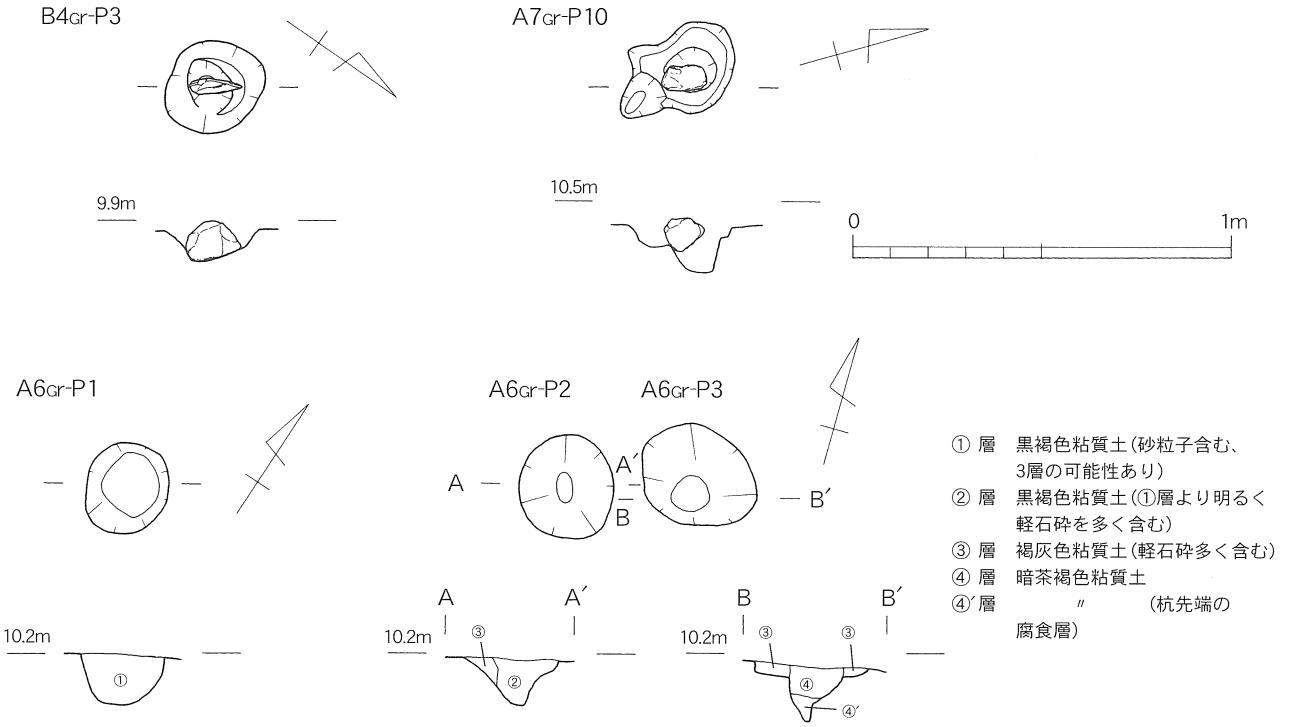


図35　主要ピット実測図(S=1/20)

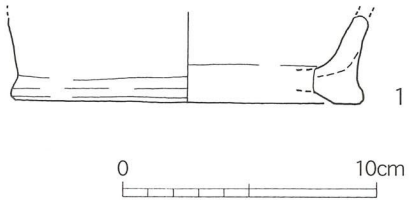


図 36　A7Gr-P3 出土遺物実測図(S=1/3)

断面形態はバケツ形を呈し、直径 10 ～ 15cm、深さ 10cm を測る小規模のピットである。図 36-1 縄文土器の上げ底の底部が出土している。A7Gr-P10 は平面形態は歪な楕円形、断面形態は 2 段掘りを呈し、直径 20 ～ 35cm、深さ 14cm を測る中規模のピットである。中央のステップ上に長さ 12cm、幅 7cm、厚さ 9cm を測る礫が 1 点埋置されていた。C9Gr-P3 は平面形態は魚形、断面形態は 2 段掘りの漏斗状を呈し、南側で新しいピットに切られている。検出長 95cm、幅 50cm、深さ 20cm を測るやや大型の中規模ピットである。図 50-12 加工痕ある剥片(スクレイパー？)が出土している。

土器集積(図 6・37・38・50)

B6Gr 内第 4 層(3C 層)を掘削中に最下部が 4 層上面に載っている土器の集積を検出した。図 6 中に▲印を付してある。最初に図 50-13 平石を置き、その上に土製円盤を積み上げ、最後に土器の口縁部・胴部及び底部で包み込むような状況を呈していた。

調査時は上部から 1 面め、2 面め、3 面めとして遺物を取り上げていった。1 面めは縄文土器片 2 点、縄文または弥生前期？土器片 2 点、弥生前期土器片 3 点、弥生前半期土器片 2 点、2 面めは縄文土器片 2 点、縄文または弥生前期？土器片 1 点、弥生前期土器片 6 点(うち 4 点は土製円盤に転用したもの)、3 面めは弥生前期土器片 3 点(土製円盤に転用したもの)、平石 1 点が出土している。

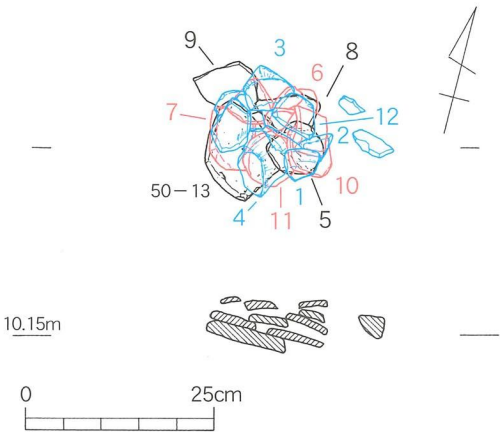


図 37　土器集積出土状況図(S=1/10)

これは単に土器破片を集積したものではなく、転用して土製円盤としたものを集積し、その上に器としての土器破片で塞いでいることに意味をもつものと思われる。

図 38-1・2 は縄文土器の口縁部で、粗雑なナデ調整が施され口縁部は 1 は丸く、2 は平坦面を有する。図 38-3 ～ 12 は弥生土器で、3・4 は平底の底部、5 ～ 12 は転用して土製円盤としたものである。円形系の 5・6・11、方形系の 7・10、三角形系の 8・9・12 に分類される。図 50-13 は平べったい石で、仮に平石と呼称するものである。表面のみ研磨痕が観察される。

遺構外出土遺物(図 39 ～ 48・51 ～ 56)

1 区東調査区からの遺構外出土遺物は、石器以外で 6 コンテナ分、石器が 1 コンテナ分出土している。

図 39 は遺構外出土遺物のうち、掘削中に目に止まったやや大きな遺物及び若干集中して出土した遺物の出土ポイントと標高を押さえたものである。そこには図 56-55 のような当該調査区での最も大型石器も出土している。詳細は後述する。遺物は標高 10.5m 付近に集中しているが、東へ地形が下がる東側は西よりも遺物出土標高が下がっている。これらのうち最も新しい古式土師器図 47-1 が最も高い標高に位置し、最も古い A6Gr 内北東出土の縄文または弥生土器は若干低い位置から出土している。全体として、相対的に新しい遺物は上位から、古い遺物は下位から出土しているようである。

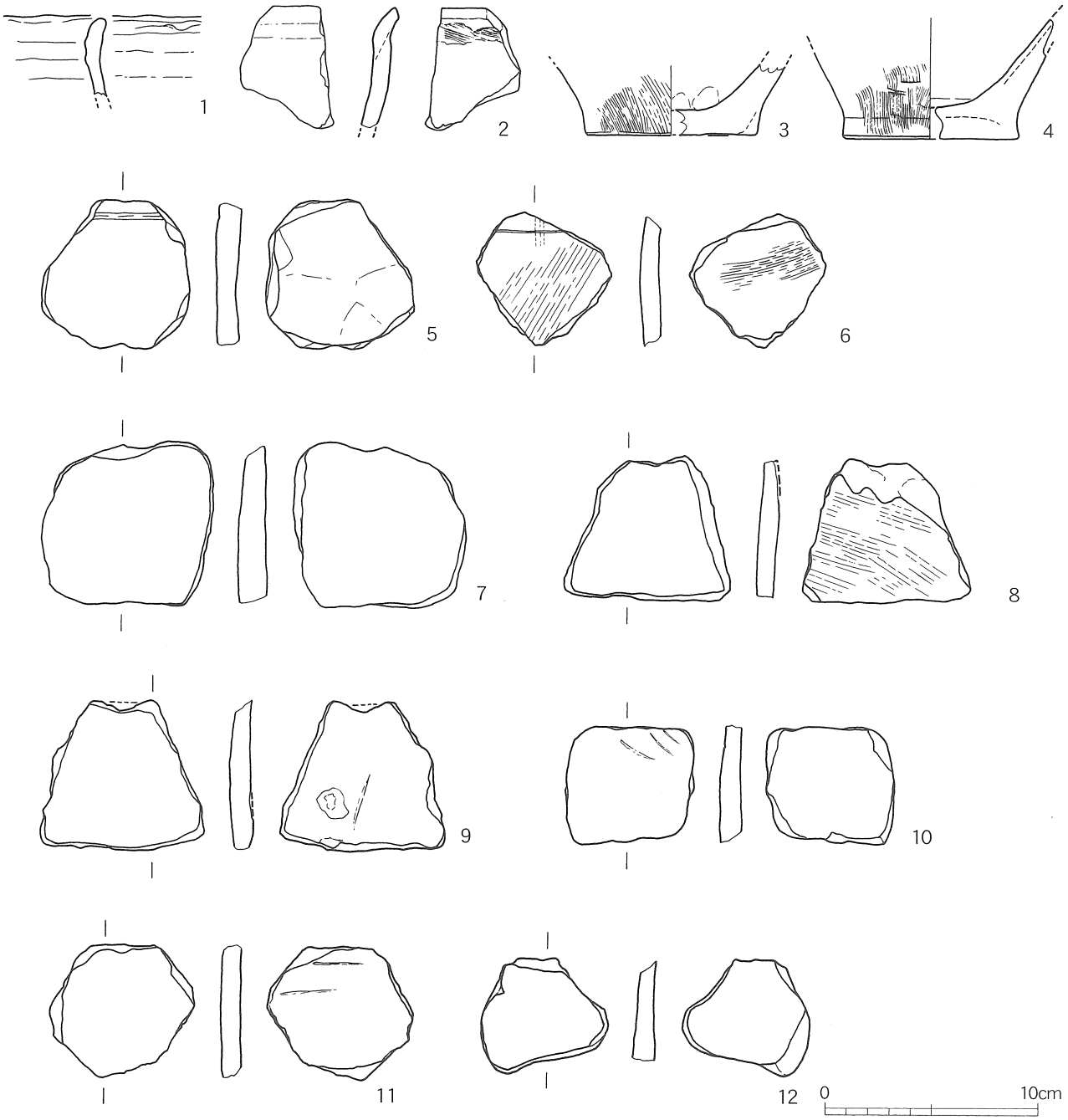


図 38　土器集積出土遺物実測図(S=1/3)

図 40 ～ 48・51 ～ 56 は出土遺物の実測図である。種別毎に区切り、種別の中で器種毎に古手と思われるものから羅列した。以下種別毎に若干の特徴等を記し、各遺物の詳細は観察表に委ねることとする。

【縄文土器】(図 40)

1 は直口壺の口縁部である。口縁部には現状で 1 穴の穿孔が施されている。2 ～ 4 は浅鉢である。2 は縁帯文を用いて立体的な文様を施している。3・4 は体部が屈曲内傾するタイプで、4 には屈曲部に明瞭な沈線文が施されている。5・6 は無文の深鉢で、5 は波状口縁部、6 は頸部付近である。7 ～ 9 は上げ底の底部である。

【突帯文土器】(図41)

当該土器は包含層中で弥生前半期土器と共伴することと、前記したように縄文晩期の遺物がほとんど不明なため、縄文・弥生移行期の土器として扱っている。また分類するのに、当該遺跡から数km丘陵縁辺沿いに南へ入った位置で、丘陵をひとつ挟んだ対峙関係にある三田谷遺跡1次調査[11]で突帯文深鉢土器の分類が行われており[12]、これを利用する。分類の概略は以下である。

刻目突帯A類：器形は肩部で屈曲、刻目は口縁端部と突帯上、突帯は口縁端部より下がった位置。
刻目突帯B類：器形は肩部で屈曲・外反、刻目は口縁端部と突帯上、突帯は口縁端部に接する位置。
刻目突帯C類：器形は砲弾形、刻目は口縁端部と突帯上、突帯は口縁端部より下がった位置。
刻目突帯D類：器形は砲弾形、刻目は口縁端部と突帯上、突帯は口縁端部に接する位置。
刻目突帯E類：器形は肩部で屈曲、刻目は突帯上のみ、突帯は口縁端部より下がった位置。
刻目突帯F類：器形は肩部で屈曲・緩やかに外反、刻目は突帯上のみ、突帯は口縁端部に接する位置。
刻目突帯G類：器形は砲弾形、刻目は突帯上のみ、突帯は口縁端部より下がった位置。
刻目突帯H類：器形は砲弾形、刻目は突帯上のみ、突帯は口縁端部に接する位置。
刻目突帯I類：2条刻目突帯をもつ。
無刻目突帯A類：器形は屈曲・外反、無刻目突帯は口縁端部より下がった位置。
無刻目突帯B類：器形は屈曲、無刻目突帯は口縁端部に接する位置。
無刻目突帯C類：器形は砲弾形、無刻目突帯は口縁端部より下がった位置。
無刻目突帯D類：器形は砲弾形、無刻目突帯は口縁端部に接する位置。
無刻目突帯E類：2条無刻目突帯をもつ。
突帯文系土器：突帯文を有するが粘土接合が外傾接合のもので遠賀川系の影響を受けているもの。

1～17は深鉢の4は胴部だが、あとは口縁部である。1～4は刻目突帯文で、1は刻目突帯E類、2・3は刻目突帯H類、4は(2条突帯文と思われるので)刻目突帯I類に分類される。口縁部に刻目が施されるものはなかった。5～14は無刻目突帯文で、5～8は無刻目突帯B類、9は無刻目突帯C類、10～14は無刻目突帯D類に分類される。5の口縁部は如意形口縁状を呈するが胎土・調整などから突帯文土器と判断した。7の口縁部上面に残存する円形孔は人工的に施されたものか風化によるものかは判別できなかった。15～17は突帯文系土器に分類した。図下していないが断面で外傾接合の痕跡が観察される。

【弥生土器】(図42～46)

1～19は壺である。1は短めの外反した口縁部の下端のナデにより段が施されている。2は頸部に削り出し突帯を施したもので、外面口縁部の一部にわずかな朱塗り痕が観察される。3も低い削り出し突帯が施された胴部である。4・5は玉縁状の口縁端部を有する口縁部と胴部であるが、各頸部には4はナデによる、5はハケ状工具による押さえにより段を施している。6～9は胴部で、6はヘラ描きによる羽状文・3条の平行沈線文・複線弧状文、7は貝殻原体による2条の平行沈線文・有軸羽状文、8・9は先端の丸い棒状工具による刺突文が施されている。10～12は広口壺の口縁部と頸部で、10・11の口縁端面には1条の浅い沈線文が施され、11・12の頸部には4～5条のヘラ描き平行沈線文が施されている。13・14は胴部で、2条のヘラ描き沈線文・貝殻原体による3段の羽状文・貝殻原体による3条の沈線文が施されている。15は胴部の破片であるが、文様としては企画性が乏しくラインが直線的なので、ヘラ描きによる絵画ではないかと思われる。16は13・14のように胴部が張

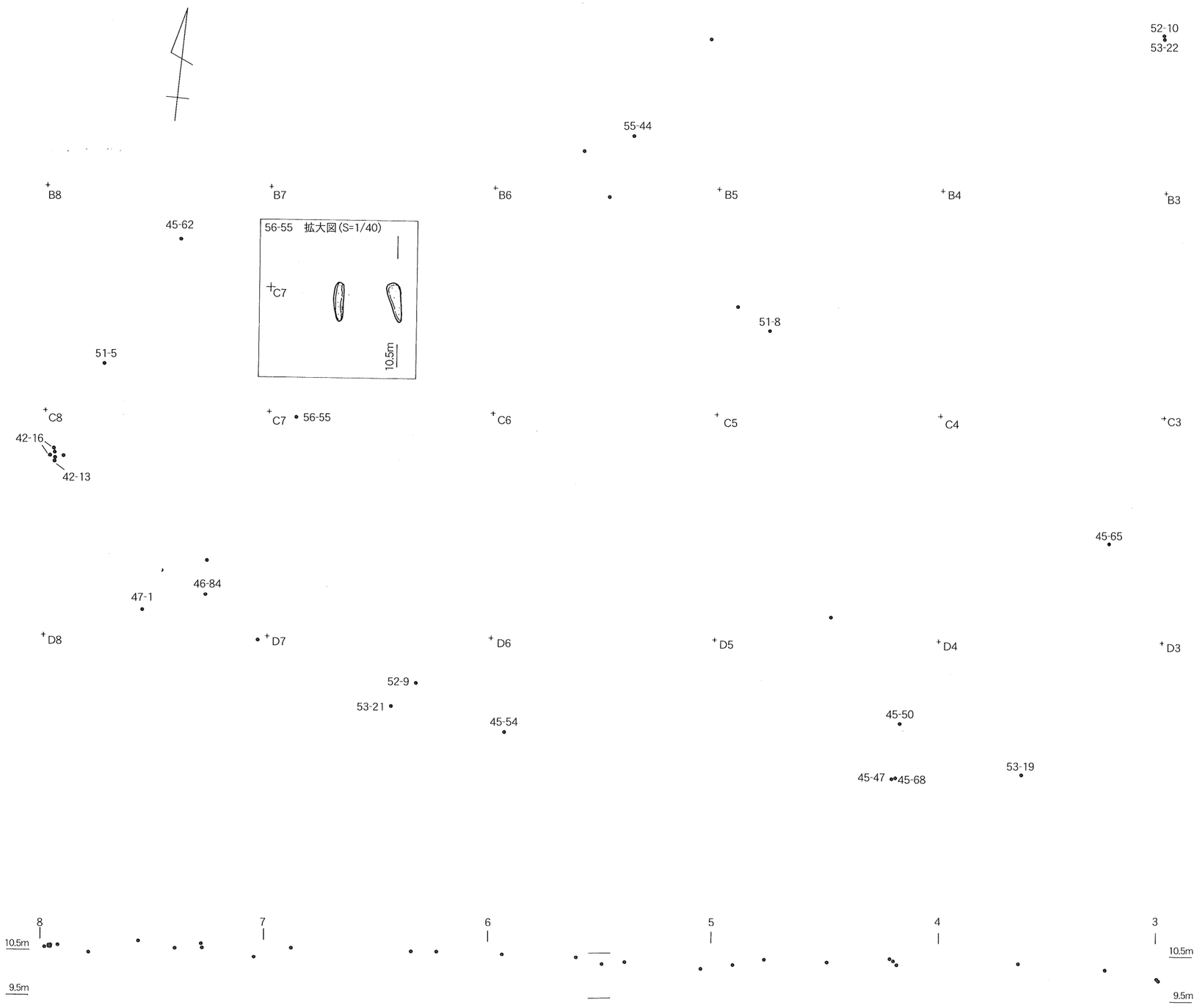


図 39　遺構外遺物出土状況図(S=1/100)

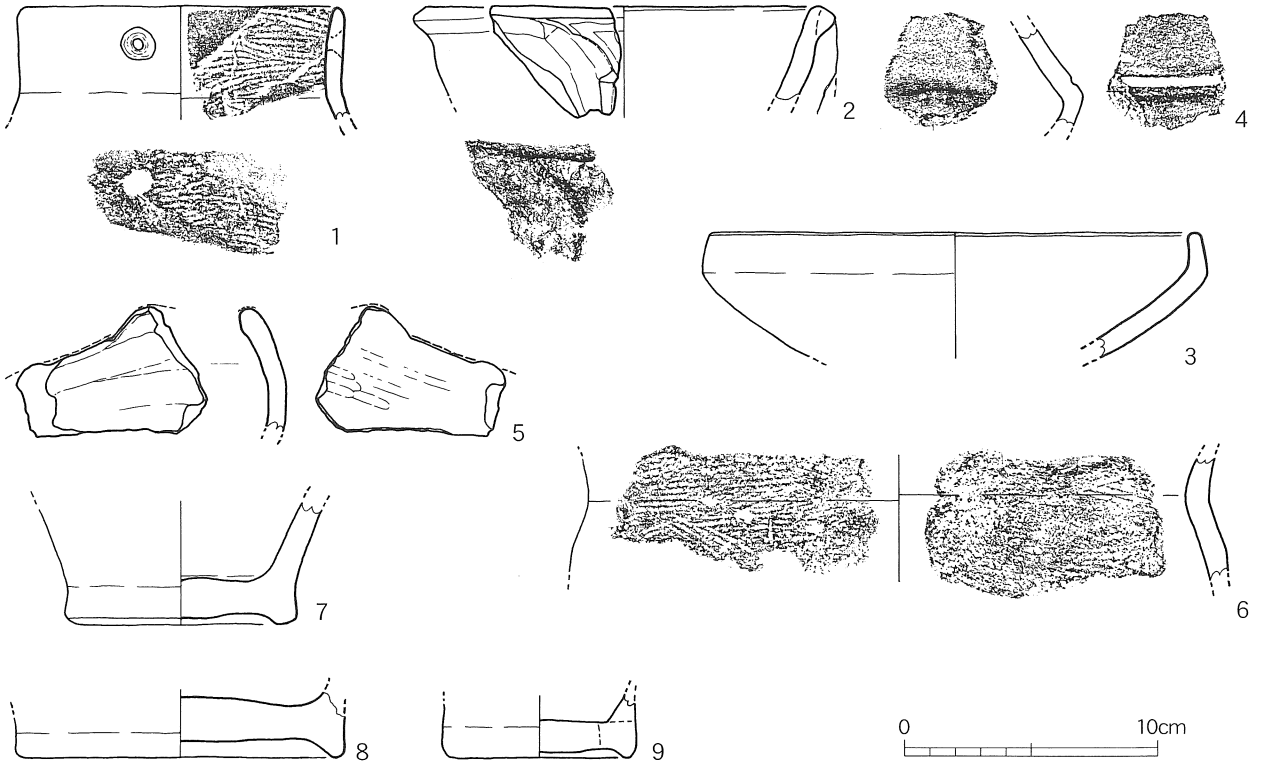


図 40　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図 1（S=1/3）

り出すタイプの平底の底部である。17 は広口壺の口縁部で、10・11 よりも口縁部が外反しているので後出のものであろう。18 は短頸壺で、頸部にはナデにより若干の段が施されている。19 は最大径位に 2 条の削り出し突帯を、その下に貝殻原体による羽状文を施した胴部である。

20 ～ 43 は甕で、口縁部はほとんどが如意形を呈するが、42・43 の口縁端部は矩形を呈する。20・22・25 ～ 27・40・41 は口縁端部に刻目をもつ。20 ～ 24 は胴部上位にナデあるいはハケ状工具の押さえつけによる段を有し、25 は浅い沈線状の段を有する。31 ～ 35・37 は頸部下にヘラ描き沈線文を 1 条、36・38 は 3 条のヘラ描き平行沈線文を、39 は 4 条のヘラ描き平行沈線文を、40 は先端に丸みのある工具による 5 条の平行沈線文を施している。

44 は端部が菱形を呈し、外面に 1 条のヘラ描き沈線文を施した口縁部である。45 は小型の鉢で口縁端部は L 字状に外部へ引き延ばされ平坦面を有する。内外面とも粗雑なナデによる指押さえの凹凸が著しい。

46 ～ 77 は底部である。46 ～ 64 はすっきりした平底、65 ～ 71 は底部から胴部への立ち上がる部位がナデによりくびれている平底、72 ～ 74 は分厚い平底、75 ～ 77 は上げ底のものである。51 は中央部の割れ口が丸みをおびており、焼成後の底部穿孔と思われる。また底面の小穴は粘土内に混入していた物が焼成時に熔けてできたものか。58 の底面には指ナデによるドーナッツ状の凹みができている。

78 は唯一出土の高坏で、脚柱部である。接合部には円筒状の粘土が充填されている。

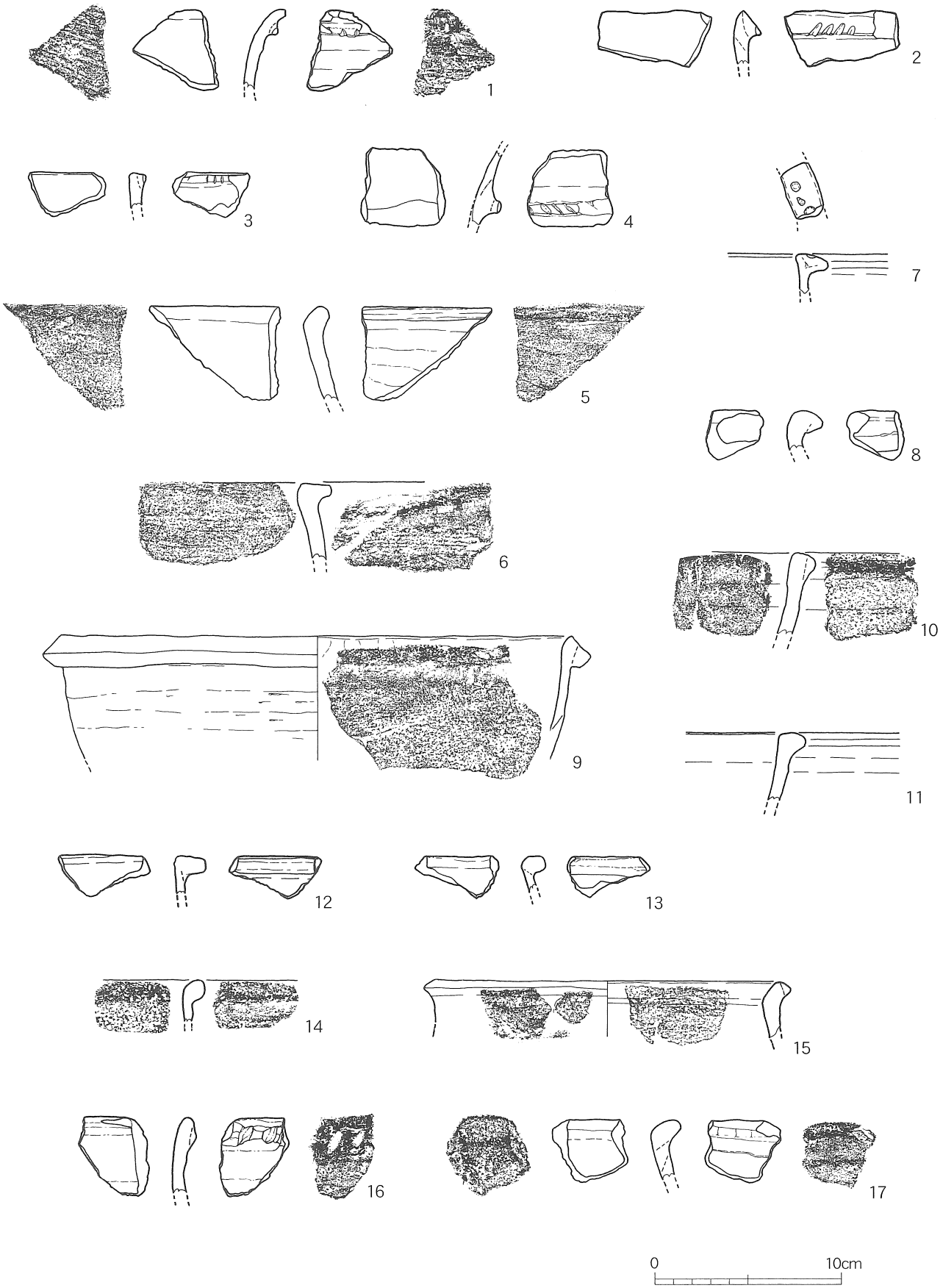


図41　遺構外出土遺物(突帯文土器)実測図2(S=1/3)

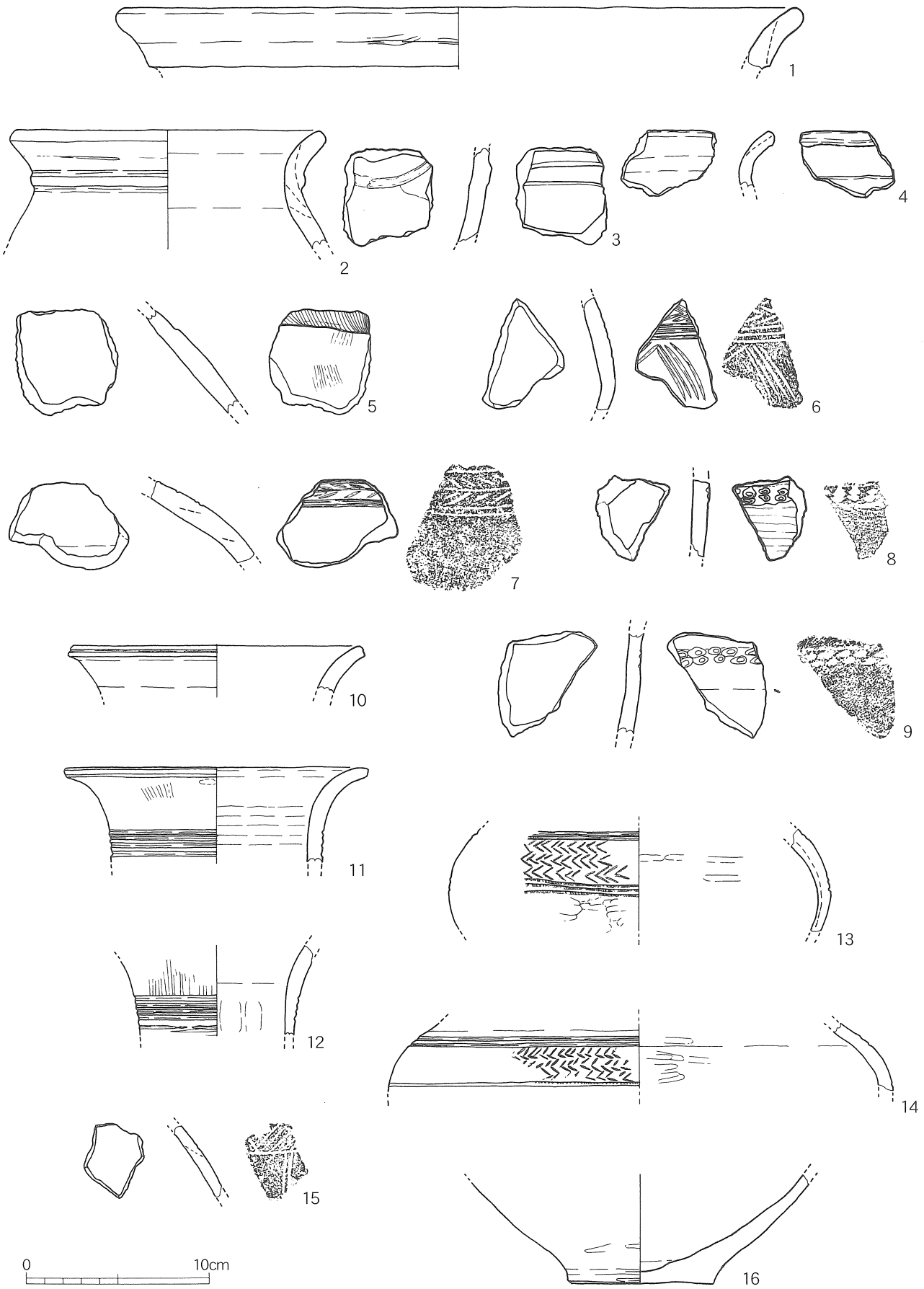


図 42　遺構外出土遺物(弥生土器 1)実測図 3(S=1/3)

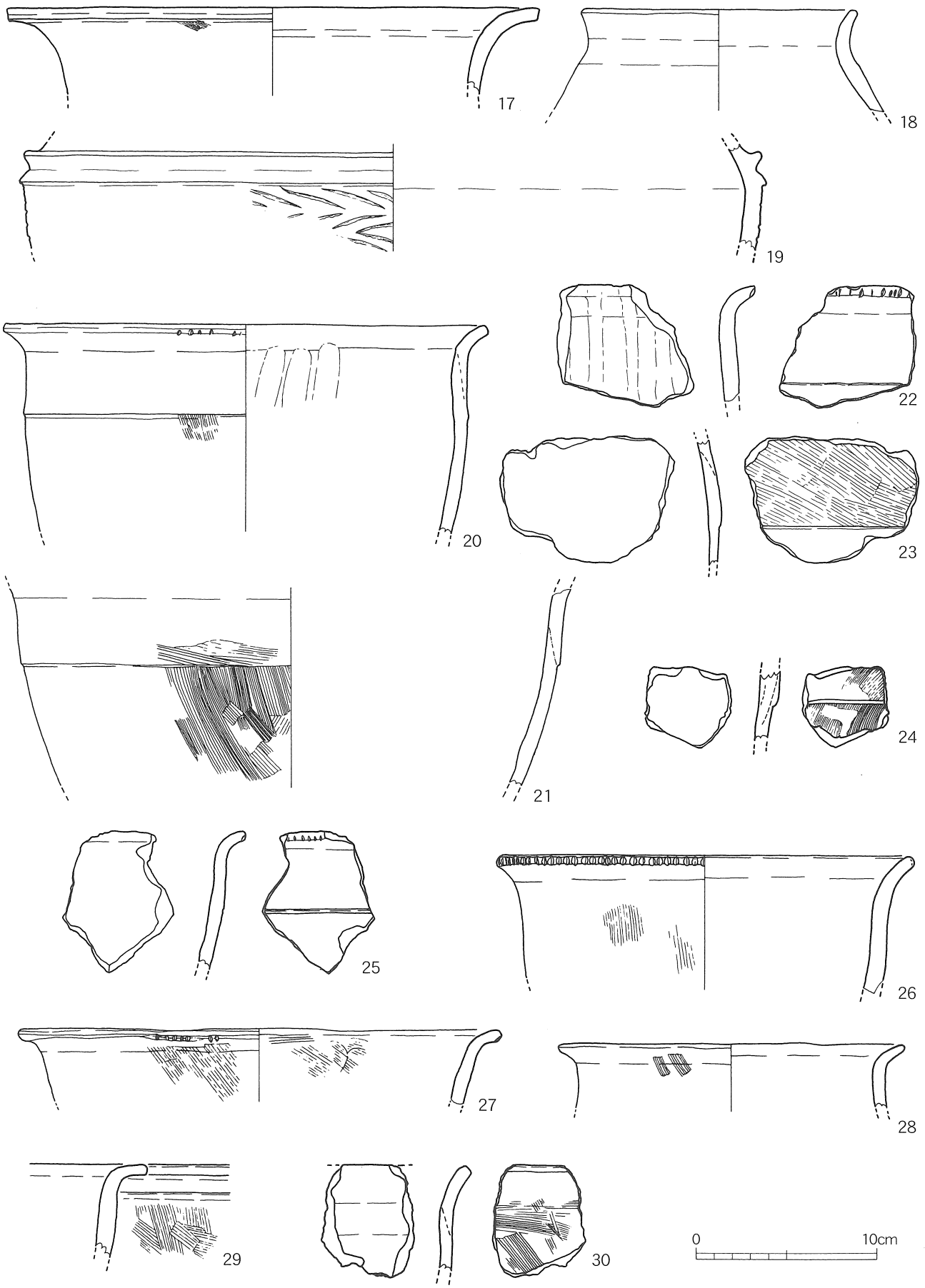


図 43　遺構外出土遺物（弥生土器 2）実測図 4（S=1/3）

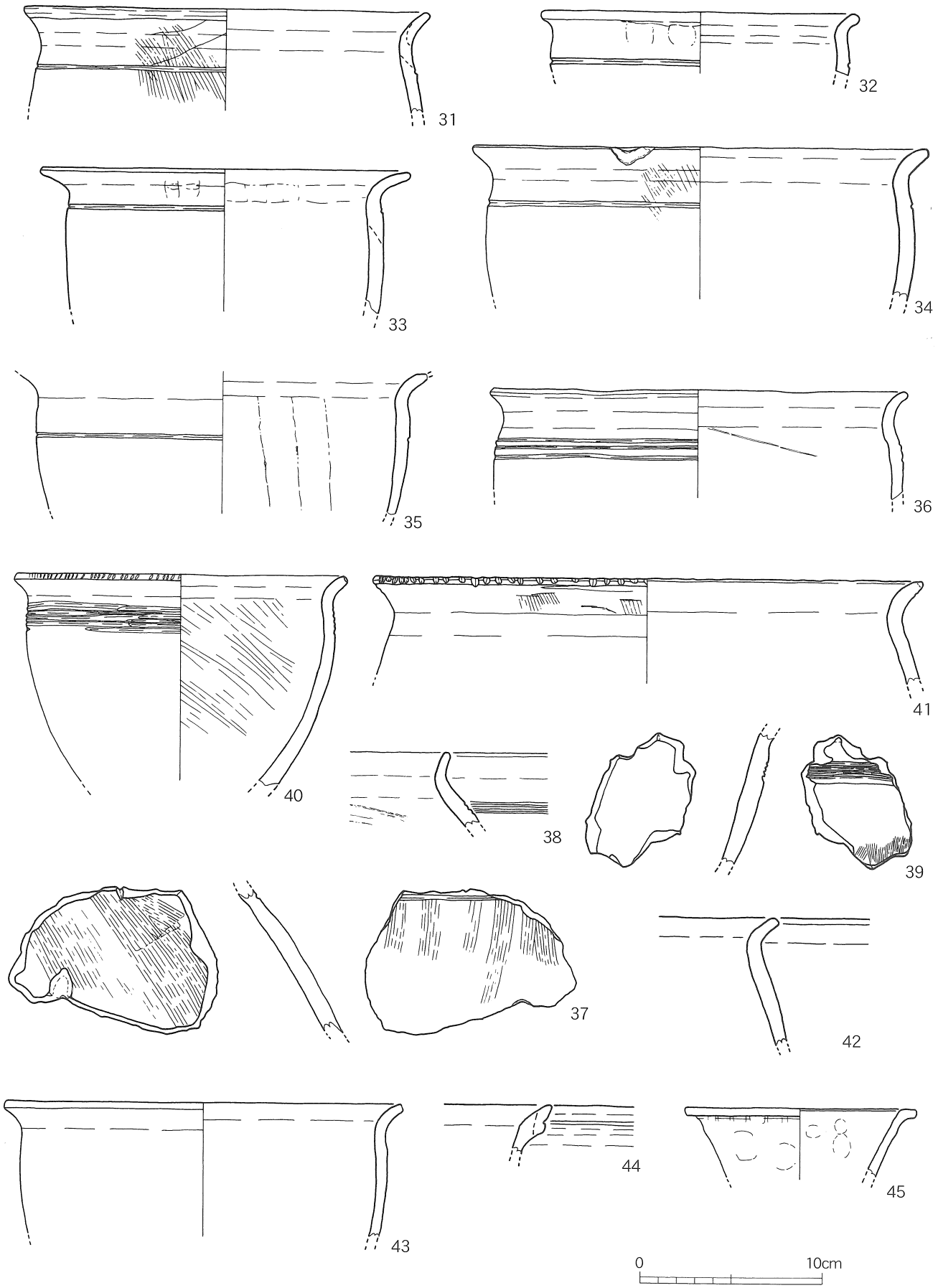


図 44　遺構外出土遺物（弥生土器 3）実測図 5（S=1/3）

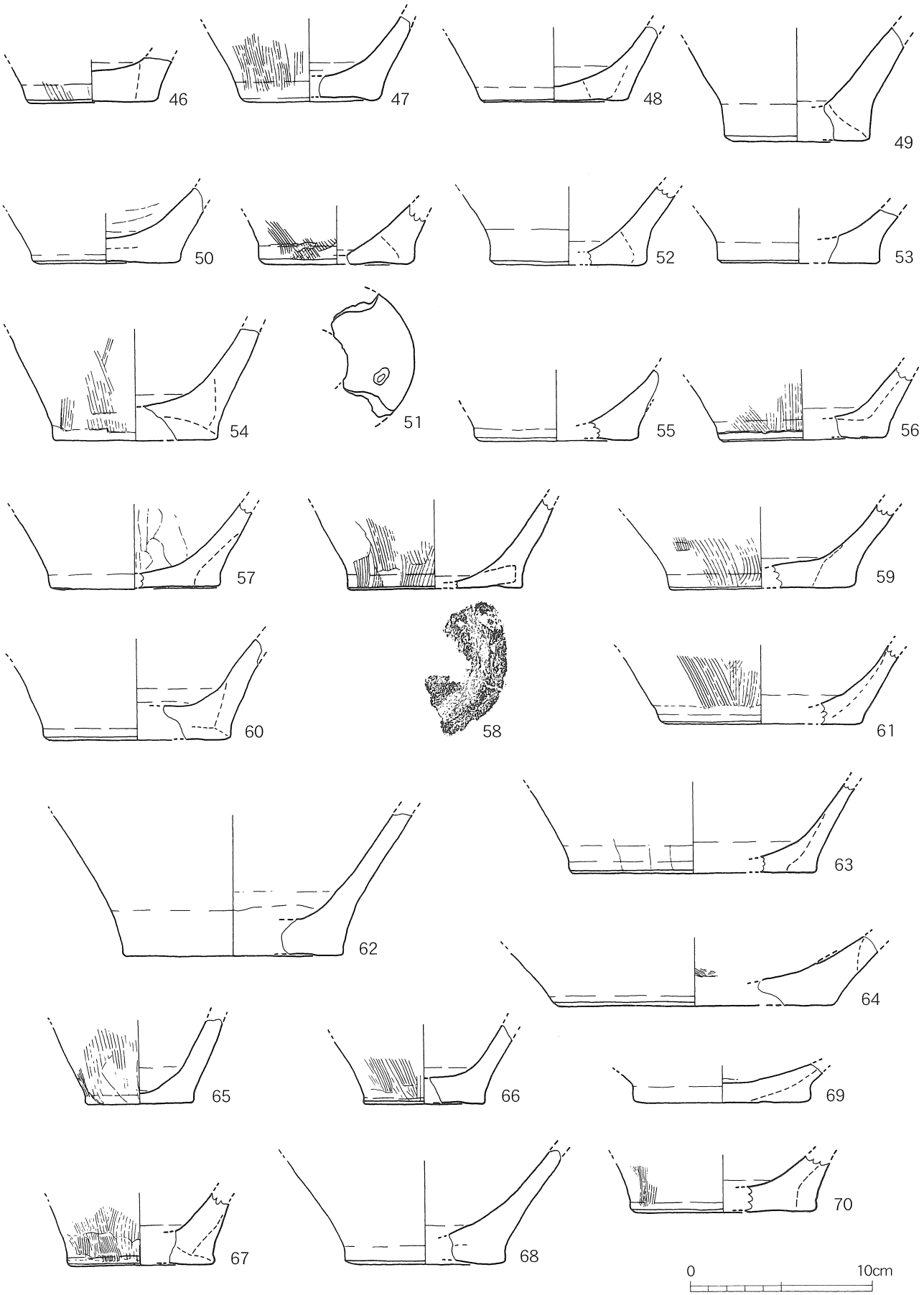


図 45　遺構外出土遺物(弥生土器 4)実測図 6(S=1/3)

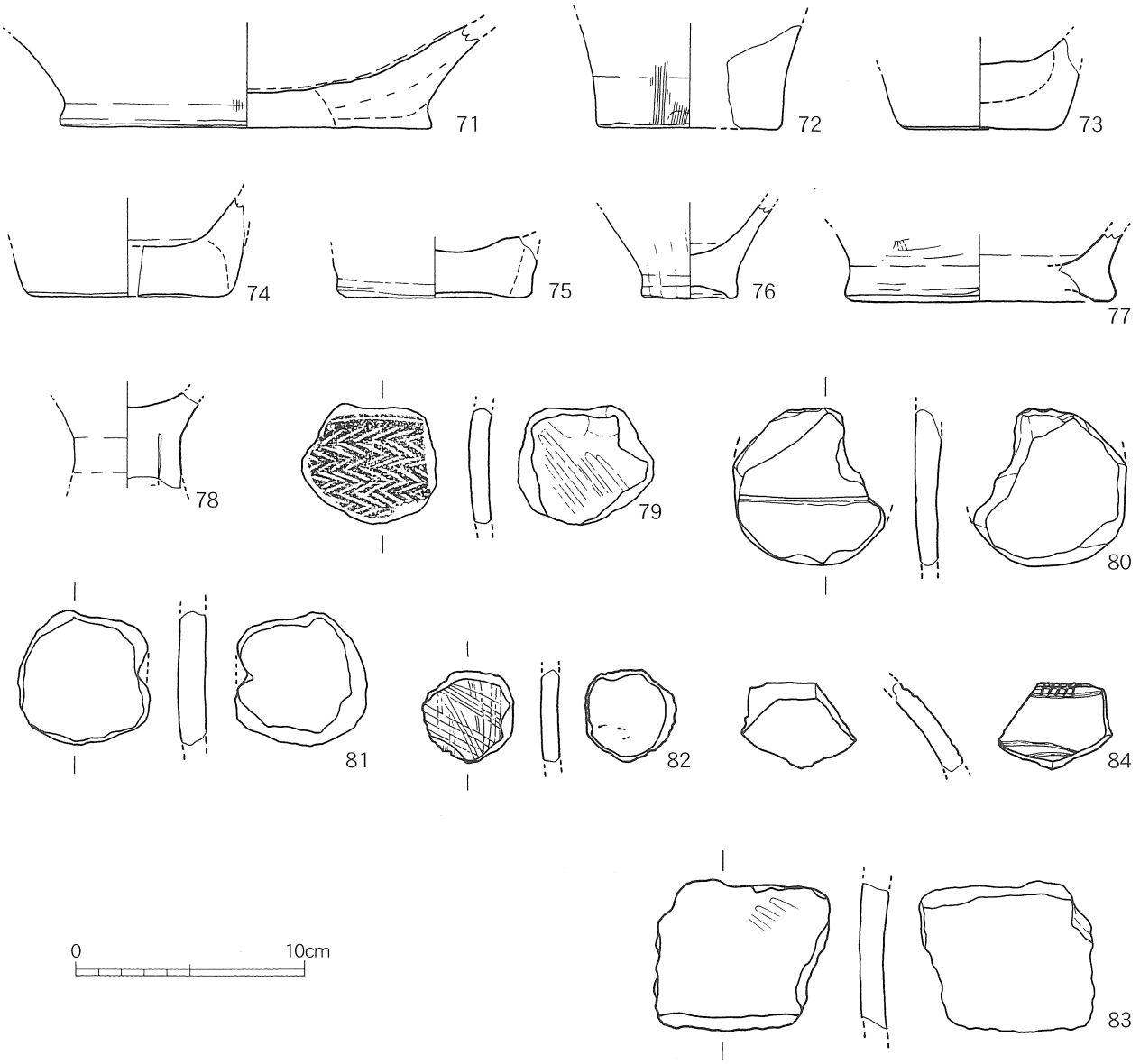


図46　遺構外出土遺物(弥生土器5)実測図7(S=1/3)

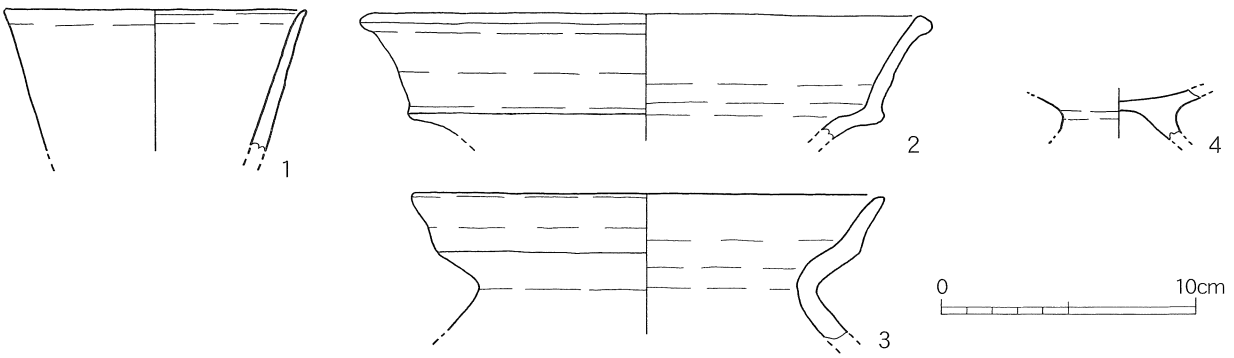


図47　遺構外出土遺物(古式土師器)実測図8(S=1/3)

79～83は土器を転用した土製円盤である。79～81は前期土器を、82・83は中期土器を利用している。

84は唯一出土の塩町式土器で、特有の刻目と平行沈線の組合せ文を施している。

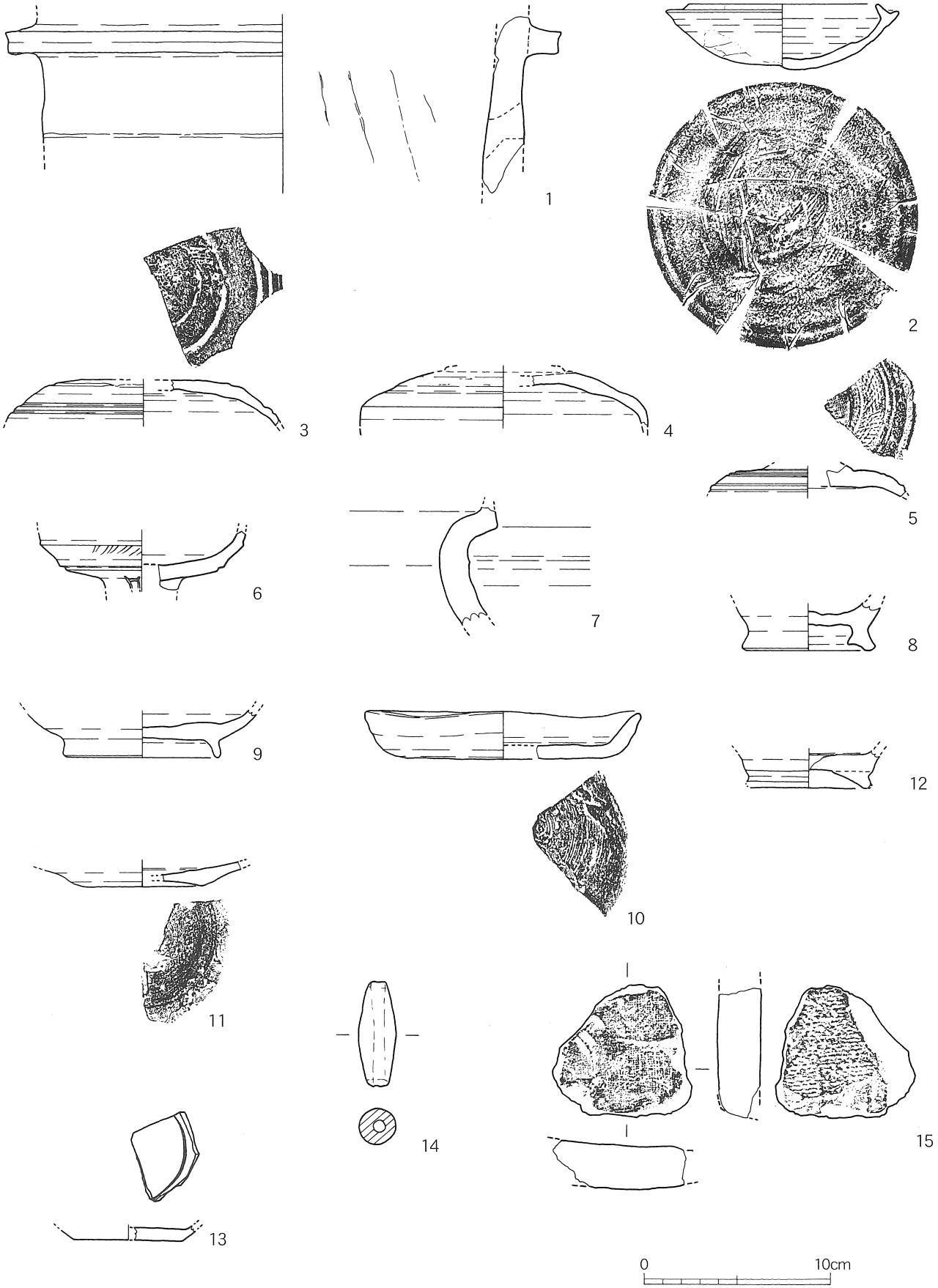


図48　遺構外出土遺物（その他）実測図9（S=1/3）

※スクリントーンは磨滅痕

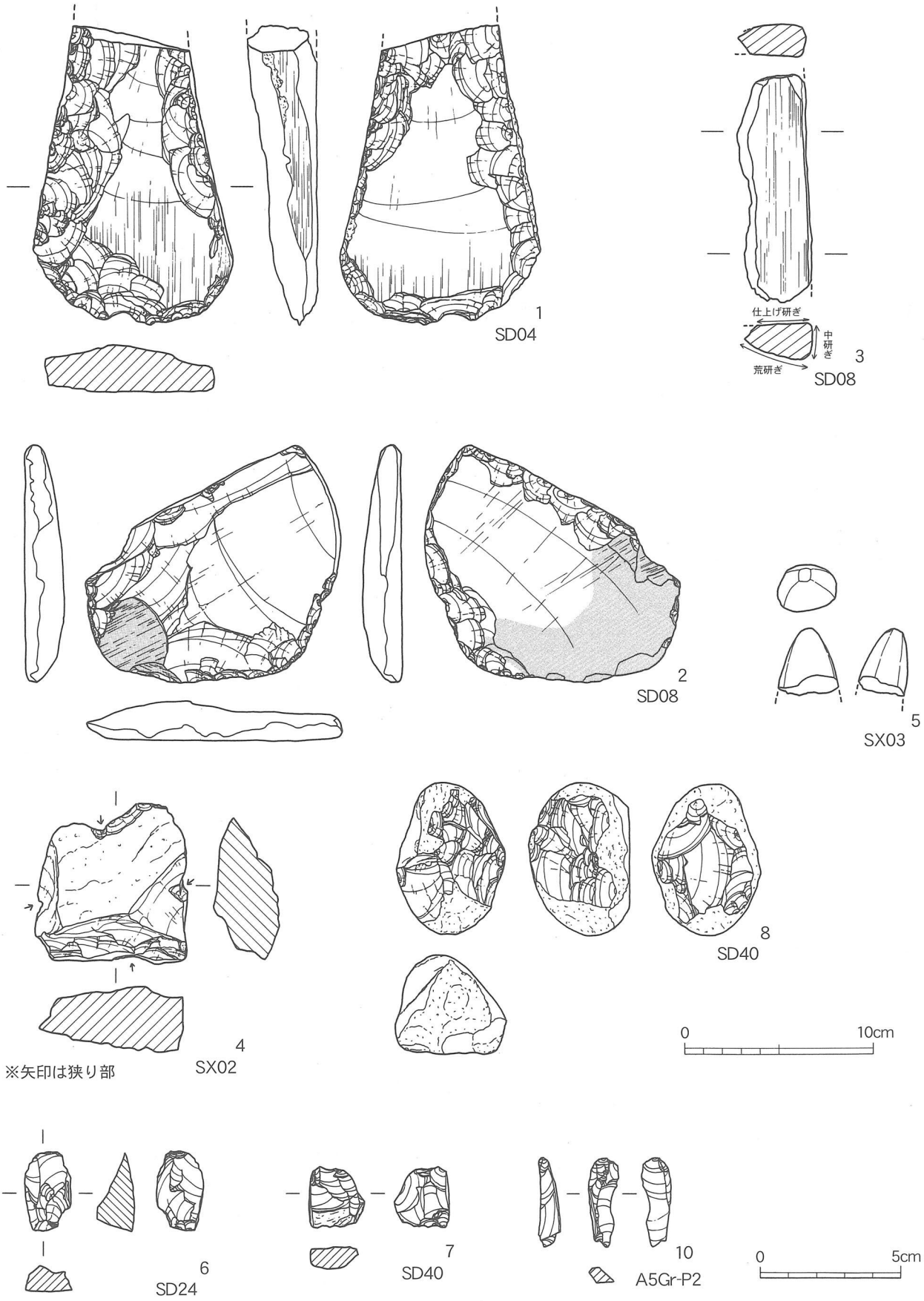


図 49　遺構内出土石器実測図 1(1 ～ 5・8 S=1/3　6・7・10 S=1/2)

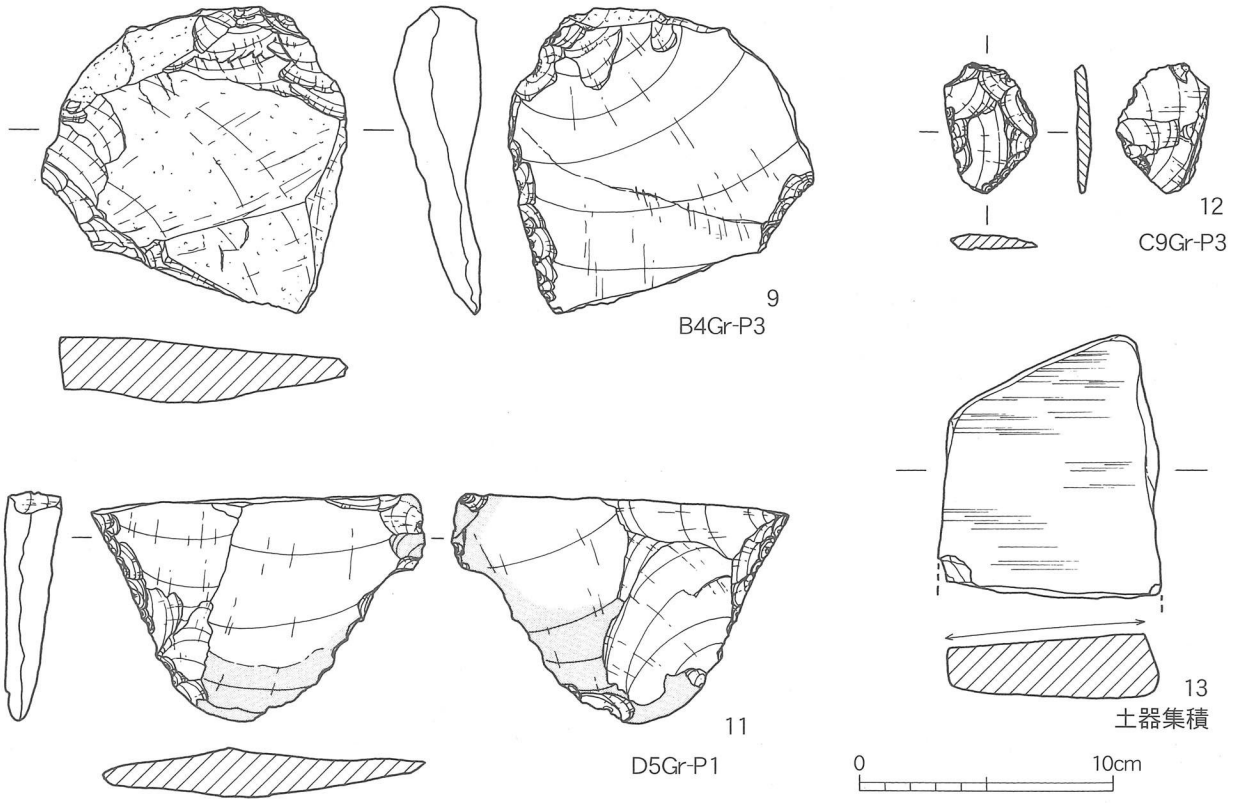


図 50　遺構内出土石器実測図 2(S=1/3)

【古式土師器】(図 47)

1 は直口壺の口縁部である。器壁が薄く口縁端部は尖るように延びている。2・3 は甕の口縁部で、2 はしっかりした複合口縁で口縁端部は外へ屈曲して平坦面をもつ。3 は複合口縁が退化途上のもので突出部が不明瞭で口縁面長が短い。3 の破面には外面～内面に連続した焼成状況が観察される。焼成時破砕のものと思われる。4 は低脚坏の接合部である。

【その他の遺物(石器以外)】(図 48)

1 は円筒埴輪で、1.5cm 長の明瞭なタガが付いている。

2 ～ 11 は須恵器で、2 ～ 4 は蓋坏の 2 は身で 3・4 は蓋である。2 はかえりが短く底部調整も粗雑に成されている。5 は前 3 者より小振りなことと外面に文様(回転による連続刺突文)が施されているため壺の蓋と解釈している。6 は高坏の坏部で、ヘラ状工具による連続刺突文、底部と体部の境目に太めの 1 条の沈線文を施す。接合部には残存する透かしの痕跡がみられる。7 は大甕の口縁部、8 は断面がエの字状を呈する踏ん張りがしっかりした高台部である。9 は高台付碗で、やや外側に高台を付けている。10・11 は皿で、10 はやや厚手の口径と底径の差が小さく胴部は外反した立ち上がりをみせるものである。11 はやや薄手の底部から外広がりに胴部が立ち上がるもので、内面は磨滅している。

12 は土師器で、高台付坏の底部である。外踏張りの高台部が付いている。

13 は白磁の無高台の皿である。緑がかった灰白色を呈する釉薬がほぼ全体に(底面は塗られたというより垂れ下がってかかったという感じ)施されている。

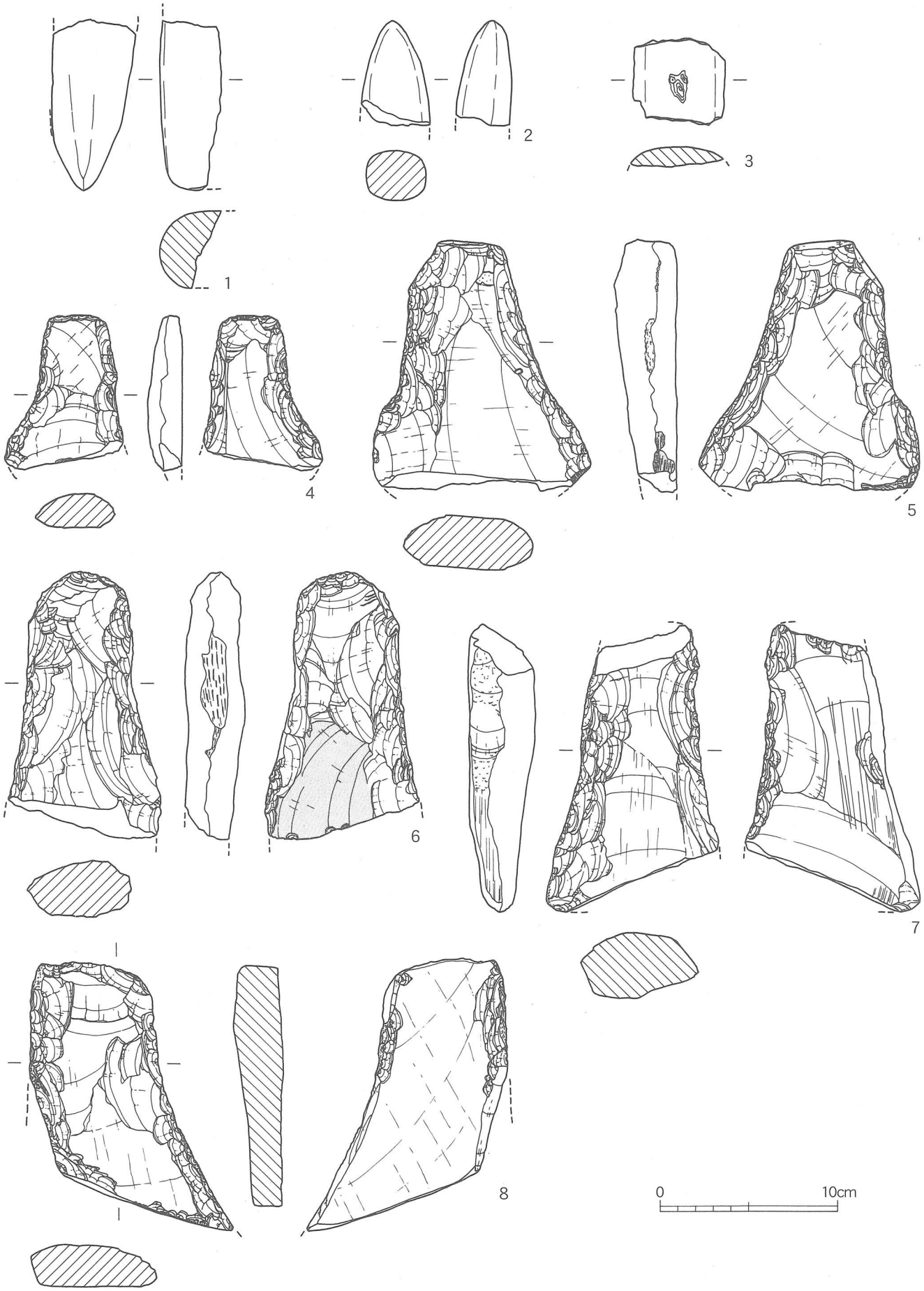


図51　遺構外出土石器実測図1(S=1/3)

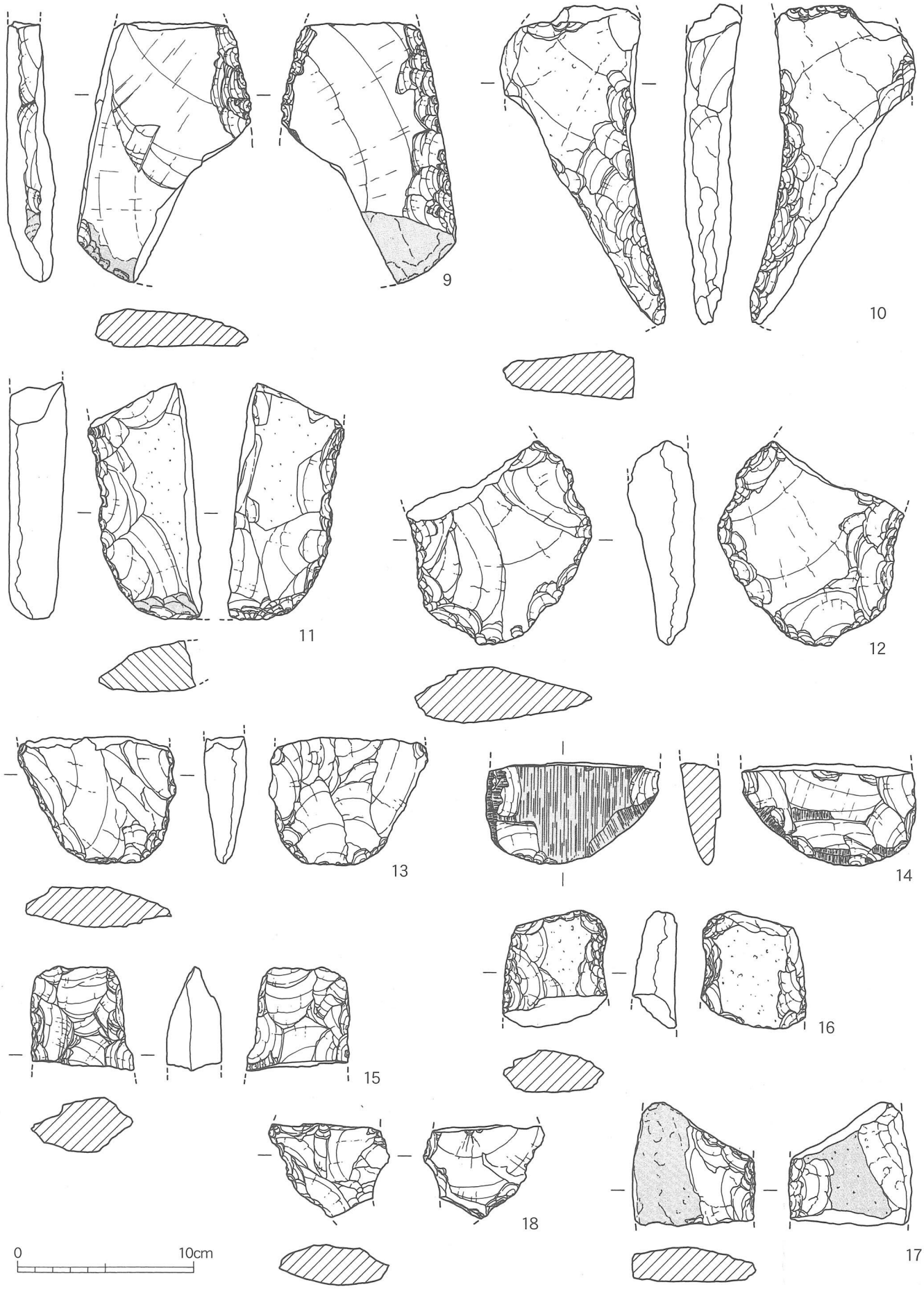


図 52　遺構外出土石器実測図 2(S=1/3)

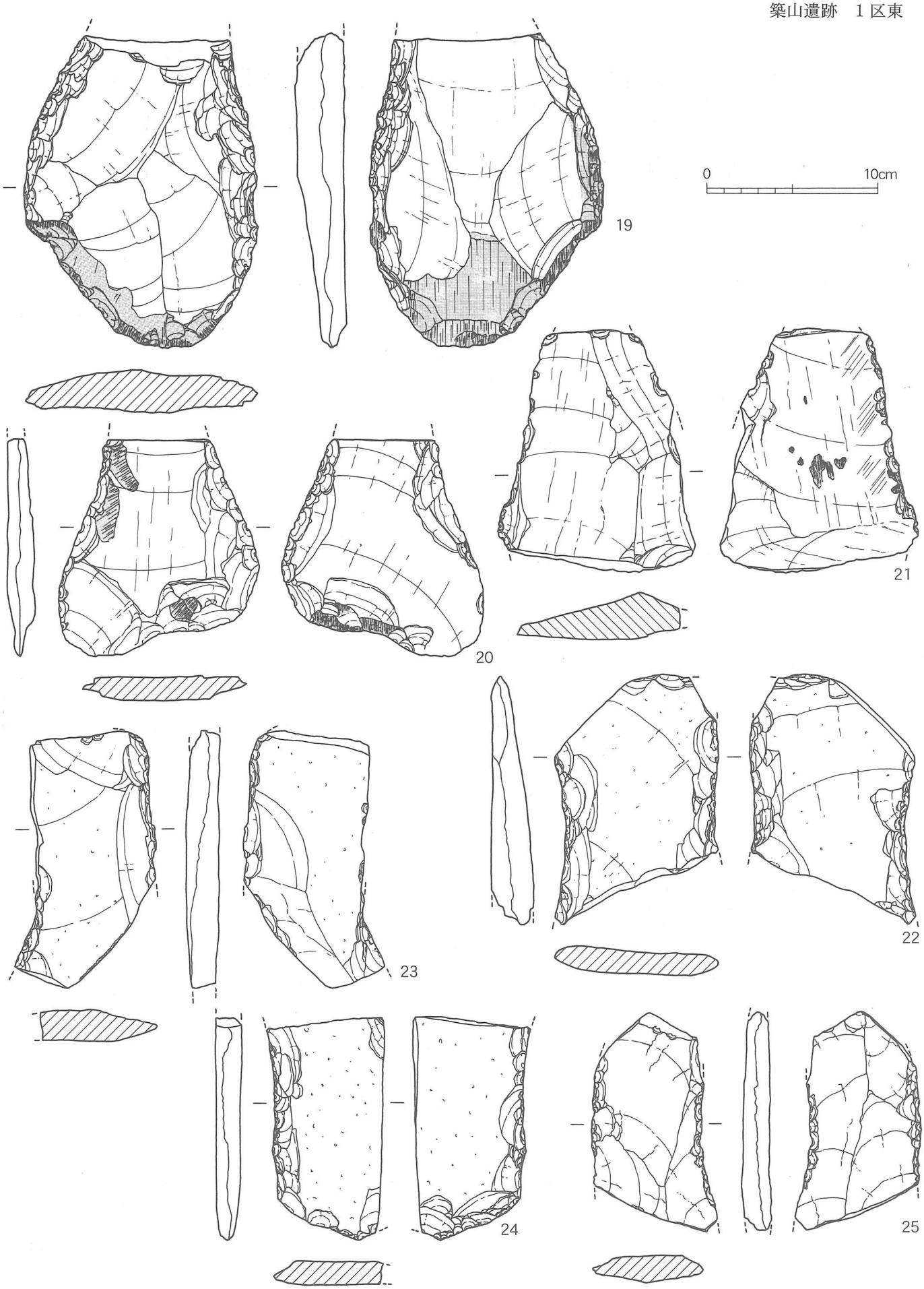


図 53　遺構外出土石器実測図 3(S=1/3)

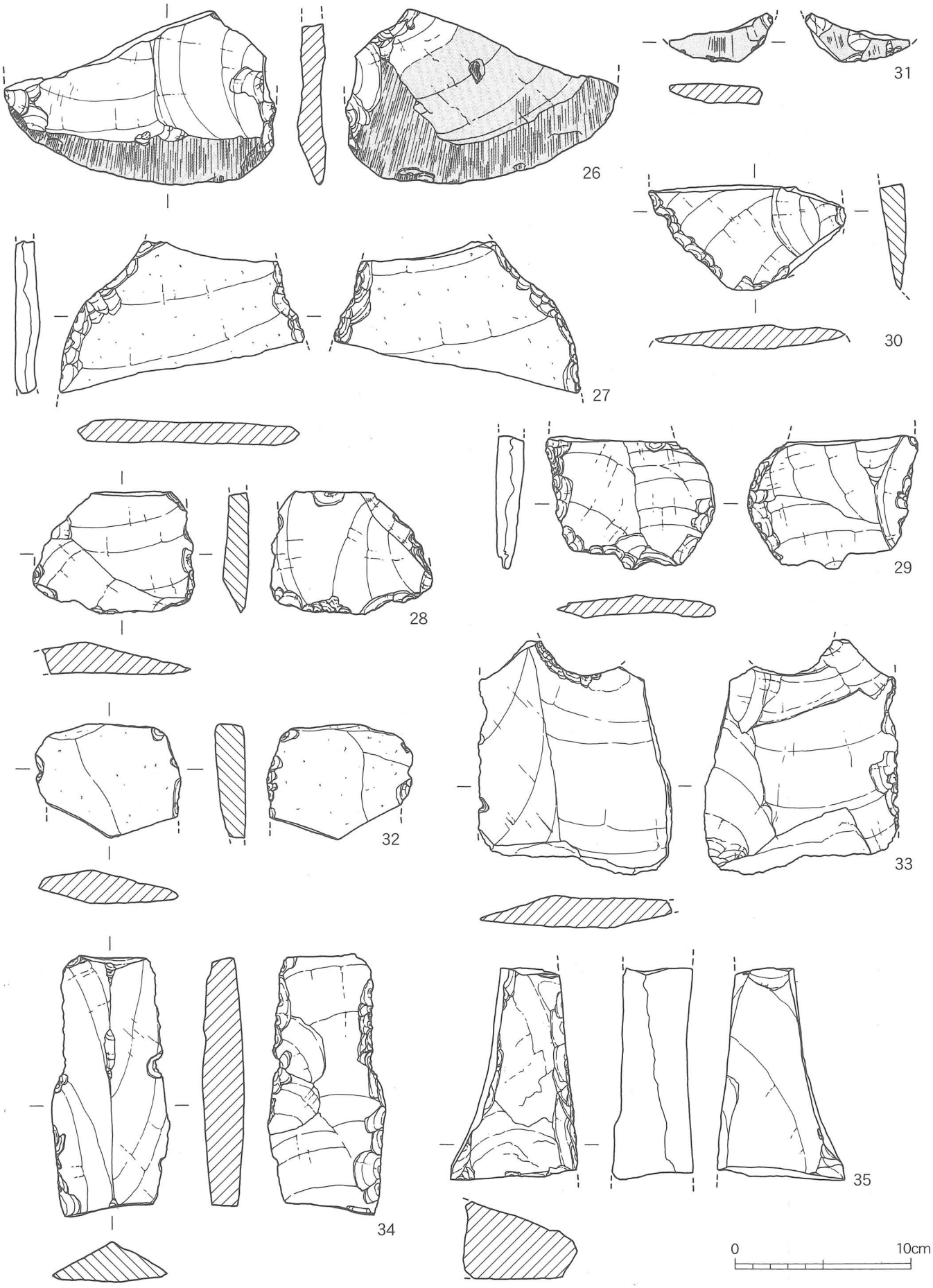


図 54　遺構外出土石器実測図 4(S=1/3)

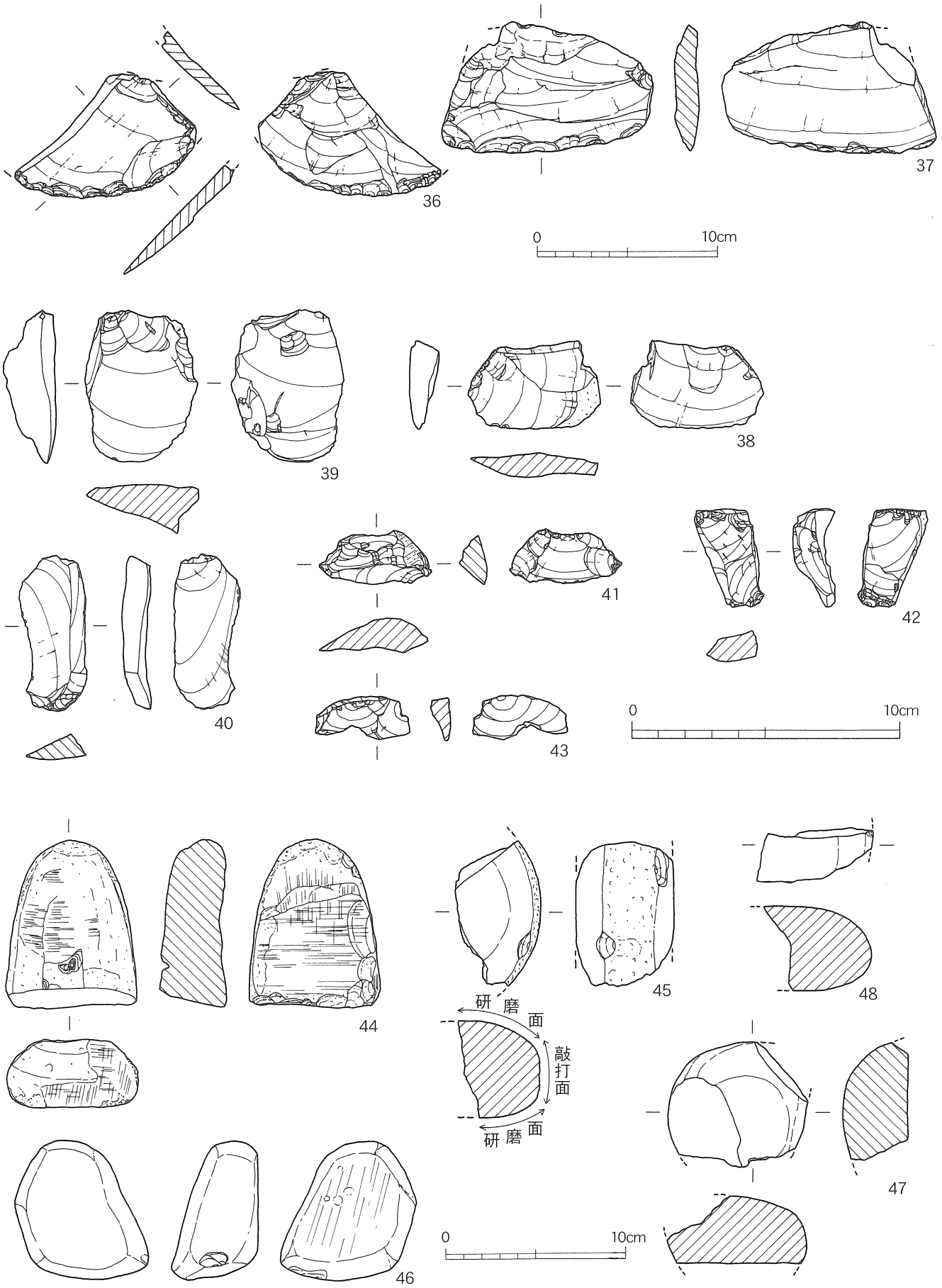


図 55　遺構外出土石器実測図 5(36・37・44 ～ 48 S=1/3　38 ～ 43 S=1/2)

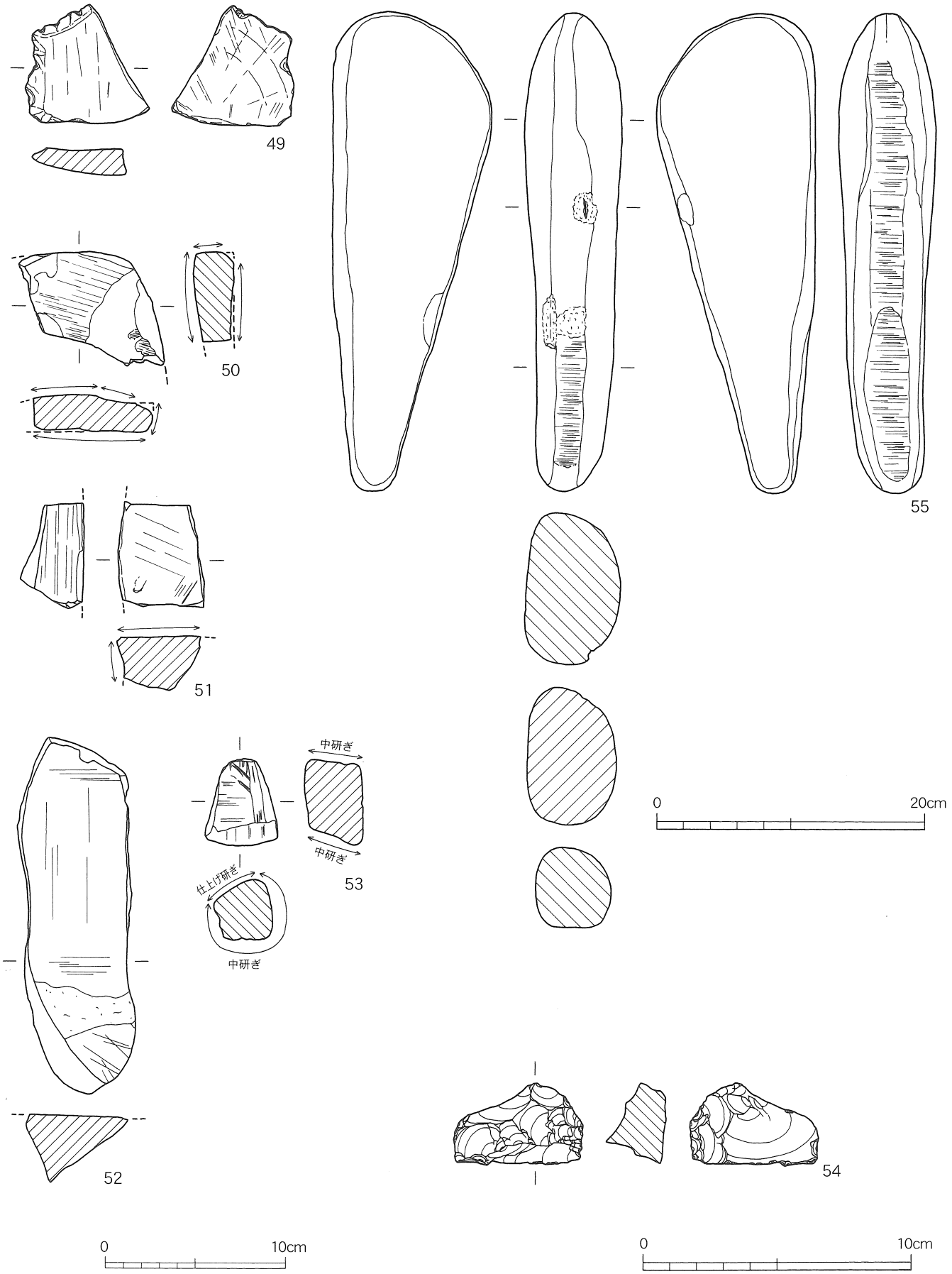


図 56　遺構外出土石器実測図 6(49 ～ 53 S=1/3　54 S=1/2　55 S=1/4)

14は当該調査で唯一出土した土錘である。第3層上面遺構を調査中に排土捨て場から見つかったものなので、第3層堆積以後中世前半期までのものと考えられる。やや細身の紡錘形を呈する。

15は1区東からは唯一出土の布目瓦の破片である。焼成不良の須恵質のものである。

【石器】(図51～56)

1～3は磨製石斧で、3点とも太型蛤刃石斧の破片で、1・3は塩基性片岩製、2は玄武岩製である。1は刃部、2は基部、3は体部の破片で中央に敲打痕が観察される。

4～32は打製石斧、33は打製石斧の可能性があるもの、34・35は打製石斧の未成品で、全て流紋岩～安山岩製である。4～18は厚手で調整剥離が中央付近まで行われているもの、19～33は薄手で調整剥離が縁辺に行われているものである。完形品は皆無であるため詳細な形態分類は困難であるが、4・5・8のような体部中央から屈曲して刃部が幅広となるタイプ、6・7・10・20・22・23のように体部中央から屈曲して裾広がりとなるタイプ、9・21・25のように屈曲せず裾広がりとなるタイプなどに分類できる。特徴的なのは刃部で、残存している刃部は、20のようにくびれているもの以外は、強弱はあるが全て尖頭型である。また14・19・21・26・31には顕著な磨滅痕が残存している。

36～40はスクレイパーで、36は当該調査で出土した唯一のサヌカイト製、37・38は流紋岩～安山岩製、39・40は玉髄製である。エンド及びサイドを利用したものである。

41～43は黒曜石製の41・42は加工痕ある剥片、43は剥片である。

44～48は磨石及び敲石で、45～48は円礫を利用しているが、44はスタンプ形に成形されたもので、下部の平たい面を使用している。

49～53は砥石で、49～51は残存部分全面に研磨痕が観察される。52・53は1区西に隣接するグリッド内からの出土であること、刃部痕が観察されることなどより前者より後出のものであろう。

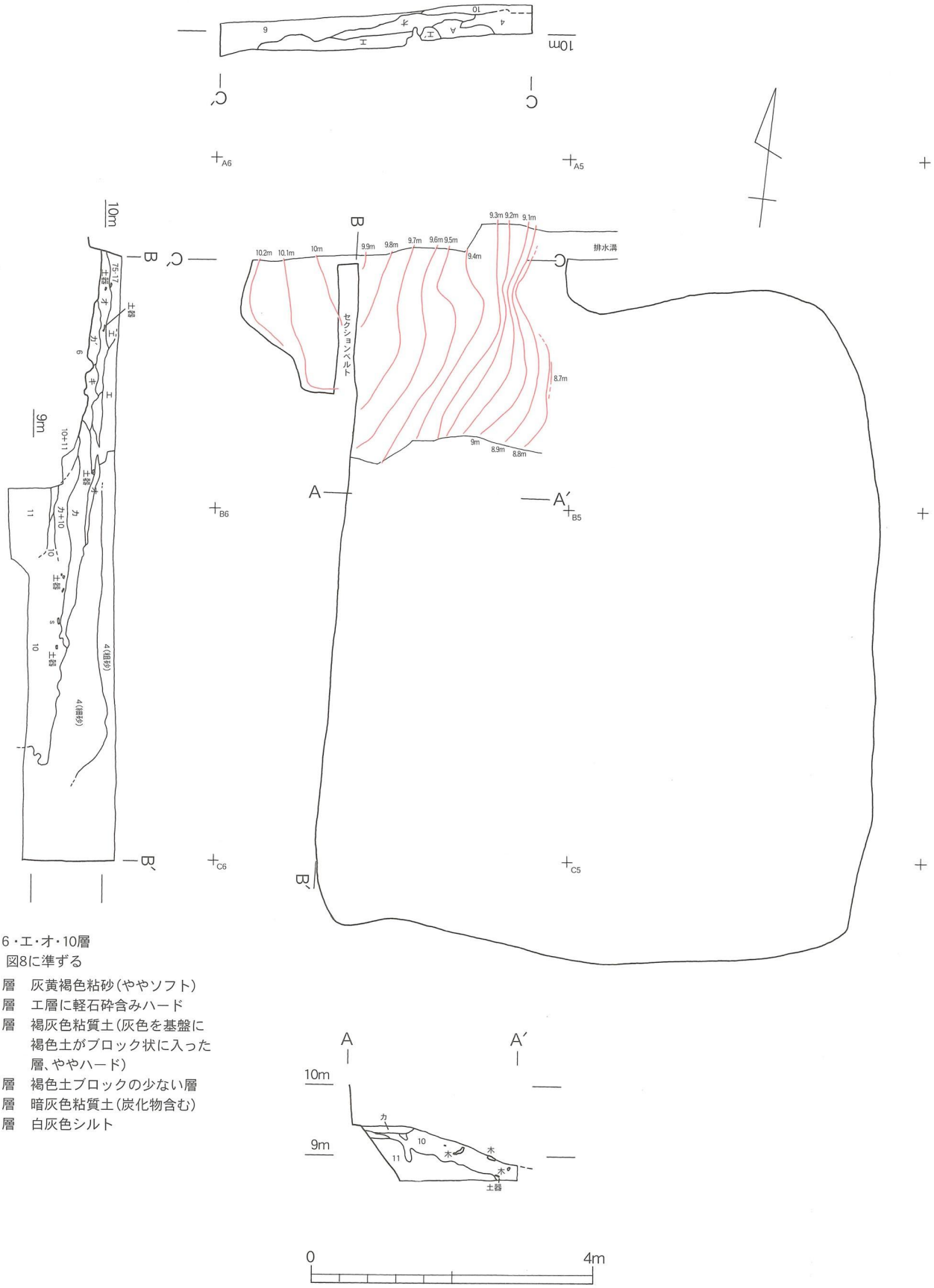
54は玉髄製の石核である。

55は玄武岩質貫入岩のハンマー形を呈する石器である。出土状況が明らかな石器で、図39に拡大図として1/40で掲載した。遺構には伴わないが地山に、細長く研磨により平たくされた面を底面(裏面)にし直立した状況で出土した。上面には微妙な鞍部が敲打によって作り出されたように観察される。これは中部地域を中心に縄文時代晩期に出土する御物石器の形骸化したものではないかと考えられる[13]。

縄文集中地の調査(図57～78)

調査状況

A6Gr内第4層(4層と6層の境目)上面で、遺物の集中する箇所を検出した。当初は当概地の直ぐ北側にある調査区北壁面土層の上半部分のみ(エ層)しか確認しておらず、深い落ち込み遺構が存在するものと考えていた。遺物の集中する箇所はエ層の広がる部分で平面形態としては楕円形を呈していた。遺物は、第3層包含遺物及び第4層上面検出遺構から出土する遺物のうち最も古い縄文・弥生移行期の遺物よりも古い、縄文後期初頭のもので、なぜこのような古い遺物を出土する遺構が存在するのか謎であった。



4・6・エ・オ・10層
図8に準ずる

A 層　灰黄褐色粘砂(ややソフト)
エ′層　エ層に軽石砕含みハード
カ 層　褐灰色粘質土(灰色を基盤に褐色土がブロック状に入った層、ややハード)
カ′層　褐色土ブロックの少ない層
キ 層　暗灰色粘質土(炭化物含む)
11 層　白灰色シルト

図 57　縄文集中地調査範囲平面図・土層断面図(S=1/80)

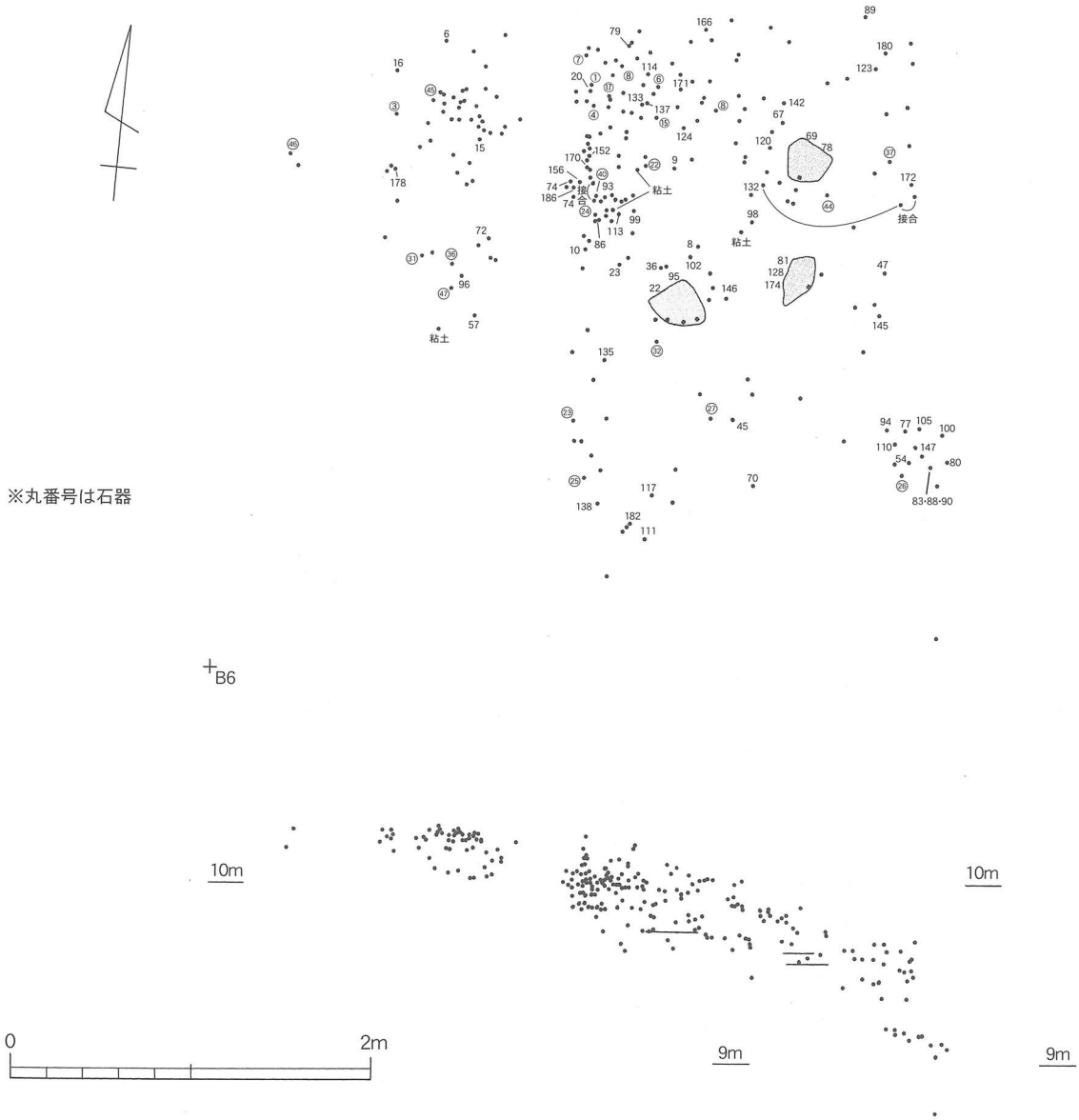


図 58　縄文集中地遺物出土状況図(S=1/40)

その遺構と考えられたプランの中軸に南北セクションベルトを設定し、調査区北壁面沿いの排水溝側に東西セクションベルトを残して掘削を開始した。南北セクションベルトから西側ではエ層の下から6層が検出されるが、東側ではエ層下からオ層が検出された。ここで東西土層及び調査区北壁面土層下半部を確認すると、6層が東へ傾斜して4層の下へオ層・10層とともに入り込む様相が明らかとなった。4層がこれらの上に載っている状況を明確にするため、南北セクションベルトを第4層が6層から4層へ完全に移行するBGrラインまで南へ延長させ、4層も掘削開始した。予想通り4層はオ層・10層の上に載った厚い堆積砂であった。

これらの土層観察を島根県立三瓶自然館の中村唯史氏に行ってもらった。その結果、4層は約3,600年前の三瓶山噴火による火山灰の土砂が神戸川を流れて堆積したいわゆる第1ハイカ層に対応するもので、4層下は縄文後期、4層上はそれ以降の時期でなくてはならない、ということであった。そのため第4層から上の層は第1黒色土層、4層は第1ハイカ層、オ・カ・キ・10層は第2黒色土層に

図 59　縄文集中地出土遺物実測図 1(S=1/3)

対応することとなり、6 層は旧地盤と考えられた。エ層は 4 層の上下に入り込んでいるので、おそらく漸移層と考えられる。今回第 2 黒色土層が検出されたのは、旧地盤の 6 層が第 1 ハイカ層と同レベルに残存しており、たまたま遺物包含層が頭を覗かせたためと考えられる。

これらの結果をふまえて、A6Gr 内で南北セクションベルトから東へ地盤を追っかけるために掘り下げを行った。図 57 の平面図北西に等高線を入れた部分までを手掘りで、6 層上面標高 8.7m まで下げた。その遺物出土状況を図 58 に掲載した。西寄りの空白地は南北セクションベルトである。これ以東は急激に地形が下がるため、地盤のゆるい 4 層が崩壊する危険性があるため手掘りは中止とした。また第 2 ハイカ層を確認するため、A~C-5・6Gr 内に重機で掘削を行った。図 57 の平面図に囲った範囲である。第 4 層上面から約 3m の深さまで掘削したが、10 層上面が粗砂の水の流れ道となっており崩れ易く危険なため、第 2 ハイカ層まで確認することはできず埋め戻した。しかし 6 層地盤は東と南へ地形が傾斜していく様相が判明した。

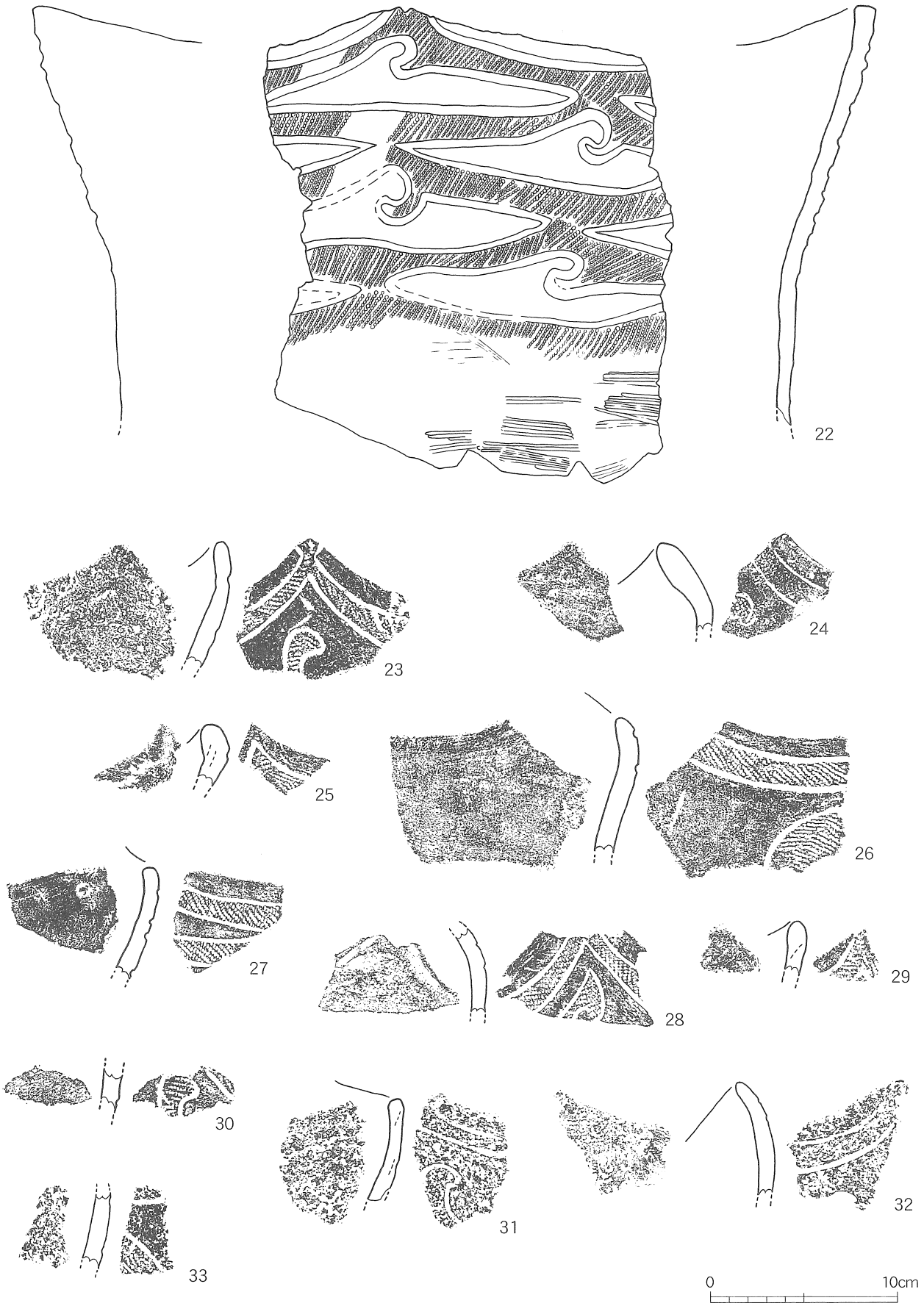


図 60　縄文集中地出土遺物実測図 2(S=1/3)

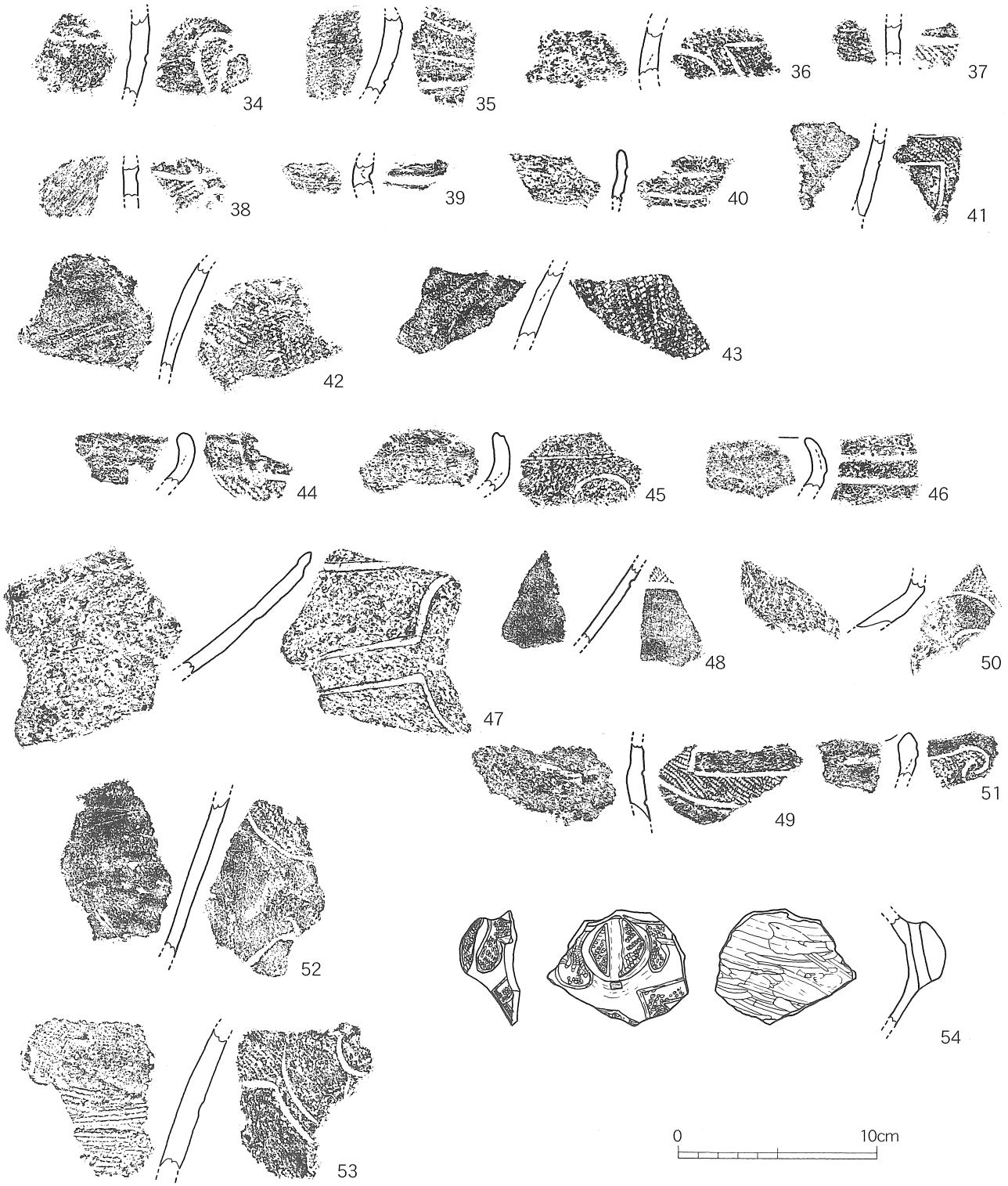


図 61　縄文集中地出土遺物実測図 3（S=1/3）

出土遺物

漸移層があるため混入品と考えられる突帯文土器以外で、出土した土器は、縄文後期初頭の中津式土器の範疇である。有文土器を図 59 ～ 61 に、無文土器を図 62 ～ 70 に、底部を図 71 に、その他を図 72 に掲載した。7 のように有文土器の下半部が無文部となるものがあるため、無文土器には有文土器を含んでいる可能性は十分にあるが、現状況で判断した。文様の基本形は磨消縄文で、J 字文・区画文などが施され、沈線のみの文様もある。深鉢の、口縁部形態は波状、水平口縁のものがあり、

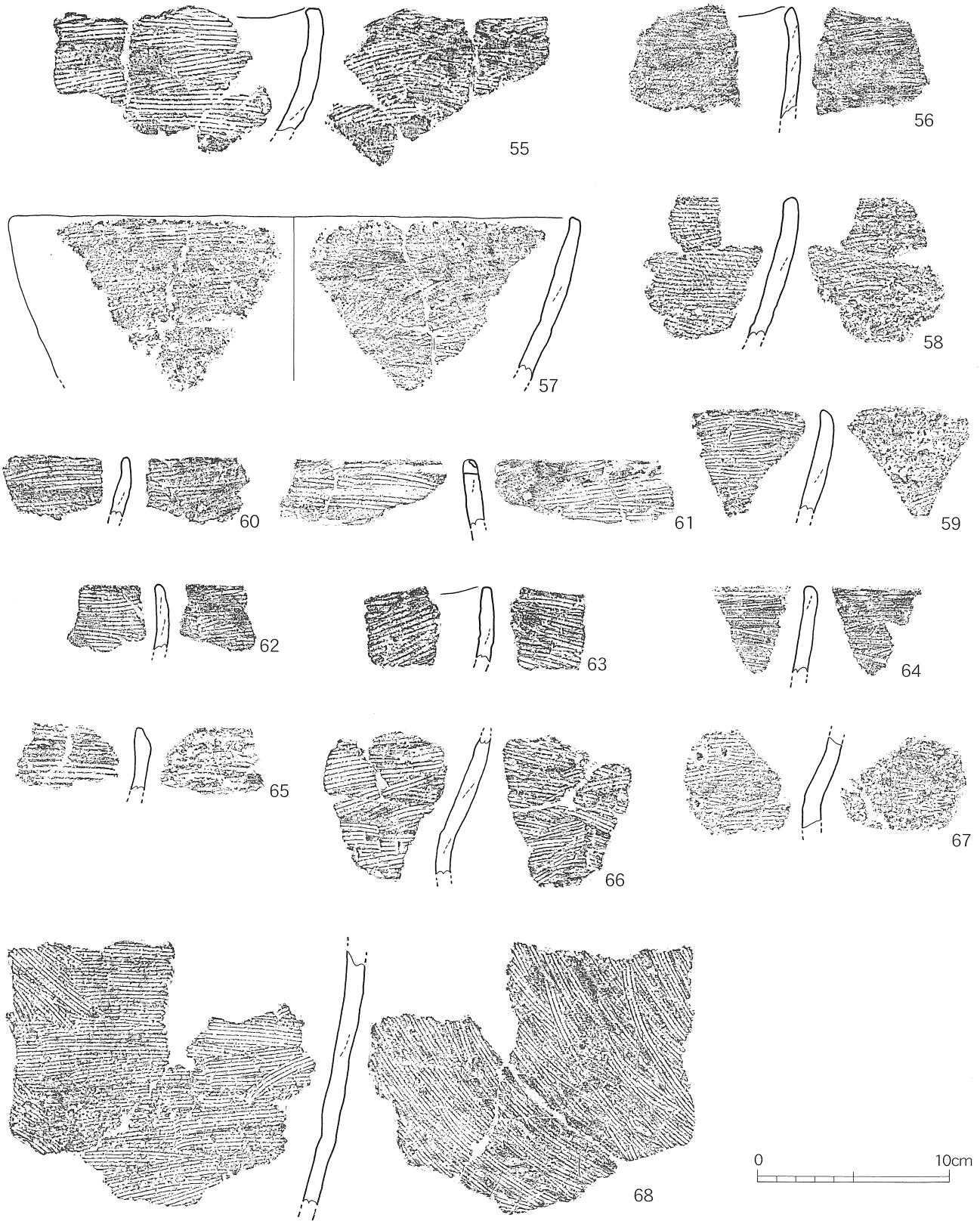


図62　縄文集中地出土遺物実測図4(S=1/3)

体部形態は頸部が大きく湾曲するキャリーパー形、バケツ形、筒形などのものがあり、底部は上げ底、軽く窪ませた凹底、平底のものがある。浅鉢の、口縁部形態は有文のものには波状口縁もみられるが水平口縁のものが多く、体部形態は皿形、内湾するボウル形のものがあり、底部は平底が一般的なよ

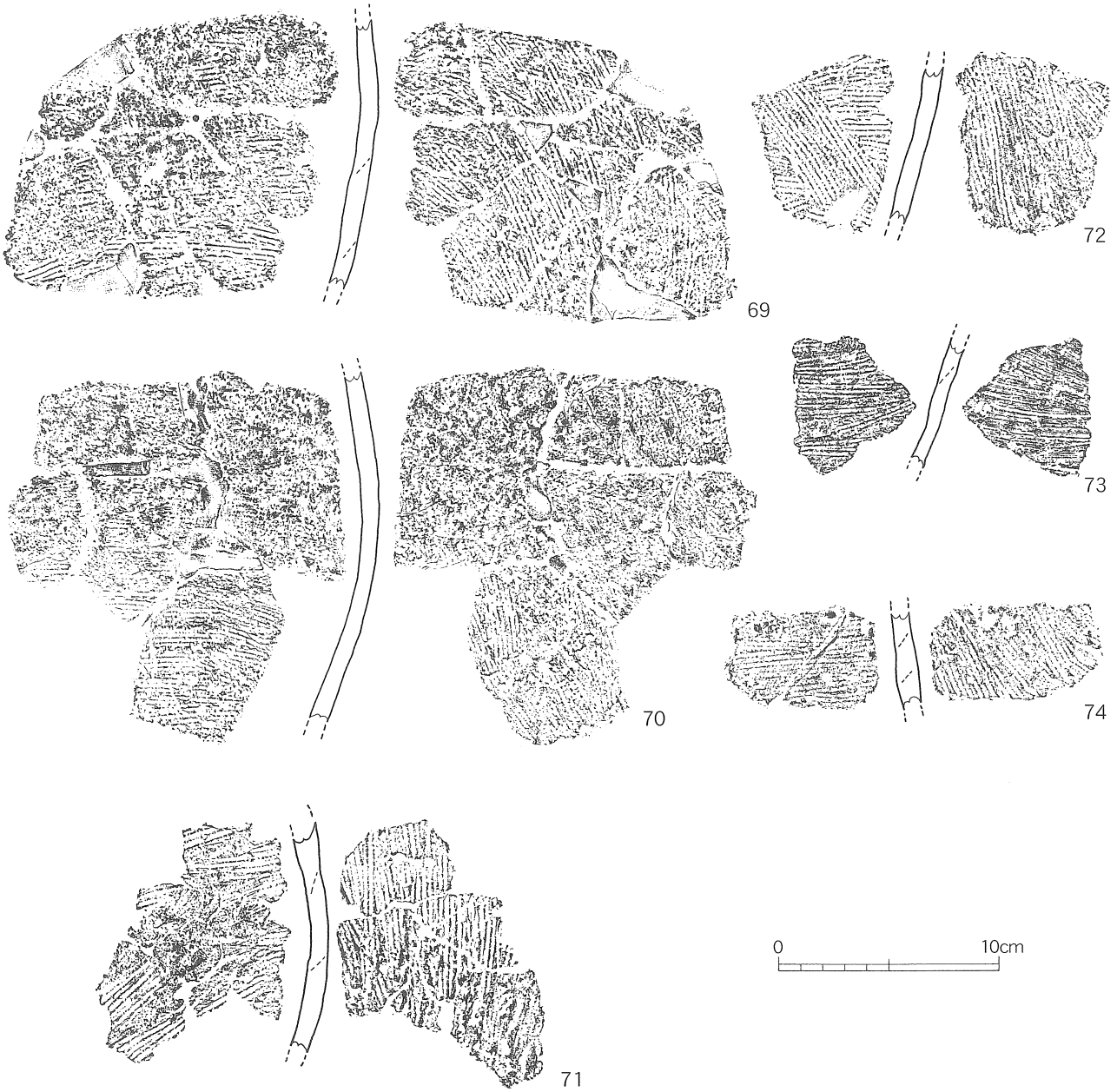


図 63　縄文集中地出土遺物実測図 5(S=1/3)

うである。

土器の特徴のひとつに、胎土中にデイサイトの粒子が含まれる土器が多いということである。これは神戸川から土石流として流れ堆積した第 2 ハイカ層中のものと考えられ、特に白っぽいものを選択しているのではないかと中村氏の言である。このデイサイトを岡山理科大学の白石純氏に分析していただいた。詳細は「築山遺跡Ⅱ」に掲載予定。

1 ～ 54 は有文土器である。1 ～ 43 は深鉢で、口縁部形態が波状のもの 1 ～ 3・22 ～ 29・31・32・35、体部形態は頸部が大きく湾曲するキャリーパー形のもの 6・7・22 が判別できた。1 ～ 21 は沈線が太く、幅広の縄文帯で古手と思われるものである。小破片が多くて文様意匠の詳細は不明であるが、6・8・18 のように鉤状 J 字文、1・16 のように菱形文を施し、他は長楕円形や長方形などの区画文部分である。縄文を施さず沈線のみで文様を施すものに 17 ～ 21 がある。また 11 は擬縄文である。

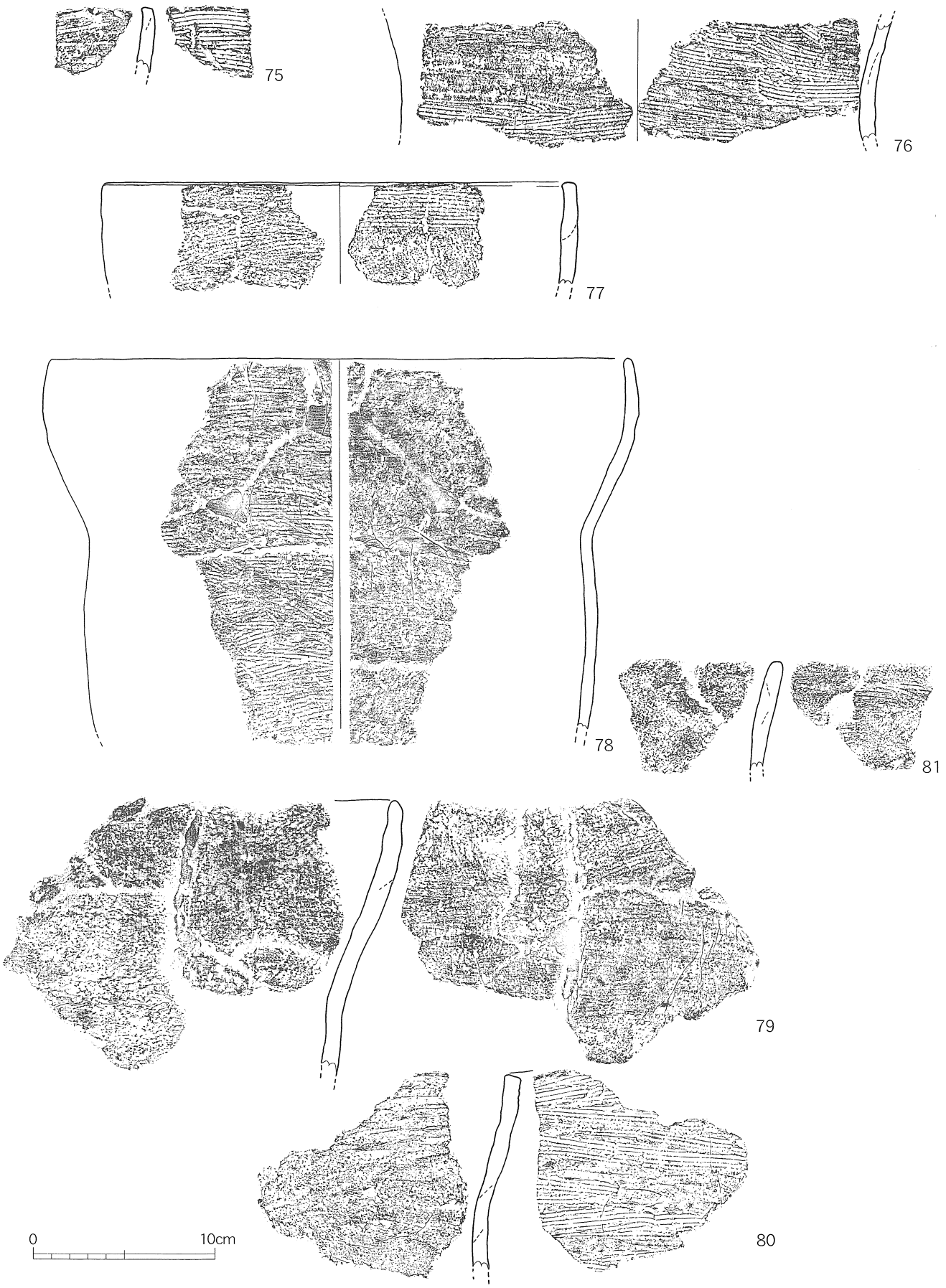


図 64　縄文集中地出土遺物実測図 6(S=1/3)

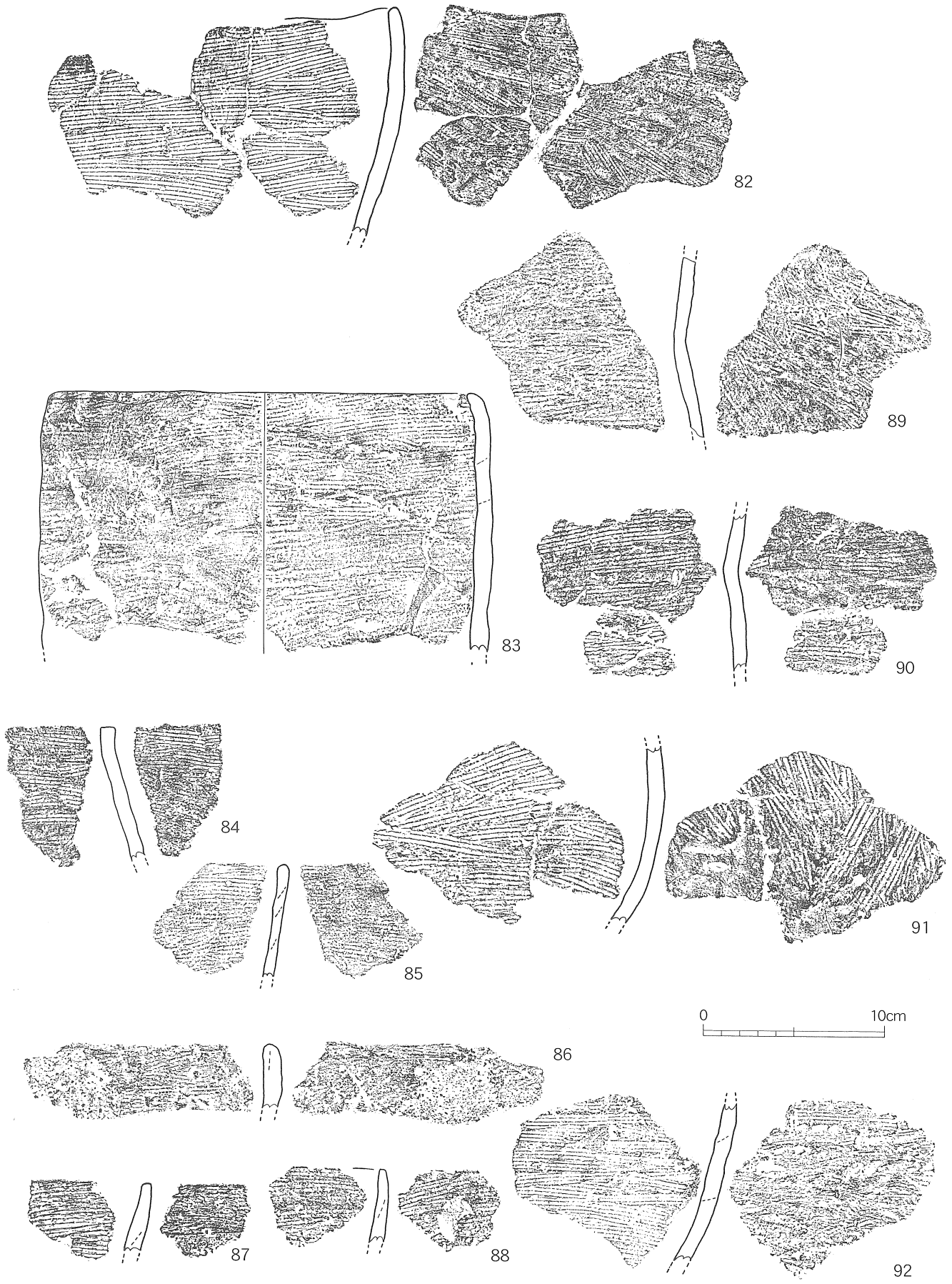


図 65　縄文集中地出土遺物実測図 7 (S=1/3)

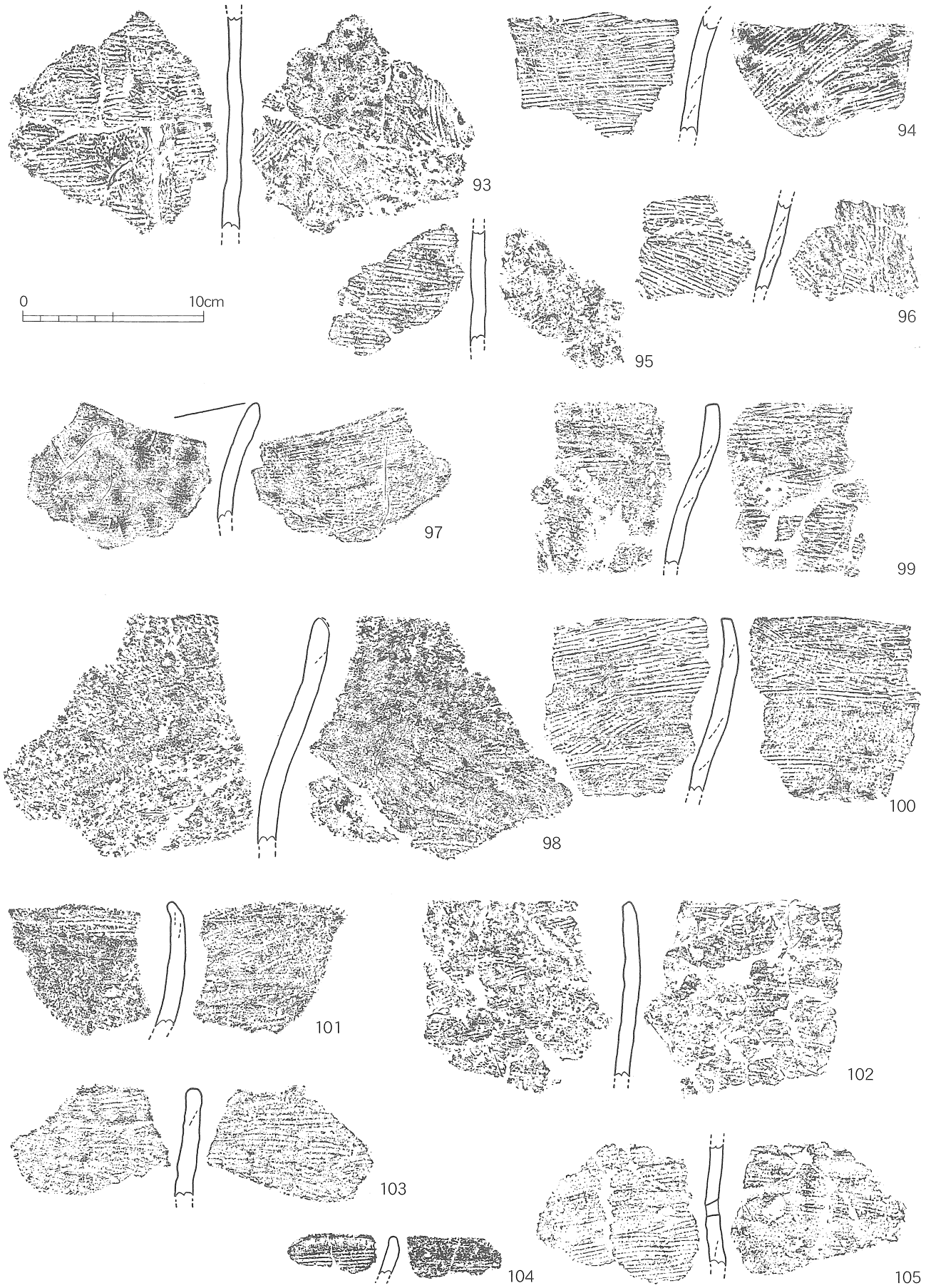


図 66　縄文集中地出土遺物実測図 8(S=1/3)

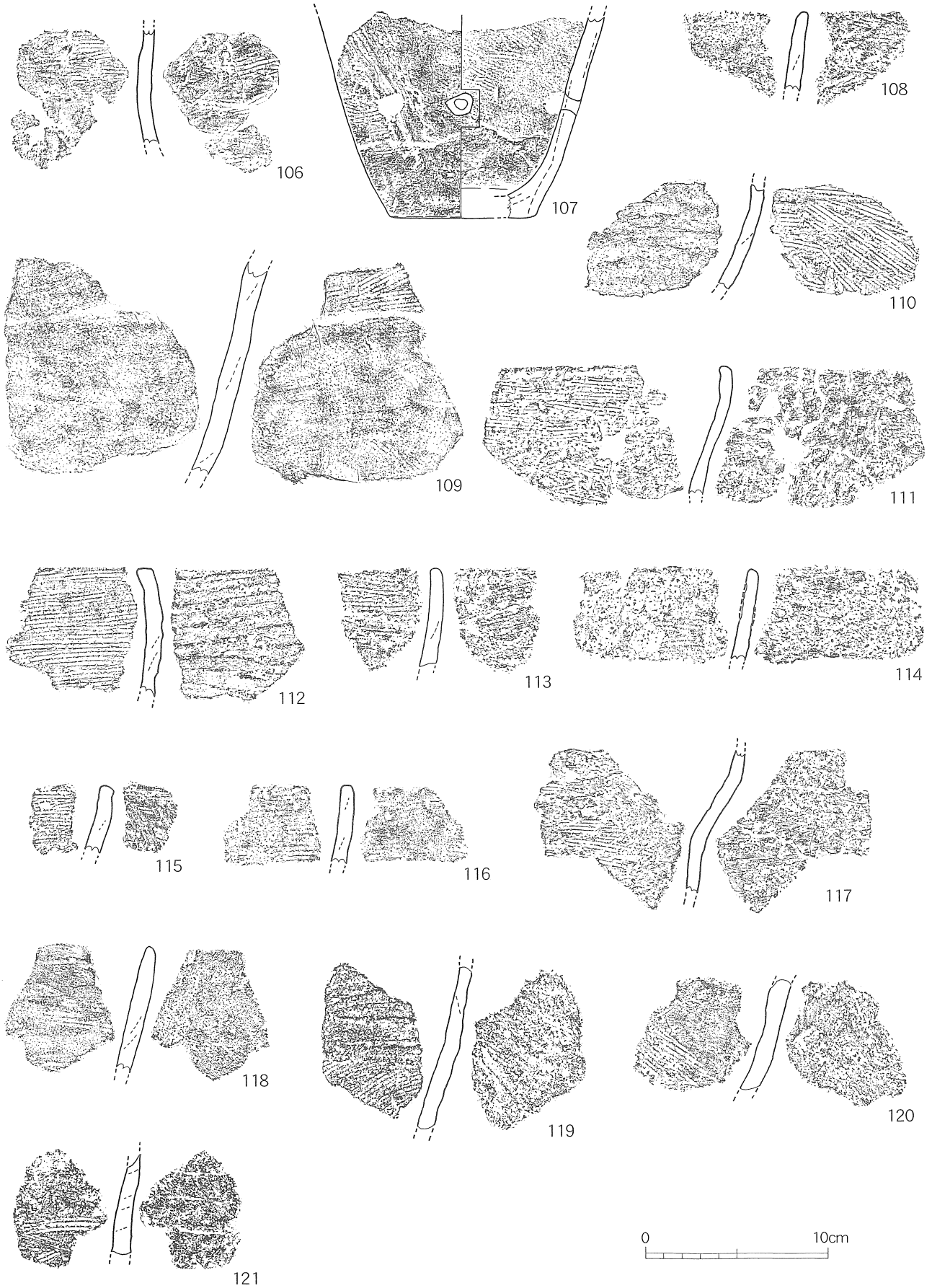


図 67　縄文集中地出土遺物実測図 9(S=1/3)

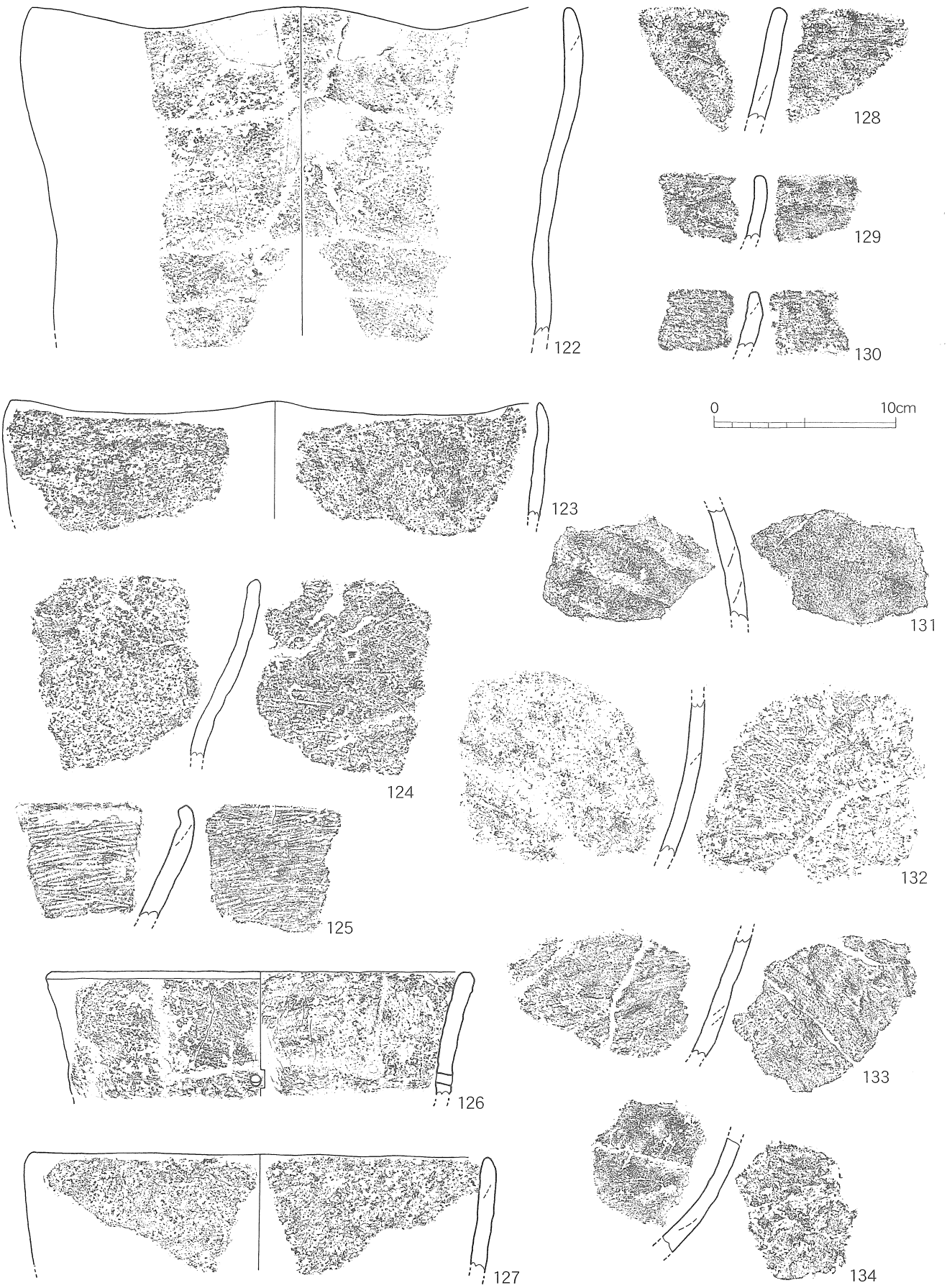


図 68　縄文集中地出土遺物実測図 10(S=1/3)

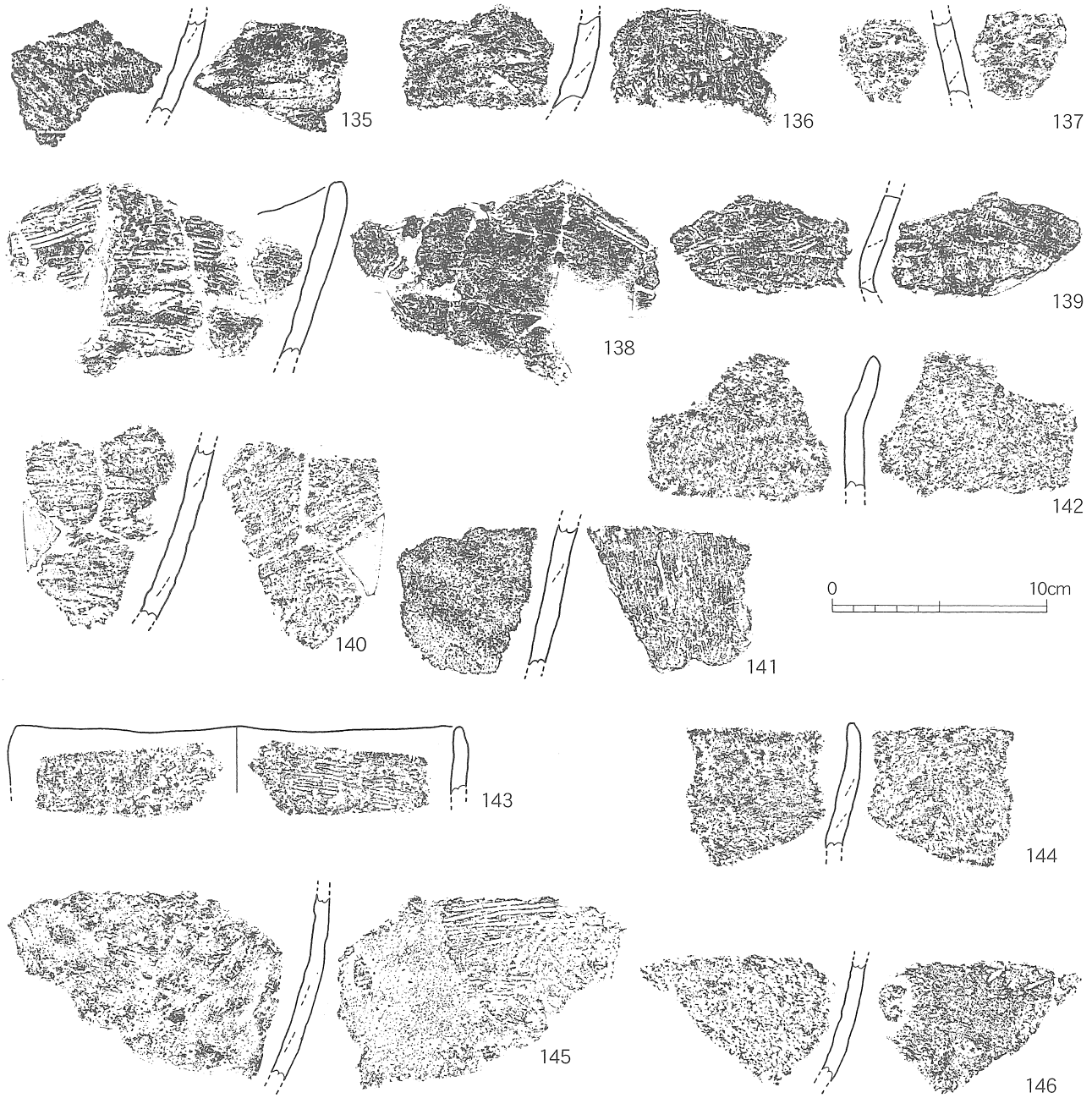


図 69　縄文集中地出土遺物実測図 11(S=1/3)

22 ～ 43 は前記した古手のものと比較すると沈線が細くなり、縄文帯も狭い区画に施されている。文様意匠は 22 のように鉤状 J 字文を交互に 4 段口縁部に施すものがある。23・24・30・31・34 のように鉤状 J 字文が上向きのもの、28・29 のように頂部の尖った J 字文のもので、28 は一筆描きではなく沈線が頂部で途切れている。他は長楕円形や長方形などの区画文部分である。縄文を施さず沈線のみで文様を施すものに 31・32・39・40 がある。42・43 は縄文のみ施されている。

44 ～ 53 は浅鉢で、口縁部形態が波状のもの 47・51、水平のもの 44 ～ 46 がある。体部形態は皿形のもの 47、内湾するボウル形のもの 44 ～ 46 が判別できた。深鉢と同じく小破片が多くて文様意匠の詳細は不明であるが、45・50・51 のように鉤状 J 字文、47・53 のように円形文を施し、他は長方形などの区画文部分である。縄文を施さず沈線のみで文様を施すものに 47 がある。内外面の調整

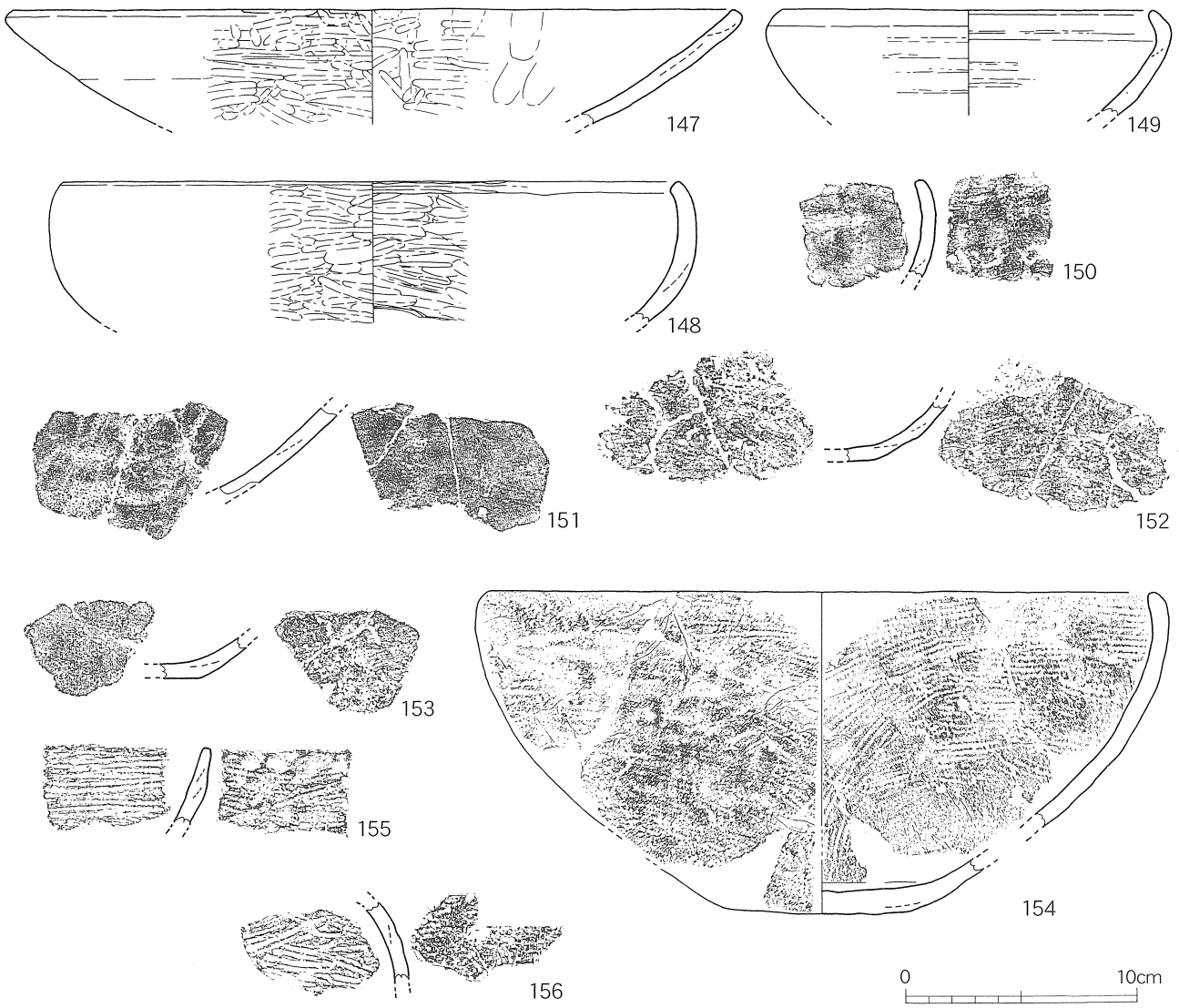


図 70　縄文集中地出土遺物実測図 12(S=1/3)

にはミガキまたはナデのみが行われている。

54 は当該地で唯一出土した双耳壺の把手で、上下に穿孔が行われている。磨消縄文で鉤状 J 字文、区画文などが把手面まで賑々しく施されている。

55 ～ 156 は無文土器である。55 ～ 146 は深鉢で、口縁部形態が波状のもの 55・56・63・79・80・82・86・97・101・122・123・138・143、水平口縁のもの 57・59 ～ 62・64・75・77・78・81・83 ～ 85・87・88・98 ～ 100・102 ～ 104・108・111 ～ 116・118・124 ～ 130・144 があり、体部形態は頸部が大きく湾曲するキャリーパー形 66・67・76・78 ～ 80・89・90・98 ～ 100・106・111・117・122・124・139・142、バケツ形 57、筒形 83 が判別できた。体部形態はキャリパー形以外のものはバケツ形及び筒形と思われるが、破片のため判別しなかった。また 61 は口縁端部近くに、105・107・126 は胴部に穿孔がある。55 ～ 146 は内外面の調整方法の組合せでグルーピングした。55 ～ 74 は内外面とも条痕調整。75 ～ 77 は外面は条痕、内面は条痕ののち一部ナデ調整。78 ～ 81 は外面は条痕、内面はナデ調整。82 ～ 96 は外面は条痕ののち一部ナデ、内面は条痕調整。97 ～ 107 は内外面とも条痕ののち一部ナデ調整。108 ～ 110 は外面は条痕ののち一部ナデ、内面はナデ調整。111 ～ 117

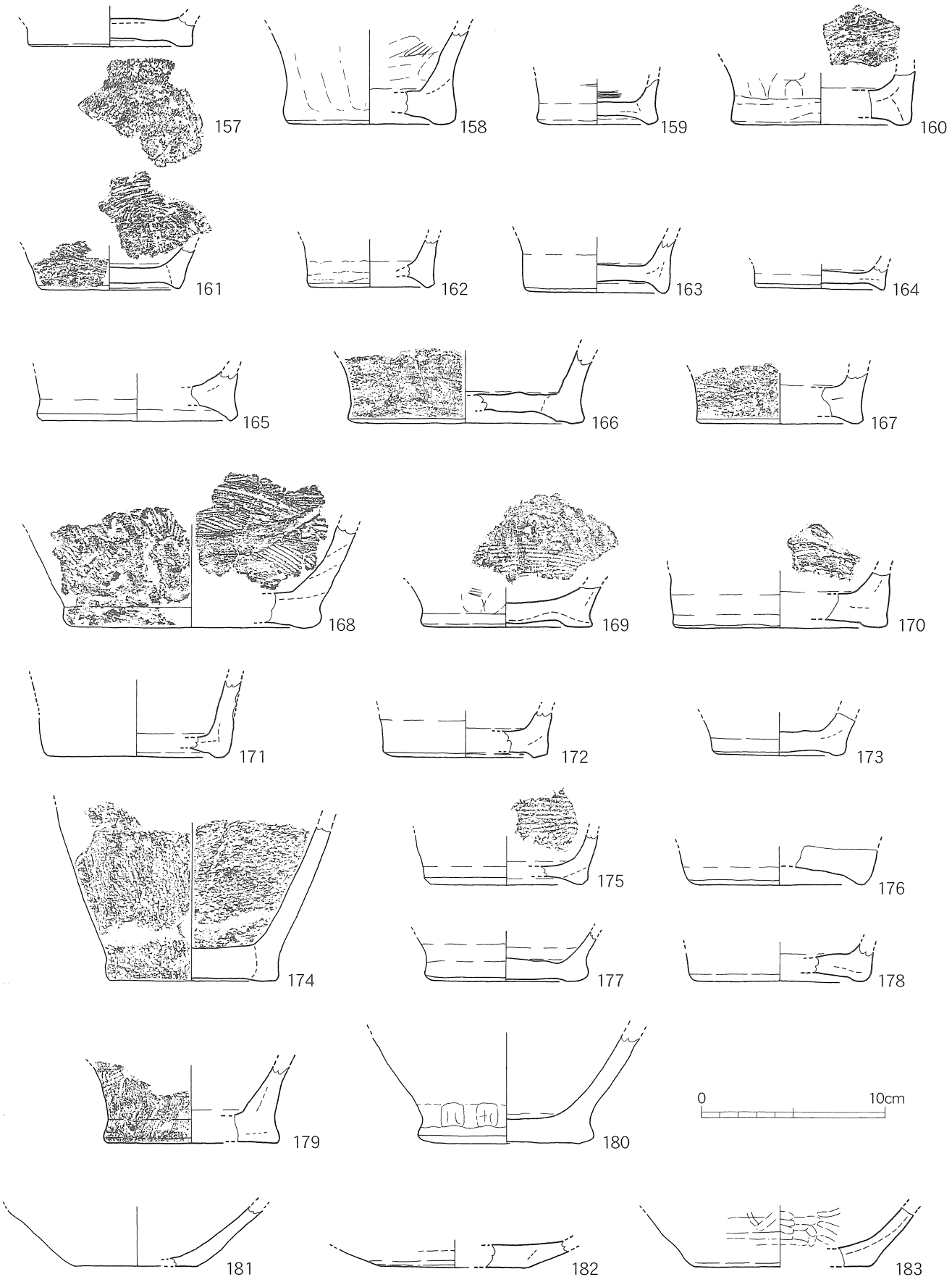


図 71　縄文集中地出土遺物実測図 13(S=1/3)

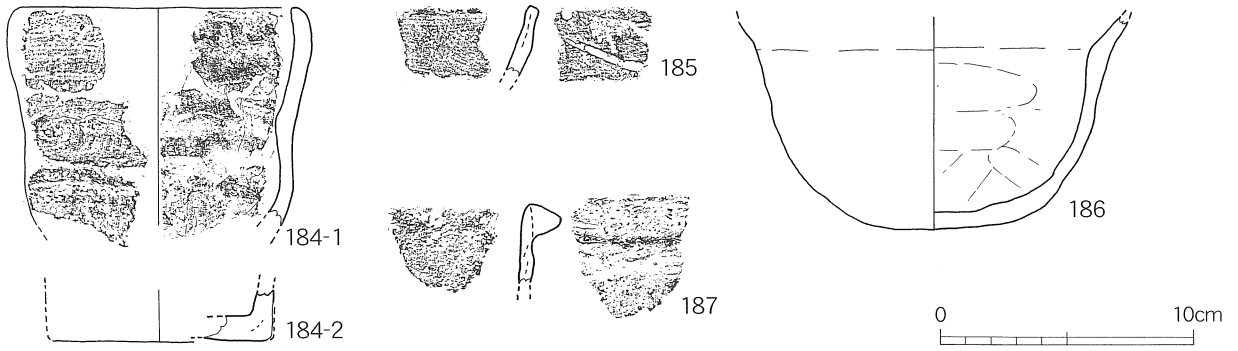


図 72　縄文集中地出土遺物実測図 14(S=1/3)

は外面はナデ、内面は条痕調整。118 ～ 121 は外面はナデ、内面は条痕ののち一部ナデ調整。122 ～ 137 は内外面ともナデ調整。138 は外面はミガキ、内面は条痕調整。139 は外面はミガキ、内面はケズリののちナデ調整。140 は外面はケズリ、内面はナデとケズリ調整。141 は外面はケズリ、内面はナデ調整。143 の内面は条痕調整、145 の外面は条痕調整、146 の外面はナデ調整で、他は風化・剥落が著しく調整は不明であった。

147 ～ 156 は浅鉢で、口縁部形態が確認できるものは全て水平口縁のもので、体部形態は皿形 147・151、内湾するボウル形 148 ～ 150・154・156 が判別できた。147 ～ 153 は内外面ともミガキ調整が施され、154 ～ 156 は内外面に条痕とナデ調整が施されている。前者は有文浅鉢と共に精製土器、後者は粗製土器に分類される。それを示すように 154 の内面には煤の付着痕が観察される。

157 ～ 183 は底部である。157 ～ 167 は上げ底のもの、168 ～ 178 は上げ底のようにしっかり浮かせずに中央を押し上げたようにした凹底のもの、179 ～ 183 は平底のものである。181 ～ 183 は器壁への立ち上がりが開くのとナデまたはミガキ調整が行われているので、浅鉢の底部と考えられる。

184 は小型の深鉢である。頸部が湾曲するキャリパー形を呈するが口縁部は外反せず、口縁部と底部は頸部から同じような内湾をみせる。同一個体と考えられる底部は平底である。

185・186 は小型の鉢である。186 は口縁部が頸部から外反し、底部は丸底ぎみの平底である。

187 は第 4 層以上からの混入品の突帯文土器である。遺構外出土遺物で分類を示した無刻目突帯 D 類である。

当該調査地では土器と混ざって 2 ～ 6cm 大の焼成粘土塊(図版 30)が中袋 1 袋分(総重量 600 g)出土した。これらは土器が現地で焼成された証拠品として捉えられないだろうか。

また 10 層からは関節付近と考えられる獣骨(図 73-1)が 1 点出土している。

石器は、縄文・弥生移行期の石器組成とは違いを見せる。小型の剥片類の出土が多く、また石錘の出土が全体の 4 割近くを占め、確認できなかった谷地形の下部を流れている川での漁が想定される。

図 74-1・2 は石鏃で、1 は黒曜石製、2 は流紋岩～安山岩製であり、1 の先端部はドリルのように細く加工が施されている。

図 74-3・4 は楔形石器、図 74-5 は楔状の使用痕ある剥片で、3 点とも黒曜石製である。各辺には潰れ痕が観察される。

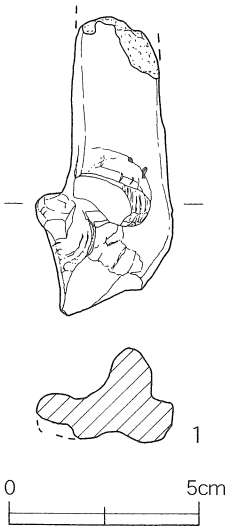


図73
縄文集中地出土獣骨
実測図(S=1/2)

図74-6～図75-19は剥片石器系の石器で、玉髄、黒曜石、流紋岩～安山岩、瑪瑙、方解石などが用いられている。

図75-20～24は磨石及び敲石で、円礫をほぼ利用している。

図76-25～27は石皿で、25は大型で断面がU字状を呈するものであるが、26・27は小型の台石様のものである。

図76-28は砥石と考えられる石器、図76-29は打製石斧の未成品と考えられるものである。

図77-30～図78-46は石錘、図78-47は石錘の未成品である。小円礫を利用しており、円形からハート形、方形までバラエティーに富んでいる。

まとめ

掲載遺物中で、有文深鉢と無文深鉢をそれぞれに施される内外面の調整方法の組合せにより分類し、比率から使用頻度の高い調整方法を確認してみた。これらの遺物は破片が多いが、器壁の厚さから法量に大差がないと考えられたため、破壊されて残存した破片でも比率を出すのには有効と思われる。また風化・剥落が著しく片面でも調整不明のものは外した。表1はその結果である。

表1

有文深鉢		無文深鉢	
外面	内面	外面	内面
文様帯のみ 5	5 条痕	条痕 20	20 条痕
30	1	3	14
4	30 ナデ	4	7
条痕 1	1	条痕 14	3 条痕
ミガキ 1	4 ミガキ	(+ナデ) 11	11 (+ナデ)
		3	4
		ナデ 7	4 ナデ
		4	3
		16	16

有文深鉢には外面に文様帯のみしか確認できなかったもの39点と調整が確認できた2点(条痕・ミガキ)があり、内面には条痕・ナデ・ミガキが行われているが、そのほとんどにナデ調整が行われている。また内面に条痕調整を行っているものは古手のものである。

無文深鉢では、内外面とも条痕・条痕ののち一部にナデ調整が行われている条痕(＋ナデ)・ナデの3種類の組合せがほとんどで、表には記載しなかったがその他、外面ミガキ－内面条痕、外面ミガキ－内面ケズリのちナデ、外面ケズリ－内面ナデ＋ケズリ、外面ケズリ－内面ナデの4点も確認している。無文深鉢では内外面とも条痕調整が主に行われているが、ナデ調整も高い頻度(1/3)で行われて

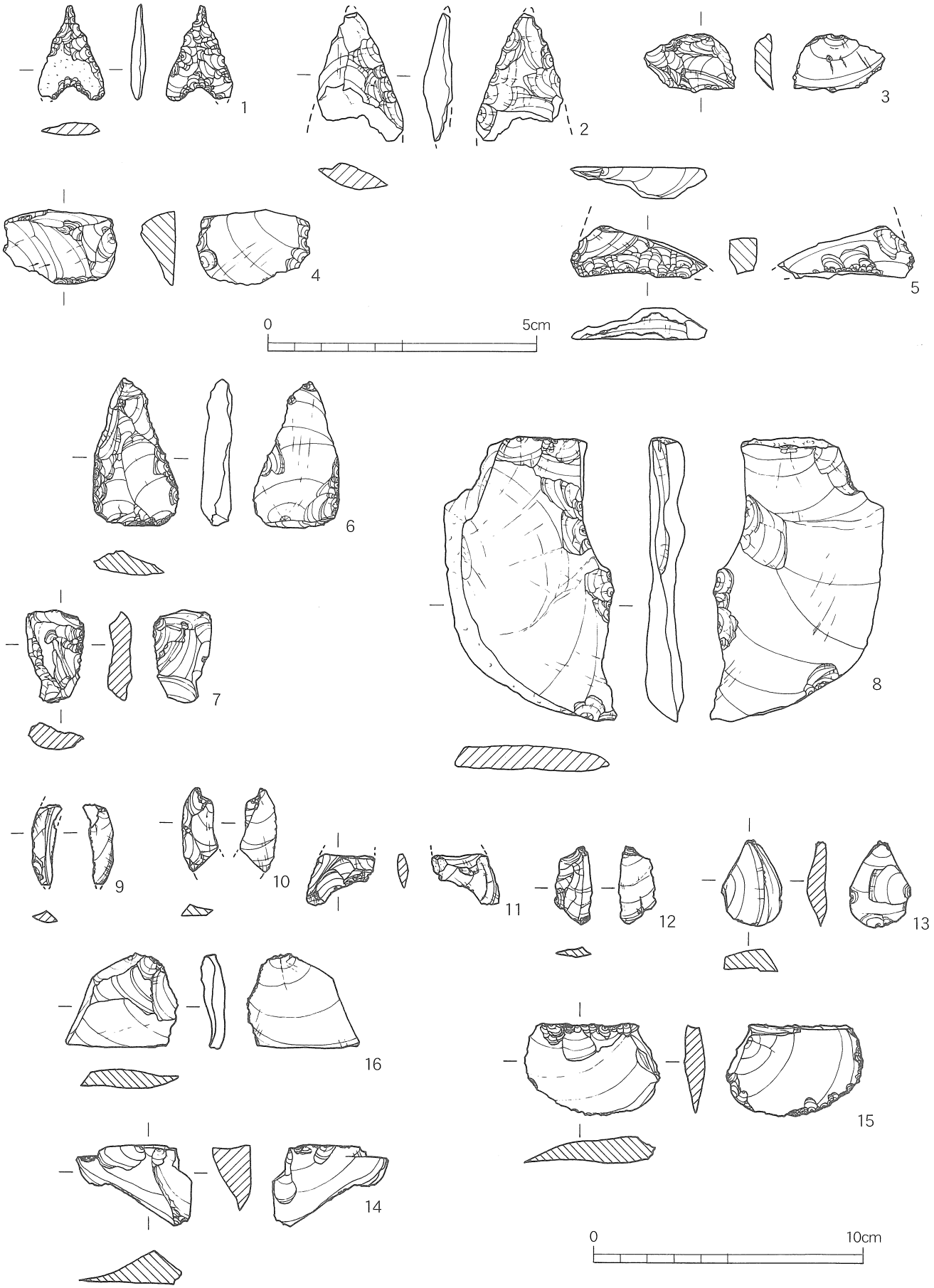


図 74　縄文集中地出土石器実測図 1(1 ～ 5 S=1/1　6 ～ 16 S=1/2)

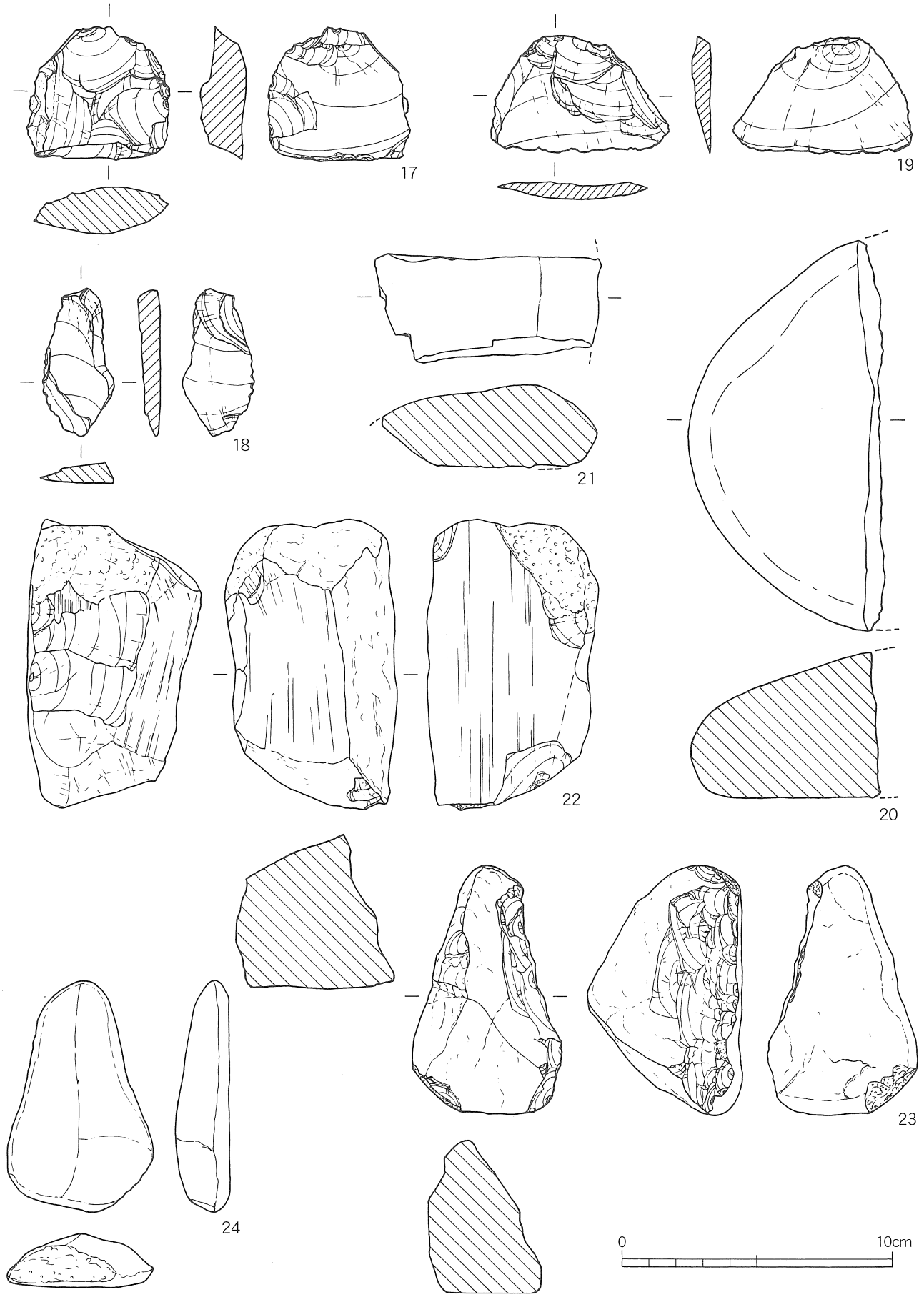


図 75　縄文集中地出土石器実測図 2(S=1/2)

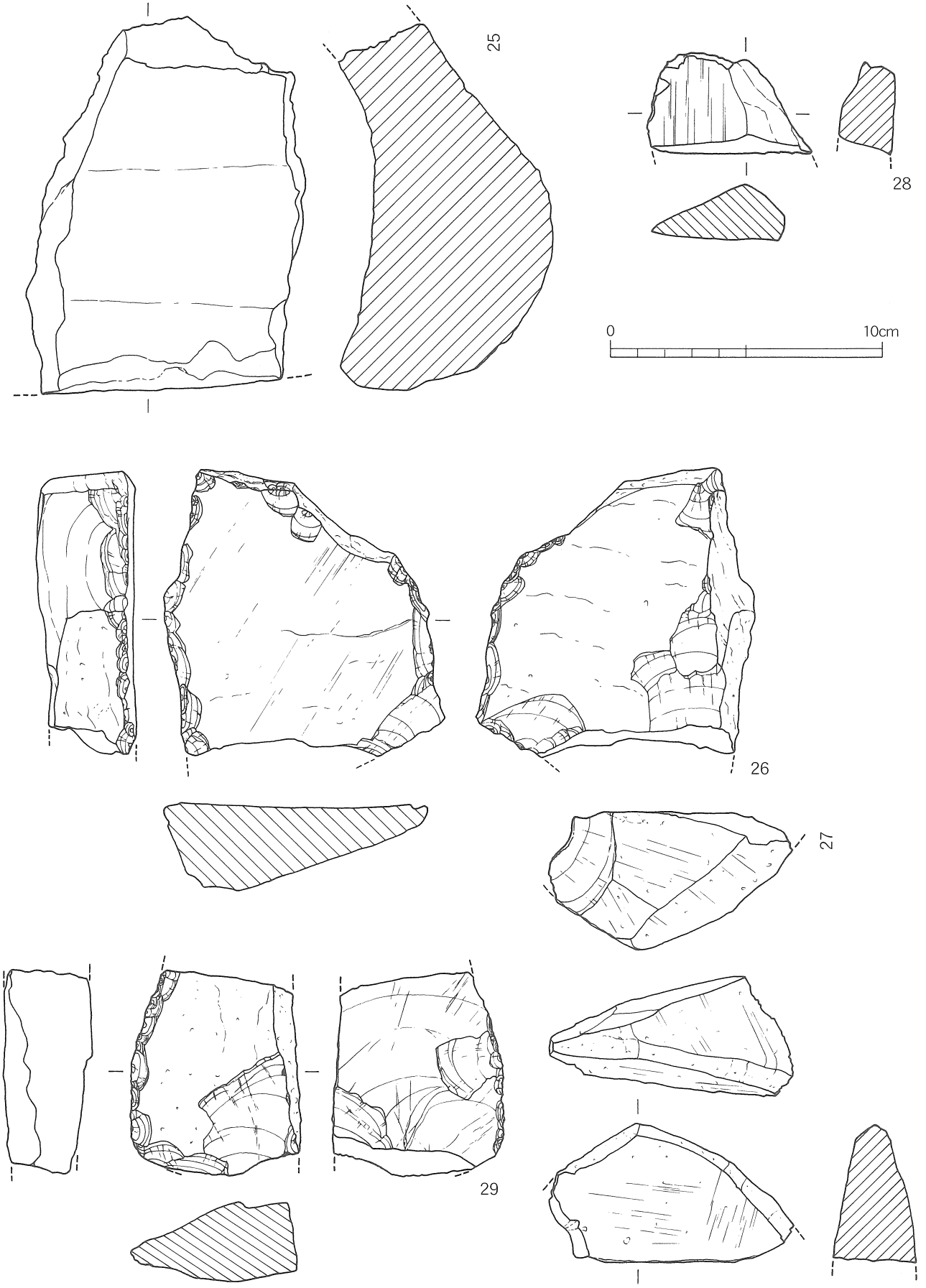


図 76　縄文集中地出土石器実測図 3(S=1/2)

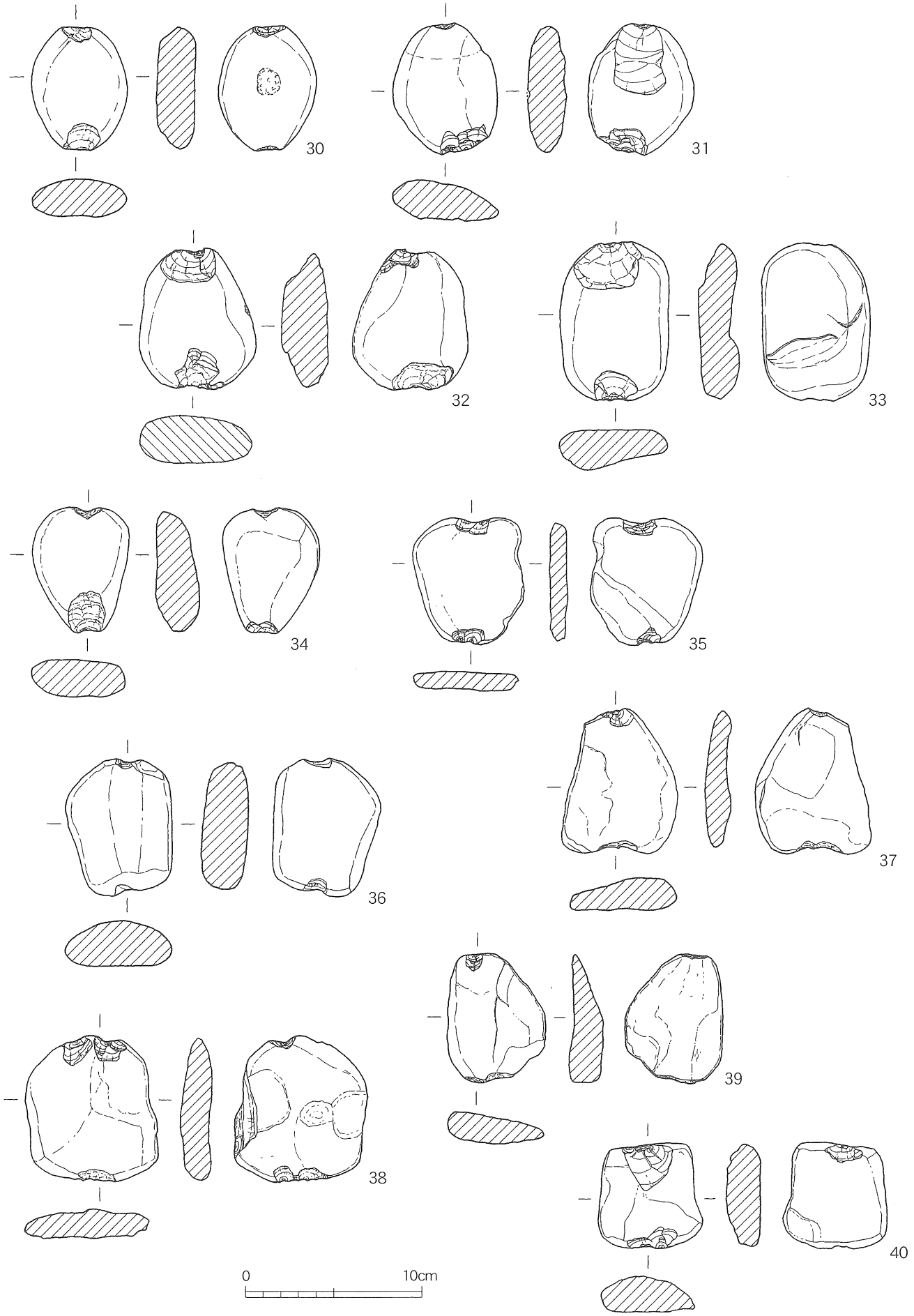


図 77　縄文集中地出土石器実測図 4(S=1/3)

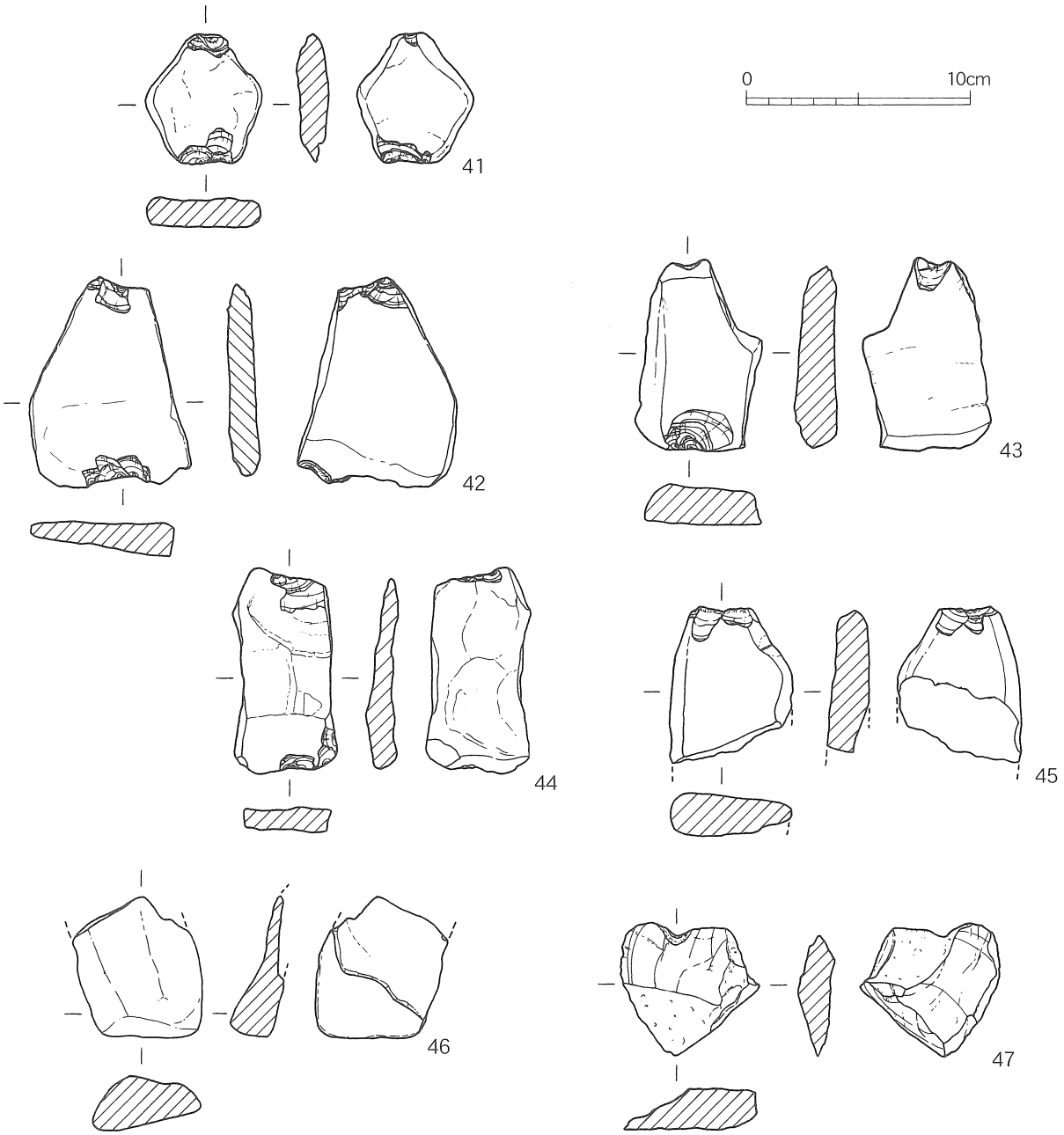


図 78　縄文集中地出土石器実測図 5(S=1/3)

いることが判明した。

また有文深鉢と無文深鉢では行われる調整に差異がみられるが、これは有文深鉢が精製土器で無文深鉢が粗製土器として区別されているためか、あるいは時期差(有文では若干の時期差がみられる)であるのか、今回の出土状況・共伴関係では判断ができなかった。今後良好な出土状況及び共伴関係資料の出土が待たれる。

当該調査地では、花粉分析及び年代測定を行った。詳細は第 5 章で各担当者から玉稿を頂き記載しているので、ここではそれらを簡単にまとめておく。

花粉化石の含有量は、古土壌である 10 層以外は、少量しか検出することができなかった。それは第 1 ハイカ層(4 層)を堆積させた大規模な土石流発生以前の小規模な洪水に伴う堆積物であったためと推定されている。10 層と 4 層の間にある数枚の層(エ・オ層など)はこの小規模な洪水による堆積層であるらしい。古環境としては、後背の丘陵にカシ類などの照葉樹林が分布し、丘陵縁辺など開けた

場所にはアカマツやナラ類などの遷移林が分布し、近辺の林床や草地にはキク科、アカザ科(ヒユ科)、カヤツリグサ科の草本が茂っていたと考えられる、ということである。

10層出土の木材を文化財調査コンサルタントで年代測定(AMS法)を依頼し、3700 ± 40yBP(補正^{14}C)：BC2200 ～ 1955年cal y.(暦年代)という結果を得た。また10層出土の木材及び図67-119土器付着炭化物を国立歴史民俗博物館でも年代測定(AMS法)を依頼し、木材3点は3690 ± 40yBP(補正^{14}C)：2145 ～ 1950年calBC(暦年代)、3730 ± 40yBP(補正^{14}C)：2250 ～ 2025年calBC(暦年代)、3670 ± 40yBP(補正^{14}C)：2140 ～ 1935年calBC(暦年代)という結果を得、119土器付着炭化物は3905 ± 45yBP(補正^{14}C)：2470 ～ 2275年calBC(暦年代)という結果を得た。両者で測定していただいた木材に関してはほぼ合致をみるが、119土器付着炭化物は約200年古い数値がでた。しかし歴博の担当者である小林謙一氏によると[14]、氏らのこれまでの測定結果から後期初頭の中津式土器の年代に相当するものであるという。よって、木材は平成14年度調査Ⅱ区から出土した縄文埋没林とも同様な年代結果が出ているので[15]、木材は第1ハイカ(4層)となる土石流と共に流され埋没した可能性も考えられる。

1区西

層序(図 10)

1区西の土層はA10-A18ライン及びA12-E12ラインで確認した。第1層(表土・耕作土)の下に第2層(2Ⅰ、2Ⅳ層など)、第3層(3A、3AⅢ層など)、中間層(3AⅡ層)、第4層(6、4A、9層など)が認められた。この内遺構検出を行ったのは第3層上面を主とする第1面と第4層上面を主とする第2面である。中間層上面、第4層上面の遺構についてはここでは第2面として一括して掲載する。また、SD16付近以西の第1面と第2面がほぼ同一面として検出される範囲については第1面として記載する。なお、第2層は近世頃の堆積、第3層及び中間層は弥生時代～中世頃の堆積、第4層の内4A、9層は約3600年前に堆積した三瓶山火山泥流である第1ハイカ層、6層は布志名層に相当する堆積層と考えられる。以下、検出遺構面毎に主要遺構の概要を記す。

第1面検出遺構

SK01(図 80)

SK01はB14grの標高10.26mの調査面において、SD06、SD14、SD15などを切った状態で検出した土坑である。平面形はN-18°-W方向に細長く、検出規模は長さ208cm、幅40cm～60cm、深さ40cmである。覆土からは僅かに須恵器と土師器の小片が出土している。

SK03(図 80)

SK03はD12grの標高10.34mの調査面で検出した土坑である。楕円形の平面形で長軸はN-69°-Eを指向し、長径188cm、短径106cm、深さ42cmの検出規模である。また、底は浅い窪みを有するが、比較的平坦で、側壁の立ち上がりは急である。

覆土は3層確認でき、ここから数点土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。

SK08(図 80)

SK08はA16grからA17grにかけての標高10.30mの調査面において、SD14を切った状態で検出した土坑である。平面形はN-38°-E方向に長く不整な楕円形を呈する。検出規模は長さ180cm、幅55cm～114cmで、深さは23cmと浅い。3層確認された覆土からは、中世土師器と考えられる小片が僅かに出土している。

SK10(図 80)

SK10はB11grの標高10.56mの調査面で検出した土坑である。

平面形N-2°-W方向に長軸をとる不整な楕円形を呈しており、検出規模は長径66cm、短径58cm、深さ24cmである。

1層のみ確認された覆土からは、土師器の小片が1点出土した。

土坑(図 79・80)

幅2mの12ラインサブトレンチ掘削時にD13grにおいて土坑を確認した。平面形は長さ100cm程度、幅40cm程度の楕円形を呈しており、深さは28cmを測る。

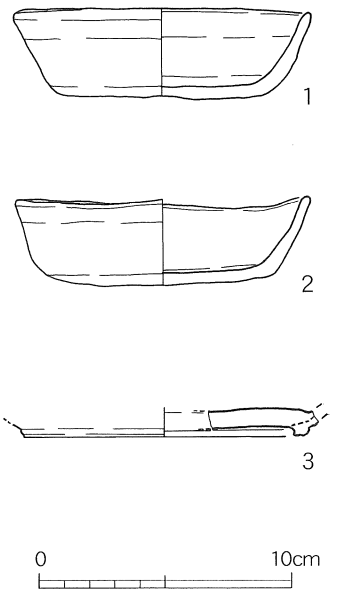


図79　土坑・SX07出土遺物（1：3）

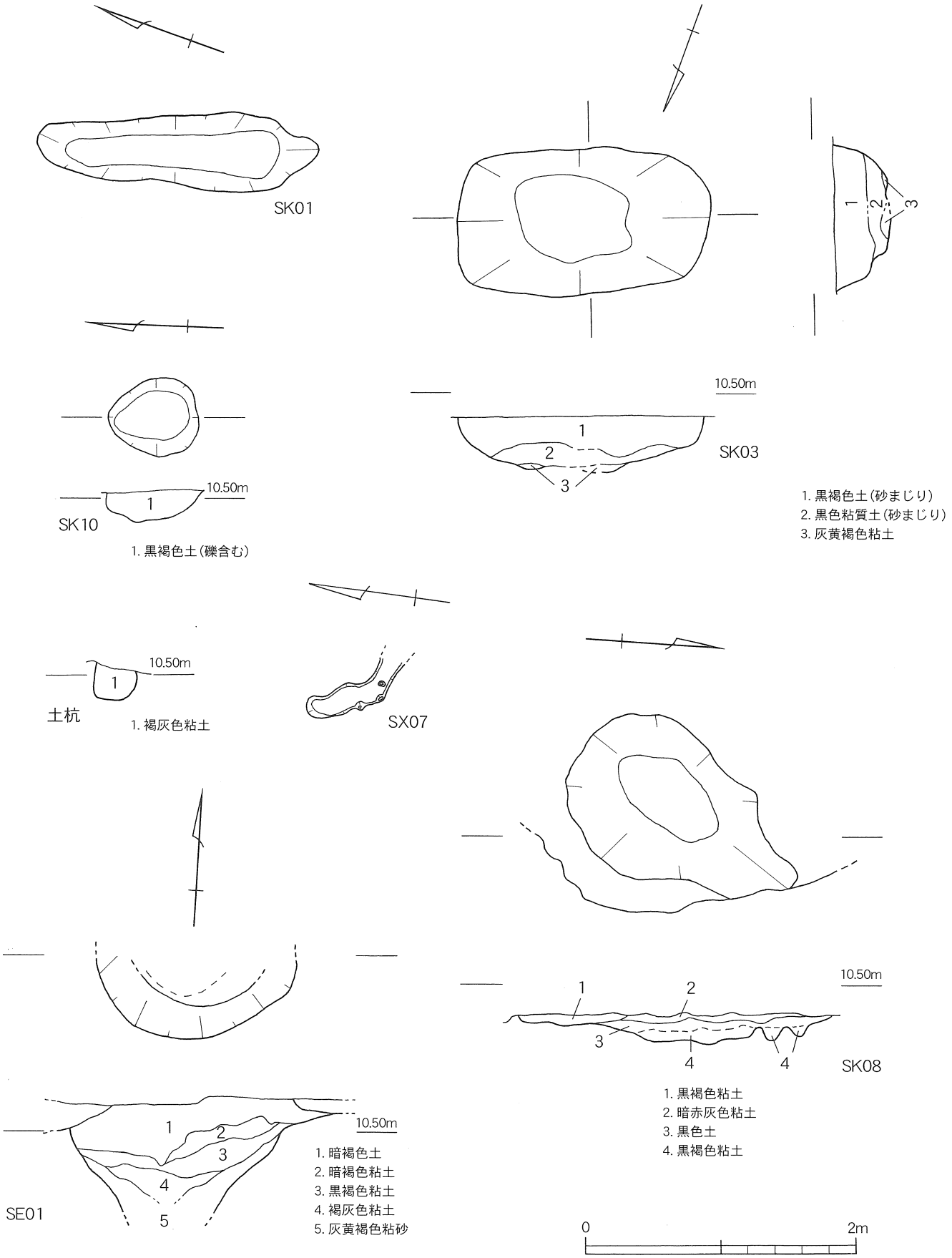


図80　第1面検出土坑・井戸他(1：40)

12ライン断面では覆土は1層のみ確認され、ここから79-1・79-2に示す中世土師器の坏が完形で出土している。これらは遺構の時期を示すと考えられる。

SE01(図80)

SE01はA13grのAライン際、標高10.74mでの調査面で検出した。一部の検出にとどまったが径150cm程度の円形の平面形を呈する井戸跡と考えられる遺構である。深さ85cmまで掘削したが、井戸側や水溜を構築する部材は確認できなかったため、素掘りの井戸と思われる。

覆土は5層確認できたが、出土遺物は須恵器、土師器の小片数点にとどまるため、時期は不明である。

SX07(図79・80)

SX07はB18grの標高9.99mで検出した遺構である。平面形は一部不明瞭であり、溝状を呈する可能性もある。検出規模は長さ74cm、幅14cm～20cm前後、深さ10cmを測る。

覆土から79-3に示す須恵器の坏底部片が出土した。8世紀後半から9世紀前半のものと考えられ、遺構の時期を示すと思われる。

SD01(図81～83)

SD01は12ラインから14ライン間の標高10.50mの調査面で検出した溝状遺構である。層位上最も新しい遺構の1つで、第2層上面から掘り込まれている。検出した長さは19mであり、N-22°-W方向を指向する。上幅は最大4mを測るがAライン寄りでは3m、Eライン寄りでは2.5mと変化する。側壁の立ち上がりはa-a′ラインでは緩やかに立ち上がり、深さも74cmと比較的浅いが、b-b′ラインやd-d′ライン付近などではさらに70cm以上ほぼ垂直に落ち込む箇所も認められる。また、d-d′ライン付近では杭と礫で、堰などの構造物が築かれていたものと思われる。

覆土からは20層程度確認しており、堆積状況から掘り返しも数回行われたようである。また、ビニール袋で3袋分の出土遺物があった。多くは83-1～83-4に示す須恵器や83-5・83-6に示す土師器の破片であるが、83-7の唐津系陶器、83-8の擂鉢、83-9・83-10の円筒埴輪片なども出土している。83-7がもっとも新しい遺物で近世の所産であることから、この遺構の時期も同時期と考えられる。

SD02(図81・82)

SD02はSD01とSD06に切られ、SD05を切った状態で検出した溝状遺構である。検出した長さ20mの範囲ではやや湾曲するものの概観するとN-28°-Wを指向する。上幅30cm～100cm程度、下幅20cm～50cm程度を測り、側壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は2層確認しており、ここからビニール袋半分程度の須恵器、土師器片が出土している。

SD03(図81・82)

SD03はSD01から2m～3m離れた位置で、SD05を切った状態で検出した。検出した長さ20mの範囲では若干蛇行するものの、ほぼN-29°-W方向に延びている。断面は「U」字形を呈しており、検出規模は上幅50cm、下幅30cm、深さ22cmである。また、底の標高はf-f′ラインで10.44mであるのに対して、e-e′ラインでは10.28mとなるため、北方に下がると考えられる。

覆土は2層観察でき、ここから須恵器と土師器の破片が僅かに出土している。

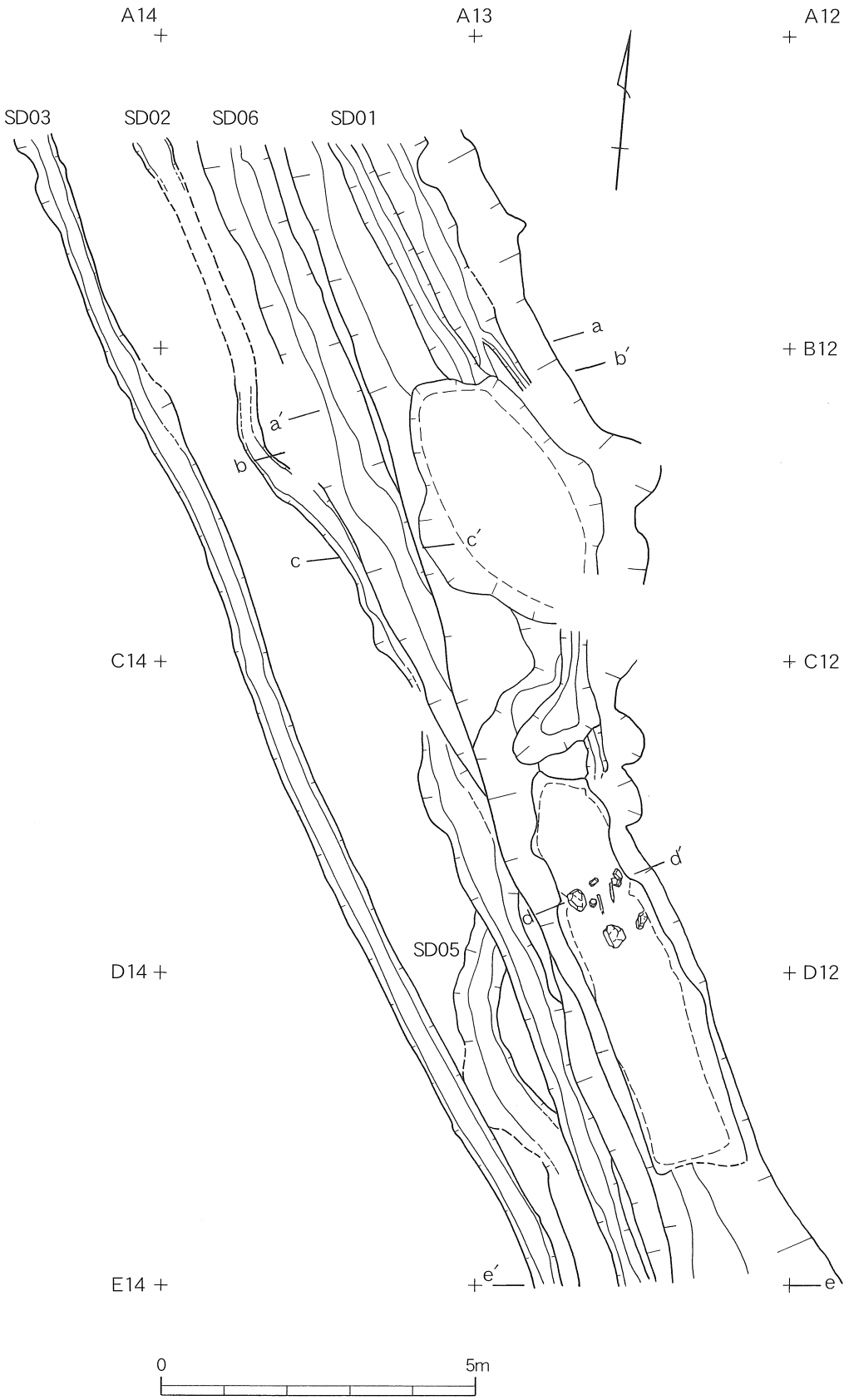


図81　SD01他 平面図(1：100)

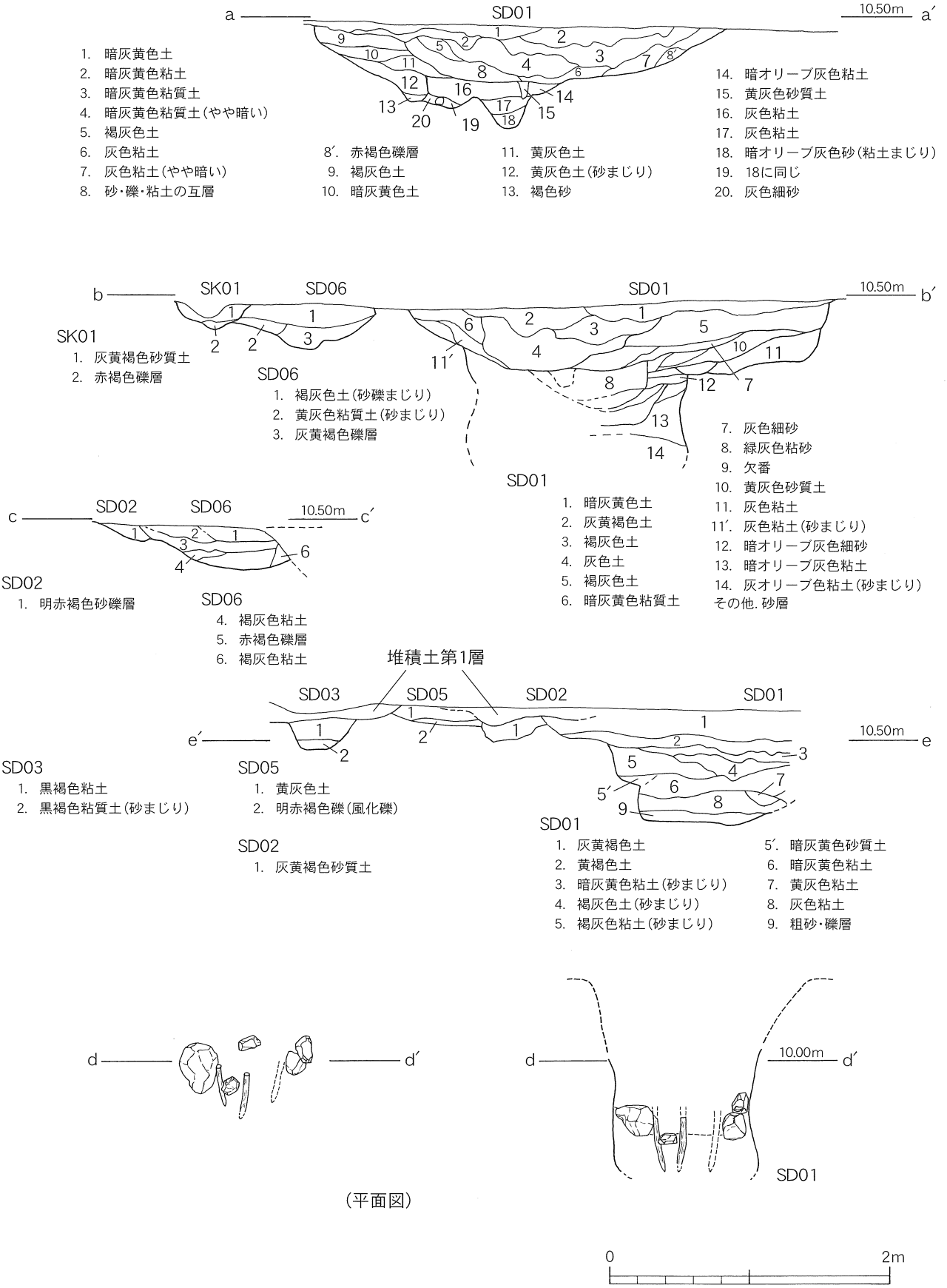


図 82　SD01 他 断面図(1：40)